Research reports in archaeology on the campus of TOHOKU UNIVERSITY No.2

Samurai Residences around Sendai Castle (BK13 site)

- Excavation reports of Loc.13 of samurai residences located at the side of north outer moat of Ninomaru i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle -

Archaeological Research office on the Campus,
Tohoku University

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告２

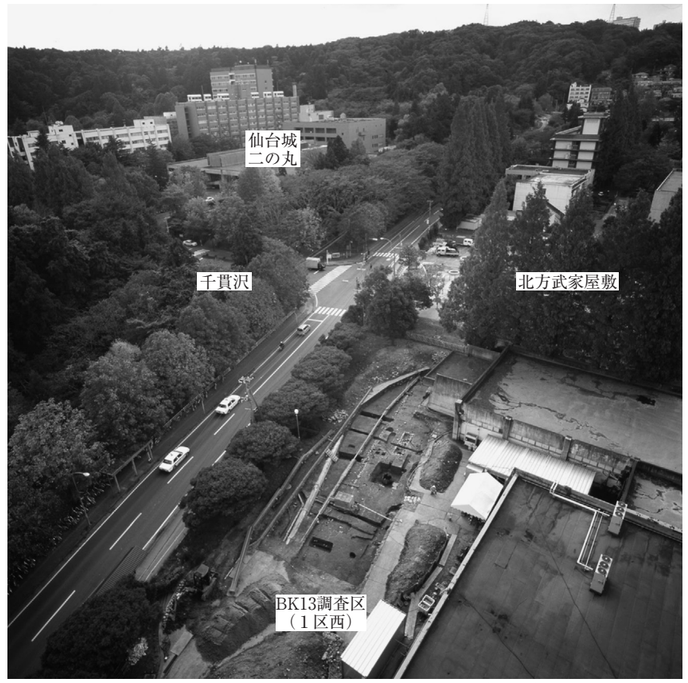
仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点

東北大学

ISSN 2185-6990

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告２

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点



仙台城二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）
東から仙台城二の丸・千貫沢を望む

東北大学埋蔵文化財調査室
２０１３

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告２

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区
第13地点

東北大学埋蔵文化財調査室
２０１３

武家屋敷地区第13地点１区西全景（左側が北）

武家屋敷地区第13地点１区東全景（左側が北）

序

本報告書は、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』の２冊目として、2008年度から2009年度にかけて実施した、川内北地区厚生会館増改築に伴う仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点の調査成果を報告いたします。

東北大学埋蔵文化財調査室では、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』という新たなシリーズで、東北大学構内における埋蔵文化財調査報告書を刊行しております。本報告書は、その２冊目となります。以前は『東北大学埋蔵文化財調査年報』として、年度ごとに事業概要と調査成果の報告をまとめて刊行してきました。年度ごとの事業概要の報告は、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』として別に刊行し、発掘調査の報告については『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』として、独立させて刊行していくこととしております。

今回報告する二の丸北方武家屋敷地区第13地点では、掘立柱建物をはじめ、江戸時代の遺構が多数検出されました。沢状の遺構も検出されております。これらを城下絵図などと照らし合わせて検討した結果、今回の調査地点は、二の丸裏門への入り口近くに置かれた、「北下馬厩」の周辺に相当することが確実となりました。仙台城周辺の武家屋敷地区に置かれた施設を研究していく上で、重要なデータを加えることになったと考えております。

調査の実施から報告書の刊行まで、大学内外の関係機関の御協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申し上げるとともに、本書で報告されるデータが各方面で活用されることを望むものです。

東北大学埋蔵文化財調査室
室長　阿子島　香

例　言

1．本調査報告は、東北大学構内において、東北大学埋蔵文化財調査室が2008年度から2009年度にかけて行った、川内北キャンパスの厚生会館増改築工事に伴う遺跡調査成果をまとめたものである。

2．報告する遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）

本体工事分（１・２区）　2008年９月１日～2009年３月30日

藤沢敦・柴田恵子・高木暢亮・菅野智則・百々千鶴

付帯工事分（３～８区）　2009年６月15日～９月11・18日、10月１日、11月５日、12月10日、

2010年２月３・４日

藤沢　敦・柴田恵子・菅野智則・百々千鶴

3．調査・整理作業は、東北大学埋蔵文化財調査室が行った。

4．本報告の編集は、阿子島香の指導のもとに、藤沢敦・柴田恵子・菅野智則が担当した。

5．本文は、藤沢敦・柴田恵子・菅野智則が執筆したほか、石器・石製品については傳田惠隆氏（東北大学大学院文学研究科考古学研究室）、動物遺存体については、川口貴史氏（当時:東松島市奥松島縄文村歴史資料館）に執筆を依頼し、報告をいただいた。執筆分担は以下の通りである。

第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章：藤沢敦

第Ⅳ章、第Ⅴ章：菅野智則

第Ⅵ章１～６・８：柴田恵子、７：傳田惠隆、９：川口貴史

第Ⅶ章：藤沢敦、菅野智則

英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。

6．遺物実測図の作成にあたっては、原図はすべて手描きで作成している。遺物実測図のうち、石器・石製品については手描きのトレースによって原版を作成した。それ以外の遺物実測図と遺構の測量図は、デジタルトレースによって原版を作成した。また、磁器と陶器の文様部分の図面原版は、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージャーを用いたデジタル写真から作成した。

7．遺物写真については、有限会社仙台写真工房に委託して撮影した。

8．発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申しあげる（敬称略）。

仙台市教育委員会、仙台市博物館、東北大学考古学研究室、佐藤洋（仙台市教育委員会）、

菅野正道（仙台市博物館）、鹿又喜隆（東北大学大学院文学研究科考古学研究室）、

澁谷悠子（東北大学大学院文学研究科日本史研究室）

9．出土遺物・調査記録は、東北大学埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

凡　例

1．方位は真北に統一してある。

2．図１は、国土地理院の１万分の１地形図「青葉山」を使用した。

3．川内地区の仙台城跡二の丸地区、および二の丸北方の武家屋敷にあたる地域の地形測量図は、仙台市教育委員会の作成による「仙台城跡地形図」（縮尺500分の１）を使用した。

4．国土座標値を用いる場合には、日本測地系と世界測地系の別を、それぞれ記入した。

5．遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。

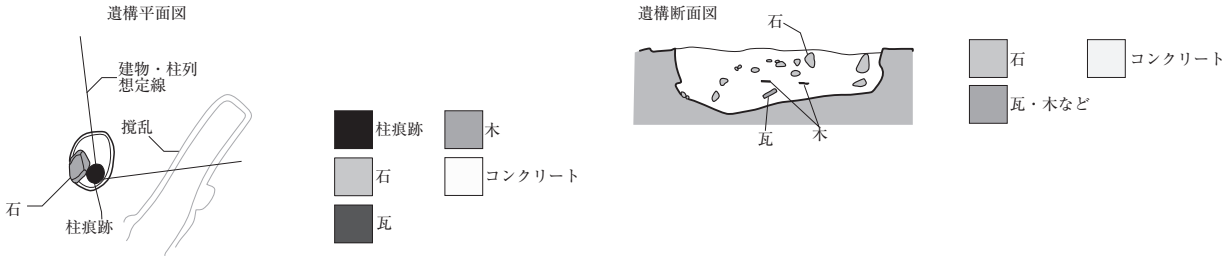
6．引用・参考文献は、巻末にまとめた。また、本文中で当室が刊行した報告書類を引用する際には、下記のように略した。

例　『東北大学埋蔵文化財調査年報』１　…　年報１

『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』2008　…　年次報告2008

『東北大学埋蔵文化財調査報告』１　…　調査報告１

7．挿図中の表記は、特に指示しないものについては、以下の通りである。



これら以外については、それぞれに指示した。

目　次

巻頭カラー図版

序
例言
凡例
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史……1
　1．仙台城と周辺武家屋敷の立地……1
　2．仙台城と仙台城下の武家屋敷……4
　　(1) 仙台城の歴史……4
　　(2) 仙台城周辺の武家屋敷……5
　3．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における
　　これまでの調査‥11
第Ⅱ章　調査の方法と経過……16
　1．調査地点の位置……16
　2．調査にいたる経緯……16
　3．調査の方法と経過……18
　　(1) 発掘調査の経過……18
　　(2) 記録方法……20
　　(3) 遺構の名称について……21
　　(4) 遺物の取り上げについて……21
　　(5) 整理作業……22
第Ⅲ章　基本層序と時期区分……23
　1．基本層序……23
　2．遺構の変遷段階の設定……23
　3．各期の推定時期……23
第Ⅳ章　検出遺構……29
　1．1区西の遺構……29
　　(1) Ⅰ期……29
　　(2) Ⅱａ期……29
　　(3) Ⅱｂ期……30
　　(4) Ⅲ期……31
　　(5) Ⅳ期……31
　2．1区東・8区の遺構……31
　3．1号溝と4号遺構……39
　4．2～4区の遺構……49
第Ⅴ章　出土遺物……53
　1．陶磁器……53
　2．土師質土器……58
　3．瓦質土器……59
　4．土製品……59
　5．瓦……60
　6．木製品・漆塗製品……63
　7．金属製品……63
　8．ガラス製品……64
　9．石器・石製品……64
　10．動物遺存体……65
第Ⅵ章　検出遺構の検討……101
　1．沢状遺構の変遷……101
　2．厩との関連……102
第Ⅶ章　まとめ……106

引用・参考文献
東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧
国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程
英文要旨
写真図版

図　目　次

図１　仙台城と二の丸の位置……2
図２　仙台城周辺の地形区分図……3
図３　川内地区周辺の絵図・地図（1）……6
図４　川内地区周辺の絵図・地図（2）……7
図５　川内北地区調査地点……13
図６　武家屋敷地区第13地点調査区の位置……17
図７　武家屋敷地区第13地点調査区模式図……19
図８　武家屋敷地区第13地点遺構変遷模式図……24
図９　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（1）……32
図10　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（2）……33
図11　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（3）……34
図12　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（4）……35
図13　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（5）……36
図14　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（6）……37
図15　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（7）……38
図16　武家屋敷地区第13地点１区東の遺構（1）……41
図17　武家屋敷地区第13地点１区東の遺構（2）……42
図18　武家屋敷地区第13地点１区東の遺構（3）……43
図19　武家屋敷地区第13地点１区の遺構……44
図20　武家屋敷地区第13地点
　１区東・５～８区の遺構（1）……45
図21　武家屋敷地区第13地点
　１区東・５～８区の遺構（2）……46
図22　武家屋敷地区第13地点
　１区東・５～８区の遺構（3）……47
図23　武家屋敷地区第13地点Ａ層堆積状況……48
図24　武家屋敷地区第13地点
　２～４区の遺構（1）……50
図25　武家屋敷地区第13地点
　２～４区の遺構（2）……51
図26　武家屋敷地区第13地点
　２～４区の遺構（3）……52
図27　武家屋敷地区第13地点出土磁器（1）……66
図28　武家屋敷地区第13地点出土磁器（2）……67
図29　武家屋敷地区第13地点出土磁器（3）……68
図30　武家屋敷地区第13地点出土磁器（4）……69
図31　武家屋敷地区第13地点出土陶器（1）……70
図32　武家屋敷地区第13地点出土陶器（2）……71
図33　武家屋敷地区第13地点出土陶器（3）……72
図34　武家屋敷地区第13地点出土陶器（4）……73
図35　武家屋敷地区第13地点出土陶器（5）……74
図36　武家屋敷地区第13地点出土土師質土器……75
図37　武家屋敷地区第13地点出土瓦質土器……75
図38　武家屋敷地区第13地点出土土製品……76
図39　武家屋敷地区第13地点出土瓦（1）……77
図40　武家屋敷地区第13地点出土瓦（2）……78
図41　武家屋敷地区第13地点出土瓦（3）……79
図42　武家屋敷地区第13地点出土瓦（4）……80
図43　武家屋敷地区第13地点出土瓦（5）……81
図44　武家屋敷地区第13地点出土瓦（6）……82
図45　武家屋敷地区第13地点出土瓦（7）……83
図46　武家屋敷地区第13地点出土瓦（8）……84
図47　武家屋敷地区第13地点出土古銭……85
図48　武家屋敷地区第13地点出土煙管……85
図49　武家屋敷地区第13地点出土
　その他銅製品（1）……85
図50　武家屋敷地区第13地点出土
　その他銅製品（2）……86
図51　武家屋敷地区第13地点出土鉄製品……86
図52　武家屋敷地区第13地点出土石器・石製品……87
図53　武家屋敷地区第13地点周辺の絵図……101
図54　「北下馬厩」の絵図……103
図55　武家屋敷地区第13地点
　検出遺構と絵図との対比……104

表　目　次

表１　武家屋敷地区第13地点関連絵図人名……10
表２　仙台藩の家格……10
表３　仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧……12
表４　武家屋敷地区第13地点遺構名称対照表（1）‥25
表５　武家屋敷地区第13地点遺構名称対照表（2）‥26
表６　武家屋敷地区第13地点時期別遺構一覧表……27
表７　武家屋敷地区第13地点遺構属性表……28
表８　武家屋敷地区第13地点出土磁器集計表……88
表９　武家屋敷地区第13地点出土陶器集計表……89
表10　武家屋敷地区第13地点出土瓦集計表……90
表11　武家屋敷地区第13地点出土
土師質土器・瓦質土器集計表……91
表12　武家屋敷地区第13地点出土金属製品集計表‥91
表13　武家屋敷地区第13地点出土
その他の遺物集計表……91
表14　武家屋敷地区第13地点出土
磁器観察表（1）……92
表15　武家屋敷地区第13地点出土
磁器観察表（2）……93
表16　武家屋敷地区第13地点出土
陶器観察表（1）……94
表17　武家屋敷地区第13地点出土
陶器観察表（2）……95
表18　武家屋敷地区第13地点出土
土師質土器皿観察表……96
表19　武家屋敷地区第13地点出土
土師質土器（皿以外）観察表……96
表20　武家屋敷地区第13地点出土
瓦質土器観察表……96
表21　武家屋敷地区第13地点出土
土製品観察表……96
表22　武家屋敷地区第13地点出土古代瓦観察表……97
表23　武家屋敷地区第13地点出土軒丸瓦観察表……97
表24　武家屋敷地区第13地点出土軒平瓦類観察表‥97
表25　武家屋敷地区第13地点出土軒桟瓦観察表……97
表26　武家屋敷地区第13地点出土丸瓦観察表……97
表27　武家屋敷地区第13地点出土平瓦１類観察表‥97
表28　武家屋敷地区第13地点出土平瓦観察表……98
表29　武家屋敷地区第13地点出土桟瓦観察表……98
表30　武家屋敷地区第13地点出土板塀瓦観察表……98
表31　武家屋敷地区第13地点出土面戸瓦観察表……98
表32　武家屋敷地区第13地点出土輪違い観察表……98
表33　武家屋敷地区第13地点出土
その他の瓦観察表……98
表34　武家屋敷地区第13地点出土古銭観察表……99
表35　武家屋敷地区第13地点出土煙管吸口観察表‥99
表36　武家屋敷地区第13地点出土銅製品観察表……99
表37　武家屋敷地区第13地点出土鉄製品観察表……99
表38　武家屋敷地区第13地点出土
石器・石製品観察表……100
表39　武家屋敷地区第13地点出土
ガラス玉観察表……100
表40　武家屋敷地区第13地点出土貝類集計表……100
表41　武家屋敷地区第13地点出土
魚類・哺乳類集計表……100

図　版　目　次

図版１　武家屋敷地区第13地点全景（1）・・・・・・・・・・123
図版２　武家屋敷地区第13地点全景（2）・・・・・・・・・・124
図版３　武家屋敷地区第13地点全景（3）・・・・・・・・・・125
図版４　武家屋敷地区第13地点全景（4）・・・・・・・・・・126
図版５　武家屋敷地区第13地点全景（5）・・・・・・・・・・127
図版６　武家屋敷地区第13地点の遺構（1）・・・・・・・・128
図版７　武家屋敷地区第13地点の遺構（2）・・・・・・・・129
図版８　武家屋敷地区第13地点の遺構（3）・・・・・・・・130
図版９　武家屋敷地区第13地点の遺構（4）・・・・・・・・131
図版10　武家屋敷地区第13地点の遺構（5）・・・・・・・・132
図版11　武家屋敷地区第13地点の遺構（6）・・・・・・・・133
図版12　武家屋敷地区第13地点の遺構（7）・・・・・・・・134
図版13　武家屋敷地区第13地点の遺構（8）・・・・・・・・135
図版14　武家屋敷地区第13地点の遺構（9）・・・・・・・・136
図版15　武家屋敷地区第13地点の遺構（10）・・・・・・・137
図版16　武家屋敷地区第13地点の遺構（11）・・・・・・・138
図版17　武家屋敷地区第13地点の遺構（12）・・・・・・・139
図版18　武家屋敷地区第13地点の遺構（13）・・・・・・・140
図版19　武家屋敷地区第13地点の遺構（14）・・・・・・・141
図版20　武家屋敷地区第13地点の遺構（15）・・・・・・・142
図版21　武家屋敷地区第13地点の遺構（16）・・・・・・・143
図版22　武家屋敷地区第13地点の遺構（17）・・・・・・・144
図版23　武家屋敷地区第13地点出土磁器（1）・・・・・145
図版24　武家屋敷地区第13地点出土磁器（2）・・・・・146
図版25　武家屋敷地区第13地点出土磁器（3）・・・・・147
図版26　武家屋敷地区第13地点出土磁器（4）・・・・・148
図版27　武家屋敷地区第13地点出土陶器（1）・・・・・149
図版28　武家屋敷地区第13地点出土陶器（2）・・・・・150
図版29　武家屋敷地区第13地点出土陶器（3）・・・・・151
図版30　武家屋敷地区第13地点出土陶器（4）・・・・・152
図版31　武家屋敷地区第13地点出土
　　土師質土器・瓦質土器・・・・・・・・・・・・・153
図版32　武家屋敷地区第13地点出土
　　土製品・瓦（1）・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
図版33　武家屋敷地区第13地点出土瓦（2）・・・・・・・155
図版34　武家屋敷地区第13地点出土瓦（3）・・・・・・・156
図版35　武家屋敷地区第13地点出土瓦（4）・・・・・・・157
図版36　武家屋敷地区第13地点出土瓦（5）・・・・・・・158
図版37　武家屋敷地区第13地点出土瓦（6）・・・・・・・159
図版38　武家屋敷地区第13地点出土瓦（7）・・・・・・・160
図版39　武家屋敷地区第13地点出土
　　古銭・煙管・その他の金属製品（1）・・161
図版40　武家屋敷地区第13地点出土
　　その他の金属製品（2）・動物遺存体・・162
図版41　武家屋敷地区第13地点出土
　　石器・石製品・ガラス玉・・・・・・・・・・・163

第Ⅰ章　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

１．仙台城と周辺武家屋敷の立地

仙台平野は、宮城県のほぼ中央部に位置し、西は奥羽脊梁山脈とそこから派生する丘陵地帯に接し、東は仙台湾に開いた平野である。狭義では、北は仙台市域北部の丘陵地帯によって区切られ、南は阿武隈川によって区切られる範囲を指す。仙台平野には、奥羽脊梁山脈に源を発した河川が西から東へ流下している。北から七北田川、広瀬川、名取川である。この中の広瀬川は、丘陵地帯を抜けて仙台平野に入ると、青葉山などの丘陵地の北東麓を流下し、やがて名取川に合流し、太平洋にそそいでいる。この広瀬川の両岸には、河岸段丘が発達している。河岸段丘は、高位から台町段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と分けられており、河岸段丘の間は段丘崖となっている。

仙台城は、宮城県仙台市青葉区川内および荒巻に所在する。現在の仙台市街地中心部から、広瀬川を西に渡った川内・青葉山地区に位置しており、市街地西部に張り出す青葉山丘陵の東縁辺と、その裾に広がる河岸段丘上に立地している。広瀬川が青葉山などの丘陵地の北東麓を流下しているため、広瀬川の南西側にあたる川内地区の河岸段丘はさほど広くない。一方、広瀬川の北東側には、広い河岸段丘面が連なっており、その東縁は活断層である長町－利府線によって画され、沖積平野に接している。仙台城下のほとんどの範囲は、この広瀬川北東側の河岸段丘上に位置している。現在の仙台市街地中心部も、この広瀬川の河岸段丘上に立地し、仙台城下を引き継ぎ発展してきた。

仙台城の構成は、大きく本丸・二の丸・三の丸（東丸）に分かれる（図１）。

本丸は広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた標高115～138mの、青葉山の高位段丘面（青葉山Ⅲ面）に立地している。本丸の北西側に二の丸が、北東側に三の丸が配置されているが、本丸だけは一段高い高位段丘面に位置している。本丸の東側は、60m以上の断崖となっている。現在の広瀬川は、本丸の立地する丘陵からやや離れたところを流れている。しかし江戸時代には、広瀬川は大きく蛇行して、本丸東側の崖下までせまっていた。本丸の南側は、広瀬川の支流である竜の口渓谷の急崖で画されている。本丸は防御を重視して、このような急峻な地形を利用して造られたと考えられている。

本丸の北側に広がる川内地区は、広瀬川によって形成された河岸段丘の中の、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面にあたる。二の丸は標高54～71mの上町段丘面に、三の丸は標高40m前後の下町段丘面に立地する。周辺の武家屋敷も、西側の標高の高い部分から広瀬川に向かって順に、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面に立地する。東北大学の川内北地区は、東側の一段低いグラウンド部分が中町段丘面にあたり、それ以外の区域は上町段丘面に相当する（図２）。

これらの河岸段丘を開析しつつ、広瀬川の支流が、西から東へ流れている。これらの支流のひとつである千貫沢が、二の丸の北側を流れており、千貫沢をはさんで南側が二の丸地区、北側が二の丸北方武家屋敷地区となる。千貫沢は、標高差の大きい河岸段丘を横切る形で流下していることから、これらの段丘面を深く切り込んでいる。二の丸裏門から北に延びる道路が千貫沢を渡るところに造られた千貫橋付近では、段丘面の標高が57m程度、千貫沢の沢筋の標高は46m程度である。千貫橋付近の段丘面と千貫沢の標高差は11mあまりになり、深くて急峻な沢筋となっている。大橋付近を流れる広瀬川の河原の標高は22m程度で、千貫橋付近の段丘面との標高差は、およそ35mとなる。また大手門の北側にも沢筋が残っており、仙台城の造営によって改変されていると思われるが、本来は急峻な沢筋であったと考えられる。

図１　仙台城と二の丸の位置
Fig. 1　Distribution of Sendai Castle

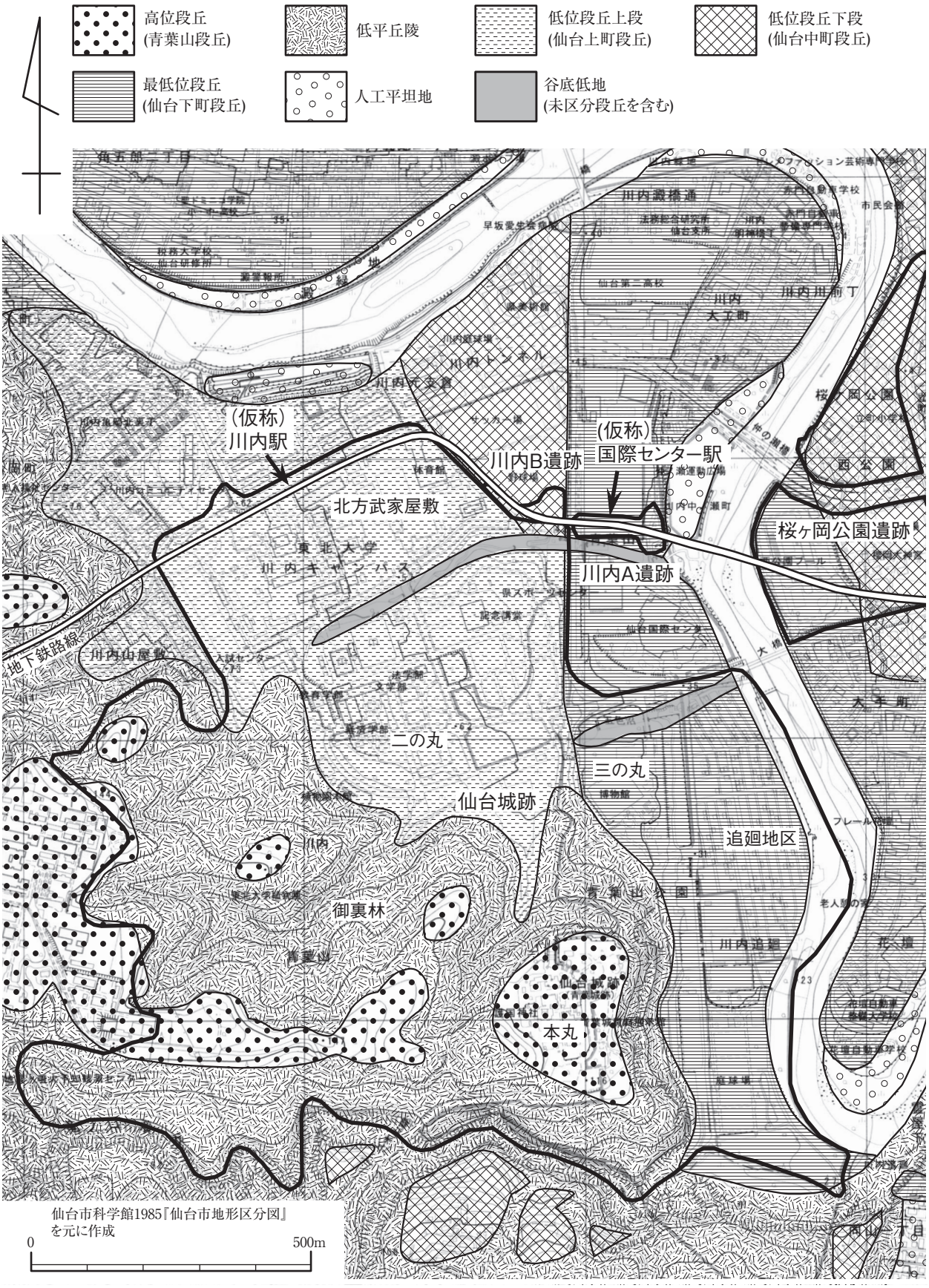


図２　仙台城周辺の地形区分図
Fig. 2　Topographical map around Sendai Castle

２．仙台城と仙台城下の武家屋敷

（1）仙台城の歴史

仙台城は、慶長15年（1600年）から、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって築城が開始された近世城郭である。その後、幾たびかの改変を受けつつ、幕末まで仙台藩の中枢として機能していく。この仙台城は、本丸と二の丸の一部を除き、2003年に国史跡に部分指定されている。

この伊達政宗による築城以前には、国分氏の千代城が存在したことが知られていたが、その実態は不明なままであった。1998年の仙台市教育委員会による本丸石垣修復工事に伴う調査の際に、虎口・竪堀・平場・通路などの遺構が検出され、初めて国分氏の千代城の遺構の一端が明らかとなった（金森・渡部2009）。千代城は、文献記録や発掘調査成果の検討から、築城期は不明であるが、16世紀末の天正年間（1573～92年）頃に廃絶されたと考えられている。

伊達政宗によって造営された仙台城の本丸は、慶長７年（1602年）には、土木工事にあたる普請がほぼ完成していたと考えられる。各種の殿舎建築は継続中であったと思われ、本丸の中心建物となる「大広間」は、慶長15年（1610年）に完成したとされる。築城時に、本丸北側には石垣が築かれるが、石垣修復に伴う発掘調査によって、３時期に渡る変遷が明らかとなった。築城期のⅠ期石垣は、元和２年（1616年）の地震で大きな被害を受け、Ⅱ期石垣が築かれる。Ⅱ期石垣も、寛文８年（1668年）の地震で大きく崩壊し、現存するⅢ期石垣が造られたことが明らかとなっている（金森・渡部2009）。

仙台城が築城された時点での、本丸以外の施設を含めた仙台城の全体像は、必ずしも明らかではない。

後に三の丸（東丸）とされる区域では、仙台市教育委員会による発掘調査によって、政宗時代の茶室や四阿の可能性のある建物跡などが発見されている。池跡も検出されており、庭園が伴うものと推定されている（佐藤洋ほか1985）。本丸に付随した施設として、整備が進められていたと考えられる。

この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったとの伝承がある。しかし、この伝承を検証できる資料はない。本丸の築造が進められた慶長年間には、伊達宗泰は元服前の幼少期であり、この時期に伊達宗泰の屋敷が置かれていたと想定することは難しい。伊達宗泰の屋敷が置かれていたとしても、本丸築城期より遅れる可能性もある。また、他の重臣の屋敷が置かれていた可能性を示す史料もある。文献史料に残されていない、これら以外の屋敷が置かれた可能性も検討していく必要がある。いずれにせよ、二の丸第９地点などの発掘調査では、江戸時代初頭に遡る遺構が検出されており、本丸築城期から、何らかの施設が置かれていたことは確実である（年報８・９）。

元和６年（1620年）には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八（いろは）姫の居館である「西屋敷」が造られる。五郎八姫は、伊達政宗の正室愛姫との間に生まれた長女で、慶長４年（1599年）に徳川家康の六男忠輝と婚約し、慶長11年（1606年）に輿入れする。しかし、元和２年（1616年）に忠輝が、大阪夏の陣の際の遅参・怠戦と、家臣による旗本殺害に対する不謝罪を理由に改易され、伊勢国に配流されると、五郎八姫は政宗の江戸屋敷へ帰され、さらに元和６年には仙台に移ることとなった。この五郎八姫の、仙台における居所として造られたのが「西屋敷」である。正保２年（1645年）の『奥州仙台城絵図』（正保絵図）に描かれており、東西102間、南北60間であったことが記されている。東側に門が描かれ、東向きの屋敷であったことが判る。二の丸第５地点の調査では、西屋敷期の礎石建物跡などが発見されており、その西側に複雑な形態の池が連なる庭園が広がっていたことが判明している（年報６・７）。

伊達政宗は、寛永４年（1627年）、仙台城下の南東側にあたる現在の仙台市若林区古城において、若林城を造営する。「仙台屋敷構」として幕府の許可を得たものであるが、周囲に堀と土塁をめぐらした城郭である。寛永５年（1628年）に若林城が完成すると、政宗は国元では若林城を居城とし、仙台城に滞在するのは、儀式など特別な場合に限られるようになる。対照的に、後の二代藩主伊達忠宗は、国元では仙台城に滞在していた。この若

林城の建物が、後の二の丸造営の際に、移築されていることが仙台藩の公式記録である『治家記録』に記されている。若林城跡の第５次調査と第８次調査で調査された１号建物跡が、仙台城二の丸を描いた『御二之丸御指図』に見られる「大台所」と一致することなどが明らかとなり、若林城の建物を仙台城二の丸に移築したという文献記録を裏付けることとなった（仙台市教委2006・2008）。

伊達政宗は寛永13年（1636年）に死去し、伊達忠宗が二代藩主となる。忠宗は、寛永15年（1638年）に、伝伊達宗泰の屋敷跡に二の丸を造営する。二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸で行われるようになり、藩主の居所も二の丸へ移る。これ以降、二の丸が仙台城の実質的な中枢となり、この状態は幕末まで維持されていくこととなる。二の丸の造営とほぼ同じ頃に、三の丸（東丸）には、米蔵が置かれるようになったと考えられる。

寛永15年に二の丸が造営された時点では、五郎八姫の「西屋敷」が、二の丸の北隣に存続していた。五郎八姫が寛文元年（1661年）に死去すると、もとの「西屋敷」は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業所など、二の丸に附属する実務的な施設が置かれるように変化する。

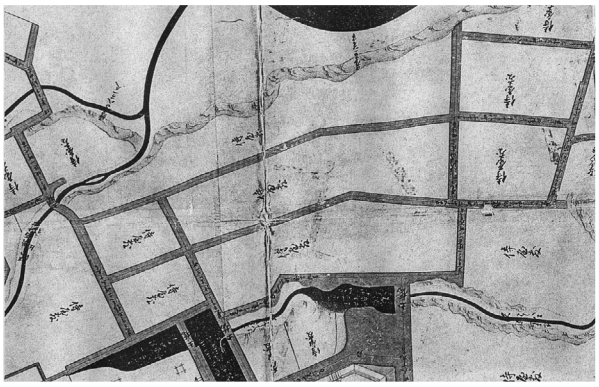
17世紀末から18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって、二の丸は大改造が施される。その際、もとの「西屋敷」の敷地は二の丸に取り込まれ、中奥がもとの「西屋敷」の範囲に大きく拡張された。仙台城では、藩主と側室の居住の場を「中奥」と呼んでいた。この改造によって、仙台城は完成した姿を迎えた。二の丸は、文化元年（1804年）の火災でほぼ全焼する被害を受けつつも、従来通り再建され、幕末まで仙台城の中枢として維持されていく。

明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城も大きく変化する。仙台藩は奥羽越列藩同盟の中心として新政府に対抗するが、相次ぐ軍事的敗北の中で同盟は瓦解する。仙台藩は慶応４年（明治元年・1868年）９月に新政府に降伏謝罪し、12月には領地・領民をいったん取り上げられた上で、28万石を新たに拝領し存続が許された。明治２年（1869年）の版籍奉還により、藩主伊達宗基が仙台藩知藩事となり、二の丸には藩の統治機関たる勤政庁が置かれた。明治４年（1871年）の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は、明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本営として引き続き利用された。しかし明治15年（1882年）の火災で、二の丸建物のほとんどが焼失してしまう。そして明治19年（1886年）には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、明治21年（1888年）には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には師団司令部が置かれ、三の丸跡には陸軍倉庫が置かれていた。本丸跡には、明治37年（1904年）に仙台招魂社（後の護国神社）が建てられ、戦没者を祀る場所へと変わっていく。

昭和20年（1945年）７月21日の仙台空襲の際には、仙台城の建物として最後まで残っていた大手門・脇櫓と巽門が焼失してしまう。敗戦後は、二の丸跡をはじめとする川内地区のかつての軍用地が、アメリカ軍の駐屯地であるキャンプ・センダイとなる。昭和32年（1957年）のアメリカ軍からの返還を受け、二の丸地区のほとんどは東北大学が使用することとなり、一部は仙台市の公園となり、現在に至っている。

（2）仙台城周辺の武家屋敷

仙台城下は、仙台城の造営と併行して、その建設が進められていく。慶長６年（1601年）の正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図を以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル。」との記録が残されている（『貞山公治家記録巻之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていったものと考えられる。江戸時代の地誌である『仙台萩』には、慶長７年（1602年）に、仙台に移る以前の本拠であった岩出山の士民に、仙台へ移るよう命令したことが記されている。その戸数などは不明ながら、家臣団や町方をはじめ多数が移住したと見られている。仙台城下の範囲は、その後徐々に拡大し、それに伴い再配置が行われる場合もあったが、基本的な



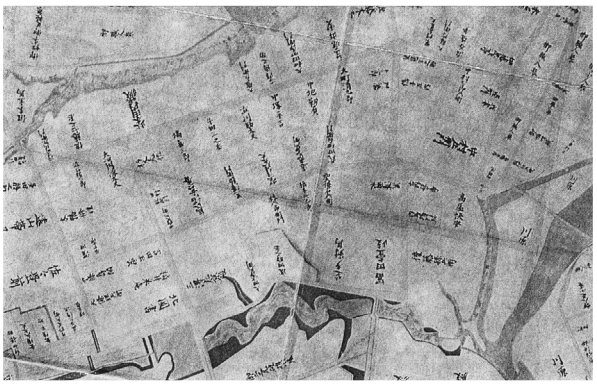
1．正保二年（1645年）　奥州仙台城絵図

2．寛文四年（1664年）　仙台城下絵図

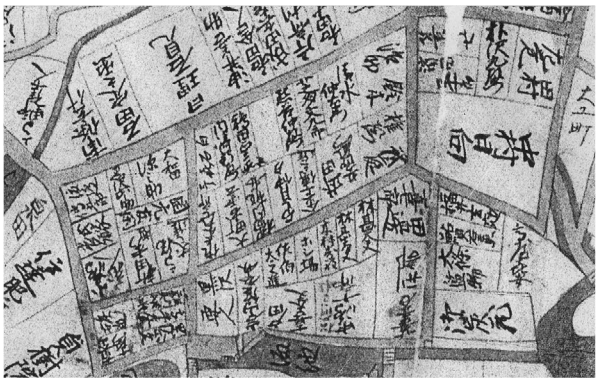
3．寛文八・九年（1668・69年）　仙台城下絵図

4．延宝六～八年（1678～80）　仙台城下大絵図

5．延宝九～天和三年（1681～83年）　仙台城下絵図



6．元禄四・五年（1691・92年）　仙台城下五釐卦絵図



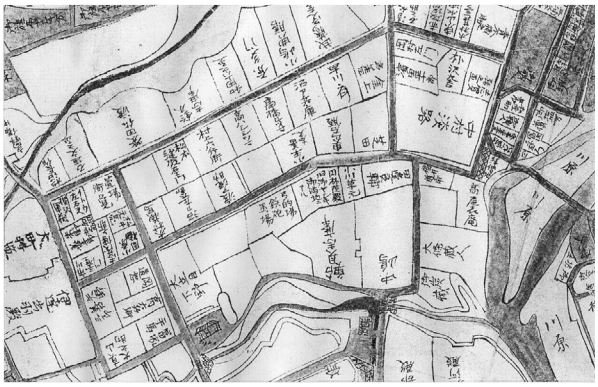
7．享保九年（1724年）以降　仙台城下絵図

1・2・6『絵図・地図で見る仙台』

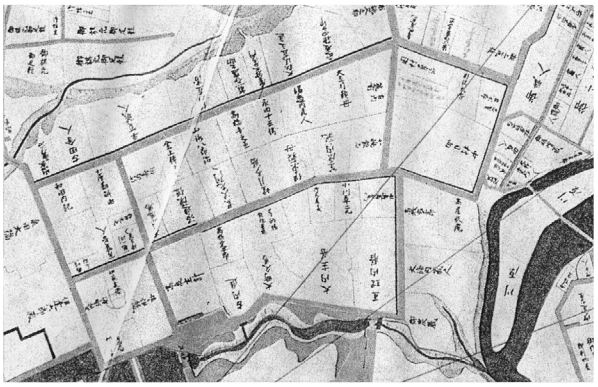
5・7『絵図・地図で見る仙台　第二輯』

3・4『仙台城下絵図の研究』

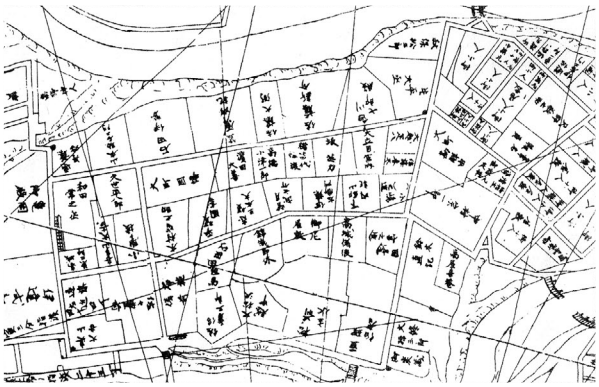
図３　川内地区周辺の絵図・地図（1）
Fig. 3　Picture maps around the Kawauchi area (1)



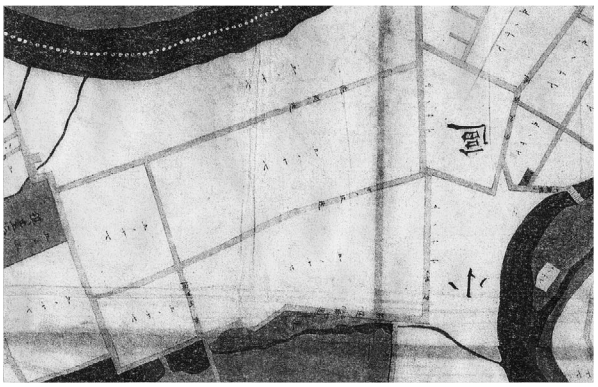
8．宝暦十～明和三年（1760～66年）　仙台城下絵図



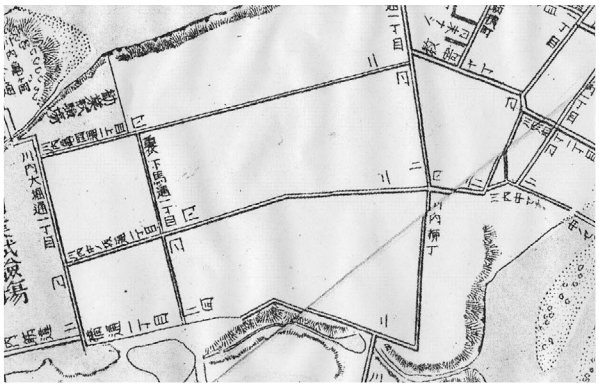
9．天明六～寛政元年（1786～89年）　仙台城下絵図



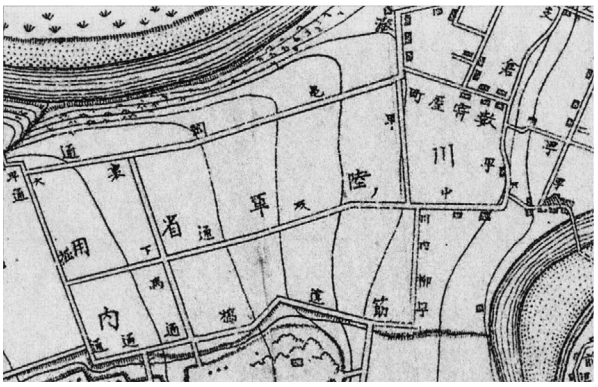
10．安政三～六年（1856～59年）　安静補正改革仙府絵図



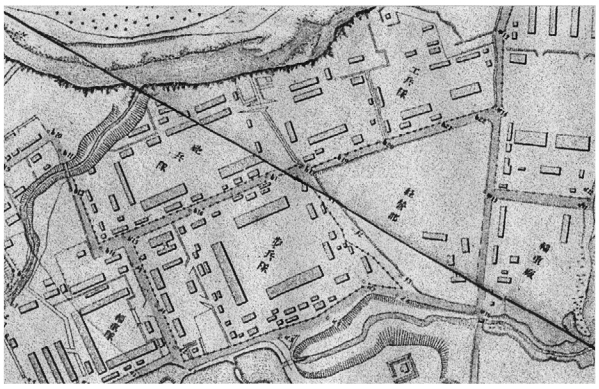
11．明治８年（1875年）　宮城郡仙台町地引図



12．明治13年（1880年）　宮城県仙台区全図



13．明治15年（1882年）　仙台区及近傍村落之図



14．明治26年（1893年）　仙台市測量全図

9・10・14『絵図・地図で見る仙台』

8・11～13『絵図・地図で見る仙台　第二輯』

図４　川内地区周辺の絵図・地図（2）
Fig. 4　Picture maps around the Kawauchi area (2)

構成は踏襲されていく。川内地区は、一部の寺社と職人屋敷を除くと、侍屋敷として使われていた。

仙台城下の様相を知ることができる基本的な資料は、城下絵図である。これらの城下絵図には、年代が近接するものもあるため、時期による変遷が判るように選択して、川内北地区周辺の部分を示したのが、図３・４である。道路の変化を見るため、明治時代の地図についても、併せて示しておいた。

仙台城下を描いた知られている最も古い絵図は、正保２年（1645年）の『奥州仙台城絵図』である（図３－１）。これは幕府提出用絵図のため、細かな屋敷割は記されていないが、仙台城の周辺には「侍屋敷」と記されており、この時点では武家屋敷が広がっていることが判る。これまでの川内北地区での調査でも、各所で江戸時代初頭に遡る遺構や遺物が発見されており、この区域では江戸時代初頭から屋敷地が整備されていったものと考えられる。

正保絵図以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家臣の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも上級家臣の屋敷が多い。東北大学の川内北地区も、比較的上級の家臣の屋敷が置かれていた。川内地区全体の屋敷の様相については、調査報告１において、城下絵図をもとにした検討結果を掲載しているので、詳細はそちらを参照していただきたい。

仙台城下絵図で、川内地区の道路の位置を見ると、正保絵図（図３－１）以降、明治15年（1882年）の地図（図４－13）に至るまで、基本的に変化がないことが判る。江戸時代における道路の位置の復元についても、調査報告１において詳しく検討しているので、ここではごく概略を述べることとする。

二の丸と北方武家屋敷との境には、千貫沢とそれを広げた堀がある。この千貫沢や堀沿いに「筋違橋通」が東西に走っているが、それより北側には東西方向の道路としては「中ノ坂通」と「亀岡通」の２本がある。ところが現在は、千貫沢沿いの道路の北側には、東西方向の道路は１本だけである。現在のような道路は明治26年（1893年）の地図（図４－14）において、初めて見られるようになる。これと同時に、大手門から北側へ延びる道路も改変されている。大手門前から北へ延びる道路は、もともとは、千貫沢を渡る筋違橋の北側で鉤の手状に屈曲していたが、この時にまっすぐ北へ延びる道路へ変わっている。同様に、広瀬川を渡る大橋から大手門へいたる道路も、もとは大手門手前で屈曲していたのが、大橋からまっすぐ延びる形に変わっている。明治22年（1989年）の広瀬川の洪水によって木橋であった大橋が流失し、第二師団の要請で鉄橋が架けられることとなり、明治25年（1892年）に竣工した際に、大橋から大手門へ至る道路が直線になった。川内北地区の道路がつけ替えられたのが、大橋鉄橋架橋と同時かどうかは確認できていないが、明治21年（1888年）の第二師団の設置以降、一連の過程で川内地区の整備が進められていったものと考えて良いであろう。

明治時代の地図も、初期のものは、全てを正確に測量して作成されたものではない。ある程度信頼が置けるものは、明治26年の地図以降であるが、この段階では川内北地区周辺の道路は、改変された後である。改変以前の道路を正確に測量した地図は、確認できていない。したがって、絵図や明治時代初期の地図をもとに、江戸時代の道路を正確に復元することは難しい。南北方向の道路については、ある程度復元根拠がある。しかし東西方向の道路である「中ノ坂通」と「亀岡通」については、復元根拠を欠いており、正確な位置を復元することは難しい。このような限界を踏まえて、図１では、江戸時代の道路の位置を、現在の地図上に推定復元している。

千貫沢の北側を東西に走るのが「筋違橋通」である。その北側を東西に走るのが「中ノ坂通」と「亀岡通」である。二の丸裏門である台所門を出て、千貫橋を渡って北に延びる道路が「裏下馬通」で、それとほぼ並行して西側にあるのが「大堀通」である。筋違橋から北へ延び「中ノ坂通」に至るのが「川内柳丁」、さらに北へ延び澱橋へ至るのが「澱橋通」である。

今回報告する武家屋敷地区第13地点（BK13）は、「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の北東側に位置し、「筋違橋通」のすぐ北側にあたる場所であると考えられる（図１）。江戸時代の絵図と対比させて考えると、調査地点は、「筋違橋通」に面し、「裏下馬通」との交差点から１軒目と２軒目の屋敷の南端付近に相当すると考えられる。この１軒目の屋敷と２軒目の屋敷の間には、千貫沢の支流の沢が流れていたことが、いくつかの絵図から判

明する。この支流の沢と考えられる遺構（４号遺構）が検出されており、調査区がこの２軒の屋敷にまたがることは間違いがないものと思われる。

西側の「裏下馬通」との交差点から１軒目の屋敷の道路沿いには、「北下馬厩」が存在したことが、いくつかの絵図から判明する。第Ⅵ章で検討するが、今回の調査区に、この「北下馬厩」が入ってくる可能性も高い。仙台城の周囲には、３ヶ所に厩が設けられていた。「大手門」の東側には、「外繋」とも呼ばれた「下馬厩」があり、もっとも規模が大きかった。二の丸裏門である「台所門」に東から入っていく「扇坂」の入口近くには「扇坂下厩」がある。「台所門」に北側から入る千貫橋の外側に置かれていたのが「北下馬厩」で、20頭を収容できた。これは、「大手門」近くの「下馬厩」に次ぐ規模であった。

調査区に相当すると考えられる２軒の屋敷について、これらを使用していた人名を、城下絵図から拾い出したものが表１である。記載されている人名をもとに、これらの家臣の禄高や家格などについて、次に見てみたい。記載された家臣の全てについて、詳細が判明している訳ではないが、おおよそは判明する。なお仙台藩では、生産高や知行高を、一般的な石高ではなく、戦国時代以来の貫高で表示していた。貫高と石高の換算は、寛永検地を経て、１貫（1000文）を10石に換算するように定められた。寛永検地以前の換算については、いくつかの説がある。ただし、ここで検討材料とする屋敷拝領者が記載されている藩政用絵図が、寛文４年（1664年）以降のものしか存在せず、全て寛永検地より新しい時期のものとなるので、１貫を10石と換算すれば良いこととなる。

仙台藩の家格は、家格の高い順から、一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出・平士・組士・卒というように分けられていた（表２）。平士は、仙台藩家臣団の主力を構成した家臣で、多くは大番組に属する大番士であった。平士（大番士）は、登城した際に控える部屋の名前をとって、上位から虎の間番士・中の間番士・次の間番士・広間番士に分けられた。組士と卒が下級藩士となる。

絵図の記載を見ると、北側の区画と合わせて大きな区画としている場合がある。特に西側の１軒目の屋敷では、ほとんどの絵図で大きな区画となっている。２軒目でも、享保９年以降（1724～）の絵図では、北側の区画と合わせて大きな屋敷地となっている。

西側の１軒目の屋敷では、17世紀に記載の無い場合が多く、これは空き屋敷を示すものと思われる。それ以外の使用者の記載のあるものでは、かなり家格の高い重臣が使用していることが判る。最も家格の高い一門の三沢氏、準一家の高泉主計、一族の大立目下野が続く。黒沢要人や布施備前は、これらよりは家格の低い着座であるが、それでもかなりの重臣である。禄高は黒沢要人が300貫文、布施備前は170貫文と、かなり高い。二の丸裏門の「台所門」を出て、「下馬厩」が置かれている脇という、重要な場所であり、それにふさわしい重臣が屋敷地を拝領していたと言えるであろう。

東側の２軒目の屋敷は、西側より家格・禄高ともに低い。家格や禄高が判然としないものも多い。それでも、元禄４・５年（1691～92）絵図では、召出で130貫文という高い禄高の太田次郎兵衛の名前が見える。享保９年以降（1724～）の絵図では、虎間番士ではあるが62貫文と高い禄高の岩山縫殿介が使用している。これらは、家臣の中でも比較的上級のものと言うことができるであろう。

以上のように、武家屋敷地区第13地点の調査区の周辺は、江戸時代を通じて、かなり上級の家臣の屋敷が並んでいた区域と言える。特に西側の「裏下馬通」の交差点に面した屋敷は、家格・禄高ともにかなり上級の家臣が使用していた場所である。

表１　武家屋敷地区第13地点関連絵図人名
Tab. 1　List of names of *samurai* lived at this location

年代（西暦）	図	「筋違橋通」沿い	
		「裏下馬通」交差点から１区画目	「裏下馬通」交差点から２区画目
寛文４年（1664）	図３－２	記載無し	大河内善左衛門　不明　20貫文
寛文８・９年（1668～69）	図３－３	記載無し	大河内善左衛門　不明　20貫文
延宝６～８年（1678～80）	図３－４	三沢頼母　一門　100貫文 北側と同一区画	大河内善左衛門　不明　20貫文
延宝９年～天和３年（1681～83）	図３－５	記載無し	大河内善左衛門　不明　20貫文
元禄４・５年（1691～92）	図３－６	三沢左京　一門　100貫文	太田次郎兵衛　召出　130貫文
享保９年以降（1724～）	図３－７	黒沢要人　着座　300貫文 北側と同一区画	岩山縫殿介　虎間　62貫文 北側と同一区画
宝暦10年～明和３年（1760～66）	図４－８	大立目下野　一族　100貫文 北側と同一区画	記載無し
天明６年～寛政元年（1786～89）	図４－９	高泉主計　準一家　270貫文 北側と同一区画	古内進　不明　不明
安政３～６年（1856～59）	図４－10	布施備前　着座　170貫文 北側と同一区画	佐伯勇五郎　不明　不明

表２　仙台藩の家格
Tab. 2　List of status in *Sendai-han*

家　格	人　数	備　考
一門	11	角田石川氏・亘理伊達氏・水沢伊達氏・涌谷伊達氏・登米伊達氏・岩谷堂伊達氏・岩出山伊達氏・宮床伊達氏・川崎伊達氏・白河氏・三沢氏
一家	17	鮎貝・秋保・柴田・小梁川・塩森・大条・泉田・村田・黒木・石母田・瀬上・中村・石川・中目・亘理・梁川・片倉
準一家	10	猪苗代・天童・松前・葦名・本宮・高泉・葛西・上遠野・保土原・福原
一族	22	大立目・大町（胆沢郡）・大塚・大内・西大条・小原・西大立目・中島（江刺郡）・宮内・中島（伊具郡）・茂庭・遠藤・佐藤・畠中・片平・下郡山・沼辺・大町（宮城郡）・高城・大松沢・石母田・坂
宿老	3	着座のうち一番座の三家（遠藤・但木・後藤）
着座	28	正月等の儀式で登城し着座して藩主に挨拶する家臣
太刀上	10	正月賀礼に太刀を献上し藩主から盃を頂戴する家柄
召出一番座	38	正月宴会に召し出される家柄
召出二番座	51	正月宴会に召し出される家柄
平士（1000石以上）	6	
平士（500石以上）	68	
平士（100石以上）	994	
合計	1258	

３．仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区におけるこれまでの調査

東北大学の川内地区は、沢とその脇を東西に走る道路によって、川内南地区と北地区に分かれている。この川内南地区は仙台城二の丸が置かれた場所であり、北地区は家臣の屋敷が存在した区域に相当する（図１）。

仙台城の考古学的調査は、本丸・二の丸・三の丸などの各地区において実施されている。この内二の丸地区については、東北大学の施設整備事業などに先立ち、東北大学によって調査が実施されてきた。三の丸地区では、仙台市博物館の建て替えに伴い、仙台市教育委員会による調査が実施されている。本丸地区では、石垣修復工事に伴う仙台市教育委員会による調査が、1997年から実施され、多大な成果をあげるとともに、史跡指定への直接的な契機となった。2001年度からは、文化庁の国庫補助を受けた遺構確認調査が仙台市教育委員会によって開始され、現在も継続中である。表３に、仙台城と、周辺武家屋敷地区における調査の一覧を示しておいた。

仙台城周辺の武家屋敷地区についての調査は、近年急速に調査事例が増加している。

1978年、川内北地区のプール西側の排水管埋設工事の際、石組みの井戸などが発見された。この時、東北大学の文学部考古学研究室によって緊急の調査が行われたのが、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における最初の考古学的調査であった。しかしこの時は、既に掘削が実施された後に、露出した遺構の記録を作成する緊急の調査であったため、ごく部分的な調査にとどまらざるをえなかった。この時には、川内北地区は周知の遺跡の範囲内ではなく、新たに周知の遺跡として登録する措置もとられていない。

東北大学に埋蔵文化財調査委員会が1983年に設置され、構内遺跡の組織的な調査が開始されると、川内北地区についても遺跡が広がっている可能性に配慮し、必要な措置がとられるようになった。すなわち、施設建設が計画されている場所については試掘調査を行うとともに、営繕工事に際しては、立会調査を実施してきた。その結果、いくつかの調査において、江戸時代の遺構面が残存していることが明らかとなってきた。また、1986年度に調査を実施した二の丸第８地点は、二の丸北側に東西に延びていた堀の、北側の岸の部分の調査であった（年報４）。二の丸に伴う堀の調査のため、調査地点名称は二の丸地区の名称を採用したが、調査を実施した場所は川内北地区であった。これらの調査は、川内南地区が周知の遺跡である仙台城跡の範囲内に含まれていたことから、周知の遺跡の隣接地という位置づけで、調査を実施していたものである。

これらの調査によって、川内北地区においても、江戸時代の遺構面が良好に残存していることが判明してきた。しかも、二の丸地区の遺構面から、途切れることなく、周辺の遺構面が連続して残っていることも明らかとなってきた。このような成果を受けて、仙台市教育委員会・宮城県教育委員会とも協議した結果、1993年度に仙台城跡の範囲を拡大する措置がとられた。川内北地区に江戸時代の遺構面が良好に残存していることと、二の丸のすぐ北側に位置し、二の丸と密接に関連することから、仙台城跡の一部として扱うこととなった。これにより川内北地区のほとんどが、周知の遺跡である仙台城跡の範囲に含まれることとなった。ただし、川内北地区の中でももっとも東側のグラウンドについては、それまで実施した立会調査によって、確実に江戸時代に遡る遺構面が残存している場所は確認できていなかった。またこのグラウンド部分は、西側よりは段丘崖によって一段低くなっている区域であり、二の丸地区が立地する段丘面より、一段低い段丘面であった。これらの理由から、仙台城跡の範囲拡大にあたって、グラウンドの区域は含まれなかった。

東北大学埋蔵文化財調査委員会に始まり、東北大学埋蔵文化財調査研究センターを経て、現在の埋蔵文化財調査室に至る、東北大学の構内遺跡調査組織による、施設整備などの工事に伴う二の丸北方武家屋敷地区における調査は、2012年度までに第１～15地点の調査が実施されてきた（図５）。この内、1985年度に実施した第２地点（BK２）と第３地点（BK３）の調査は、結果的に立会調査で終了したため欠番としている。したがって、13地点で調査が実施されていることとなる。

第１地点（BK１）は、2001年度に調査を実施した第７地点と一部重なる区域で、1984年度に実施した試掘調査である。当時、課外活動施設の建設候補地であったため、江戸時代の遺構・遺物の有無を確認する目的で、２

表３　仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧
Tab. 3　List of excavations of Sendai Castle and *Samurai* Residences around Sendai Castle

年度		仙台市調査		東北大学構内		仙台市調査（周辺武家屋敷）	
		国庫補助確認調査以外	国庫補助重要遺跡遺構確認調査	二の丸地区	二の丸北方武家屋敷地区	二の丸北方武家屋敷地区	その他の周辺武家屋敷
1974	昭和49			文系厚生施設緊急調査（仙台市教委）			
1978	昭和52				プール脇排水管緊急調査（考古学研究室）		
1982	昭和57			第１地点試掘			
1983	昭和58	三の丸博物館新築（76集）		第１地点（年報１） 第２地点（年報１） 第３地点（年報１）			
1984	昭和59			第４地点（1987年度継続）	第１地点試掘		
1985	昭和60			第５地点試掘	第４地点試掘		
1986	昭和61			第７地点（年報４） 第８地点（年報４）			
1987	昭和62			第４地点（年報５） 第５地点（翌年度継続）			
1988	昭和63			第５地点（年報６）			
1989	平成１			第５地点付帯部（年報７） 第９地点試掘	第５地点（年報７）		
1990	平成２			第９地点（年報８）			
1991	平成３			第10地点（年報９）			
1992	平成４			第11地点試掘 第12地点試掘 第13地点（年報10）			
1993	平成５			第12地点（年報11） 第14地点（年報11）			
1994	平成６			第15地点（年報12）	第４地点（翌年度継続）		
1995	平成７			第11地点（年報13）	第４地点（年報13）		
1996	平成８	本丸１次石垣修復確認調査			第６地点（年報14）		
1997	平成９	本丸１次石垣修復（翌年度継続）		第16地点（年報15）			
1998	平成10	本丸１次石垣修復（翌年度継続）		第17地点試掘			
1999	平成11	本丸１次石垣修復（翌年度継続）					
2000	平成12	本丸１次石垣修復（翌年度継続）		第17地点（年報18）			
2001	平成13	本丸１次石垣修復（翌年度継続）	第１次大広間１次 第２次清水門（259集）		第７地点（年報19）		
2002	平成14	本丸１次石垣修復（翌年度継続）	第３次大番士土手他 第４次巽櫓 第５次本丸大広間２次（264集）		第８地点（年報20）		
2003	平成15	本丸１次石垣修復（275・282・298・349集）	第６次全域分布（271集） 第７次大広間３次 第８次登城路 第９次広瀬川護岸石垣（270集）		第９地点（年報21）		
2004	平成16	中門・清水門復旧整備（299集）	第10次大広間４次 第11次広瀬川護岸・沢曲輪他石垣（285集）			東西線試掘（289集）	川内Ａ・桜ヶ岡公園東西線試掘（289集）
2005	平成17	清水門周辺復旧整備（299集） 登城路１次（300集）	第12次大広間５次 第13次三の丸１次 第14次広瀬川護岸・中門石垣（297集）			東西線試掘（302集）	川内Ａ周辺・桜ヶ岡公園東西線試掘（302集）川内Ａ遺跡東西線（312集）
2006	平成18		第15次大広間６次 第16次三の丸２次（309集）		第10地点（年報24） 第11地点（翌年度継続）	東西線（亀岡トンネル開削部・342集）	川内Ａ周辺・川内Ｂ東西線試掘（316集）追廻遺構確認１次（350集）
2007	平成19		第17次大広間７次 第18次三の丸３次 第19次本丸北西石垣（330集）		第11地点（調査報告１） 第12地点（調査報告１）	東西線（川内駅部・立坑部・386集）	川内Ｂ東西線試掘 東西線桜ヶ岡公園（広瀬川高架橋部・公園駅部他） 桜ヶ岡公園２次（西公園再整備・318集）追廻遺構確認２次（350集）
2008	平成20		第20次大広間８次 第21次造酒屋敷１次 第22次本丸北西石垣（348集）		第13地点（本体部分・調査報告２）	東西線（扇坂トンネル部・402集）	東西線川内Ａ（広瀬川右岸橋梁部・402集）・川内Ｂ（扇坂トンネル部・385集）・桜ヶ岡公園（公園駅部他） 桜ヶ岡公園３次（西公園再整備・335集）追廻遺構確認３次（350集）
2009	平成21	登城路２次（354集）	第23次造酒屋敷２次 第24次大広間追加 第25次広瀬川護岸石垣（374集）		第13地点（付帯工事・調査報告２）	東西線（扇坂トンネル部・亀岡トンネル開削部・402集） 第２次雨水幹線（356集）	東西線川内Ａ（広瀬川右岸橋梁部・402集）
2010	平成22		第26次造酒屋敷３次（395集）			東西線（亀岡トンネル開削部・401集）	東西線川内Ｂ（扇坂トンネル部・401集）追廻コート周辺試掘
2011	平成23				第14地点（翌年度継続）		
2012	平成24	大手門北側石垣土塀・中門北側石垣・本丸北西石垣（震災復旧）			第14地点（調査途中で中断）第15地点（翌年度継続）		追廻公園センター

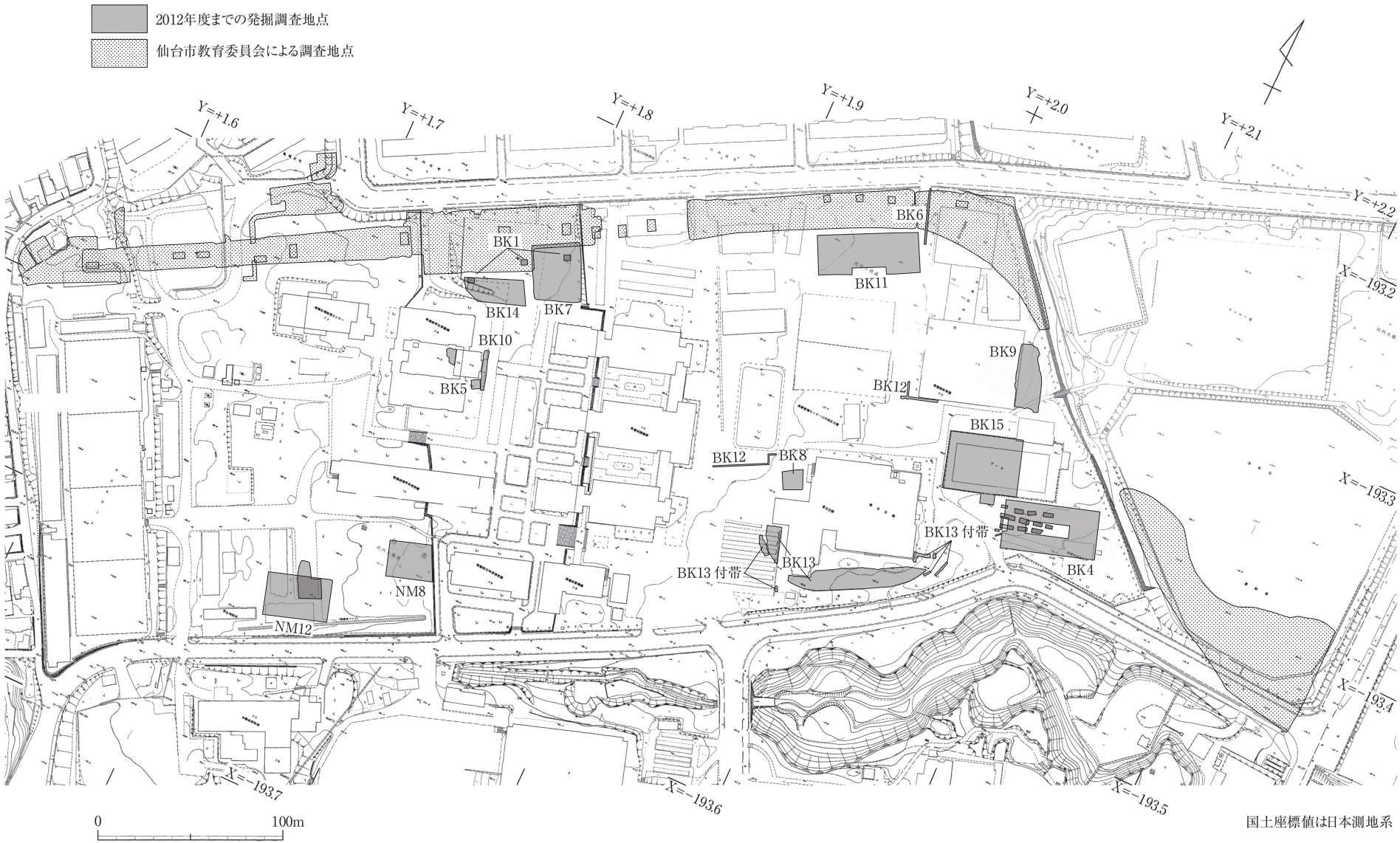


図５　川内北地区調査地点
Fig. 5　Location of excavations at Kawauchi−Kita campus (NM i.e.Secondary Citadel)

×２ｍの試掘調査区を３ヶ所設けて調査を行っている。その結果、東よりの調査区で、江戸時代の遺構面が残存していることが確認されている。試掘調査実施後は、課外活動施設の建設場所が変更されたため、第７地点の調査が行われるまで、それ以上の調査は実施されなかった。

第４地点（BK４）は、1985年度に試掘調査を実施し、1994～1995年度に本調査を行った。試掘調査時には保健管理センターの建設予定地であったが、その後の計画見直しによって課外活動施設がこの地点に建設されることとなり、本調査を実施した。調査面積が　1,143㎡という、二の丸北方武家屋敷地区では、初めての大規模な調査となった。江戸時代の初頭から幕末に至る、多数の遺構が検出された（年報13）。

第５地点（BK５）は、教養部学生実験施設（当時、現学生実験棟）にエレベーターを設置するのに伴い、1989年度に実施した。40㎡という小規模な調査であったが、溝が検出されている（年報７）。

1996年度に実施した第６地点（BK６）は、給水管埋設に伴う調査である。調査面積は15㎡と少なかったが、比較的多くの遺構が検出されている（年報14）。

2001年度に実施した第７地点（BK７）は、マルチメディア教育研究棟新営に伴う調査である。調査を行った面積が810㎡と、まとまった規模の調査としては、第４地点に続く調査となった。礎石建物・掘立柱建物・掘立柱列や溝・井戸など、江戸時代の各時期の遺構が検出された。特筆されるものは、大規模なゴミ穴が検出され、様々な種類の遺物が大量に出土したことである。このゴミ穴からは、享保年間の年号が記されたものを含む、多数の荷札木簡が出土している。木簡の記載内容や、捨てられたゴミの内容から、堀をはさんだ二の丸地区のゴミが運び込まれて捨てられたものと考えられる（年報19第１～５分冊）。

第８地点（BK８）は、厚生会館前の上屋取設工事に伴い、2002年度に調査を実施した。28.6㎡と小規模な調査であった。溝やピットなどが検出されている（年報20）。

第９地点（BK９）は、課外活動施設（川内ホール）新営に伴い、2003年度に調査を実施した。体育館西側の、グラウンドとの段差に近い区域での調査であった。363.5㎡とやや規模の大きな調査であったが、段丘崖にかかる区域での調査であったため、遺構密度はさほど高くなかった。小規模な石垣や溝、掘立柱列などが発見されている（年報21）。

第10地点（BK10）は、学生実験棟改修に伴い、2006年度に調査を実施した。建物の東側と、中庭の２ヶ所で調査を行った。建物東側の調査区は、第５地点の調査区に隣接し、溝・井戸などが検出されている。中庭の調査区では、道路測溝の可能性のある、石垣が発見されている（年報24）。

第11地点（BK11）と第12地点（BK12）は、仙台市高速鉄道東西線（以下地下鉄東西線と略記）機能補償に関係する調査である（調査報告１）。第11地点は、サブアリーナ棟新営に伴うもので、調査面積は1,401㎡で、大規模な調査となった。掘立柱建物・溝・井戸や大規模に掘り込まれた遺構など、多数の遺構が検出された。第12地点は、屋外給排水管設備の迂回工事に伴うもので、遺構面まで掘削が及ぶ区域のみを調査したため、59.6㎡と小規模な調査であった。

第13地点（BK13）は、厚生会館増改築に伴う調査で、本書で報告するものである。2008年度に増築建物本体部分（774.8㎡）、翌2009年度に付帯工事部分（44.85㎡）の調査を実施している。

第14地点（BK14）は、地下鉄東西線川内駅（仮称）の駅前整備に伴う調査である。2011年度から調査を開始し、2012年度も一部を継続して調査を実施したが、次の第15地点の調査を先行して実施することが必要となったため、調査途中で一時中断している。全体の調査予定面積953㎡の内、496㎡の調査が終了している。掘立柱列・溝や井戸などが検出されている。

第15地点（BK15）は、課外活動施設新営に伴う調査で、2012年度から調査を実施している。1,455㎡と、東北大学が実施した北方武家屋敷地区の調査では、最大規模の調査となっている。当地点は、2013年度に継続して調査を実施する予定である。

この第14地点と第15地点については、2012年度末の段階では調査が継続中であるため、調査が終了した後に整理作業を行い、調査報告書を作成する予定である。

一方、仙台市教育委員会による調査も、地下鉄東西線建設に伴う調査を中心に、多数実施されるようになっている。地下鉄東西線関係の本調査に先立ち、2004年度から2006年度にかけて試掘調査が行われている。本調査と併行して、2007年度にも東北大学のグラウンド部分で試掘調査が行われている。これらの試掘調査は、仙台城二の丸北方武家屋敷地区だけでなく、その東側の東北大学のグラウンド部分と仙台商業高等学校グラウンド跡地の区域、広瀬川を渡った対岸の西公園の区域でも、試掘調査が行われている。これらの試掘調査の結果、仙台商業高等学校グラウンド跡地の一部が川内Ａ遺跡、東北大学グラウンドの一部が川内Ｂ遺跡、広瀬川を渡った対岸の西公園部分が桜ヶ岡公園遺跡として、新たに周知の遺跡として遺跡登録がなされ、記録保存のための調査が行われるようになった。

仙台市教育委員会による地下鉄東西線建設に先立つ調査は、2005年度の川内Ａ遺跡から始まり、二の丸北方武家屋敷地区では2006年度から2009年度にかけて、川内Ｂ遺跡では2008年度と2009年度に調査が行われている。桜ヶ岡公園遺跡では、2007年度と2008年度に調査が行われている。これら、地下鉄東西線建設に伴う調査以外にも、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区では雨水幹線の移設工事、桜ヶ岡公園遺跡では西公園の再整備に伴い、事前調査が行われている。

仙台城三の丸地区の東側の追廻地区は、重臣を含む家臣の屋敷地や、馬場やそれに付随する施設などが置かれていた区域である。この追廻地区は、青葉山公園整備計画の対象区域となっており、公園便益施設や庭園などを設置する計画で検討が進められている。公園整備事業の推進にあたって、埋蔵文化財の確認を目的として、2006年度から2008年度に、遺構確認調査が実施されている。これらの確認調査を踏まえて、2012年度からは、追廻公園センター建築計画に伴う調査も開始されている。

これらの調査が行われてきた結果、川内地区は、仙台城下の武家屋敷の中では、もっとも広い範囲で考古学的調査が実施されてきた地区となっている。特に、川内北地区の二の丸北方武家屋敷地区は、もっとも高い密度で考古学的調査が実施されている区域となってきている。

第Ⅱ章　調査の方法と経過

１．調査地点の位置

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点（BK13）の調査は、川内北地区の厚生会館の増改築に伴う調査である。川内北地区のほぼ中央南よりに、川内北地区厚生会館が置かれている。川内北地区の厚生会館には、食堂・購買部などが置かれており、川内地区全体の厚生施設の中心となる建物である。この既存施設の一部を取り壊し、南側に食堂を増築することとなった。緑地や通路となっていた区域で、西から東へごく緩やかに傾斜しているが、ほぼ平坦な場所である（図６）。

調査区の南側には、川内南地区と川内北地区を区切る道路があり、その南側には千貫沢が流れている。この千貫沢北側の道路は、江戸時代の道路「筋違橋通」をほぼ踏襲したものと考えられる。また、川内南地区へ至る道路が千貫沢を横切るところは土橋となっており、その東側には石垣が残っている。これは、江戸時代から続く千貫沢の土橋（千貫橋）で、石垣は改修は施されているものの、江戸時代から続くものである。

これらとの位置関係から、今回の調査区を、江戸時代の城下絵図と対比することができる。第Ⅰ章で検討したように、今回の調査地点は、「筋違橋通」と「千貫橋」から北へ延びる「裏下馬通」の交差点の北東側に位置し、「筋違橋通」のすぐ北側にあたる場所であると考えられる（図１）。調査地点は、「筋違橋通」に面し、「裏下馬通」との交差点から１軒目と２軒目の屋敷の南端付近に相当すると考えられる。江戸時代を通じて、かなり上級の家臣の屋敷が並んでいた区域である。特に西側の「裏下馬通」の交差点に面した屋敷は、家格・禄高ともにかなり上級の家臣が使用していた場所である。

今回の調査地点の周辺は、比較的調査が行われている区域である。東側には課外活動施設新営に伴う第４地点の調査区がある。江戸時代の初頭から幕末に至る、多数の遺構が検出されている（年報13）。厚生会館をはさんで北西側には、厚生会館前の上屋取設工事に伴う第８地点の調査区がある。小規模な調査であったが、溝やピットなどが検出されている（年報20）。厚生会館の北側には、仙台市高速鉄道（地下鉄）東西線機能補償に関わって実施した、屋外給排水管設備の迂回工事に伴う第12地点の調査区がある。これも小規模な調査であった（調査報告１）。

２．調査にいたる経緯

川内北地区の厚生会館の増改築工事が、2008年度末から翌2009年度にかけて実施されることとなった。厚生会館の南側に食堂を増築する部分については、一部は既存厚生会館を取り壊すが、大部分は緑地や通路となっていた区域であった。この区域では、これ以前にも給水管敷設などの際に立会調査を実施し、江戸時代の遺構面が良好に残されていることが判明していた。江戸時代の遺構面までの深さは、おおむね現地表から60cm程度と見込まれていた。

新たに建設される建物は、木造平屋建のため、基礎杭は打たず、平基礎の形で建築されることとなった。増築建物は、既存食堂と床レベルを合わせる必要があったため、現地表より設計床レベルが、かなり高くなった。そのため、基礎掘削は比較的浅く済み、新しい盛土の範囲内におさまる深さで計画することが可能となった。建設場所は、西側が高く、東側に向かってごく緩やかに傾斜して下っている。西側は、江戸時代の遺構検出面の近くまで掘削されるが、遺構面までは達しない見込みであった。東側では表層を除去する程度か、ほとんど掘削されないこととなった。

これら工法について施設部担当者と協議する一方、対処方針について、仙台市教育委員会文化財課と協議を行った。今回の建築工事では、江戸時代の遺構面は削平されない見込みであったが、木造平屋建ではあるものの恒久的な建造物である。鉄筋コンクリート造りの建物よりは、耐用年数はかなり短くなるが、仮設的な建物とは言い

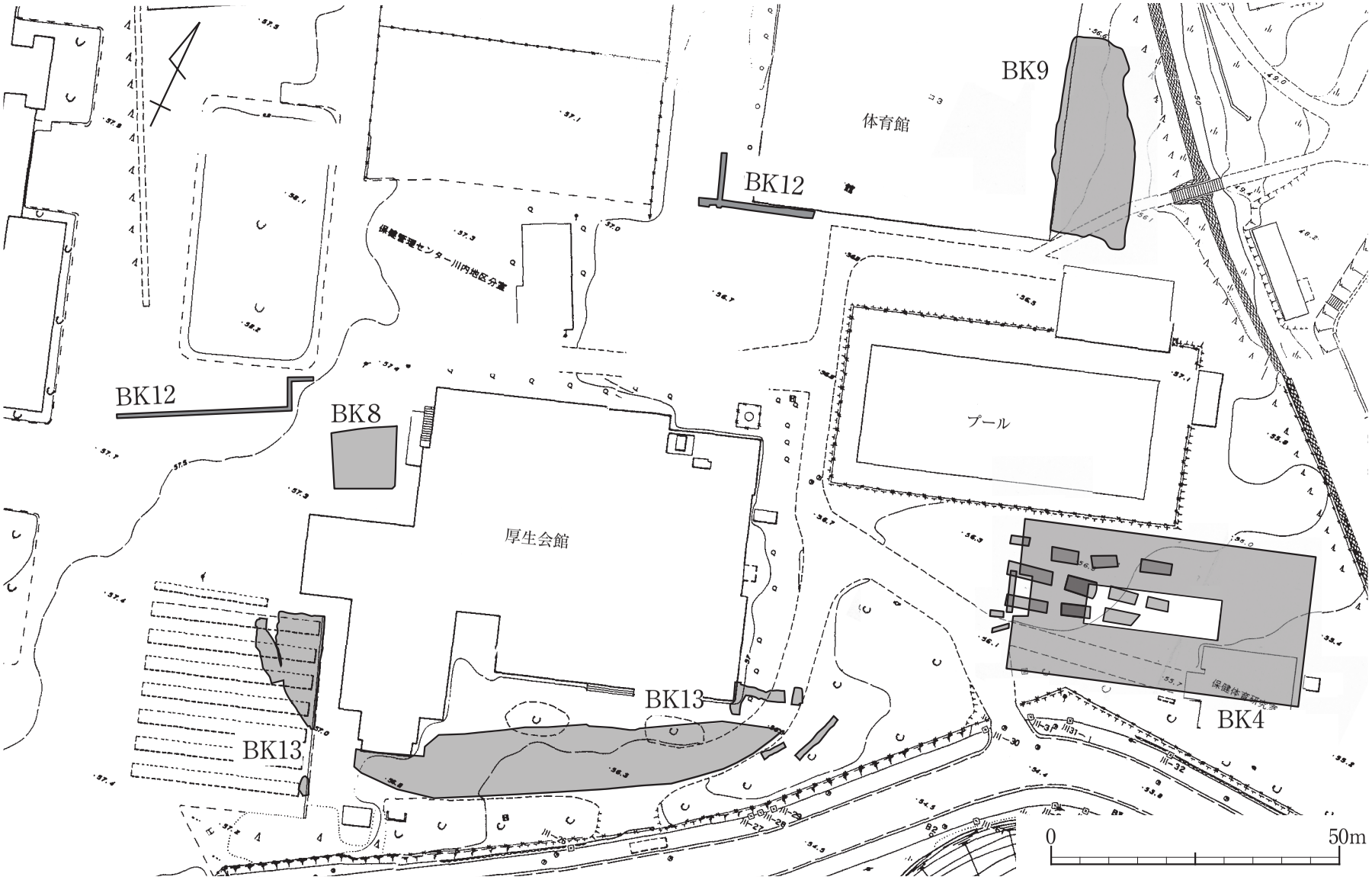


図６　武家屋敷地区第13地点調査区の位置
Fig. 6　Location of BK13 (BK13 i.e. Location 13 of *samurai* residence)

難いものであった。そのため、事前調査の範囲をどこまでとするか、仙台市教育委員会と協議して検討を行った。その結果、増築建物の範囲全体を調査対象として、江戸時代の遺構面を検出して、基礎工事の深さとの関係を確認する。その上で、遺構の分布状況や種類、遺構の埋土の深さなどを調査して、遺構埋土をどこまで掘り上げて調査するかを検討していくこととした。

増改築工事に関わる、給排水・電気・ガス管などの設備に関わる付帯工事については、地下の遺構を破壊しないために、できるだけ掘削深さが浅くなるよう、施設部担当者に依頼して、設計の際に配慮していただいた。そのためほとんどの工事は、江戸時代の地層に影響を与えない、新しい盛土の範囲におさまる深さとなった。しかし、汚水・雨水排水管の一部については、江戸時代の遺構確認面まで、工事による掘削が達することが予想された。そのため、工事による掘削の際に調査室担当者が立会調査を行い、必要な部分は工事を中断し、本調査を実施する体制を組むこととした。

３．調査の方法と経過

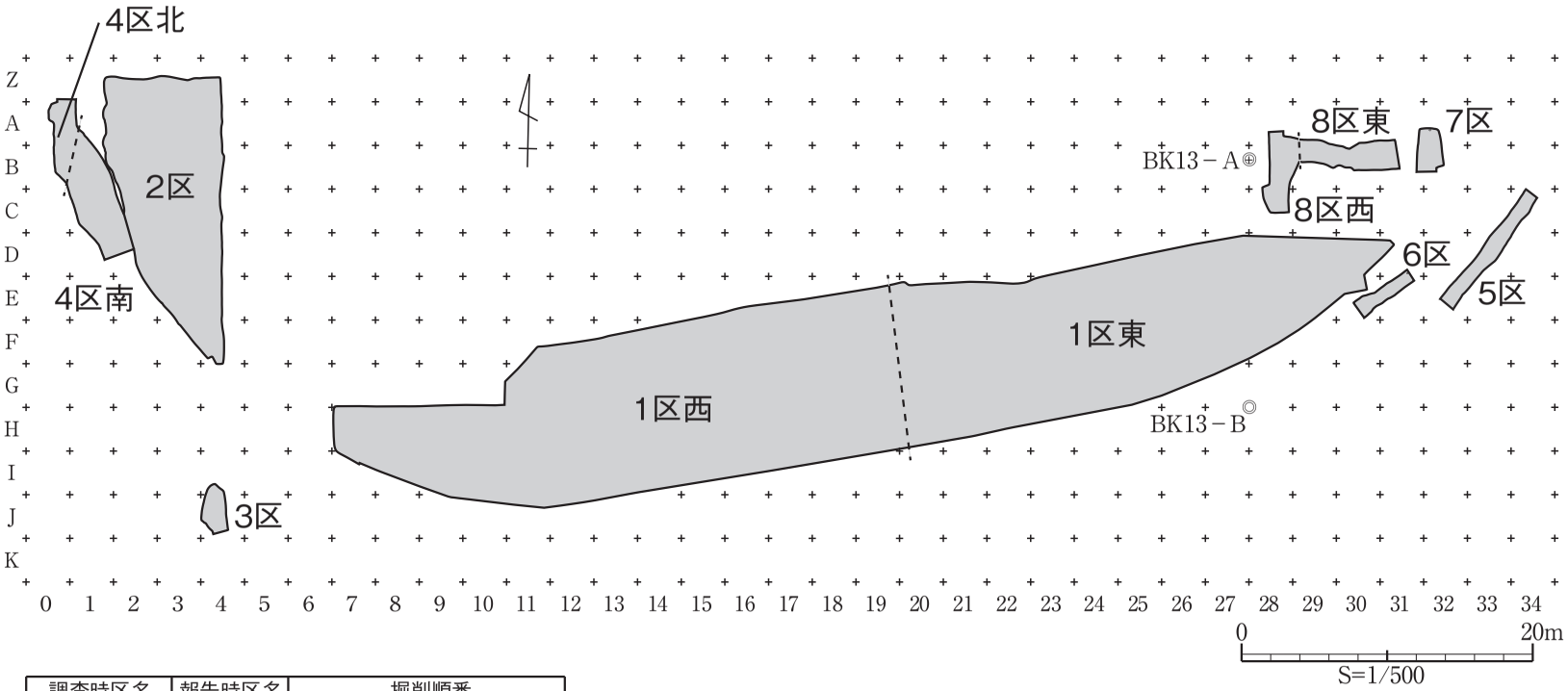
(1) 発掘調査の経過

調査区対象範囲は、建物本体の建築範囲と、給排水・電気・ガス管などの設備に関わる付帯工事範囲に大きく分けられる。増改築工事は、2008年度末から翌2009年度にかけて実施されるため、工事に先立って2008年度に建物本体部分の調査を実施した。付帯工事部分については、工事が実施される2009年度に調査を行うこととした。なお調査区の名称は、調査時点での名称では、ややわかりづらいため、報告書作成段階で整理した。遺物に付された注記は、調査時点での調査区名となっている。そのため、以下に調査時点の調査区名と、本報告での調査区名を示しておく。

建物本体部分	本体区	→	１区
	本体西区	→	２区
付帯工事部分	西１区	→	３区
	西２区	→	４区北
	西３区	→	４区南
	東１区	→	５区
	東２区	→	６区
	東３区	→	７区
	東４区	→	８区東
	東５区	→	８区西

2008年度に実施した本体部分の合計の調査面積は774.8㎡である。既存厚生会館が南側に突出している場所をはさんで、本体部分の調査区は２ヶ所に分かれる（図７）。東側の主要な調査区を、１区とした。１区は、排土置場が他に確保できないことから、半分づつ調査を行うこととした。西側半分（１区西）を先行して調査し、それが終了した後に、東側半分（１区東）を調査した。１区では、遺跡の保存状態は比較的良好であった。１区の調査は、９月１日から12月26日の期間で実施した。既存建物の西側は、２区とした。既存建物の西側に、メタセコイヤが植樹されており、安全確保の関係から、これらを伐採してから調査を行う必要があった。メタセコイヤの伐採は、建築工事にまとめて発注することとなった関係で、それらの準備が整った、３月４日から31日に調査を実施した。２区は、戦前の陸軍第二師団時代のレンガ基礎、戦後の米軍時時代のコンクリート基礎が広い範囲で見られ、遺跡の保存状態はあまり良好ではなかった。

調査にあたっては、明治時代の陸軍第二師団の時期と考えられる層序より上位を、１層・撹乱として一括し、重機によって除去した。重機で除去しきれなかった第二師団期以降の盛土と、撹乱の埋土については、手掘りに



調査時区名		報告時区名	掘削順番	
本体区	西半分	1区西	本体掘削1回目	2008年9月
	東半分	1区東	本体掘削2回目	2008年11月
本体西区		2区	本体掘削3回目	2009年3月
付帯西1区		3区	付帯工事掘削	2009年6月
付帯西2区		4区北		
付帯西3区		4区南		
付帯東1区		5区		2009年7月
付帯東2区		6区		
付帯東3区		7区		
付帯東4区		8区東		
付帯東5区		8区西		

	局地座標		日本測地系		世界測地系	
	X座標	Y座標	X座標	Y座標	X座標	Y座標
BK13－A	－1.000	±0	－193,456.609	＋2,044.493	－193,147.8771	＋1,744.5948
BK13－B	－18.000	±0	－193,440.429	＋2,039.277	－193,131.6971	＋1,739.3790

図7　武家屋敷地区第13地点調査区模式図
Fig. 7　Pattern diagram of location at BK13

よって除去した。二の丸北方武家屋敷地区の調査では、明治時代初頭の畑の耕作土と考えられる地層が、各所で確認されている。今回の調査においても、調査区の東側で、類似した地層（Ａ層）が分布していた。１区では、調査区内に使用中の給水管があり、これらについては残して調査を実施せざるを得なかった。Ａ層の分布範囲に、この給水管がかかっており、そのため充分な検討ができていないが、層相から明治時代初頭の地層に類似すると考えられる。このＡ層については、手掘りで掘り下げて調査を行っている。

１区では、遺構密度は高く、多数のピットが検出された他に、大型の溝、大型の掘り込みを持つ遺構や、沢状の遺構などが確認された。２区では、大型の掘り込みを持つ遺構などが確認された。遺物は、陶磁器・土器類、瓦などコンテナ16箱分が出土した。

１区・２区の調査の結果、遺構面まで基礎工事に伴う掘削が及ばないことが確実となった。また、大型の遺構は、部分的に埋土の掘り下げを行ったが、現地表面より２ｍを越える深さとなるものも存在することが判明した。これらの遺構を全て掘りあげて調査すると、地耐力が落ちることから基礎杭を打たざるを得なくなり、結果的に遺構の破壊が避けられなくなることが明らかとなった。また、限られた範囲内で、２ｍを越える深さの遺構を調査することは、安全性の面から困難であった。これらの状況を勘案し、遺構の掘り下げは一部にとどめることとした。検出遺構の記録作成後、山砂を約10cmの厚さで全面に敷き、その上に排出土を埋め戻した。

付帯工事部分では、工事による掘削に調査室担当者が立会調査を行い、必要な部分で調査を実施した。調査を実施した順序にしたがって、増築建物の西側を３区・４区、東側を５～８区とした（図７）。本調査を実施した面積は、44.9㎡であった。これ以外の部分については、工事による掘削が江戸時代の地層に及ばないことが確認されたため、立会調査で調査を終えている。本調査は、６月15日からの８月５日までの期間に、断続的に実施した。それ以降は、立会調査のみである。

付帯工事部分では、工事で掘削される深さまで調査を行うことを基本とした。工事による掘削が、遺構確認面でとどまる場合には、遺構プランの確認までにとどめている。遺構埋土まで掘削が及ぶ場合には、遺構埋土を掘り上げて調査を行っている。調査範囲が狭いこともあり、検出された遺構はさほど多くなかった。遺物は、江戸時代の陶磁器類や瓦などが、２箱出土した。

今回の調査では、排出土の置き場の関係から現地に余裕が無く、安全の確保が難しいことから、現地説明会などの一般向けの公開は行っていない。

（2）記録方法

調査にあたっては、既存の厚生施設の方向に合わせて、３ｍグリッドを作成した（図７）。Ａ－27区の南東コーナーを原点として、グリッドラインに沿って局地座標を設定し、実測作業は局地座標を利用して行った。調査に際して設定した基準点の国土座標値は、以下のとおりで、基準点の位置は図７に示した。平面直角座標系は、Ｘ系である。グリッドは、北で17°52′00″西偏している。

ＢＫ13－Ａ	局地座標	Ｘ＝－ 1.000	日本測地系	Ｘ＝－193,456.609	世界測地系	Ｘ＝－193,147.877
		Ｙ＝± 0.000		Ｙ＝＋ 2,044.493		Ｙ＝＋ 1,744.595
ＢＫ13－Ｂ	局地座標	Ｘ＝－18.000	日本測地系	Ｘ＝－193,440.429	世界測地系	Ｘ＝－193,131.697
		Ｙ＝± 0.000		Ｙ＝＋ 2,039.277		Ｙ＝＋ 1,739.379

なお、本年報にも掲載した、縮尺500分の1地形図などは、旧来の日本測地系によるものである。そこで当面の間、基準点の国土座標値は、日本測地系と世界測地系の座標値を、両方とも掲載することとしている。掲載図版中の座標値についても、日本測地系か、世界測地系のものか、それぞれに明示している。

今回の調査では、遺構の掘り込みは一部にとどめたため、多くの遺構はプランの確認状況で記録を作成することとなった。本体部分の１区西と１区東の平面図については、写真測量によって作成した。作業は国際文化財株

式会社に委託して、ラジコンヘリによる空中写真撮影と、空撮写真による写真測量を行っている。断面図については、手作業によって実測作業を行った。これ以外の本体部分２区と付帯工事の３～８区については、全ての記録図面を手作業によって作成している。

記録写真は、35mmフィルムによるカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、デジタル写真も同じカットで撮影した。１区西・１区東の全景写真では、６×７のカラーリバーサルとモノクロ写真も撮影している。ラジコンヘリによる空撮では、６×６のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影し、デジタル写真も同じカットで撮影している。

(3) 遺構の名称について

近世遺跡の調査においては、多種多様な遺構が検出される。その際、遺構の詳しい用途まで判明する場合もある一方で、遺構の形状からしか名称を付けられないものも存在する。そのため、異なる基準での名称が混在する場合が多い。本来は、同一基準での命名が望ましいが、作業を進める上での判り易さという点も無視できない。今回使用した遺構名称は、次の通りである。

遺構・建物・柱列・溝・井戸・ピット

従来は、比較的大型の掘り方を有する遺構については、「土坑」との名称を使用してきた。その中には、池状を呈する大型のものから、比較的大型のピットと呼べるようなものまで、規模の面でも性格についても、様々なものが想定される遺構が含まれている。そのため、一定の性格を想定させる呼称を避け、比較的大型の遺構を一括する呼称として、「@号遺構」との呼称を採用することとしている。従来は土坑と呼んでいたような遺構も、基本的に「@号遺構」と呼称することとした。４号遺構は、沢状の遺構と考えられるが、特に名称を変更していない。

柱穴などのピットについては、建物や柱列を構成することが現場で判明している場合でも、ピット番号として、全体で一連の通し番号を現地で付けた。川内地区での調査の場合、遺構が複雑に重なり合うと、現場での検討では、組み合う全ての柱穴を確認できない場合が多い。調査後の図面整理の過程で、建物跡や柱列を確認している場合が多数を占める。現地で組み合うことが判明したものについて柱番号を付すと、その後に同じ建物跡などを構成することが判明したピットの番号と、柱番号が前後する場合が生じる。整理後に柱番号を付け直すと、現地での呼称との間で混乱をきたしかねない。そのため、現地で付ける遺構名称は、通し番号のピット番号に統一し、建物跡や柱列を構成するピットについては、図面整理後に柱番号を新たに付ける形で、名称を変更している。

表４・５に、現地で付した遺構名称と、本報告にあたっての遺構名称の対照表を示している。遺物に付された注記は、全て現地での遺構名称となっている。また、ピット以外の、各時期ごとの遺構の一覧を、表６に掲げておく。

(4) 遺物の取り上げについて

近世以降の遺跡の調査においては、それ以前の時代の遺跡と比較すると、遺物の出土量が極めて多くなるのが通常である。その際、破片では特徴が判別し難い瓦などについて、全てを取り上げるか否かが問題となる。

当調査室の調査においては、江戸時代に遡る可能性がある遺物については、全て採集することを基本方針としている。今回の調査では、陸軍第二師団の時期以降と考えられる層序は、１層・撹乱として一括している。これより下位の層序から出土した遺物については、基本的に全ての遺物を採集している。１層・撹乱として一括した層序から出土したものについては、明らかに近現代に下るもの以外について、遺物を回収した。ただし、１層・撹乱出土の瓦については、一定の基準を設けて現地で選別を行った。瓦は、江戸時代のものと、明治以降のものを識別することが、破片の場合ほとんど不可能なものも多い。そこで、長さと幅の判明するもの、軒瓦、刻印や

線刻のあるもの、その他特殊なものについては採集するという基準を設けている。刻印や線刻の有無などについては、土壌が付着したままでは判別が難しいので、現地で土壌をおおよそ落とした上で、上記の基準に当てはまる資料のみを収集している。

(5) 整理作業

東北大学埋蔵文化財調査室での整理作業と報告書刊行については、経費は全学的基盤経費として、毎年度ほぼ一定した額が措置されている。調査の事業量は年度により多寡があるため、大きな滞りをきたすことなく調査報告書を作成できるよう、各年度に実施する整理作業を平均化して計画的に実施することとしている。武家屋敷地区第13地点の出土遺物は、整理作業前の段階で、本体部分で16箱、付帯工事部分で２箱で、比較的少ないものであった。他の調査の整理作業が残っていたことから、整理作業は2010年度から開始することとなった。併行して、他の調査の整理作業も進めたため、2010年度から2012年度の３ヶ年を整理作業期間とし、2012年度に報告書を刊行することとした。

2010年度は、遺構図面の整理・トレース、遺構写真の整理、出土遺物の水洗・注記・接合・分類・集計の一部と写真撮影などの作業を実施した。2011年度は、出土遺物の集計、実測図作成、トレース、磁器の文様のデジタル写真からの図化、写真撮影などの作業を実施した。2012年度は、遺物観察表の作成、図版レイアウト、原稿作成、編集などの作業を行った。遺物実測図の作成では、磁器と陶器の文様部分について、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージャーによって撮影したデジタル写真をもとに作成した。遺物写真の撮影は、有限会社仙台写真工房に委託して行った。

近世遺跡の調査では、様々な材質の遺物が出土する。水浸木製品のように、材質に応じて特有の取り扱いを必要とするものも多いことから、遺物の種類ごとに整理作業を進めている。そのため本報告書でも、遺物の種類ごとに事実記載を行うこととした。遺物の各種類ごとの分類基準などについては、出土遺物の報告の各項目の中で、必要に応じて記述する。

図面ないし写真を、本報告書に掲載した遺物については、種類ごとに以下の頭文字を決め、その下に通し番号の登録番号を付けている。実測図・写真図版・観察表の番号は、いずれもこの登録番号に統一している。遺物を管理する台帳も、全てこの登録番号をもとに作成しており、保管にあたっても、この登録番号を基礎に管理するようにしている。

磁器：ＣＪ　陶器：ＣＴ　軟質施釉土器：ＣＮ
土師質土器：ＣＨ　瓦質土器：ＣＧ　土製品：ＣＯ
瓦：Ｔ（古代の瓦を含む）
古銭：ＭＣ　古銭以外の金属製品：ＭＯ
石器・石製品：Ｓ　ガラス製品：Ｇ

今回の武家屋敷地区第13地点の調査では、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理が必要な遺物も少数ではあるが出土している。東北大学埋蔵文化財調査室では、木製品と金属製品について保存処理を実施しており、武家屋敷地区第13地点から出土した遺物についても、当調査室で保存処理を行っている。

第Ⅲ章　基本層序と時期区分

１．基本層序

今回の調査では、現代の表土層および陸軍第２師団期以降の近代の整地層を１層とし、それを除去した段階で遺構確認を行なった。遺構の内容確認以外には、それ以下の層の掘り下げは行なっていない。ほとんどの区では１層除去段階で地山が現れたが、１区東・６区・８区等では、１層直下に黄褐色のブロックを含む褐色あるいは暗褐色のシルトを主体とした層を確認した。各区で細かな特徴は異なるが、共通する様相が認められるため、この層をＡ層と命名した（図23）。さらに、１区東・８区ではＡ層の下位で、にぶい黄褐色のシルト層を確認した。そのため、A層をA1層とA2層と細分した。

A1層からは、磁器158点等が出土しており、その出土遺物量は多い（表８～13）。これらのうち時期が判明した遺物には、17世紀後半の中碗丸の磁器（CJ035）から、19世紀前～中葉の土瓶蓋（CT044）まであり、ばらつきがある。このA1層の層相・出土遺物の時期等から、この層は当調査区の50m程東の地点にて確認した明治初頭に形成されたと考えられる層に類似する（BK４の４層：調査年報13）。また、A2層は６区・８区のみ掘り下げを行った。１区東のA2層は、遺構が検出されたため、完全に掘り下げていない。８区からの出土遺物の様相は、A1層とほぼ変わらず、類似する傾向を示す。

２．遺構の変遷段階の設定

全ピット210基のうち63基（30.0％）を建物、柱列として認定した。認定した建物数は５棟、柱列数は５基であった。建物は、それほど大きくはなく、最大で東西５間、南北３間（２号建物）となる。柱列は、全てが東西方向に並び、そのほとんどは１号溝に並行する。

建物・柱列とその他の遺構の重複関係から、遺構の相対的な順番を導き出した。また、建物の軸角度を0.5°刻みで計測し、その角度を算出した。この軸角度、遺構配置、重複関係、出土遺物等からⅠ～Ⅲ期の各期を設定した（図８）。また、Ⅱ期は遺構の重複関係と1号溝との関係からⅡa期とⅡb期に細分した。重複関係等からⅢ期以降と考えられる遺構も存在したが、これはⅣ期とした。

建物・柱列以外の147基（70.0％）のピットは、出土遺物と遺構の切り合い関係から、Ⅰ期3基、Ⅰ～Ⅱa期19基、Ⅰ～Ⅲ期56基、Ⅰ～Ⅳ期44基、Ⅱa～Ⅳ期13基、Ⅲ期９基、Ⅲ～Ⅳ期３基となる。

３．各期の推定時期

各遺構の確認面は、ほとんどが地山や遺構埋土であるが、A2層を確認面とする遺構・ピットも存在する。その遺構は、５号建物、６号遺構のほか、ピット164～168、171、172、177、178、183となる。これらの遺構のうち、時期が判明する遺物が出土しているのは、６号遺構とピット164である。６号遺構では19世紀前～中葉の磁器（CJ021）、ピット164では19世紀中～後葉の時期となる陶器（CT028～031）が出土している。これらの遺物は埋土最上位からの出土であり、その後に形成されるA1層の推定形成時期と整合的である。また、A2層の形成時期は、この層がA1層と層相が類似するため、一連のものである可能性は高い。そう考えるならば、A2層を確認面とする遺構は、A1層形成直前の短期間に構築された遺構であると考えることができる。各期の遺構からの出土遺物は、下記の通りである。

Ⅰ期：２区の８号遺構からは、16世紀後半～17世紀前半の中国産磁器（CJ001）、17世紀初頭の陶器（CT001）が出土している。

Ⅱ期：１区西の1号遺構b（Ⅱa期）の埋土から18世紀の陶器（CT002）が出土している。その他の遺構からの出土遺物は無い。

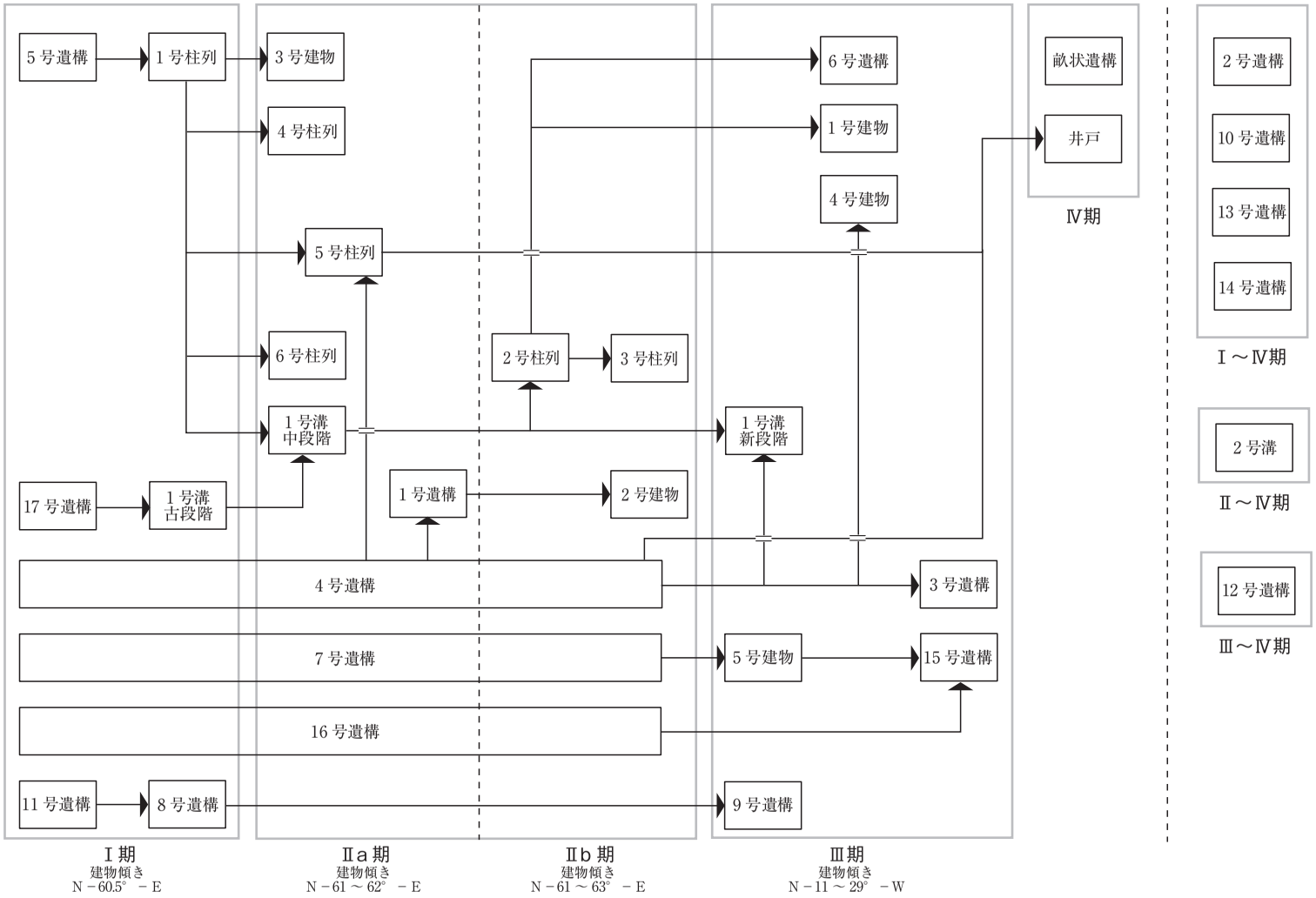


図８　武家屋敷地区第13地点遺構変遷模式図
Fig. 8　Transition of features at BK13

表４　武家屋敷地区第13地点遺構名称対照表（1）
Tab. 4　List of the features name which are collated at BK13 (1)

現場名称	確定名称	備考	時期
なし	１号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	２号建物	個別ピット番号	Ⅱb
なし	３号建物	個別ピット番号	Ⅱa
なし	４号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	５号建物	個別ピット番号	Ⅲ
なし	１号柱列	個別ピット番号	Ⅰ
なし	２号柱列	個別ピット番号	Ⅱb
なし	３号柱列	個別ピット番号	Ⅱb
なし	４号柱列	個別ピット番号	Ⅱa
なし	５号柱列	個別ピット番号	Ⅱa
なし	６号柱列	個別ピット番号	Ⅱa
１号溝	１号溝	古・中・新段階に分かれる	Ⅰ－Ⅲ
２号溝	２号溝		Ⅰ－Ⅳ
１号遺構	１号遺構		Ⅱa
２号遺構	２号遺構		Ⅰ－Ⅳ
３号遺構	３号遺構		Ⅲ
４号遺構	４号遺構		Ⅰ－Ⅱ
５号遺構	５号遺構		Ⅰ
６号遺構	６号遺構		Ⅲ
７号遺構	７号遺構		Ⅰ－Ⅱ
８号遺構	８号遺構		Ⅰ
９号遺構	９号遺構		Ⅲ
付帯西２区遺構	10号遺構		Ⅰ－Ⅳ
付帯西２区遺構	11号遺構		Ⅰ
９号遺構	12号遺構	９号遺構より分離	Ⅲ－Ⅳ
付帯西１区遺構	13号遺構		Ⅰ－Ⅳ
付帯東４区遺構	14号遺構		Ⅰ－Ⅳ
Pit180	15号遺構		Ⅲ
Pit188	16号遺構		Ⅰ－Ⅱ
１号溝	17号遺構	１号溝より分離	Ⅰ
畑跡	畝状遺構		Ⅳ
井戸	井戸		Ⅳ

Ⅲ期：遺物が出土した遺構は比較的多い。６号遺構からは、先述の通り19世紀前～中葉の磁器（CJ021）のほか、19世紀初頭～中葉の陶器（CT023）、が出土している。３号遺構からは19世紀の小中鉢破片１点（CT022）が出土した。15号遺構からは、19世紀前～中葉を主体とする陶磁器群が出土している（CJ023～026、CT025～027）。９号遺構の埋土２層（図25①）からは19世紀中～後葉の磁器（CJ22）が出土している。

今回の調査では、遺構を完全に掘り下げてはいないため、出土遺物の大体は埋土上層からの出土である。従って、この遺物は、遺構埋没時の時期を示している。また、Ⅲ期の建物の軸角度は、それまでの統一的な有り様とは様相が非常に異なることから、明治初頭まで下がる可能性が高い。このような状況から、Ⅲ期は明治初期頃の年代と考え、Ⅰ期は17世紀、Ⅱ期は18世紀から幕末までと幅広い時期を想定した。またⅣ期は、A1層が形成された時期となり、明治初期から陸軍関係の建物整備が始まる明治20年前後の年代と捉えた。

表５　武家屋敷地区第13地点遺構名称対照表（2）
Tab. 5　List of the features name which are collated at BK13 (2)

ピット番号	確定名称	備考	時期	ピット番号	確定名称	備考	時期	ピット番号	確定名称	備考	時期
1	６号柱列柱１		Ⅱａ	76	１号建物柱４		Ⅲ	151			Ⅰ
2			Ⅰ－Ⅳ	77	１号建物柱５		Ⅲ	152			Ⅰ－Ⅱａ
3	２号柱列柱５		Ⅱｂ	78			Ⅰ－Ⅳ	153			Ⅰ－Ⅳ
4	３号柱列柱２		Ⅱｂ	79			Ⅰ－Ⅳ	154	２号建物柱７		Ⅱｂ
5	３号柱列柱３		Ⅱｂ	80	２号柱列柱３		Ⅱｂ	155			Ⅱａ－Ⅳ
6	２号柱列柱６		Ⅱｂ	81			Ⅰ－Ⅳ	156			Ⅱａ－Ⅳ
7	３号建物柱３		Ⅱａ	82			Ⅰ－Ⅳ	157			Ⅱａ－Ⅳ
8			Ⅰ	83			Ⅰ－Ⅳ	158	欠番		－
9			Ⅰ－Ⅲ	84			Ⅰ－Ⅳ	159			Ⅰ－Ⅲ
10			Ⅱａ－Ⅳ	85	２号柱列柱１		Ⅱｂ	160			Ⅰ－Ⅲ
11			Ⅱａ－Ⅳ	86	２号柱列柱２		Ⅱｂ	161			Ⅰ－Ⅳ
12	３号建物柱４		Ⅱａ	87	３号柱列柱１		Ⅱｂ	162			Ⅰ－Ⅲ
13	２号柱列柱７		Ⅱｂ	88	１号柱列柱２		Ⅰ	163	５号建物柱５		Ⅲ
14	２号柱列柱４		Ⅱｂ	89	４号柱列柱２		Ⅱａ	164			Ⅲ
15			Ⅰ－Ⅱａ	90			Ⅰ－Ⅳ	165			Ⅲ
16			Ⅰ－Ⅳ	91	４号柱列柱１		Ⅱａ	166			Ⅲ
17			Ⅱａ－Ⅳ	92			Ⅰ－Ⅱａ	167			Ⅲ
18	５号柱列柱１		Ⅱａ	93			Ⅱａ－Ⅳ	168			Ⅲ
19			Ⅰ－Ⅱａ	94			Ⅱａ－Ⅳ	169	５号建物柱３		Ⅲ
20			Ⅰ－Ⅱａ	95	３号建物柱１		Ⅱａ	170			Ⅲ
21			Ⅰ－Ⅲ	96	欠番	ピット88と統一	－	171			Ⅲ
22			Ⅰ－Ⅲ	97	１号柱列柱１		Ⅰ	172			Ⅰ－Ⅲ
23	１号柱列柱４		Ⅰ	98	欠番	ピット97と統一	－	173			Ⅰ－Ⅲ
24	５号柱列柱２		Ⅱａ	99	６号柱列柱２		Ⅱａ	174			Ⅰ－Ⅲ
25	１号柱列柱７		Ⅰ	100			Ⅰ－Ⅱａ	175			Ⅰ－Ⅲ
26			Ⅰ－Ⅲ	101			Ⅱａ－Ⅳ	176			Ⅰ－Ⅲ
27			Ⅰ－Ⅲ	102	６号柱列柱３		Ⅱａ	177			Ⅲ
28			Ⅰ－Ⅲ	103	１号柱列柱３		Ⅰ	178			Ⅲ
29			Ⅰ－Ⅲ	104	欠番	ピット103と統一	－	179	５号建物柱４		Ⅲ
30			Ⅰ－Ⅲ	105			Ⅰ－Ⅳ	180	欠番	15号遺構に変更	－
31			Ⅰ－Ⅲ	106	４号建物柱４		Ⅲ	181			Ⅰ－Ⅲ
32			Ⅱａ－Ⅳ	107			Ⅰ	182			Ⅰ－Ⅲ
33			Ⅰ－Ⅱａ	108	２号建物柱５		Ⅱｂ	183			Ⅰ－Ⅲ
34	４号柱列柱５		Ⅱａ	109	２号建物柱８		Ⅱｂ	184			Ⅰ－Ⅲ
35			Ⅰ－Ⅲ	110			Ⅰ－Ⅱａ	185	５号建物柱６		Ⅲ
36	１号柱列柱６		Ⅰ	111			Ⅰ－Ⅳ	186			Ⅰ－Ⅲ
37			Ⅰ－Ⅲ	112			Ⅲ－Ⅳ	187			Ⅰ－Ⅲ
38			Ⅰ－Ⅳ	113	４号建物柱２		Ⅲ	188	欠番	16号遺構に変更	－
39	２号建物柱３		Ⅱｂ	114	４号建物柱３		Ⅲ	189			Ⅰ－Ⅳ
40	１号柱列柱８		Ⅰ	115	５号柱列柱４		Ⅱａ	190			Ⅰ－Ⅳ
41			Ⅰ－Ⅲ	116			Ⅰ－Ⅳ	191			Ⅰ－Ⅲ
42			Ⅰ－Ⅲ	117			Ⅰ－Ⅳ	192	５号建物柱１		Ⅲ
43	１号柱列柱５		Ⅰ	118	２号建物柱４		Ⅱｂ	193			Ⅰ－Ⅲ
44	４号建物柱１		Ⅲ	119	２号建物柱６		Ⅱｂ	194			Ⅰ－Ⅲ
45			Ⅰ－Ⅲ	120			Ⅰ－Ⅳ	195			Ⅰ－Ⅲ
46			Ⅲ－Ⅳ	121	２号建物柱９		Ⅱｂ	196			Ⅰ－Ⅲ
47			Ⅰ－Ⅲ	122			Ⅰ－Ⅳ	197			Ⅰ－Ⅲ
48	欠番	ピット23と統一	－	123			Ⅰ－Ⅱａ	198	５号建物柱２		Ⅲ
49			Ⅰ－Ⅲ	124	５号柱列柱６		Ⅱａ	199			Ⅰ－Ⅳ
50			Ⅰ－Ⅲ	125			Ⅰ－Ⅳ	200			Ⅰ－Ⅳ
51			Ⅰ－Ⅲ	126	５号柱列柱５		Ⅱａ	201			Ⅰ－Ⅳ
52			Ⅰ－Ⅲ	127			Ⅰ－Ⅲ	202			Ⅰ－Ⅳ
53			Ⅰ－Ⅲ	128			Ⅰ－Ⅳ	203			Ⅰ－Ⅳ
54			Ⅰ－Ⅲ	129			Ⅰ－Ⅳ	204			Ⅰ－Ⅳ
55			Ⅰ－Ⅲ	130			Ⅰ－Ⅳ	205			Ⅰ－Ⅳ
56			Ⅰ－Ⅲ	131			Ⅰ－Ⅳ	206			Ⅰ－Ⅳ
57			Ⅱａ－Ⅳ	132	５号柱列柱７		Ⅱａ	207			Ⅰ－Ⅳ
58	３号建物柱２		Ⅱａ	133			Ⅰ－Ⅳ	208			Ⅰ－Ⅳ
59	６号柱列柱４		Ⅱａ	134			Ⅰ－Ⅳ	209			Ⅰ－Ⅳ
60			Ⅰ－Ⅲ	135			Ⅰ－Ⅳ	210			Ⅲ－Ⅳ
61			Ⅰ－Ⅱａ	136			Ⅰ－Ⅳ	211			Ⅰ－Ⅳ
62			Ⅰ－Ⅲ	137			Ⅰ－Ⅲ	212			Ⅰ－Ⅲ
63			Ⅰ－Ⅲ	138			Ⅰ－Ⅱａ	213			Ⅰ－Ⅲ
64	欠番	ピット36と統一	－	139			Ⅰ－Ⅱａ	214			Ⅰ－Ⅲ
65			Ⅰ－Ⅳ	140			Ⅰ－Ⅱａ	215			Ⅰ－Ⅲ
66	欠番	ピット43と統一	－	141			Ⅰ－Ⅱａ	216			Ⅰ－Ⅲ
67	４号柱列柱３		Ⅱａ	142			Ⅰ－Ⅱａ	217			Ⅰ－Ⅲ
68			Ⅰ－Ⅱａ	143			Ⅰ－Ⅱａ	218			Ⅰ－Ⅲ
69	１号建物柱３		Ⅲ	144			Ⅰ－Ⅱａ	219			Ⅰ－Ⅲ
70	２号建物柱１		Ⅱｂ	145			Ⅱａ－Ⅳ	なし	４号柱列柱４		Ⅲ
71			Ⅰ－Ⅱａ	146			Ⅱａ－Ⅳ				
72	１号建物柱２		Ⅲ	147			Ⅰ－Ⅳ				
73	１号建物柱１		Ⅲ	148			Ⅰ－Ⅳ				
74	１号建物柱６		Ⅲ	149	５号柱列柱３		Ⅱａ				
75	２号建物柱２		Ⅱｂ	150	１号柱列柱９		Ⅰ				

表６　武家屋敷地区第13地点時期別遺構一覧表
Tab. 6　List of all features divided in period at BK13

確定名称	現場名称	備考
Ⅰ期		
１号柱列	なし	個別ピット番号
５号遺構	５号遺構	
８号遺構	８号遺構	
11号遺構	付帯西２区遺構	
17号遺構	１号溝	
１号溝古段階	１号溝	
Ⅰ～Ⅱ期		
４号遺構	４号遺構	
７号遺構	７号遺構	
16号遺構	Pit188	
Ⅰ～Ⅳ期		
２号遺構	２号遺構	
10号遺構	付帯西２区遺構	
13号遺構	付帯西１区遺構	
14号遺構	付帯東４区遺構	
Ⅱa期		
３号建物	なし	個別ピット番号
４号柱列	なし	個別ピット番号
５号柱列	なし	個別ピット番号
６号柱列	なし	個別ピット番号
１号遺構	１号遺構	
１号溝中段階	１号溝	
Ⅱb期		
２号建物	なし	個別ピット番号
２号柱列	なし	個別ピット番号
３号柱列	なし	個別ピット番号
１号溝中段階	１号溝	
Ⅱ～Ⅳ期		
２号溝	２号溝	

確定名称	現場名称	備考
Ⅲ期		
１号建物	なし	個別ピット番号
４号建物	なし	個別ピット番号
５号建物	なし	個別ピット番号
３号遺構	３号遺構	
６号遺構	６号遺構	
９号遺構	９号遺構	
15号遺構	Pit180	
１号溝新段階	１号溝	
Ⅲ～Ⅳ期		
12号遺構	９号遺構	９号遺構より分離
Ⅳ期		
畝状遺構	畑跡	
井戸	井戸	

表７　武家屋敷地区第13地点遺構属性表
Tab. 7　Attribute of the features at BK13

①建物・柱列

建物名	区名	角度	間数（東西×南北）	尺	時期	古い遺構	新しい遺構
１号建物	F・G－12	N－29°－W	1×2	６尺３寸半	Ⅲ	２号建物、ピット71	
２号建物	F－12・13、G－12～14	N－63°－E	5×3	６尺３寸半	Ⅱb	１・４号遺構、１号柱列、ピット71・110・123・151	１・４号建物
３号建物	G－11、H－9・10	N－62°－E	4×1	４尺	Ⅱa	１号柱列、ピット８・61	ピット10・11・57・93・94・101
４号建物	G－13、H－12・13	N－18.5°－W	2×4	６尺３寸半	Ⅲ	４号遺構、２号建物、ピット45・151	ピット46
５号建物	D～G－25～27	N－11°－W	2×4	６尺３寸	Ⅲ	７号遺構	ピット168
１号柱列	G－12・13、H－8～13、I－8	N－60.5°－E	8	６尺３寸	Ⅰ	5号遺構、ピット８・107・151	１号溝、２・３号建物、２～６号柱列、ピット２・15・20・38・48・65・68・92・100・148
２号柱列	H－８～11、I－8・9	N－61°－E	6	４尺	Ⅱb	５号遺構、１号溝、１号柱列	３号柱列
３号柱列	H－8～11	N－62°－E	5	４尺	Ⅱb	５号遺構、１・２号柱列	
４号柱列	H－9～12	N－62°－E	5	６尺３寸	Ⅱa	１号柱列、ピット68・92	
５号柱列	G－13～16、H－11～13	N－61°－E	13	６尺３寸半	Ⅱa	４号遺構、１号柱列、ピット19・107・139・151	
６号柱列	H－7～10、I－7	N－62°－E	7	４尺	Ⅱa	１号柱列、ピット61・100	

②遺構

名称	時期	区名	形状	面積（㎡）	規模（長軸×短軸）（m）	確認面	古い遺構	新しい遺構
１号遺構	Ⅱa	G－12・13	長方形	8.3	5.1×1.8	地山	４号遺構、ピット151	２号建物
２号遺構	Ⅰ－Ⅳ	H－７・８	楕円形？	1.8	(4.2)×(0.8)	地山	５号遺構、ピット105	ピット81・82・90
３号遺構	Ⅲ	F－13～15、E－15・16	不明	4.2	(8.1)×(1.3)	４号遺構埋土	４号遺構	ピット112
４号遺構	Ⅰ－Ⅱ	D－23～25、E－15～25、F－13～25、G－13～19・22、H－14	方形	170.6	37.2×(6.0)	地山		１・３号遺構、２・４号建物、５号柱列、ピット45・110～112・120・122・123・125・128～131・133～136・138・140～145・147・153・161・189・190
５号遺構	Ⅰ	H－７～９	方形？	5.9	5.0×(2.3)	地山		２号遺構、１号溝、１～３号柱列、ピット20・78・79・84・105
６号遺構	Ⅲ	E・F－28・29	不明	1.7	(1.5)×(1.1)	A2層上面		
７号遺構	Ⅰ－Ⅱ	D・E－27～29	楕円形	6.5	(7.3)×(1.7)	地山	ピット184	５号建物、ピット174～176・187・191・193～197
８号遺構	Ⅰ	Z－２～４、A・B－０～４、C－１・３・４	不明	47.4	(11.2)×(9.1)	地山		９号遺構、ピット199～208
９号遺構	Ⅲ	C－１～４、D－２～４	不明	8.3	(8.2)×(2.9)	地山	８号遺構	12号遺構、ピット210
10号遺構	Ⅰ－Ⅳ	A－０	不明	0.2	(1.2)×(1.1)	地山	８号遺構	
11号遺構	Ⅰ	B－０	不明	0.1	(0.5)×(0.3)	地山		８号遺構
12号遺構	Ⅲ－Ⅳ	C・D－１・２	不明	1.0	(2.0)×(1.2)	地山	９号遺構	
13号遺構	Ⅰ－Ⅳ	J－４	不明	0.3	(0.7)×(0.5)	地山		
14号遺構	Ⅰ－Ⅳ	B－30・31	不明	2.3	(2.2)×(1.4)	地山		
15号遺構	Ⅲ	D－26、E－26・27	不正方形	8.0	3.2×3.1	地山	ピット188・191・193	
16号遺構	Ⅰ－Ⅱ	D－25・26	円形	1.7	2.2×(0.8)	地山		
17号遺構	Ⅰ	J－11・12	不明	1.4	(1.3)×(1.1)	１号溝古段階埋土		１号溝古段階

＊規模の（　）は残存長を示す。

③溝

名称	時期	区	方向	最大幅（m）	長さ（m）	面積	確認面	古い遺構	新しい遺構
１号溝	Ⅰ－Ⅲ	F－19～22、G－15～22、H－８～22、I－８～16、J－９～13	N－81.5°－E	6.0	44.8	136.4	地山	４・５・17号遺構、１号柱列、ピット140・143・144・152	２号柱列、ピット17・20・32・33・145・155～157
２号溝	Ⅰ－Ⅳ	A－２	N－8.7°－W	0.5	2.4	0.9	８号遺構埋土	８号遺構	

第Ⅳ章　検出遺構

本章では、検出遺構を区ごとに説明する。１区西は平面図を２つに分けた（図９・13）。１号溝と４号遺構以外の遺構は、そのほとんどが西側に位置する（図９）。これら複数の遺構の重複関係から、比較的明瞭に遺構の時期的変遷を捉えることができた（図10）。そのため、１区西に関しては時期ごとに遺構を報告する。それから、遺構が少なく近接している１区東と８区、それから２～４区は、まとめて報告する。なお、５～７区ではピット以外の遺構は検出されなかった。また、１号溝と４号遺構に関しては、１区全体に各期にわたり存続することから、１区東の報告後にまとめた

１．１区西の遺構

（1）Ⅰ期

【１号柱列】（図９、図版６）

地山面、５号遺構上面で検出した。柱間寸法は６尺３寸あり、８間となる柱列である。角度はＮ－60.5°－Ｅとなる。柱間寸法から建物である可能性も考えられるが、今回の調査区内には組み合う他の柱痕跡は周囲に認められない。また、５号遺構より新しく、１号溝中段階よりは古い。柱１～６の掘り方は長方形であり、短軸0.6～0.9m、長軸1.5～1.9m程である。柱７・８では、この掘り方は明確に検出できなかった。彫り方内南側から柱穴が検出された。柱穴はほぼ円形を呈し、径20～50cmの幅に収まる。また柱２では、径10cmの円形の柱痕跡が認められた。出土遺物は無い。

【５号遺構】（図９、図版12）

地山面にて検出された。２号遺構、１～３号柱列、１号溝跡中段階等より古く、周辺の遺構の中では最も古い。幅5.0m程の方形状となる可能性があるが詳細は不明である。出土遺物は無い。

【17号遺構】（図９、図版14）

１号溝埋土の掘り下げ中に検出した。１号溝古段階は、この遺構埋土を掘り込んで構築されている。埋土は５層確認でき、上層では砂質シルト、下層では粘土となる。とくに砂質シルトの２層では、礫等が多く認められた。出土遺物には瓦２片があるのみで、時期を示す出土遺物は無い。

【２号遺構】（図９、図版10）

そのほか、詳細な時期が特定できずⅠ～Ⅳ期とした遺構として２号遺構がある。地山面、５号遺構上面で検出した。北側は調査区外へと伸び、東側は撹乱で破壊されている。残存最大長で4.2m程ある。出土遺物は無い。Ⅰ期の５号遺構よりは新しいことから、それ以降の遺構であることは確実である。

（2）Ⅱa期

【３号建物】（図９、図版６）

地山面で検出した。柱間寸法は４尺で、４×１間（東西×南北：以下同様）となる。方向はＮ－62°－Ｅとなる。柱間寸法からすれば、柱列である可能性もある。１号柱列より新しい。柱１において径20cm程の柱痕跡が認められた。出土遺物は無い。

【４号柱列】（図９、図版７）

地山面、１号柱列上面で検出した。柱間寸法は６尺３寸であり、５間続く。柱間寸法から建物と可能性もある。方向はＮ－62°－Ｅとなる。ちょうど１号柱列と対応し並行する様に並ぶ。また、柱４は径30～40cm程の石である。出土遺物は瓦片１点のみである。

【５号柱列】（図13、図版７）

地山面と１号柱列、４号遺構上面で検出した。柱間寸法は６尺３寸であるが、その半間も用いられ13間分並ぶ。４号柱列と同様に、柱間寸法から建物の可能性もある。方向は、Ｎ－61°－Ｅである。１号溝とほぼ並行する。柱１・３・６・７は40～60cm程の（楕）円形を呈するが、柱２・４・５は径20cm程の小さい円形となる。この小さい柱のうち、柱２・４では底面の半分を占める程の大きさの扁平な石が置かれている。また、柱６では10cm程の小さな柱痕跡が検出され、柱７では径20cm程の柱痕跡が残り、その周囲に礫が置かれている。柱１・５では柱痕跡は認められないが、礫が多く検出された。陶器片１点、瓦片11点が出土している。

【６号柱列】（図９、図版７）

地山面と１号柱列上面で検出した。柱間寸法は４尺で、７間分続く。方向はＮ－62°－Ｅとなる。西端は調査区外へと伸びる。柱穴は径20～50cm程で、柱３では柱痕跡状のものが検出されている。この痕跡は、10cm程の不正円形となり、柱としては不整形である。また、柱２では20～30cm程の大きな礫が壁際に並ぶ。中央に柱があり、それを支えたものと理解できるが、柱痕跡は検出できなかった。瓦片１点のみが出土している。

【１号遺構】（図９・11、図版８・９）

地山面と４号遺構上面において、長方形の石組遺構として検出した。撹乱により西と東が分断されていることから、西側を１号遺構a、東側を１号遺構bとして調査を進めた。そして、内容確認のため、１号遺構a・bの石組内部を四分割し掘り下げた。

周囲に積まれた石組は、10～30cm程の礫を２～３段に積んだものである。楕円形の礫の場合は、小口方向を内側に向けて並べる。それらの礫の一部は、内側に向く面が打ち欠かれ平坦面が形成されている。撹乱を利用し、１号遺構aの石組部の断面を確認した所、裏込めの石等は認められず、石裏側には粘土を詰めている（図11①、図版８－４）。

１号遺構a内部の西側では、砂礫あるいは砂が主体的に堆積し、礫等は少なかった。１号遺構aの東側では、検出面の段階で１号遺構bと区画する礫が確認された。この下部には堆積土が認められ、西側埋土とは異なり粘土ブロックが混じるようなシルト層が堆積していた。

１号遺構bの石組は１号遺構aと変わりない。ただし、北西側の石組は破壊されて存在していない。１号遺構bでは、検出面上に多量の瓦が認められた（図版８－８）。これらの瓦は、面戸付板塀瓦２点を含む板塀瓦が主体となっている（図43・44、図版36・37）。埋土からは平瓦を主体として多量に出土している。１号遺構bの埋土は、ほぼ水平に堆積しており、シルト・シルト質粘土等であり、１号遺構a埋土とはかなり異なる。

その１号遺構bの埋土８層は１号遺構aの５層に相当し、１号遺構b埋土10層は13列の１号遺構a埋土５層（図11②）と同じである。この埋土状況から、１号遺構a・bを区画する礫は、１号遺構b埋没後に敷設されたと言える。１号遺構の最終的な段階は、１号遺構aの区画する礫より西側が開口していた状況となり、そこに砂礫層主体の層（１～３層）が堆積したものと考えられる。本報告ではⅡa期と時期比定したが、このように形態を変化させながら、その後の時期まで継続していた可能性が高い。この点については、第Ⅵ章にて解釈したい。

出土遺物としては、先述の瓦を含め、154点（54,227g）が出土している。しかし、他の遺物は、磁器３点、陶器２点等非常に少ない。１号遺構b埋土からは18世紀代の陶器（CT002）が出土している。

（3）Ⅱb期

【２号建物】（図９、図版６）

地山面、４号遺構上面で検出した。柱間寸法は６尺３寸であるが、半間も用いられ、５×３間の建物となる。方向は、Ｎ－63°－Ｅとなる。1・４号遺構、１号柱列より新しく、１・４号建物より古い。柱１・４・６・９は径20cm程の小形のもので、柱痕跡や礫等は無い。柱２・３・８の埋土には、径10～20cm程の礫が認められる。柱痕跡は、柱７で径20cm程の円形のものが認められた。瓦片13点が出土している。

【２号柱列】（図９、図版７）

地山面、１号溝上面で検出した。柱間寸法は４尺で、６間分となる。方向はＮ－61°－Ｅである。５号遺構、１号溝中段階、１号柱列より新しく、３号柱列より古い。１号溝がかなり埋まった段階で構築された遺構であり、Ⅱ期後半のⅡb期とした。柱穴は、全て径20～30cmの楕円形となる。最大で1辺10cm以下の方形の柱痕跡が、柱１・２・４・５・７において検出された。出土遺物は、瓦片１点のみ出土している。

【３号柱列】（図９、図版７）

地山面と５号遺構上面で検出した。柱間寸法は４尺で、５間分となる。方向はＮ－62°－Ｅである。５号遺構、１・２号柱列より新しい。柱穴の規模は２号柱列と同様であるが、柱痕跡は無い。出土遺物は、瓦片１点のみ出土している。

（4）Ⅲ期

【１号建物】（図９、図版６）

地山面で検出した。柱間寸法は６尺３寸の半間で、１×２間の小さな建物であるが、未調査区の北側に伸びる。方向はＮ－29°－Ｗとなる。２号建物より新しい。おおむね30～40cmの楕円形の柱穴で構成される。柱３では、径10cm程の円形の柱痕跡がある。また、柱６では大形の礫が認められた。出土遺物は無い。

【４号建物】（図９、図版６）

地山面と４号遺構上面で検出した。柱間寸法６尺３寸で、半間を用いた２×４間の小形の建物である。方向は、Ｎ－18.5°－Ｗとなる。４号遺構、２号建物より新しい。径20cm程の円形の柱穴で構成される。柱痕跡、礫等は存在しない。瓦片３点のみが出土している。

【３号遺構】（図13・14③、図版10）

４号遺構上面において不整形な形として検出した。埋土は１層のみである。詳細は不明であるが、形が不整形であること、遺構肩部が緩やかであることから、４号遺構埋土の凹みに堆積した堆積層あるいは４号遺構の埋土の一部である可能性もある。出土遺物は、比較的多い。磁器18点、陶器56点等がある。そのうちの陶器の一つは19世紀に時期比定される（CT022）。

（5）Ⅳ期

【井戸】（図13、図版12）

１辺3.5m程の方形の掘り方を有し、直径1.3m程の桶を枠とした井戸である。その掘り方上面付近では、太い角材を組み合わせた方形の枠が設置されていた。４号遺構、５号柱列やそのほかのピット類より新しい。これまでの調査からは、このような特徴を持つものは明治時代に限られており、さらに検出された全ての遺構より新しいことから、Ⅳ期とした。調査では、この井戸の掘り方壁面で４号遺構の埋土状況等を確認するため、埋土を小型重機で一部掘削した。その際に、方形の井戸枠は撤去し、桶の井戸枠のみを残した状態で止めた。

２．１区東・８区の遺構

【５号建物】（図16、図版６）

１区東の地山面で検出した。柱間寸法は６尺３寸となり、２×４間の建物となる。方向はＮ－11°－Ｗとなる。７号遺構より新しく、15号遺構より古い。径40～60cm程度の円形に近い形状の柱穴で構成される。このうち、柱３・４は、A2層を確認面としていることから、Ⅲ期に時期比定した。出土遺物は無い。

【６号遺構】（図20・23、図版12）

１区東のA2層上面で検出した。検出面から礫が多数確認されている。調査面積が狭いため形態等は不明であ

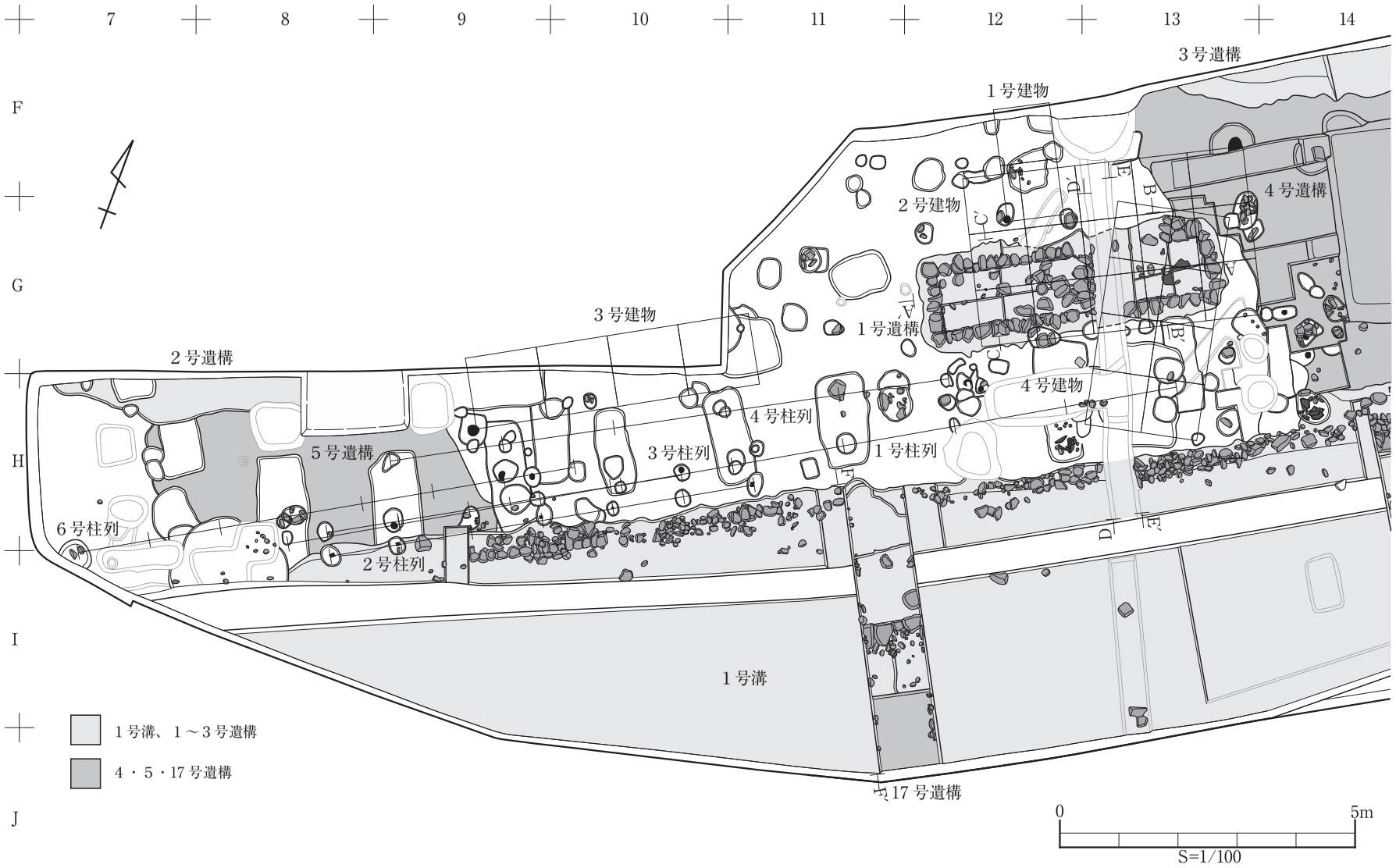


図９　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（1）
Fig. 9　Features belonging to west side of area 1 at BK13 (1)

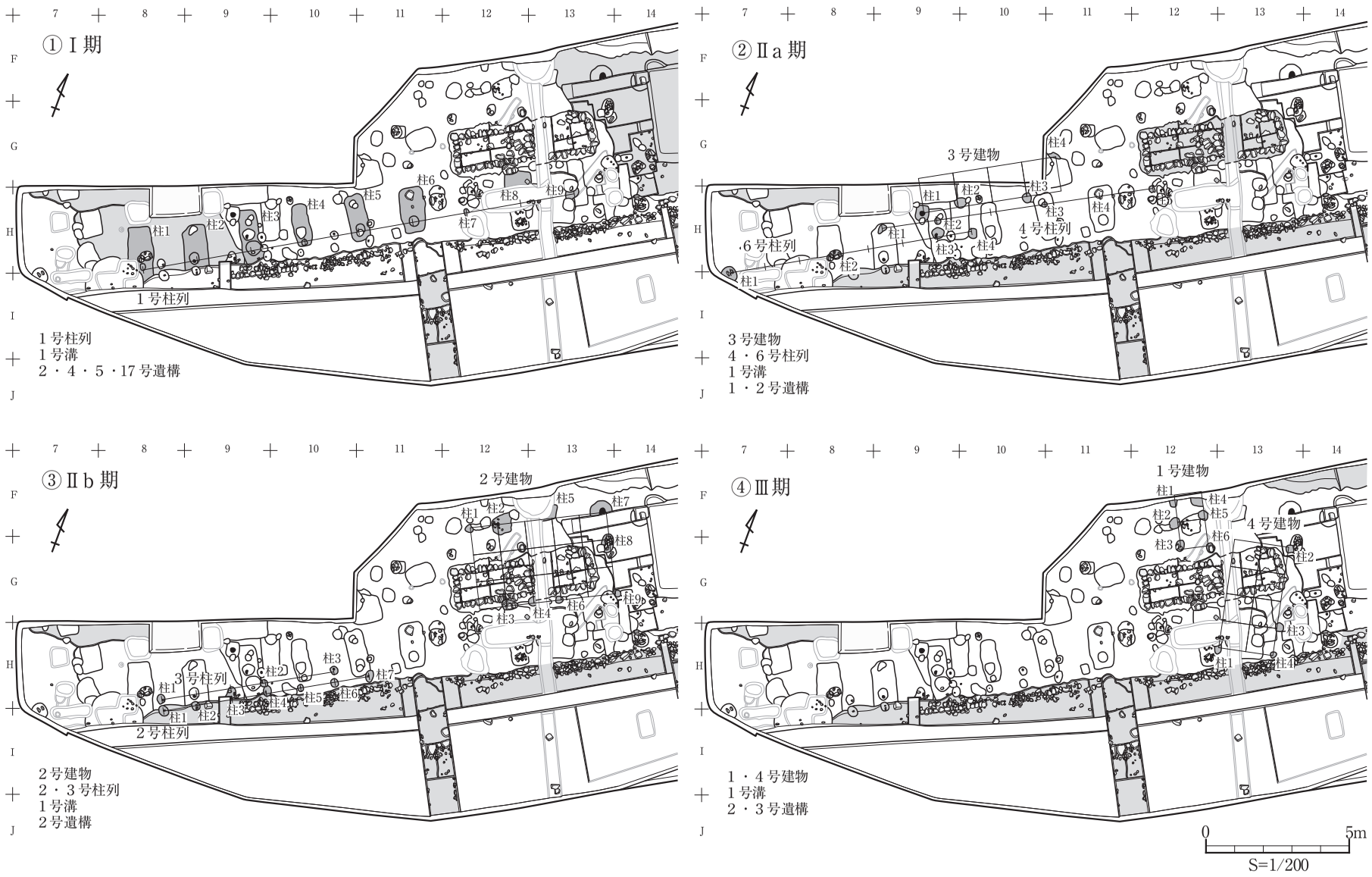
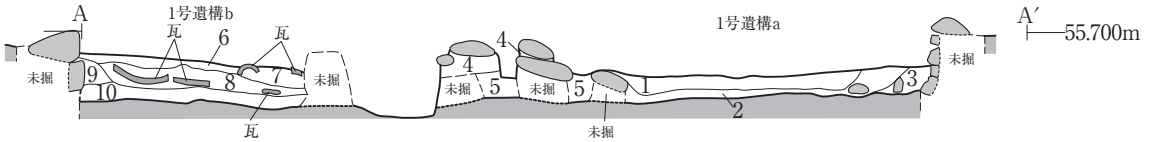
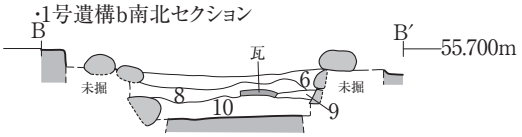


図10　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（2）
Fig. 10　Features belonging to west side of area 1 at BK13 (2)

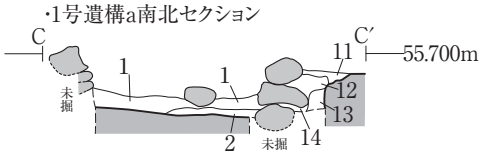
①1号遺構



・1号遺構b南北セクション

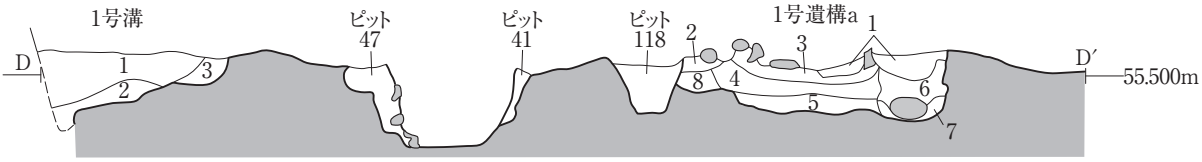


・1号遺構a南北セクション



1号遺構
1　10YR7/6 明黄褐色　砂礫　粘性無・しまり無　径2－3cm の礫を多量に含む　炭化物少量含む
2　10YR5/8 黄褐色　砂　粘性やや有り・しまりやや有り　炭化物少量、鉄分やや含む
3　10YR4/4 褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物少量含む
4　10YR4/6 褐色　シルト　粘性やや有り・しまり強　径1－3cm の礫を少量含む
5　10YR3/3 暗褐色　シルト　粘性やや有り・しまり強　粘土ブロックを僅かに含む
径1－2mm の小礫を少量、炭化物含む
6　10YR4/4 褐色　シルト　粘性無・しまり強　径0.5－1cm 程度の粘土ブロックと礫を多量に含む　炭化物も少量含む
7　10YR5/6 黄褐色　砂礫　粘性無・しまり無　径1－5cm 程度の礫と瓦破片を多量に含む
8　10YR4/4 褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり強　炭化物少量含む
かなり大形の瓦片を含む
9　10YR3/3 暗褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　径3－5cm の礫を少量含む
10　10YR5/6 黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまり強　地山土に近い
11　10YR4/4 褐色　粘土　粘性強・しまり強　径1－3mm の礫をやや含み、炭化物も少量含む
12　10YR5/6 暗褐色　粘土　粘性強・しまり強　炭化物少量含む
13　10YR5/8 黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　鉄分多量に含む
14　10YR4/6 褐色　粘土　粘性強・しまり強

②13列西壁

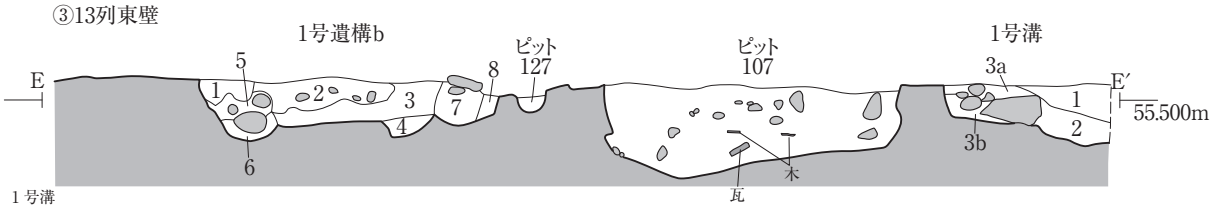


1号溝
1　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　粘土を少量、砂を僅かに斑に含み、炭化物を全体的に僅かに含む
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　層下部を中心に鉄分を含む土を僅かに斑に含み、全体的に白色土粒を僅かに含む
3　10YR5/4 にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり強　シルトを極僅かに含み、全体的に鉄分を僅かに含む

1号遺構 a
1　2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト　粘性中・しまり強　オリーブ褐色砂質シルトと、砂粒が僅かに斑に含まれている
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　黄褐色砂質シルトを僅かに斑に含み、炭化物と白色土粒を極僅かに含む
3　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　①の4層に相当する
4　2.5Y4/2 暗灰黄色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり強　炭化物と小石を全体的に極僅かに含む　①の5層に相当する
5　2.5Y4/4 オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや強　オリーブ褐色シルトを少量斑に含み、径0.2－0.5cm 程の小石を僅かに含む
6　2.5Y4/2 暗灰黄色　シルト　粘性やや弱・しまり強　オリーブ褐色粘土質シルトを斑に少量含み、炭化物と砂の粒を全体的に僅かに含む
7　2.5Y4/4 オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや強　斑に鉄分を含む
8　2.5Y3/2 黒褐色　シルト 粘性中・しまり強　オリーブ褐色粘土質シルトを僅かに斑に含み、白色土粒を全体的に僅かに含む

ピット 41　2.5Y3/2 黒褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり中　全体的に径3－10cm 程の小礫を少量含み、炭化物と砂粒を僅かに含む
ピット 47　2.5Y5/3 黄褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや強　褐色の鉄分を含む土を僅かに斑に含み、炭化物と砂粒を全体的に僅かに含む
ピット 118　2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性中・しまりやや強　黄褐色粘土質シルトを少量斑に含む　細かい砂粒と径3cm 程の小礫を僅かに含む

③13列東壁



1号溝
1　②の1号溝1層と同じ
2　②の1号溝2層と同じ
3a　2.5Y5/4 黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　砂を僅かに斑に含み、炭化物と白色土粒を極僅かに含む　部分的に鉄分を多く含む
3b　10YR4/4 褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　シルトを少量斑に含み、鉄分を極僅かに斑に含む

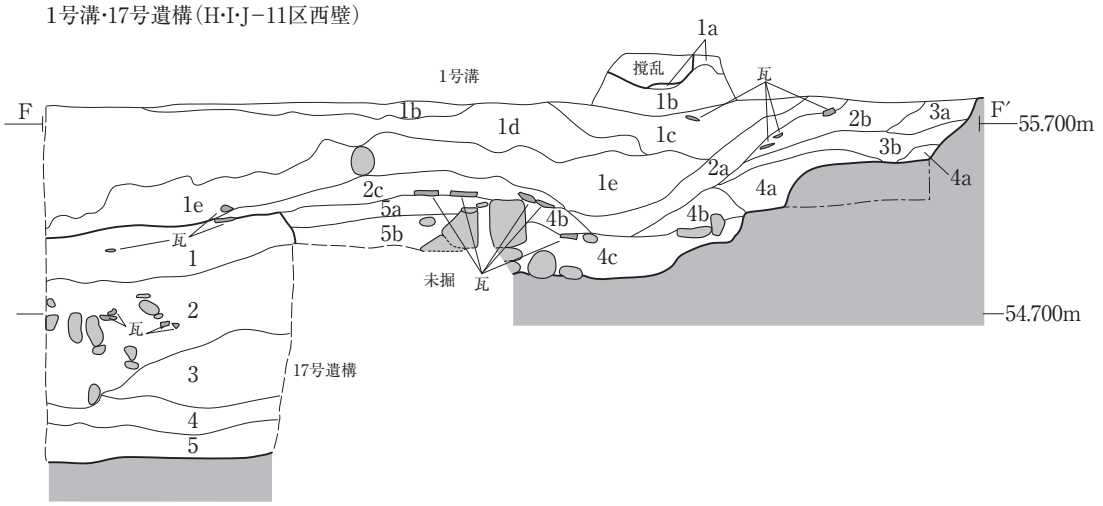
1号遺構 b
1　2.5Y4/4 オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性中・しまりやや強　暗オリーブ褐色粘土の土が僅かに斑に混じる
2　①の7層と同じ
3　①の8層と同じ
4　①の10層と同じ
5　2.5Y3/2 黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　オリーブ褐色シルト質粘土を僅かに斑に含む　炭化物と小石、径3－10cm の小礫を極僅かに含む
6　2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや強　径0.1－0.2cm 程の小石を含む
7　2.5Y5/4 黄褐色　シルト　粘性やや弱・しまり強　白色土粒と鉄分を僅かに含む
8　2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト　粘性中・しまり強　砂粒を僅かに含み、径10－20cm 程の石を含む

0　1m
S=1/40

ピット 107　2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト　粘性やや弱・しまり強　にぶい黄褐色粘土を少量斑に含み、炭化物と砂粒を僅かに含む　径5－15cm 程の小礫を全体的に含む　極僅かに瓦も含む
ピット 127　2.5Y4/6 オリーブ褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　径0.5－2cm 程の小石を僅かに含む

図11　武家屋敷地区第13地点1区西の遺構（3）
Fig. 11　Features belonging to west side of area 1 at BK13 (3)

1号溝･17号遺構（H･I･J−11区西壁）



1号溝
1a　10YR3/1 黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　暗オリーブ褐色砂質シルトの土を斑に含む　白色土粒を極僅かに含む
1b　2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり強　暗オリーブ褐色粘土質シルトの土を少量含み、赤褐色の鉄分と白色土粒を僅かに含む
1c　2.5Y3/2 黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり強　オリーブ褐色粘土、径3㎝程の土塊を極少量と炭化物を僅かに含む
1d　10YR2/2 黒褐色　粘土　粘性やや強・しまりやや強　オリーブ褐色粘土と、暗オリーブ褐色粘土を少量斑に含む　炭化物と白色土粒を僅かに含む
1e　2.5Y5/4 黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　オリーブ褐色粘土質シルトと、黒褐色シルト質粘土を少量斑に含み、炭化物を極僅かに含む
2a　2.5Y4/4 オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや強　暗オリーブ褐色粘土質シルトを極少量斑に含む　小石と炭化物を極僅かに含む
2b　2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　砂粒を僅かに含む
2c　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや強　炭化物を極僅かに含む
3a　2.5Y4/4 オリーブ褐色　砂質シルト　粘性弱・しまりやや強　鉄分を全体的に少量含む　炭化物と砂粒を極僅かに含む
3b　2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや強　黄褐色粘土を少量斑に含み、小石を少量、炭化物を極僅かに含む
4a　2.5Y5/4 黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　オリーブ褐色シルト質粘土を部分的に含む
4b　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性強・しまり中　砂粒を極僅かに含む
4c　2.5Y4/3 オリーブ褐色　砂　粘性弱・しまり弱　礫を所々に含む
5a　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中　炭化物を極僅かに含む
5b　2.5Y4/2 暗灰黄色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　明黄褐色土を極僅かに斑に含み、砂粒を含む

17号遺構
1　2.5Y4/2 暗灰黄色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや強　小石を含む
2　2.5Y4/3 オリーブ褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや強　炭化物を極僅かと、瓦の破片を部分的に多量に含む
3　2.5Y4/2 暗灰黄色　砂質シルト　粘性中・しまりやや弱　オリーブ褐色粘土、灰色シルト質土を層下部に含む
4　2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　オリーブ黒色シルト質土を少量斑に含む
5　2.5Y5/4 黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　オリーブ灰色粘土を疎らに含む

0　1m
S=1/40

図12　武家屋敷地区第13地点1区西の遺構（4）
Fig. 12　Features belonging to west side of area 1 at BK13 (4)

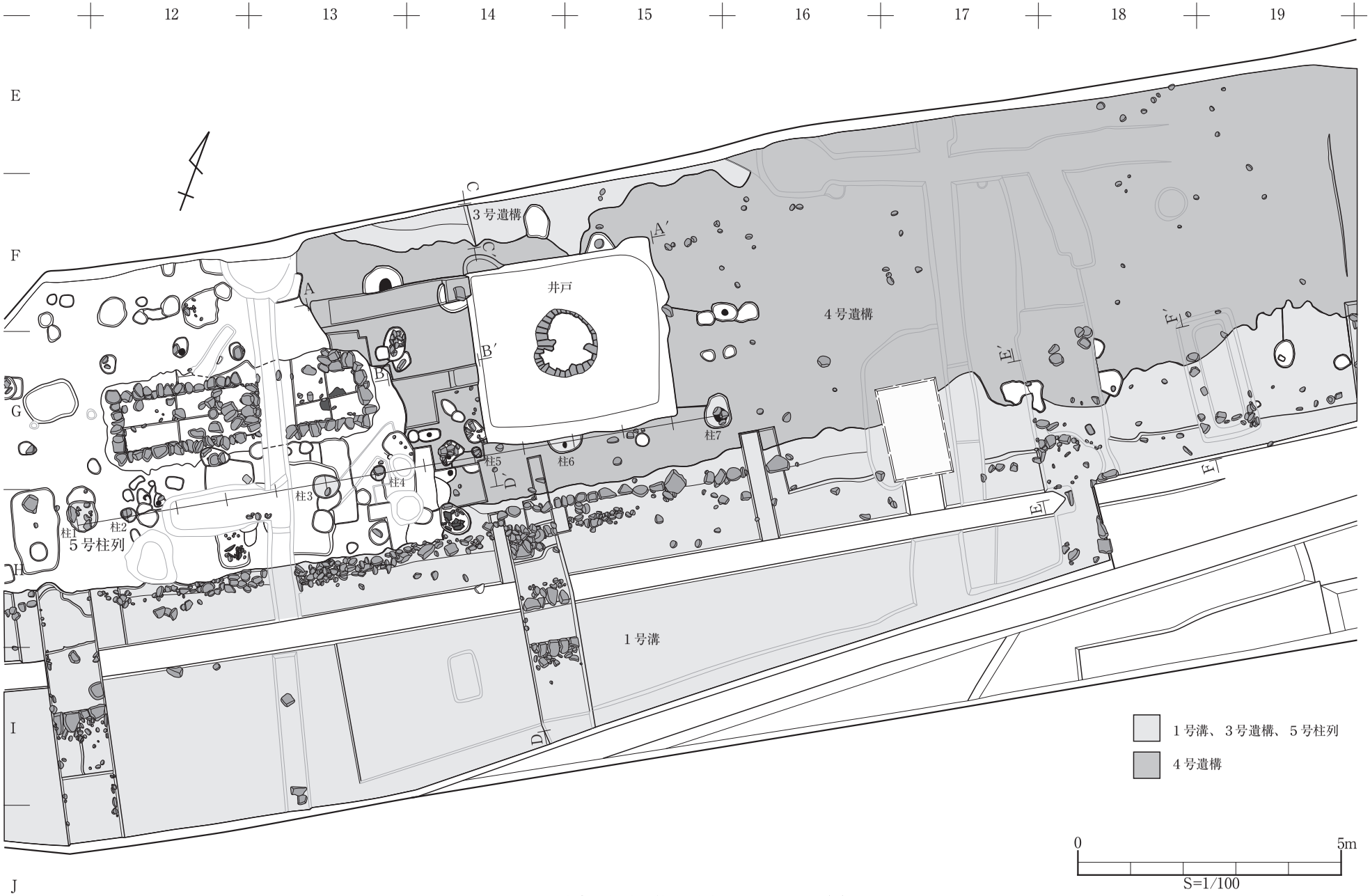
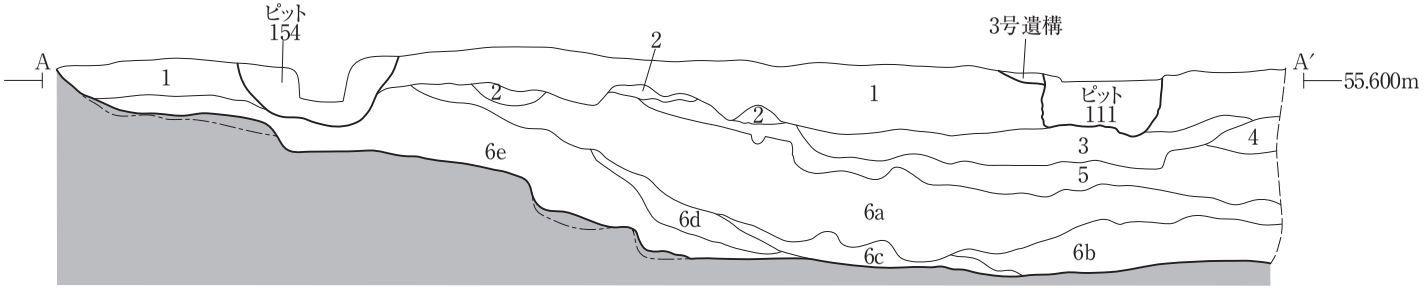


図13　武家屋敷地区第13地点1区西の遺構（5）
Fig. 13　Features belonging to west side of area 1 at BK13 (5)

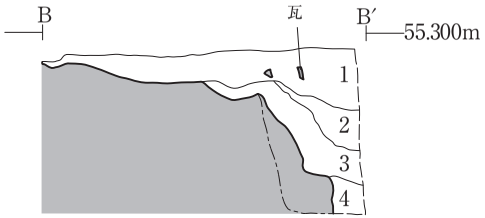
①4号遺構西端北側



3号遺構　10YR3/1 黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　風化した白色の小礫を少量、炭化物を多量に含む
4号遺構
1　10YR4/2 灰黄褐色　粘土質シルト　粘性中・しまりやや強　僅かの炭化物と礫を少量含む
2　10YR5/6 黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　風化した白色の小礫を少量、炭化物を僅かに含む
3　2.5Y5/3 黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまりやや弱　風化した白色の小礫を多量に含む　黄褐色粘土質シルトのブロックを疎らに含む
4　5Y4/1 灰色　粘土　粘性強・しまりやや弱　炭化物と小礫を僅かに含む
5　2.5Y6/6 明黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　風化した白色の小礫を中量、炭化物を僅かに含む　にぶい黄褐色粘土質シルトのブロックを疎らに含む
6a　10YR3/3 暗褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　炭化物を中量、5㎝大の礫を僅かに含む　黄褐色粘土質シルトの小ブロックを全体に疎らに含む
6b　5Y4/1 灰色　粘土　粘性強・しまり弱　炭化物を少量、5㎝大の礫を僅かに含む
6c　2.5Y4/2 暗灰黄色　粘土　粘性強・しまり弱　炭化物を全体に疎らに含むが、層西側部分には炭化物が3−5cm の厚さで層状に堆積する　にぶい黄色粘土のブロックを少量含む
6d　2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　炭化物を全体に疎らに含む　径5㎝程の礫を僅かに含む
6e　2.5Y3/2 黒褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまりやや弱　炭化物を僅かに、オリーブ褐色粘土のブロックを少量含む

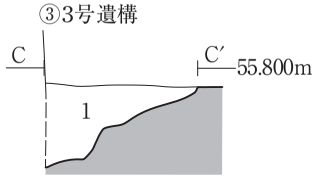
ピット 111　10YR4/1 褐灰色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　炭化物を少量含む
ピット 154　10YR4/4 褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり中　3−5cm 大の礫を中量含む　炭化物を僅かに含む

②4号遺構西端南側



4号遺構
1　①の1層と同じ
2　①の5層と同じ
3　①の6a 層と同じ
4　①の6e 層と同じ

③3号遺構

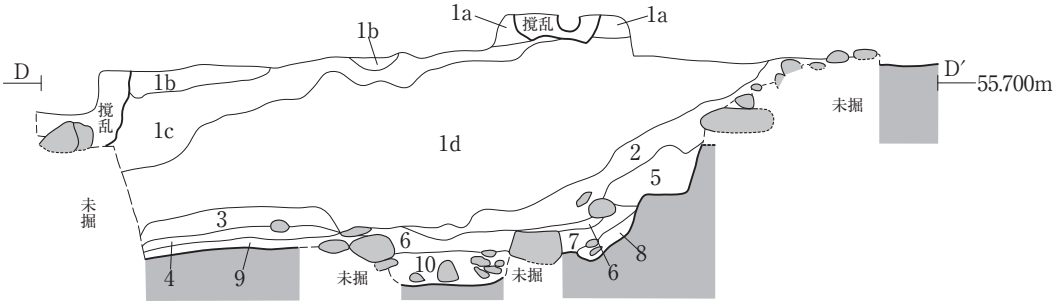


3号遺構
1　10YR2/2 黒褐色　シルト質粘土　粘性やや有り・しまり弱　部分的に褐色粘土ブロック含む
　炭化物を含む　遺物など多量に出土

0　1m
S=1/40

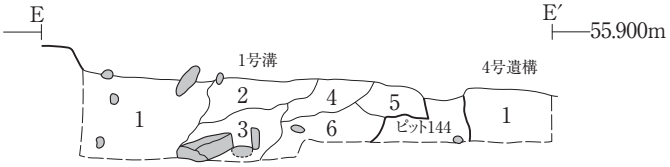
図14　武家屋敷地区第13地点1区西の遺構（6）
Fig. 14　Features belonging to west side of area 1 at BK13 (6)

①1号溝（H･I−14区西壁）



1 号溝
1a 10YR3/1 黒褐色　粘土質シルト　粘性中・しまり強　オリーブ褐色シルト質粘土の塊を含み、極僅かに白色土粒を含む
1b 10YR3/2 黒褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり強　オリーブ褐色粘土と褐色シルト質粘土が混在し少量含まれる　炭化物を極僅かに含む
1c 2.5Y4/2 暗灰黄色　砂　粘性弱・しまり強　オリーブ褐色シルト質粘土を僅かに含み、炭化物、白色土粒を極僅かに含む
1d 2.5Y5/4 黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　オリーブ黒色粘土、黒褐色砂を極僅かに含む
2 2.5Y4/2 暗灰黄色　シルト質砂　粘性やや弱・しまりやや弱　部分的に鉄分を多く含む　植物の根が多くみられる
3 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　黒褐色粘土を僅かに斑に含み、炭化物を極僅かに含む
4 2.5Y4/2 暗灰黄色　粘土　粘性強・しまり中　灰色粘土、オリーブ褐色粘土を僅かに斑に含む
5 2.5Y6/3 にぶい黄色　粘土　粘性強・しまり強　褐灰色シルト質粘土が僅かに斑に混じる
6 2.5Y3/2 黒褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　黄灰色粘土、黄褐色粘土を極僅かに含む
7 2.5Y5/3 黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　灰色粘土、黄褐色粘土を少量斑に含む
8 2.5Y5/4 黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　灰オリーブ色粘土、灰色粘土を僅かに斑に含む
9 2.5Y6/4 にぶい黄色　粘土　粘性強・しまりやや強　オリーブ灰色粘土、ブロックを含む
10 2.5Y4/2 暗灰黄色　砂　粘性弱・しまり弱　小石と径 15cm 程の河原石を多く含む

②1号溝（G−18区西壁）

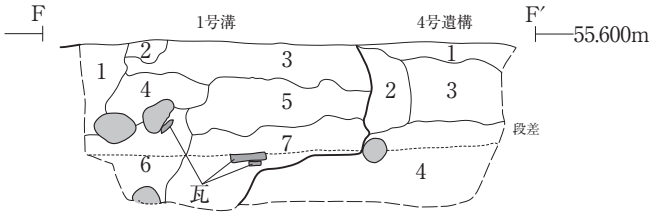


1 号溝
1 2.5Y3/2　黒褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物を含む　にぶい黄褐色粘土ブロックを多く含む　径 3−20cm の礫を含む
2 10YR5/4 にぶい黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物と白色土粒を含む　明黄褐色シルト小ブロックを僅かに含む
3 10YR4/3 にぶい黄褐色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物を僅かに含む　黄色土粒を含む
4 10YR4/3 にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　炭化物を含む　明褐色土粒を僅かに含む
5 10YR4/3 褐色　シルト　粘性強・しまり中　炭化物を含む　黄橙土粒を僅かに含む
6 7.5YR4/3 褐色　シルト　粘性やや強・しまりやや強　白色土粒と黄色土粒を含む

4 号遺構
1 10YR4/3 暗褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　炭化物を含む　一部で炭化物が層状になる　白色土粒、黄色土粒を含む

ピット 144
7.5YR4/4 褐色　粘土質シルト　粘性強・しまり中　炭化物を含む　黄色土粒と白色土粒を多く含む　径 2cm 程の円礫を僅かに含む　埋土に貝含む

③1号溝（F･G−19区西壁）



1号溝
1 2.5Y3/2 黒褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　にぶい黄色とオリーブ褐色の粘土ブロックを少量斑に含み、炭化物を僅かに含む
2 2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　小さな礫を僅かに含む
3 2.5Y5/3 黄褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　黄褐色粘土質シルトを少量斑に含み、小さな礫と炭化物を僅かに含む
4 2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや強　暗灰黄色シルト質粘土を少量斑に含み、小さな礫と炭化物を極僅かに含む
5 2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　暗灰黄色粘土が僅かに斑に混じり、オリーブ褐色粘土を塊で含む　炭化物を極僅かに含む
6 2.5Y4/2 暗灰黄色　粘土　粘性強・しまりやや弱　にぶい黄色粘土ブロックを極僅かに含む　小さな礫と炭化物を極僅かに含み、径 30 ㎝程の河原石を含む
7 2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　黄褐色粘土ブロック状に少量含む　黒褐色粘土を極僅かに斑に含み、炭化物を僅かに含む

4号遺構
1 2.5Y4/2 暗灰黄色　シルト質粘土　粘性中・しまりやや強　粘土を部分的に含み、炭化物と小さな礫を極僅かに含む
2 2.5Y5/4 黄褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　オリーブ褐色粘土を全体に斑に含む
3 2.5Y4/3 オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまり中　灰色粘土を少量部分的に斑に含む　炭化物と礫を僅かに含む
4 2.5Y4/4 オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　灰色粘土を全体に斑に含む　径 0.1−3 ㎝の礫を含む

0　1m
S=1/40

図15　武家屋敷地区第13地点１区西の遺構（7）
Fig. 15　Features belonging to west side of area 1 at BK13 (7)

る。出土遺物には磁器９点、陶器17点等がある。そのうち磁器は19世紀前～中葉（CJ021）、陶器は19世紀初頭～中葉（CT023）の年代に比定される。出土遺物と層序関系からⅢ期に時期比定した。

【７号遺構】（図20、図版12）

１区東の地山面で検出した。正確に形状は不明瞭であるが､残存部位からは楕円形を呈するものと考えられる。最大幅で7.3mとなる。５号建物より古い。出土遺物は無い。重複関係からⅠ～Ⅱ期に時期比定した。

【14号遺構】（図20・22②、図版22）

８区東の地山面で検出した。東西端共に撹乱を受けており、元の形状は不明である。残存最大幅で2.2m程ある。埋土は３層ある。出土遺物は磁器4点、陶器７点、瓦２点が出土しているが、これらの遺物の時期は不明である。詳細時期は不明であり、Ⅰ～Ⅳ期と時期比定した。

【15号遺構】（図16、図版12）

１区東の地山面で検出した。3.2×3.1m程の不正方形を呈する。５号建物より新しい。埋土中から水が多量に染み出し、埋土はグライ化していることから、井戸の可能性も考えられる。A2層を確認面とする５号建物より新しい。出土遺物も出土しており、19世紀前葉～中葉の磁器（CJ025）、19世紀初頭～中葉の陶器（CT025）等がある。出土遺物と重複関係からⅢ期に時期比定したが、それ以降の遺構である可能性もある。

【16号遺構】（図16、図版12）

１区東の地山面で検出した。おそらく径２m程度の円形を呈するものと考えられるが、15号遺構に半分が壊される。出土遺物には磁器・陶器各２点、軟質施釉陶器１点の破片が出土しているが、時期を明確に確定できる遺物は無い。重複関係からⅠ～Ⅱ期に時期比定した。

【畝状遺構】（図20・21②、図版22）

８区西のA2層下にて畝状の窪みとして検出した。A層面での耕作に伴い、地山面まで掘削された痕跡である可能性もある。層序関係からⅣ期と時期比定した。

３．１号溝と４号遺構

【１号溝】（図９・11～13・15～17、図版13～16）

１号溝は、１区南半に位置する規模の大きな遺構である。当初は石列の存在から、この遺構の存在を確認した。この石列は、H－14区からは２列となるが、次第に内側の石列は見えなくなる（図13）。G16区周辺からは、両方の石列は消失する。遺構の内容確認のため、この石列と直行するように11列（H・I・J－11区）と14列（H・I－14区）に南北方向のトレンチを２箇所設定し掘り下げを行った。その結果、11列では確認面より50cm下、14列では１m下から、石組が検出された。14列（図15①、図版14・15）の石組は、幅約60cm空けて対面しており、溝となることが判明した。11列（図12、図版14）では、南側のみ石組が確認できた。北側は段状となっているのみで、石組は確認できなかった。この溝を１号溝古段階とした。

14列で検出された溝は、20～30cm程の大きな河原石を両側に並べている。石によっては、溝中央部に向けた面を打ち欠き平らに加工したものも認められた。この石の裏側には、裏込めとして10cm以下程度の小さめの河原石を充填している。また、並べている大きな川原石と底面との間には砂が詰まっているが、その砂の間には長楕円形の石が認められる。保存のため、これらの石を外した調査は行なっておらず、これ以上の詳細な構造は不明である。

一方で、11列で検出された南側の石組のうち２点は、長方体に加工された切石が使用されている。この切石は、溝に沿わせる様に長辺を並べている。北側では、段が認められた。この段の下面には、南側石組と対応する場所に径10cm程の石が存在していた僅かな窪みが確認でき、この位置に石を並べていた可能性がある。

１号溝古段階埋土の最下層では、裏込と同規模程度の石が多く確認され、砂が堆積していた（図12：１号溝埋

土4c層、図版14－３、図15①１号溝埋土10層、図版15－１）。この埋土の様相からは、１号溝古段階廃絶時までに自然に堆積した層であると捉えられる。また、この層の広がりから、この頃には11列の北側石組はすでに存在していなかった可能性が高い。14列では、その底面の埋土と石組を覆うような粘土質土が堆積していた（図15①１号溝埋土６）。11列では、底部4c層の上に堆積する4a・4b層が、おおむねその層に対応する。これらの埋土の堆積状況から、１号溝古段階が次第に埋没していった様相が窺える。

１号溝古段階の底面の標高は、断面図上では11列で約54.9m、14列で約54.6mとなり、東に向かって30cm程の落差が認められた。その計測場所の平面距離は9.2mとなることから、傾斜角は1.9度となり、東に向かう緩やかな勾配となっている。

１号溝古段階が埋没した後に、確認面で検出した内側の石列により区画される溝が機能していたと考えられる。この時期を中段階とする。14列では確認面の60cm下から、長径40cm程の大形の礫が検出され、その裏側には裏込と考えられる小さめの石を多数確認した（図12）。確認面で認められた内側の石列は、この裏側の石が露出していたものであることが判明した。この大きな石は、H－13列東壁（図11③）でも認められるが、11列では確認できなかった。11列では、古段階の北側石組が存在しないこともあり、構造が異なっていた可能性も考えられる。

確認面で検出した外側の石列が１号溝新段階となる。中段階の石が埋没した段階でその外縁部に20～30cm程の円形の石が並べられる（図15①、図版16－１）。この石列は、H－14～16区までしか認められないため、部分的な作り直しである可能性がある。

また、１号溝中・新段階に相当する東端を20～22列で検出した。中段階の溝は、F・G－20区で４号遺構と接続する。新段階の溝は、その接続部が埋まりきった後にF－22区まで到達する。F－21・22区の1号溝新段階は非常に浅く、石列も存在しない（図17③・④、図版15・16）。

１号溝は、最終的に粘土ブロックが多く混じる１層により完全に埋め戻される。また、14列の埋土２・３層には植物の根が多数確認されており、埋め戻される直前には草等が生えていた状態であったことも想定できる。このように１号溝は、３段階の変遷を経ていることが判明した。古段階は水が流れる施設であることは確実であるが、それ以降の中段階・新段階では、今回の調査では対岸は検出しておらず、流路等の明瞭な様相は不明である。

出土遺物は非常に多い。磁器526点、陶器823点のほか、瓦432点（76,974g）等が出土している。時期が判明したものの中では、埋土4a層（H・I・J－11区）から17世紀？の陶器、埋土2a層（H・I・J－11区）から18世紀前半？の磁器が出土している。いずれも時期が明瞭ではない。その他の遺物は、おおよそ最後の埋戻し土の１層出土のもので、17世紀後葉から19世紀後葉の時期幅の遺物が出土しており混在している。

【４号遺構】（図９・13～18、図版7・10～12）

４号遺構は、１区の13列から25列まで至る37m程の幅がある沢状の遺構である。４号遺構の西端（13列）に２箇所のサブトレンチを設定し底面の確認を行った（図13、図14①・②、図版11）。おおむね端部から１m20cmを過ぎたあたりから急激に落ち始め、確認面から大体1m程下がる。掘り下げ途中で遺構や遺物は確認されていない。今回検出した遺構は、この４号遺構埋土最上面に存在する。15列近辺まで遺構は多く見つかっており、１号遺構（Ⅱa期）、１号溝中・新段階（Ⅱb期・Ⅲ期）、２号建物（Ⅱb期）、４号建物（Ⅲ期）、５号柱列（Ⅱa期）等が存在する。この５号柱列の存在からは、東端の15列あたりまではⅡa期の頃には確実に埋没していたことがわかる。

19列近辺から、４号遺構の最終的な埋戻し土と考えられる土層（図18：４号遺構埋土１・２層）が認められた（図版10）。この土層は、地山由来と考えられる大きめの黄色粘土ブロックを多量に含む層で、かなり新しい時代の整地土と考えられる。この１・２層除去後、F－20区とF－21区周辺で、標高が最低となるような窪みが検出された（図16）。この窪みは南北の流路と考えられ、最後に埋め戻される直前の４号遺構の最終段階として認識した。

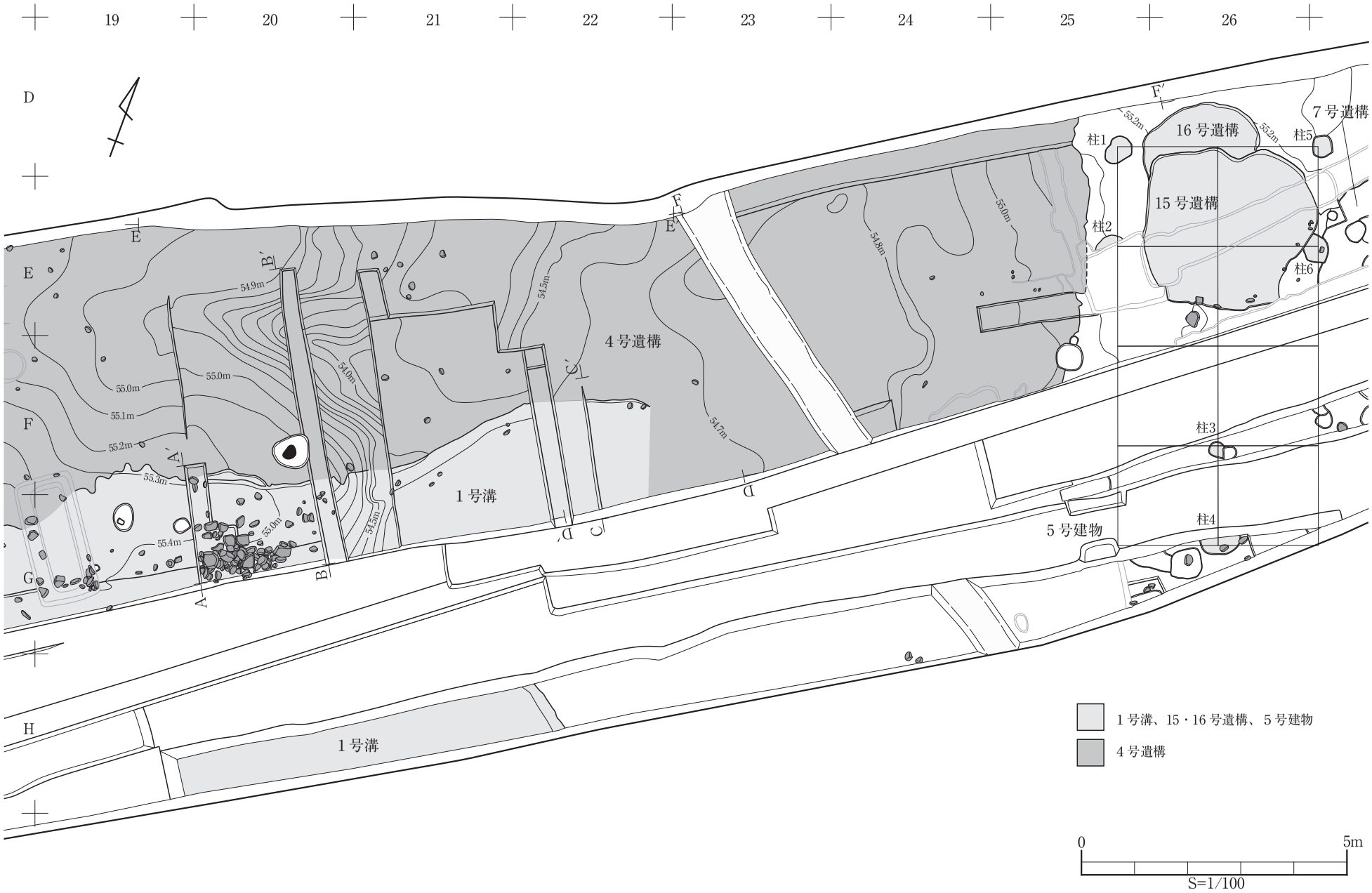
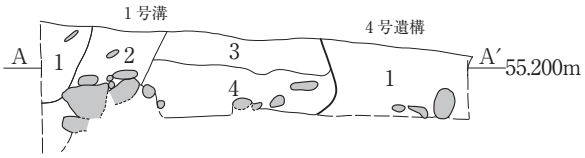


図16　武家屋敷地区第13地点１区東の遺構（1）
Fig. 16　Features belonging to east side of area 1 at BK13 (1)

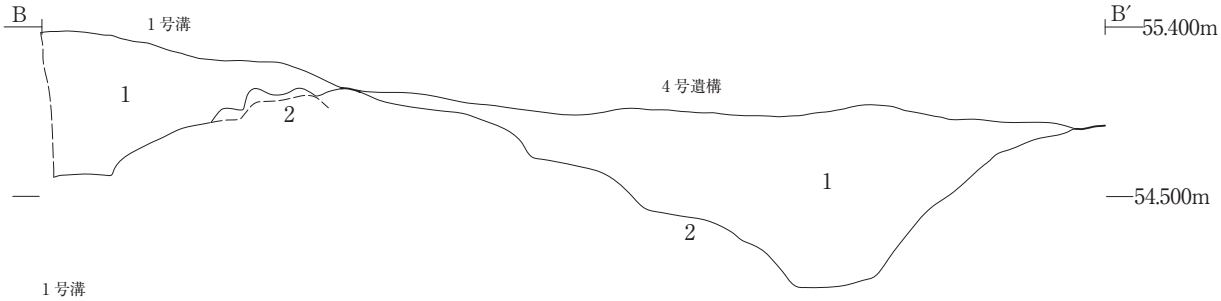
①1号溝（F･G−19･20区西壁）



1号溝
1　図15②の1号溝埋土1層と同じ
2　2.5Y4/2暗灰黄色　砂質シルト　粘性中・しまりやや強　炭化物を僅かに含む
3　図15②の1号溝埋土3層と同じ
4　図15②の1号溝埋土5層と同じ

4号遺構
1　2.5Y4/3オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　黄灰色 粘土と酸化鉄を層下部を中心に僅かに斑に含む

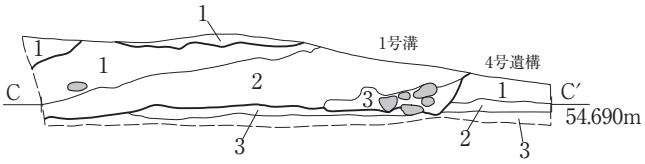
②1号溝･4号遺構（E･F･G−20区西壁）



1号溝
1　2.5Y5/4黄褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　オリーブ褐色粘土、黒褐色粘土を少量斑に含む　炭化物を極僅かに含む
2　2.5Y4/2暗灰褐色　砂　粘性中・しまりやや強

4号遺構
1　図18の4号遺構埋土2層と同じ
2　2.5Y4/2暗灰褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　混入物なし　図18の4号遺構埋土10層に相当する

③1号溝･4号遺構（F･G−22区西壁）

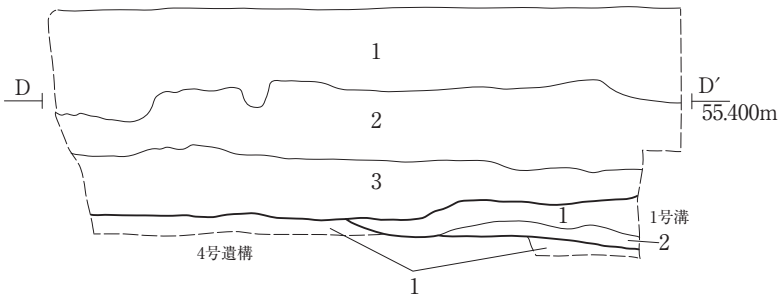


1　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまりやや強　黄褐色粘土ブロック少量含む

1号溝
1　2.5Y4/2暗灰黄色　粘土　粘性強・しまり弱　黄褐色粘土を僅かに斑に含む　極僅かに炭化物を含む
2　2.5Y4/4オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまり強　黄褐色粘土と黒褐色砂質シルトを少量斑に含む　炭化物を極僅かに含む　①の1号溝埋土1層と同じ
3　2.5Y3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまりやや弱　にぶい黄色粘土を僅かに含む

4号遺構
1　10YR4/2暗灰黄色　シルト質粘土　粘性やや強・しまりやや強　黄褐色粘土を塊で含む　僅かに炭化物を含む　図18の4号遺構埋土2層に相当する
2　2.5Y3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　オリーブ褐色粘土を僅かに斑に含む
3　2.5Y4/4オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまりやや弱　暗灰黄色粘土を少量斑に含む

④1号溝･4号遺構（G−22･23区南壁）



1　現代の盛土・撹乱等の層
2　2.5Y3/2黒褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　暗灰黄色シルト質粘土、黄褐色シルト質粘土をブロックで多量に含む　炭化物を僅かに含む
3　③の1層と同じ

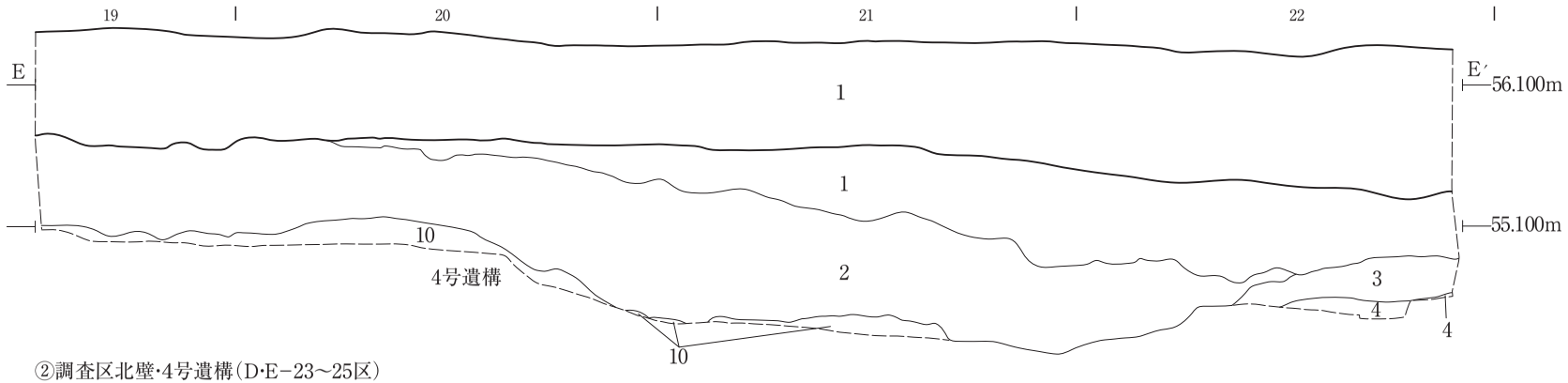
1号溝
1　③の1号溝埋土1層と同じ
2　③の1号溝埋土2層と同じ

4号遺構
1　③の4号遺構埋土3層と同じ

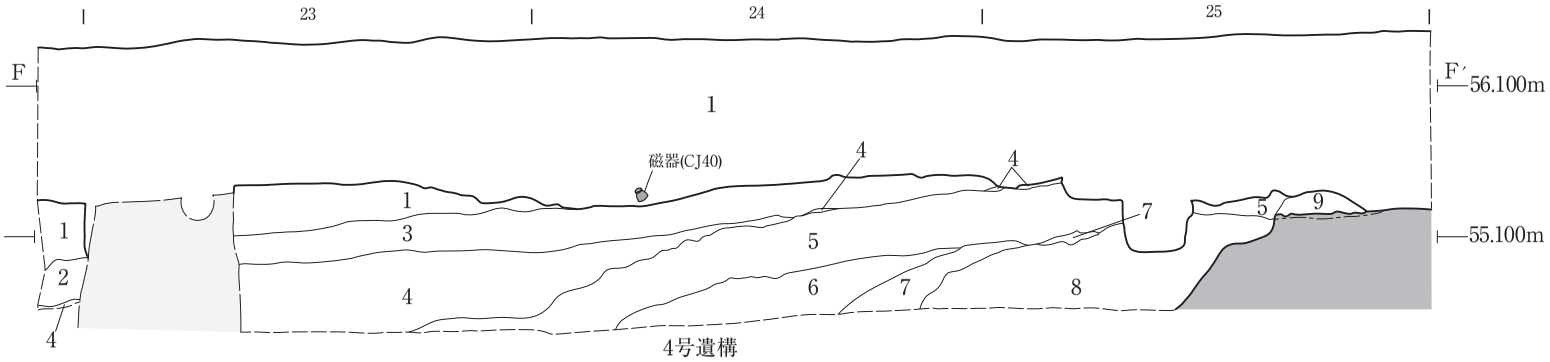
0　1m
S=1/40

図17　武家屋敷地区第13地点1区東の遺構（2）
Fig. 17　Features belonging to east side of area 1 at BK13 (2)

①調査区北壁･4号遺構（E−19〜22区）



②調査区北壁･4号遺構（D･E−23〜25区）



1　現代の盛土・撹乱等の層

4号遺構

1　10YR4/2 灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまりやや強　黄褐色粘土、オリーブ褐色粘土のブロックを少量ずつ含む　炭化物を極僅かに含む
2　2.5Y6/4 にぶい黄色　粘土　粘性強・しまり強　黒褐色砂質シルト、暗灰黄色粘土を少量ずつ斑に含む　小礫と炭化物を僅かに含む
3　10YR3/3 暗褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　黄褐色粘土のブロックを少量含む
4　2.5Y5/4 黄褐色　粘土　粘性強・しまり強　暗オリーブ褐色シルト質粘土を少量含む
5　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　シルト　粘性中・しまり強　オリーブ褐色粘土のブロックを少量含む　炭化物が僅かに混じる
6　2.5Y4/6 オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　暗オリーブ褐色シルト質粘土を西側を中心に中量斑に含む
7　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり中　オリーブ褐色粘土を東側に中量ブロックで含む　黄褐色シルト質粘土を極少量斑に含む
8　2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまりやや強　オリーブ褐色粘土を極少量斑に含む
9　10YR4/4 褐色　砂質シルト　粘性やや弱・しまり強　黄褐色シルト質粘土、灰黄褐色砂を少量斑に含む　炭化物を僅かに含む
10　2.5Y3/2 黒褐色　シルト　粘性やや弱・しまりやや弱　炭化物を僅かに含む

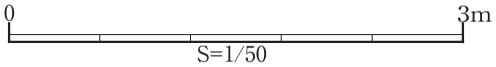


図18　武家屋敷地区第13地点１区東の遺構（3）
Fig. 18　Features belonging to east side of area 1 at BK13 (3)

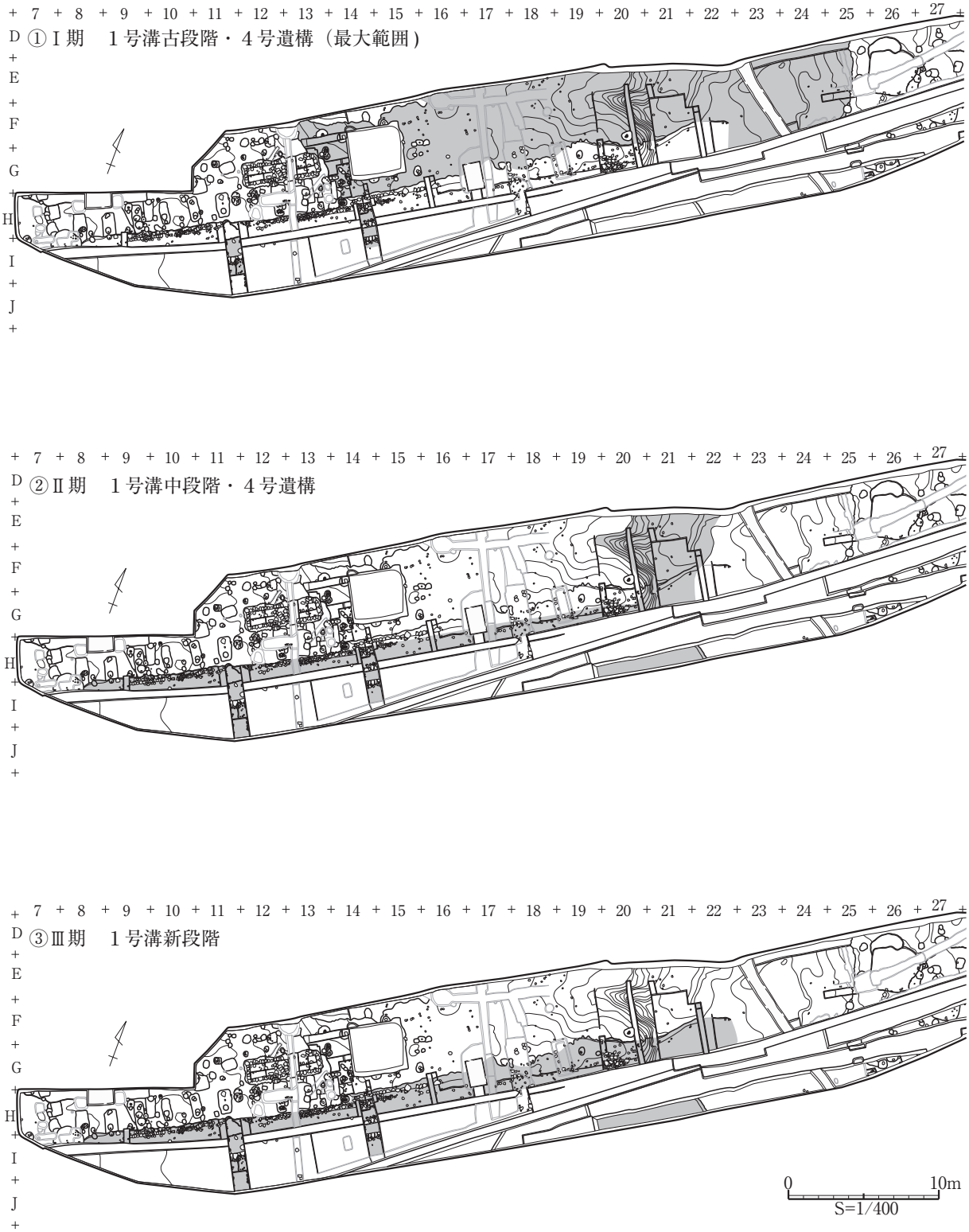


図19　武家屋敷地区第13地点１区の遺構
Fig. 19　Features belonging to area 1 at BK13

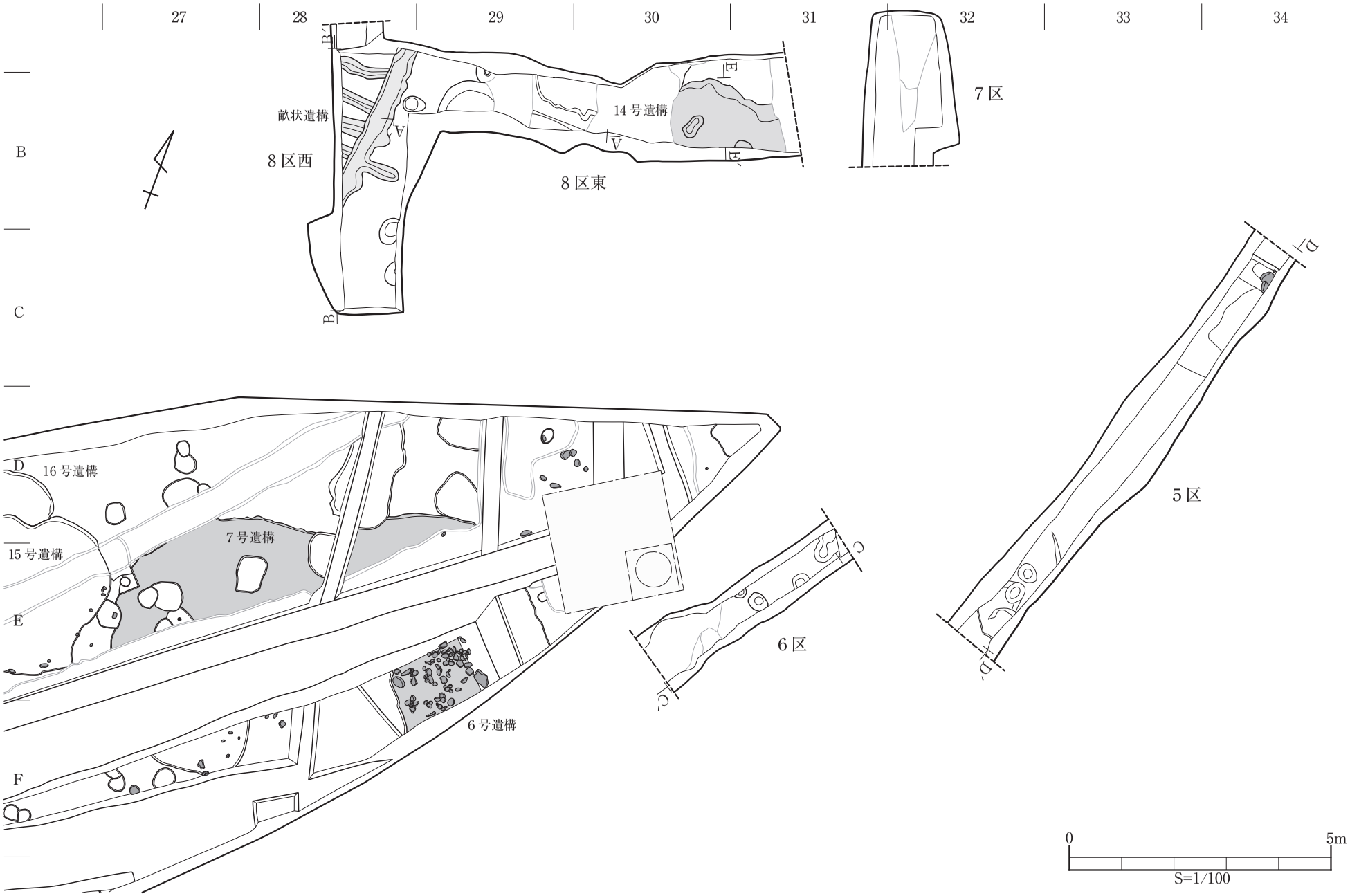
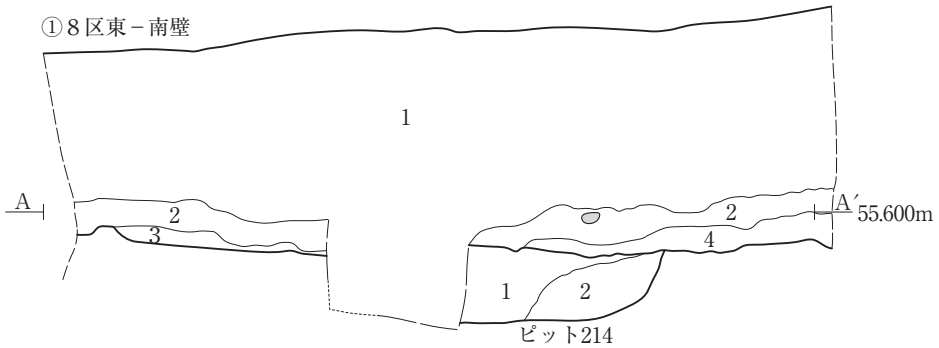


図20　武家屋敷地区第13地点１区東・５～８区の遺構（1）
Fig. 20　Features belonging to east from area 1 at BK13 (1)

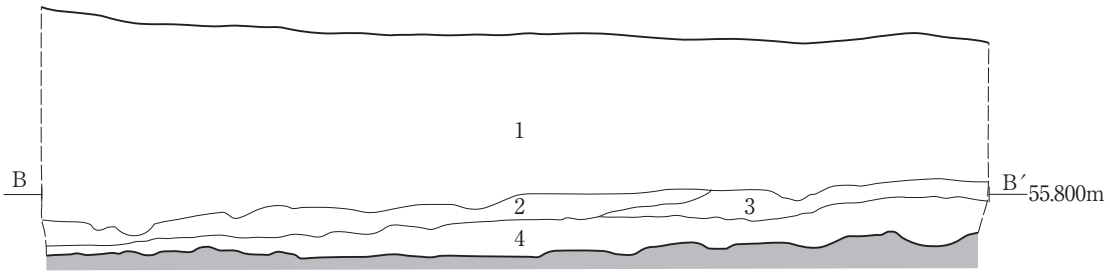
①８区東－南壁



1　現代の盛土・撹乱等の層
2　7.5YR3/4暗褐色　シルト　粘性弱・しまり中　鉄分を多く含む　黄褐色土ブロックを僅かに含む　赤色土粒、白色土粒を含む　Ａ１層に相当する
3　7.5YR4/4褐色　シルト　粘性弱・しまり中　明褐色土ブロックを多く含む　白色土粒、黄色土粒を含む　炭化物を僅かに含む　落ち込み
4　10YR4/3鈍い黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物を含む　黄褐色土ブロックを僅かに含む　白色土粒を含む　Ａ２層に相当する

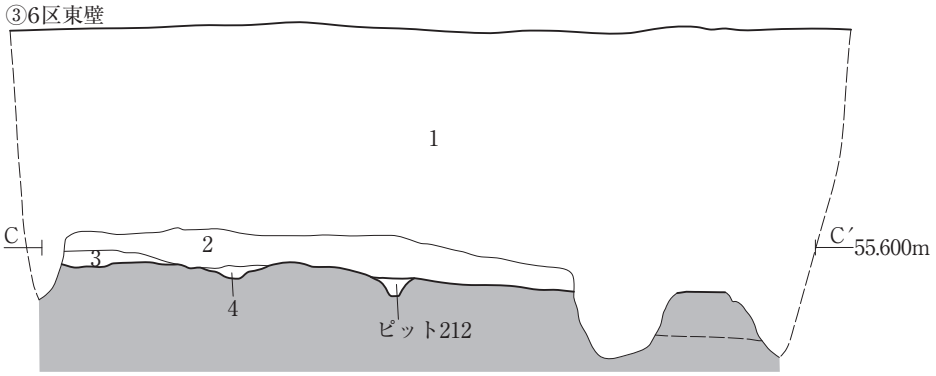
ピット214
1　10YR4/3鈍い黄褐色　シルト　粘性弱・しまり中　炭化物と白色土粒を僅かに含む
2　10YR4/4褐色　シルト　粘性弱・しまり中　黄褐色土ブロックを斑に多く含む　炭化物を僅かに含む

②８区西－西壁



1　現代の盛土・撹乱等の層
2　10YR2/3黒褐色　シルト質粘土　粘性やや強・しまり強主体　黄褐色シルト質粘土を少量斑に含む　炭化物を極僅かに含む　Ａ１層に相当する
3　10YR4/2灰黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまり中　黄褐色シルト質粘土を極少量、径2cmのブロックで含み、炭化物を疎らに含む　Ａ１層に相当する
4　10YR5/3にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性中・しまり強主体　にぶい黄褐色粘土の土を少量斑に含み、炭化物を極僅か含む　Ａ２層に相当する

③6区東壁



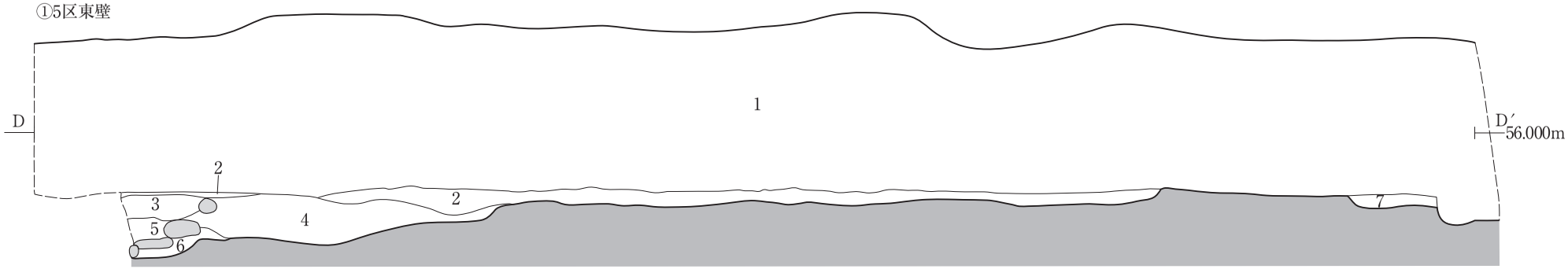
1　現代の盛土・撹乱等の層
2　7.5YR3/3暗褐色　シルト　粘性中･しまり中　炭化物、赤色土粒、白色土粒を含む　Ａ１層に相当する
3　7.5YR4/6褐色　粘土　粘性強・しまり強　黒褐色土を僅かに含む　３・４層は落ち込み
4　7.5YR4/4褐色　粘土　粘性強・しまり中　黒褐色土を斑に含む

ピット212　7.5YR3/3暗褐色　粘土　粘性強・しまり弱　明褐色土を斑に含む
ピット213　7.5YR4/4褐色　粘土　粘性強・しまり中　暗褐色土を斑に含む　径3cmの礫を含む

0　1m
S=1/40

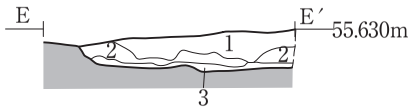
図21　武家屋敷地区第13地点１区東・５～８区の遺構（2）
Fig. 21　Features belonging to east from area 1 at BK13 (2)

①5区東壁



1　現代の盛土・撹乱等の層
2　7.5YR4/2灰褐色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色ブロックを全体に含む　一部に炭化物層を含む　鉄分を多く含む　明治時代以降の炭化物を僅かに含む　整地層
3　7.5YR5/6明褐色　粘土　粘性強・しまり強　灰褐色土を斑に含む　白色土粒、黄色土粒、マンガンを含む　３層以下は落ち込み
4　7.5YR5/6明褐色　粘土　粘性強・しまり中　灰褐色土をブロック状に僅かに含む　炭化物、黄色土粒を極僅かに含む
5　7.5YR3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　鈍い橙色土をブロック状に全体に含む　黄色土粒、白色土粒、マンガンを含む　鉄分を僅かに含む
6　7.5YR5/6明褐色　粘土　粘性強・しまり中　褐色土ブロックを僅かに含む
7　7.5YR4/6褐色　粘土　粘性強・しまり中　暗褐色土を僅かに含む　白色土粒を僅かに含む

②14号遺構（南北）

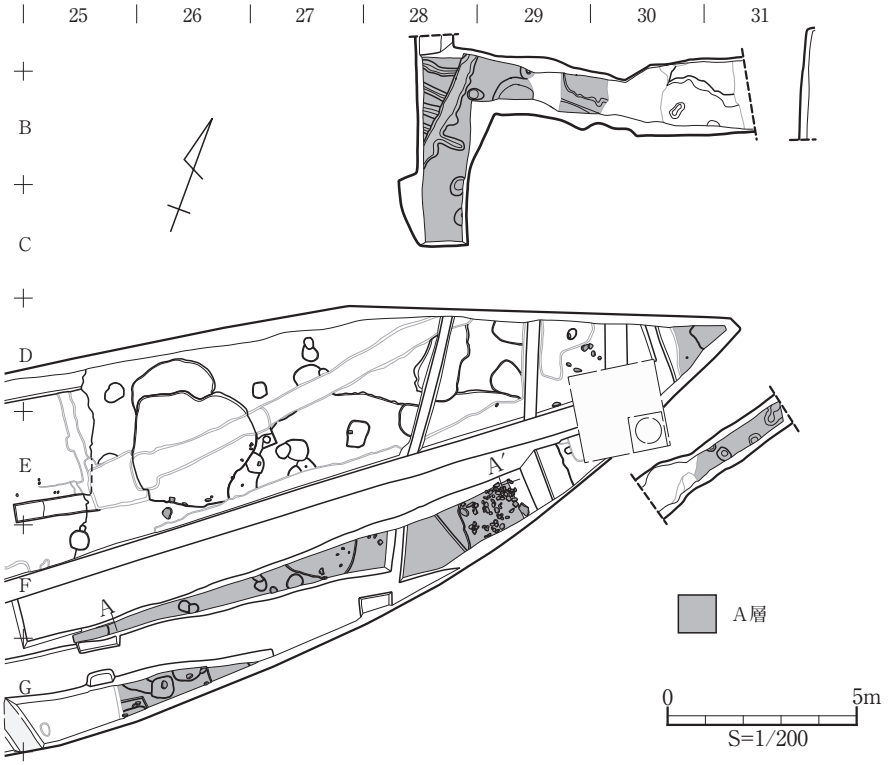


1　10YR3/4暗褐色　シルト　粘性やや弱・しまり強主体　明黄褐色粘土質シルトが中量斑に混じり、炭化物を僅かに含む
2　10YR5/4鈍い黄褐色　砂　粘性弱・しまり強主体　黄褐色シルト質粘土を極少量含む
3　10YR5/6黄褐色　粘土　粘性強・しまり強主体　鈍い黄褐色砂を極少量斑に含む

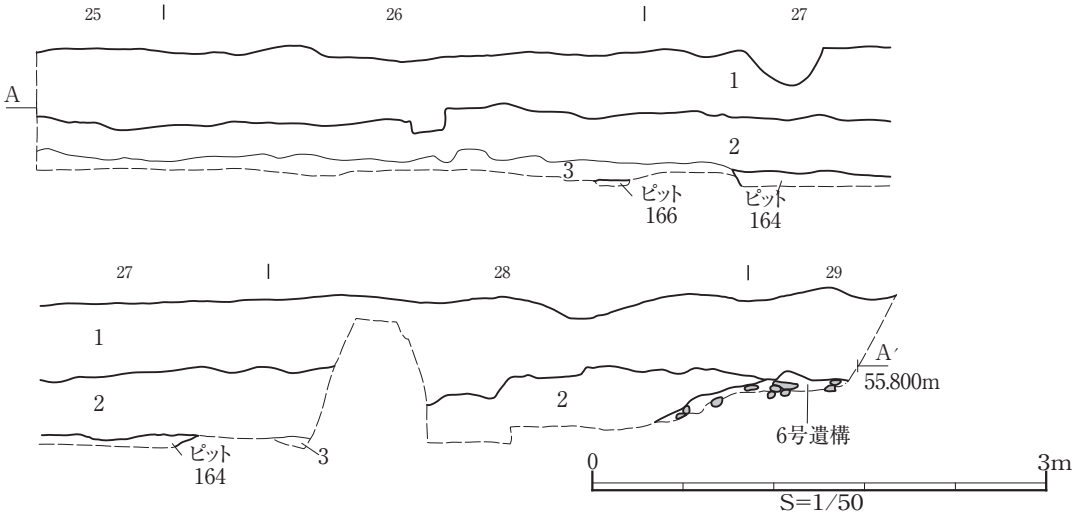
0　1m
S=1/40

図22　武家屋敷地区第13地点１区東・５～８区の遺構（3）
Fig. 22　Features belonging to east from area 1 at BK13 (3)

①A層分布状況



②1区東−南部北壁



基本層
1　現代の盛土・撹乱等の層
2　10YR4/4 褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　黄褐色粘土、黄褐色粘土質シルトをブロック状に少量含む　炭化物を僅かに含む　鉄分を部分的に僅かに含む
　A１層に相当する
3　10YR5/4 にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性やや強・しまりやや強　褐色砂、黄褐色粘土を所々少量疎らに含み、炭化物を極僅かに含む　鉄分を部分的に含む
　A２層に相当する

6 号遺構　10YR4/4 褐色　シルト　粘性中・しまりやや強　炭化物を僅かに、径 10−20cm 程の河原石を多量に含む
ピット 164　10YR5/4 にぶい黄褐色　粘土質シルト　粘性やや強・しまり中　灰黄色シルトを斑に少量、径 1−2cm の炭化物を少量含む　所々に酸化鉄が混じる
ピット 166　2.5Y5/4 黄褐色　砂　粘性弱・しまり中　混入物なし

図23　武家屋敷地区第13地点Ａ層堆積状況
Fig. 23　Distribution of the layer A at BK13

４号遺構の東端は、１区東の25列で検出した（図16、図版12－１）。さらに、４号遺構東端の確認のため、23～25列までの北壁沿いにサブトレンチを入れた（図18）。現地表面から深さ２m近くまで掘り下げたが、底面は確認できなかった。５～８層は斜めに堆積し、順次東端側から埋没していった様相が窺える。次の４層は、窪みを埋めるような堆積となっている。その後、３層がやや水平に堆積する。そして、最終的には１・２層により完全に埋められることとなる。

１号溝との関係は、図19に示した。Ⅰ期における、1号溝古段階と４号遺構の関係は不明である。図19①として、４号遺構の最大範囲を記載したが、Ⅰ期の４号遺構は、かなりの範囲まですでに埋まっていたものと考えられる。Ⅱ期では、21列においてかなり狭まった４号遺構と１号溝中段階が接続する（図19②）。Ⅲ期には、４号遺構が埋められ、その上を１号溝新段階が形成されることとなる（図19③）。また、この図では、１号溝中段階の範囲のまま表示しているが、Ⅲ期の頃の１号溝西半分の様相は不明である。

４．２～４区の遺構

【８号遺構】（図24・25、図版17・18）

２・４区の地山面で検出した。最大幅で11.2mとなる規模の大きな遺構である。９号遺構より古い。B－２区で部分的に掘り下げを行った結果、遺構確認面より70cm程下で底面を確認した（図25④、図版18－４）。南側から北側に向かって堆積している。C－２区ではその上方のほとんどを９号遺構により破壊されている（図25③、図版18－５・６）。埋土からの出土遺物には、16世紀後半～17世紀前半の中国産磁器（CJ001）、17世紀初頭の陶器が出土している（CT001）。これらの出土遺物と重複関係から、Ⅰ期に時期比定した。

【９号遺構】（図24・25、図版17・18）

２区・４区南の地山で検出された。南側は大きく撹乱されており、全体の形状は不明である。８号遺構より新しく、12号遺構より古い。残存の最大幅は8.2m程ある。出土遺物は多くはないが、断面の埋土２層から回収した磁器（CJ022）は、19世紀中葉～後葉の年代となる。この遺物、重複関係等からⅢ期に時期比定した。

【10号遺構】（図24・26②、図版19）

４区北の地山面、８号遺構上面で検出した。部分的な調査であるため、詳細は不明である。８号遺構より新しい。出土遺物は無い。Ⅰ～Ⅳ期に時期比定した。

【11号遺構】（図24・26②、図版19）

４区北の地山面で検出した。非常に部分的な確認であるため、８号遺構より古いこと以外、詳細は不明である。出土遺物は無い。重複関係よりⅠ期に時期比定した。

【12号遺構】（図24、図版19）

４区南の地山面と９号遺構上面にて検出した。南側は撹乱により破壊され、部分的な検出のみであり、形状なども不明である。９号遺構より新しい。出土遺物は無い。遺構の重複関係からⅢ～Ⅳ期に時期比定した。

【13号遺構】（図24・26①、図版18）

３区の地山面で検出した。部分的な調査であるため詳細は不明である。出土遺物は無い。Ⅰ～Ⅳ期に時期比定した。

【２号溝】（図24、図版18）

２区の８号遺構上面で検出した。方向はN－8.7°－Wとなる。幅50cm、長さ2.4m程である。確認のみであるので、詳細は不明である。出土遺物は無い。遺構の重複関係から、Ⅱ～Ⅳ期に時期比定した。

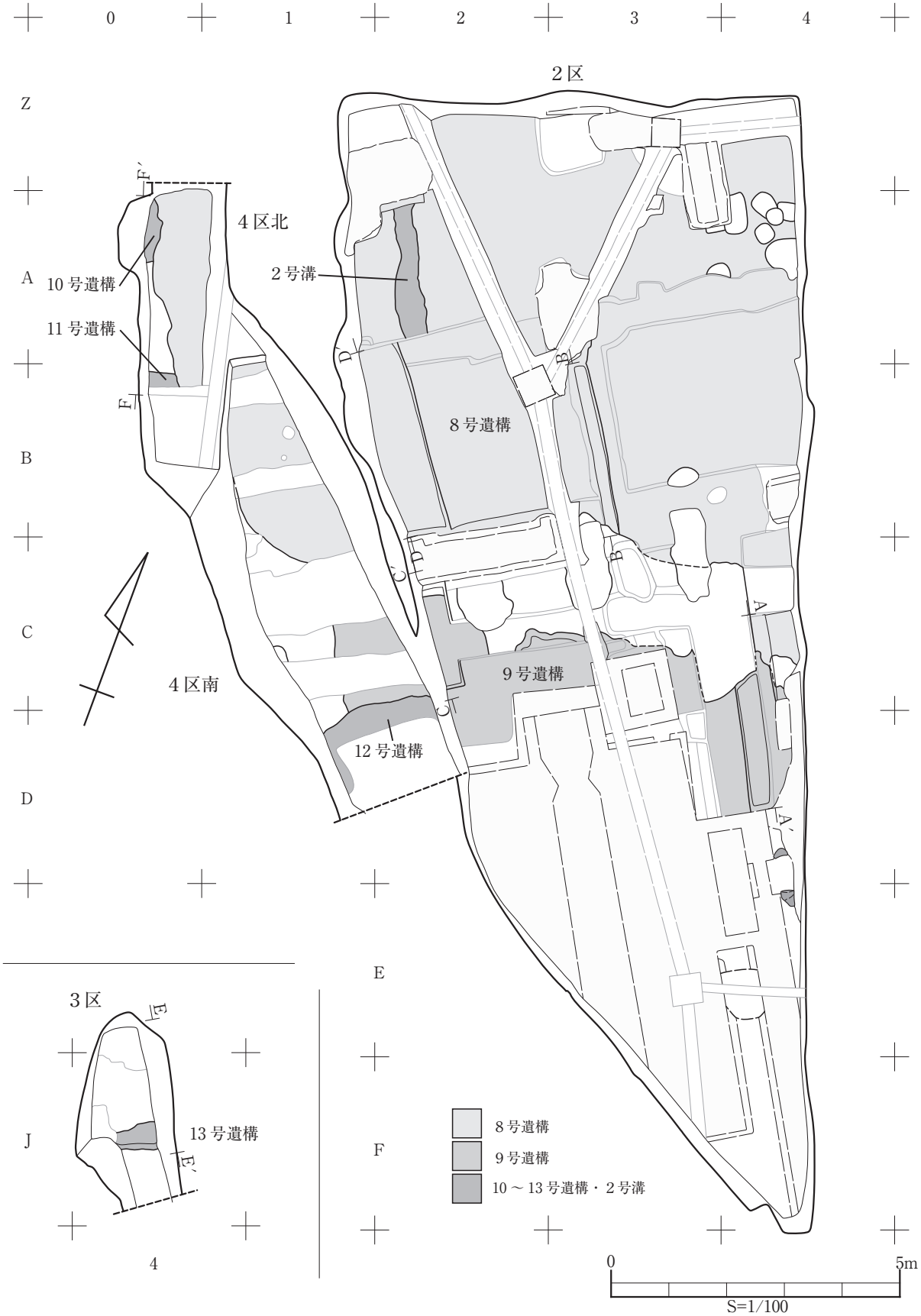
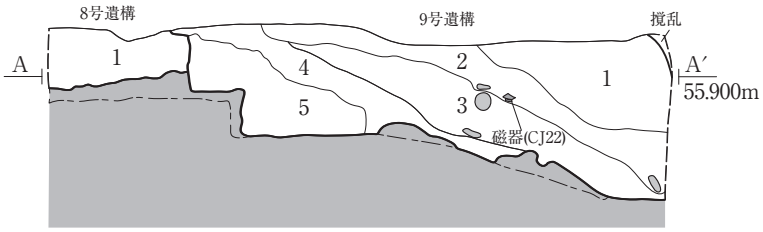


図24　武家屋敷地区第13地点２～４区の遺構（1）
Fig. 24　Features belonging to west from area 1 at BK13 (1)

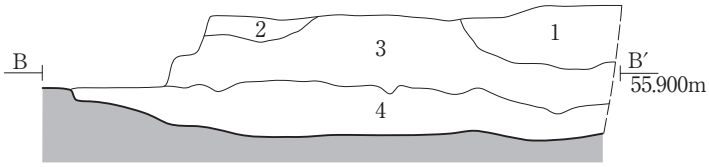
①8号･9号遺構（C･D−4区東壁）



8号遺構
1　10YR3/3 暗褐色　シルト質砂　粘性無・しまり強　炭化物と鉄分を少量含む　木根による撹乱が著しい

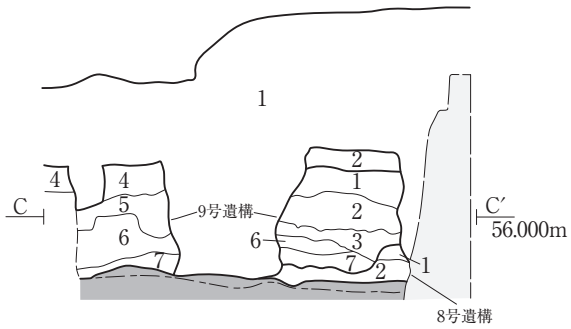
9号遺構
1　10YR3/2 黒褐色　砂質シルト　粘性無・しまり強　黄色ブロック、炭化物と径2㎝程度の礫を含む　木根による撹乱が著しい
2　10YR3/3 暗褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり強　径2−5cm の礫と炭化物を含む　鉄分と遺物を含む　木根による撹乱が著しい
3　10YR3/2 黒褐色　粘土　粘性強・しまり強　径8㎝程度の礫を含む　炭化物少量と鉄分を含む
4　10YR4/4 褐色　砂質シルト　粘性無・しまり強　径2−3mm の砂粒と炭化物少量含む
5　10YR5/6 黄褐色　砂質シルト　粘性無・しまり強　炭化物を含む　鉄分を多量に含む

②8号遺構（B−3区西壁）



8号遺構
1　10YR4/4 褐色　砂質シルト　粘性無・しまり強　径1−2cm の礫を少量含む　炭化物と鉄分を含む　上部はやや黄色が強い 遺物含む
2　10YR4/2 灰黄褐色　砂質シルト　粘性無・しまり強　径0.5−2cm の礫をやや含む　炭化物と鉄分を含む　グライ化した黄色ブロックを少量含む　遺物含む
3　10YR4/3 にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性無・しまり強　グライ化した粘土を少し含む　炭化物やや含む　遺物含む
4　10YR4/1 灰色　シルト　粘性中・しまり中　炭化物と粘土ブロックを少し含む

③2区東壁南側･8･9号遺構（C−2区）

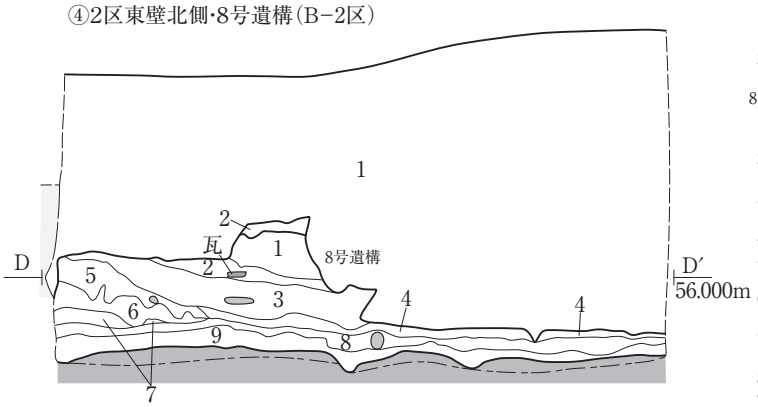


1　現代の盛土・撹乱等の層
2　10YR5/4 にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性無・しまり中　鉄分を斑状に含む

8号遺構
1　10YR3/1 黒褐色　粘土　粘性中・しまり弱　オリーブ灰色ブロック、黒色土含む
2　10YR4/1 褐灰色　粘土　粘性強・しまり弱　灰黄褐色ブロック、炭化物、鉄分含む

9号遺構
1　10YR4/6 褐色　砂質シルト　粘性無・しまり中　径3㎝程度の礫を少量含む
2　10YR6/8 明黄褐色　シルト質粘土　粘性弱・しまり強
3　10YR3/3 暗褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　粘土と炭化物を少量含む
4　10YR4/3 にぶい黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　鉄分斑状、炭化物を含む
5　10YR6/2 灰黄褐色　砂質シルト　粘性無・しまり中　鉄分を斑状に含む
6　10YR4/4 褐色　シルト質粘土　粘性弱・しまり弱　鉄分を斑状に含む
7　10YR5/2 灰黄褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり弱　径1㎝程度の礫を含む　鉄分、炭化物、黄色ブロックを含む

④2区東壁北側･8号遺構（B−2区）



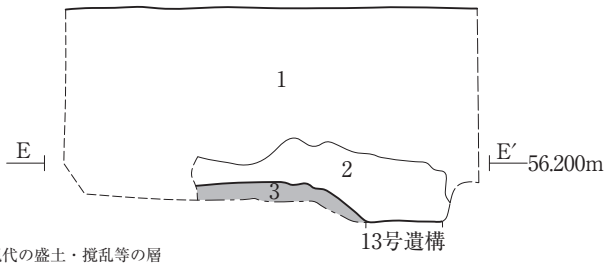
1　現代の盛土・撹乱等の層
2　③の2層と同じ

8号遺構
1　10YR4/4 褐色　砂質シルト　粘性無・しまり強　径1−3mm の砂粒を含む　炭化物少量含む
2　10YR3/2 黒褐色　砂質シルト　粘性弱・しまり中　黄色ブロックを含む
3　10YR4/3 にぶい黄褐色　シルト質粘土　粘性中・しまり中　黄色ブロックを含む
4　10YR2/1 黒色　粘土　粘性強・しまり弱　やや鉄分含む
5　10YR6/4 にぶい黄橙色　砂礫　粘性無・しまり強　径1−6cm 程度の礫を多量に含む
6　10Y5/2 オリーブ灰色　砂質シルト　粘性中・しまり強 鉄分を斑状に含む
7　10YR4/1 褐灰色　粘土　粘性弱・しまり強　鉄分、炭化物を含む
8　③の8号遺構2層と同じ
9　10Y5/2 オリーブ灰色　粘土　粘性中・しまり強　炭化物やや含む、鉄分多量に含む

0　1m
S=1/40

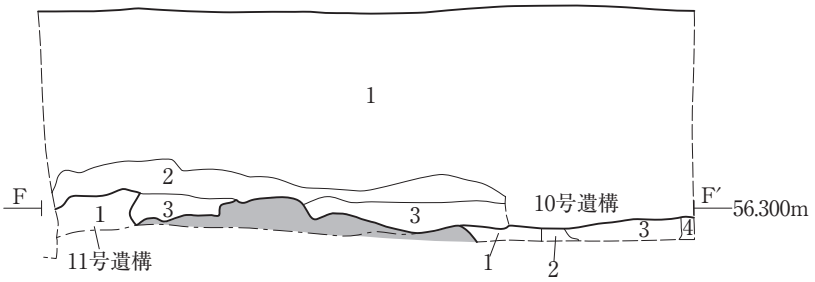
図25　武家屋敷地区第13地点２～４区の遺構（2）
Fig. 25　Features belonging to west from area 1 at BK13 (2)

①3区東壁



1　現代の盛土・撹乱等の層
2　10Y3/1オリーブ黒色　砂質シルト　粘性中・しまり中　黄色粘土を少量、炭化物を僅かに含む　遺物有り
3　10Y3/2オリーブ黒色　シルト質砂　粘性中・しまり中　径1－2mmの礫を多量に含む　地山の可能性高い

②4区北･西壁



1　現代の盛土・撹乱等の層
2　10YR4/1褐灰色　シルト　粘性中・しまり中　明黄褐色土ブロックを含む　炭化物、赤色土粒、黄色土粒を多く含む
3　2.5Y4/3オリーブ褐色　粘土　粘性中・しまり中　黄褐色土ブロックを僅かに含む　白色土粒・黄色土粒を多く含む

10号遺構
1　2.5Y3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　黄褐色土小ブロックを斑状に含む　黄色土粒、白色土粒を僅かに含む
2　2.5Y3/2黒褐色　粘土　粘性中・しまり中　白色土粒・炭化物を僅かに含む
3　2.5Y4/3オリーブ褐色　粘土　粘性強・しまり中　白色土粒、黄色土粒、炭化物を含む　鉄分を含む
4　2.5Y4/4オリーブ褐色　粘土　粘性やや強・しまり強　黄色土粒、白色土粒を多く含む
11号遺構
1　2.5Y3/2黒褐色　粘土　粘性強・しまり中　オリーブ褐色土、白色土粒、黄色土粒、炭化物を含む

0　1m
S=1/40

図26　武家屋敷地区第13地点２～４区の遺構（3）
Fig. 26　Features belonging to west from area 1 at BK13 (3)

第Ⅴ章　出土遺物

今回の調査で出土した遺物の大部分は、江戸時代以降のもので占められている。江戸時代以前の遺物は、古代の瓦が１点出土しているのみである。

第Ⅲ章でも記述しているが、今回の調査では、すべての遺構を掘り下げて精査はしていない。そのため、平面で検出状況を確認しただけの遺構では、遺物の出土はあまり多くはない。１号溝、１号遺構、４号遺構、８号遺構、９号遺構では、遺構の内容確認のため、一部を掘り下げて精査しており、他の遺構より遺物量が多くなっている。これらの遺構でも完掘はしておらず、遺物の量は確認のために掘り下げた体積によって差が出るため、本来の遺構が包含している遺物量とは関係していない。ただし、１号溝、４号遺構については、調査時の所見でも、他の遺構よりも比較的多くの遺物が含まれていたという認識を持っている。

１．陶磁器（図27～35、表８・９、14～17、図版23～30）

接合、同一個体の認定作業後の破片数は、磁器2857点、陶器3087点である。１号溝、４号遺構からの出土量が多い他は、１層・撹乱やA1層が多くなっている。

時期としては、17世紀初頭から近代、現代のものまでが含まれている。19世紀前葉から中葉や、明治期に入っての資料が量的には多い。平面でプランを確認したのみの遺構では、19世紀代の陶磁器が中心である。一部を掘り下げた遺構では、17～18世紀代の遺物が含まれている。中でも、１号溝からは、磁器526点、陶器823点と比較的多くの遺物が出土しており、図化したものも多い。１号溝の陶磁器は、19世紀が主体ではあるが、18世紀代のものも含まれ、17世紀まで遡るものも若干含まれており、比較的広い年代のものが出土している。また、８号遺構は、遺物の出土量は少ないが、17世紀代の比較的古手のものが中心である。

資料全体を通して、比較的多くの磁器に焼継痕が観察される（CJ002、CJ011、CJ016、CJ023、CJ027、CJ028、CJ041、CJ046）。焼継ぎの技術は18世紀末以降に普及したとされている（江戸遺跡研究会編2001）。磁器自体の年代としては、18世紀末よりも古いものにも焼継痕が観察される場合があり、補修しながら比較的長期間使われたものが多いのではないかと推測される。

【17世紀代の陶磁器】

17世紀代の資料は、８号遺構、４号遺構、１号溝、１層・撹乱から出土しているが、ごくわずかに含まれる程度である。磁器では、中国の製品（CJ001、CJ030）と、肥前磁器（CJ035）、肥前の青磁製品（CJ047、CJ048）がみられる。陶器では、肥前（CT001）、丹波（CT017）、美濃（CT055）の製品がみられる。

中国の青花磁器は２点出土している（CJ001、CJ030）。CJ001は、本来は小中皿と考えられるが、見込みの一部のみが残存し、破片の縁辺は意図的な打ち欠きによる敲打痕が観察される。破損した破片を転用しようとした可能性が高いが、途中でやめたものと推測される。転用の意図は不明である。高台畳付は、外面側が斜めに削られている。CJ030は、芙蓉手の大皿である。全体の文様は不明であるが、見込みには花鳥文が描かれていると考えられる。高台内に、放射状の工具痕が観察され、畳付には砂が付着している。いずれも景徳鎮民窯の製品と考えられ、明末清初の時期に相当する17世紀初頭から中葉の年代と推測される。

肥前の磁器では、青磁釉の皿が２点出土している（CJ047、CJ048）。CJ047は碁笥底である。高台は錆釉が施され、高台内にも青磁釉が塗布されている。17世紀中葉頃の波佐見の製品と考えられる。CJ048は、見込み蛇ノ目釉剝ぎの青磁皿で、外面体部下半は無釉である。17世紀後半頃に量産される肥前産の青磁と考えられる。

陶器の出土数も非常に少ない。CT001は絵唐津の向付で、８号遺構から出土している。CT017は、丹波の鉢類と考えられる。無釉であるが、内面のごく一部に垂れたような灰釉が観察されることから、あるいは一部に灰釉

が塗布されている可能性も考えられる。類似した丹波の鉢類は、仙台市若林城の調査において出土している（佐藤淳ほか2011）。

CT055は、志野織部の蓋である。鉄絵で同心円文が描かれる。孔があり、中心部分にはつまみが剥落した痕跡がみられる。不正円形の孔が残存部分で３カ所あることから香炉の蓋としたが、灯明具の蓋など類似した他の器種の可能性も考えられる。

【18世紀の陶磁器】

18世紀の陶磁器は、１号溝、１号遺構、４号遺構、A1層、１層・撹乱から出土している。磁器は、すべて肥前製品である。陶器では、大堀相馬、小野相馬、京・信楽、肥前、瀬戸・美濃など、産地が増加する。なお、18世紀後半の資料は、18世紀後半から19世紀前半の資料としてまとめて記述するため、ここには含めていない。

18世紀の磁器は、小中皿（CJ002、CJ033、CJ049）、色絵や染付の中型碗（CJ004、CJ005、CJ007、CJ29、CJ037）、蓋物(CJ014、CJ015)、仏花瓶（CJ019）、火入・香炉（CJ031）、中碗蓋（CJ043、CJ044）、蓋物の蓋（CJ046）などである。CJ002は見込み蛇の目釉剥ぎの小中皿である。18世紀代に肥前で量産された小中皿に相当すると考えられる。残存部分に焼継ぎをした痕跡は確認されないが、口縁部の一部に焼継剤が垂れた痕跡が観察される。CJ033、CJ049は見込みにこんにゃく判による五弁花文がみられる。

磁器の碗では、中型丸碗が主体である。CJ004は色絵染付の製品で、丸文は染付で描かれ、花文と折枝松文は色絵で描かれている。色絵は金・赤・緑・黒があり、赤は輪郭線と塗りで濃淡がみられる。CJ005は高台内に「冨貴長春」銘が、CJ007は渦「福」銘がみられる。銘の特徴からCJ005は17世紀末から18世紀後葉ごろ、CJ007は18世紀中葉から後葉ごろのものと考えられる。CJ037はくらわんか手の碗である。碗の蓋も２点出土しており（CJ043、CJ044）、いずれもつまみ内に渦「福」の銘がみられる。渦「福」銘から18世紀中葉から後葉と推測される（鈴田由紀夫1995）。CJ043は外面青磁釉の製品である。

CJ014の蓋物は、こんにゃく判の桐文がみられ、18世紀代に相当する。CJ015の蓋物は、腰部に錆釉が施されるものである。CJ019は、口頸部の器形から仏花瓶あるいは花生と考えられる。頸部に染付がみられるが、文様は不明である。釉調や染付から17世紀後葉から18世紀代のものと推測される。

蓋物の蓋（CJ046）は、染付と色絵によって梅花文や、雪輪に草花文や竹文が描かれており、焼継ぎの痕跡が観察される。CJ031の火入・香炉は、底部が蛇ノ目凹形高台で獣足を表現した三足が付く器形である。波佐見の青磁製品と考えられる。

陶器では、小野相馬、京・信楽、肥前、瀬戸・美濃の製品がみられるが、小野相馬と京・信楽が多い。通常、多く出土する大堀相馬は、18世紀後半から19世紀前半の年代のものが多いため、ここには含まれていない。中型丸碗（CT032）、中型腰折碗（CT003、CT046）、中型筒形碗（CT047）、小中鉢（CT002）、小中皿（CT007）、火入・灰吹（CT015、CT038）、銚子（CT037）、合子蓋（CT043）といった器種が出土している。

小野相馬では、小中鉢（CT002）、小中皿（CT007）、火入・灰吹（CT038）が出土している。これらは小野相馬で得意とした器種であり、いずれも特有の淡青灰白色の灰釉の製品である。CT002は見込みに目跡が3カ所みられる。CT007は見込みに印花文がみられるなど、小野相馬の製品によくみられる特徴が観察される。

京・信楽では、火入・灰吹？（CT015）、中型丸碗（CT032）、銚子（CT037）、合子蓋（CT043）、中型筒形碗（CT047）などがみられる。CT032は錆絵染付の製品であるが、それ以外は色絵製品である。CT015の灰吹きは、木瓜形の器形である。CT037の銚子は、注ぎ口が付き、口縁部は平面四角形で、体部下半は半球形を呈する器形で、四角形の蓋が付くものと考えられる。色絵による梅枝文がみられる。

肥前は、鉄絵山水文の付く中型の腰折碗である（CT003）。瀬戸・美濃の腰折碗（CT046）は、透明度が高く、貫入の顕著な淡緑灰色の灰釉で、口唇部の一ヶ所に鉄釉が掛けられている。素地はロクロ痕が顕著である。

【18世紀後半から19世紀前半の陶磁器】

18世紀後半から19世紀前半の陶磁器は、１号溝、４号遺構、１層・撹乱から出土している。

磁器では段重（CJ016）、火入・香炉（CJ050）がみられる。いずれも肥前産である。陶器では中型丸碗（CT003、CT005、CT048）、小型丸碗（CT034）、小中皿（CT006）、碗あるいは鉢の底部（CT035）、蓋（CT056）、仏飯器（CT058）がある。

CJ016の段重は、焼継ぎの痕跡が観察され、焼継印とみられる記号が高台の脇にみられる。CJ050は、色絵染付の火入・香炉で、口縁部には敲打痕が観察される。底部に墨書がみられるが判読不能である。

陶器の産地は、大堀相馬が主体となる。中型丸碗に加えて、この時期には小型丸碗（CT034）が加わる。灰釉は、光沢が少ない半失透釉、あるいは光沢がなく糠白色に白濁した失透釉の製品が中心である。中型丸碗(CT003、CT048)は、鉄釉流し掛けの製品である。CT006は鉄絵山水文の小中皿で、見込みに目跡が３カ所みられる。CT005、CT035、CT048、CT058は底部に墨書がみられる。CT005は「松前」、CT048は「小」、CT058は「く」ではないかと推測される。

【19世紀代の陶磁器】

19世紀代の陶磁器は、ほとんどの遺構から出土している。磁器では、中型丸碗（CJ006、CJ021、CJ027、CJ028、CJ036）、中型端反碗（CJ038、CJ039、CJ054）、小型端反碗（CJ008、CJ040、CJ041、CJ053）、小型筒形碗（CJ009）、平形碗（CJ023）、中碗の蓋（CJ012、CJ025、CJ045）、小杯（CJ024、CJ052）、うがい茶碗（CJ032）、猪口（CJ042）、小中皿（CJ010）、極小皿（CJ011、CJ034）、蓋物の蓋（CJ013）、小中鉢（CJ026）、土瓶（CJ018）、瓶類（CJ020）、植木鉢（CJ003）など、さまざまな種類がみられる。焼継ぎによって補修されている磁器も多い（CJ011、CJ023、CJ027、CJ028、CJ041）。また、磁器の産地では、特に19世紀中葉以降は、肥前は少なくなり、瀬戸や切込の製品が加わるようになる。

陶器では、中型端反碗（CT004）、瓶（CT008、CT025、CT026）、土瓶（CT009～012、CT021、CT030、CT031、CT044）、灰吹・火入・香炉（CT014）、秉燭（CT019、CT020）、小中鉢（CT022）、小中皿（CT023）、蓋（CT027、CT039、CT050）、擂鉢（CT024）、袋物（CT029、CT052）、瓶掛（CT040）、壺（CT049）、急須？（CT051）、灯明皿（CT028）などの器種がみられる。産地では、大堀相馬が主体であるが、瀬戸・美濃、京・信楽や、東北産と考えられる陶器も若干加わる。

19世紀前葉から中葉の磁器では、肥前が中心である。碗では、中型丸碗（CJ006、CJ021、CJ027、CJ036）のほか、端反碗（CJ039）、小型筒形碗（CJ009）、碗に付く蓋（CJ012、CJ025）などの器種がみられる。CJ027、CJ036、CJ039はダミを用いずに描かれた素描きの文様である。CJ036は、外面は呉須、内面は色絵で描かれている。CJ027は、高台内に朱書きで「□　千□□　九千六」の文字が確認される。後述するCJ028にも類似した朱書き文字がみられることから、同時期に使用されたものとも考えられる。CJ026は破片資料であるが、体部上半が八角形を呈する鉢であろうと考えられる。CJ032は、直線的に開き、見込み部分がやや尖る器形をしており、見込みに色絵染付で文様が描かれることから、うがい茶碗と考えられる。

19世紀前葉から中葉の陶器では、大堀相馬が中心である。碗では、端反碗（CT004）がみられ、釉は白濁した失透釉のものである。土瓶は、白濁した失透釉の灰釉のもの（CT009、CT044）と、青釉のもの（CT010）がみられる。文様では鉄絵文がみられ、呉須絵と鉄絵で山水文が描かれた皿（CT023）、鉄絵で草花文が描かれた瓶（CT025）が出土している。CT023の高台内には墨書がみられるが、判読はできない。CT026の瓶は、型押によって上下２段に花弁のような文様が表現されている。上半と下半は別に作られており、上半と下半を合わせた痕跡が内面中央部分を一周するように観察される。CT039は何らかの蓋であろうと考えられる。外面に青釉が施釉されているが、口縁部端面は無釉である。青釉や胎土から大堀相馬と考えられるが、他の産地の可能性も考えられ

る製品である。大堀相馬以外では、瀬戸・美濃の瓶掛（CT040）と、京・信楽の急須？（CT051）がみられる。CT040は、破片資料であるが、台部に印花による雷文、体部上半に貼付による葡萄文がみられ、瀬戸・美濃の呂宋瓶掛である。底部の内外面にはスス状の炭化物の付着が観察される。CT051は、欠損しているが注ぎ口が1ヵ所付く器形と推測され、京・信楽の急須と考えられる。非常に薄手の丁寧な作りであり、体部には錆絵の菊花文が少なくとも２ヵ所に配される。菊花文は16弁のものであり、非常に緻密に描かれていることから、禁裏注文の京焼きの可能性も考えられる。

19世紀中葉から後葉の磁器では、切込（CJ010、CJ018、CJ022、CJ040、CJ053）や瀬戸（CJ011、CJ028、CJ034、CJ038、CJ041、CJ045、CJ052）の製品が多くなる。切込の磁器では、三彩釉の型打輪花皿（CJ010）が出土している。三彩は、茄子紺、青緑、透明釉の三色によってなされている。本来は、鮮やかな白の素地に透明釉が掛かり、三彩の白色を示すところであるが、CJ010は素地がくすんだ白色のため、三彩の白色も灰色に近いものとなっている。高台内と畳付も青緑色の釉薬によって施釉されており、畳付に3カ所の目跡が確認される。武家屋敷地区第４地点の調査（年報13）において、切込三彩の破片が２点出土しているが、小片であった。切込三彩は、伝世品でわずかに確認されるほか、切込西山工房址（芹沢長介編1978）、同中山窯下方平場（佐藤広史1990）、の調査で、少量確認されている程度である。CJ010は、切込三彩釉の特徴の最もわかる出土資料である。CJ018の土瓶は、花文や渦巻文の描き方、胎土の色調や釉調が、切込の量産品と類似することから切込の製品と推測される。瀬戸の磁器は、中型丸碗（CJ028）、中型端反碗（CJ038）、小型端反碗（CJ041）、碗の蓋（CJ045）、極小皿（CJ011、CJ034）、小杯（CJ052）がみられる。CJ028は、焼継ぎと、高台内に朱書きで「千□八百八十　千□五百　九千六」の文字がみられる。極小皿は、いずれも白磁の型打による製品で、角皿（CJ011）と輪花皿(CJ034)である。他に産地不明の磁器として、体部下半のみ残存する瓶類（CJ020）がみられる。残存部分については無釉であり、産地は不明である。

19世紀中葉から後葉の陶器も、大堀相馬が主体であり、灯明皿（CT028）、土瓶（CT011、CT030、CT031）、袋物不明（CT029）などが出土している。灯明皿（CT028）は、内面鉄釉で非常に薄手で、口縁部に炭化物が付着している。土瓶は、鮫肌釉の蓋（CT011）、青釉の身（CT030）、灰釉に白泥と鉄絵で施文された蓋（CT031）が出土している。CT011は地の鉄釉に暗緑褐色の釉が収縮した鮫肌釉の製品である。CT030は木瓜形の器形を呈している。また、CT029は、鮫肌釉を用いた勿来手の製品である。

他の19世紀代の磁器では、CJ003は底部に孔が1ヵ所みられることから植木鉢と推測され、底部に「利ク」の墨書が観察される。CJ024の小杯は、産地は不明であるが、非常に薄手の磁器で、内面は色絵で福寿草・婦人文などが描かれている。CJ042は、瀬戸の猪口である。外面には人物の絵と「候先生」「鐵拐先生」の文字が確認される。「鐵拐先生」は、中国道教の代表的な仙人を集めた八仙の一人、李鐵拐のことと考えられる。「候先生」は、蝦蟇仙人のことと考えられ、蝦蟇仙人を「候先生」と呼ぶ逸話が存在する。八仙に含まれる仙人は、時代によって構成が異なる場合があり、道教の本来の八仙と日本での八仙では異なるようである。中国の八仙に蝦蟇仙人は入らないが、日本では蝦蟇仙人は李鐵拐と対で描かれる例が多いようである。CJ042には、他に人名とみられる文字が３カ所確認できる。欠損や不鮮明な筆跡のため、文字そのものから判読することは難しいが、八仙と仮定すると、「洞賓」、「麻姑」、「鐘離権」ではないかと考えられる。また、描かれている人物は、その衣服や特徴から、左から呂洞賓、蝦蟇仙人、李鐵拐、鐘離権である可能性が高いと考えられる。

他の19世紀代の陶器では、CT008の瓶は、無釉の生地に、飛鉋と灰釉流し掛けがなされている。胎土は炻器質で、産地は不明である。CT012は、白化粧の上に青釉と鉄絵山水文の描かれる蓋である。通常は透明釉が施釉された製品が多いが、CT012は無釉である。産地は不明である。CT018は、器種は特定できないが、台座状の体部下半に、内外面に鉄釉が施釉された製品である。秉燭は、皿状のCT019と、脚部の付くCT020がみられる。CT019は東北の地方窯の製品ではないかと推測される。CT020は大堀相馬産で、底部に孔が1ヵ所確認される。東北の地

方窯の製品と推測されるものは、他に壺（CT049）、袋物不明（CT052）などがみられる。胎土や釉など、堤に類似する部分もみられるが、他の地方窯の可能性もある陶器である。CT021は、鉄絵文字が描かれた外面無釉の製品で、産地は不明である。残存部分には３文字確認されるが、判読できるのは「賀」のみである。CT022は胎土・釉薬から堤の製品と推測される。CT027は、鉄釉の蓋で、つまみ部分は型押による葉のモチーフが用いられている。産地は不明である。

【年代不明の陶磁器】

磁器では、透かし彫りの火入・香炉（CJ017）がみられる。立方体の形状をしており、非常に薄手で、四面に透かし彫りによる菊花文が表現されている。四面とも、菊花部分を除いて染付がなされ、菊花部分が白く浮き上がる文様を呈している。

陶器では、窯道具（CT041）が出土している。形からハマの一種と考えられる。同様の形態のものが武家屋敷地区第７地点の調査（年報19第２分冊）から出土している。CT036の片口鉢は、瀬戸・美濃の製品と考えられる。釉が変質しており、火を受けた可能性が考えられる。CT053は、人形の頭部である。七福神の布袋の特徴に似ているが、体部が欠損しており、特定できない。CT054は瀬戸・美濃の瓶で、いわゆる通い徳利である。鉄絵文字で、「銘酒吾妻稲の花」「岩庄酒造店」「電話四一壱」の文字が確認される。岩庄は、宝暦二年（1752年）に宮城郡に創業した酒造家である（早坂芳雄1962）。仙台で電話事業が開始されたのが明治33年（1900年）で、開通時の加入者数は170件であった（仙台市史編さん委員会2009）。その後、電話の加入者は、比較的早くに増加したようである。CT054の電話番号が400番台であることから、電話事業開始からそう下らない年代で、ガラス一升瓶が一般化する以前の時期のものと考え、20世紀初頭から前葉のものと推測される。

２．土師質土器（図36、表11・18・19、図版31）

土師質土器は、皿、鉢類、壺、火消壺、焙烙、灯明皿などが出土している。焼塩壺、耳皿は出土していない。接合と同一個体識別作業後の土師質土器全体の破片数では、皿286点、鉢類11点、壺２点、火消壺４点、焙烙８点、灯明皿１点、不明129点で、合計442点である。前述のように、今回の調査は、遺構を確認した後、大部分の遺構の掘り下げは行っていないため、土師質土器においても、これまでの調査と比べると、出土量は非常に少なかった。

【皿】

土師質土器の皿は、286点出土している。遺構では１号溝からの73点が最も多く、次いで４号遺構から39点である。破片資料が多く、接合作業を十分に行ったが、法量がわかる程度まで器形を復元できたものは、あまり多くない。

土師質土器の皿の抽出基準は次の通りである。口縁もしくは底部外周の６分の１以上が残存し、なおかつ器高が判明するものを抽出資料とし、諸属性の観察を行った。すなわち、口縁端部から底部までが残っており、口径、底径の復元および器高の計測ができるものを抽出している。口縁もしくは底部外周の６分の１以上残っているものを抽出基準としたのは、経験的に、これだけ残っていれば、口径もしくは底径の復元において、安定した数値が得られるであろうという判断に基づいている。

抽出し、法量や調整方法などを観察できた土師質土器の皿は、全体で20点である。そのうち５点を図化している（図36、表18、図版31）。出土した土師質土器の皿の大多数は、武家の饗宴の席で使用され、１回の使用で廃棄されたものと考えられる。しかし、中には、付着物や使用した痕跡などから、転用され、別の用途で使用された痕跡が確認されるものも含まれている。図化したものは、転用された痕跡が見られるものが中心となっている。抽出された点数が少なく、まとまって出土する遺構もないことから、定量的な分析は行っていない。

CH001は、底部に焼成後に穿たれた小孔が１ヶ所あり、小孔には一部に鉄分が付着している。また、底部内面には一部に炭化物の付着が観察される。小孔を用いて釘などで固定し、灯明皿として使用されたものであろうと考えられる。底部に穿孔のある皿は、これまでの調査でもたびたび出土しており、二の丸地区第17地点では、底部に釘が残存した皿が出土している（年報18）。CH002、CH003は、口縁の一部にタール状のススが付着しており、灯火具として使用された痕跡が観察される。CH005は、口径23.6cmと大型のものである。器面全体が黒色化しており、内外面ともに底部付近に薄く炭化物が付着している。その様子から、器全体を火にかけて、焙烙のように用いられたのではないかという可能性も考えられる。抽出資料の中で大型のものはCH005の１点のみであるが、抽出されなかった資料の中にも、大型のものになる可能性のものが、若干含まれている。少ないながらも、大型の皿も一定程度含まれるものと考えられる。CH004は、底部内外面に炭化物が付着しており、器面のほぼ全体が黒色化している。器面の状態から、火を受ける状態で使用されたものであろうと推測されるが、CH005のように焙烙のように使用されたものとは異なる痕跡である。

【その他】

土師質土器の皿以外で図化したのは、CH006の１点のみである。８区西Ａ層からの出土である。小型の壺型の土器で、底部の内外面に炭化物が付着しているが、用途の詳細は不明である。

３．瓦質土器（図37、表11・20、図版31）

瓦質土器は、鉢類、蚊遣り、炭櫃、十能、五徳、さな、壺甕類などの種類がみられた。壺甕類には、火消し壺なども含まれると考えられるが、破片資料のため、特定できないものをまとめている。鉢類も、破片から種類を特定できなかった様々な「鉢」形のものをまとめており、火鉢の破片なども含まれる。今回の調査では、瓦質土器の出土量はあまり多くなかった。これらの中から、形態的特徴がわかるものを中心に９点を図化した。

CG001､CG002は､６号遺構から出土している。CG001は方形の鉢状をした瓦質土器である。器高は比較的浅い。用途は不明である。CG002は､上面は棒状に延び､断面が「L」字状を呈する器形であるが､欠損部分が大きいため､全体形状は不明である。上面には炭化物の付着がみられる。

CG003は、ピット164から出土している。幅10.7cmの板状で、「く」の字に屈曲しているが、一端は欠損し、他端は剥落している。剥落している部分は、逆方向に屈曲していくものと推測される。用途は不明である。

CG004、CG005は４号遺構から出土している。CG004は、鉢類である。底部内面に炭化物が付着しており、内面は黒色化している。外面にタタキ目があり、同様の器形をした鉢類は、武家屋敷地区第７地点の調査からも出土している（年報19第２分冊）。CG005は、蚊遣りの破片である。下半部には横長の窓がみられ、内面には炭化物が付着している。

CG006～009は、１層・撹乱からの出土である。CG006、CG009は、鉢類である。CG006は底部が欠損しており、CG009は底部のみであるが、三足を持つ同様の器形のものと考えられる。小型の火鉢のような形態である。CG007は、鉢状の器形になるのではと考えられるが、一部分のみの残存のため、器種は不明とした。口縁部内面には花型の刻印がみられる。CG008は小型の鉢類である。外面に異なる２つの刻印がみられ、内面には刻印を押したときに付いたとみられる指紋が観察される。

４．土製品（図38、表13・21、図版32）

土製品は、土師質土器、軟質施釉土器のうち実用品でないものと、玩具や人形などをまとめた。１号溝、３号遺構、４号遺構、A1層、１層・撹乱から出土しているが、いずれもごくわずかで、全体で35点である。

土師質のものでは、壺、擂鉢、蓋などのミニチュア製品、猿、犬、狐？、馬？などの土人形、土鈴などがみられる。軟質施釉のものは少なく、器台？が１点出土しているのみである。そのうち、特徴のわかる９点を図化した。図化したものは、いずれも土師質製のものである。

CO001は、中実で、表面はミガキ調整されており、刻印がみられる。土師質土器の柄や脚部などの実用品の可能性も否定できないが、小破片のため不明である。

CO002・CO005は、土人形の狐（稲荷）である。１号溝と１層・撹乱からの出土である。CO002は、左右合わせの型作りである。頭部のみ残存しており、口には宝玉をくわえている。頭部は中実で、体部は中空とみられる。CO005は、中空である。左右合わせの型作りであるが、頭部付近の片面のみが出土している。

CO003は、１号溝出土の犬である。左右合わせの型作りで、片面のみ残存している。

CO004は、４号遺構出土の馬の可能性が考えられる土製品である。四肢の１足部分のみの出土で、脚部に胸懸（もしくは尻懸）の表現がみられる。胴部は型作りで、脚部は別に貼り付けている。脚部は中実である。腹部は中空で開口するものとみられる。武家屋敷地区第11地点の調査から、類似した馬の土製品が出土している（調査報告１）。

CO006・CO007は、１層・撹乱から出土した猿の土人形である。いずれも胴部は手づくねで、四肢と尾は別に粘土を貼り付けて表現しているが、欠損していてどのようなポーズであったかは不明である。櫛描きによって体毛が表現されている。CO006は、体部は手づくね、頭部のみ型作りで、耳は粘土を貼り付けていることが観察される。

CO008は、型作りの中実で、菊花文状の文様がみられる。おはじきや、人形の装飾部分の一部などが考えられるが、詳細は不明である。

CO009は、ミニチュアの蓋である。ロクロ成形で、つまみ部分は粘土を貼り付けている。底部には回転糸切り痕が観察される。

５．瓦（図39～46、表10・22～33、図版32～38）

瓦の分類・集計・計測の基準は年報６・７・８・９で示しており、年報18では、新たな種類を設定し改めて分類基準をまとめている。さらに、調査報告１では、一部、分類が不明確だった種類を再整理した。今回報告する資料は、基本的にこれらの分類基準を踏襲して分類している。

出土した瓦は、軒丸瓦、軒平瓦類、軒桟瓦、丸瓦、丸瓦類、平瓦１類、平瓦２類、平瓦、桟瓦、桟瓦類、板塀瓦、面戸瓦、輪違い、棟瓦、谷丸瓦、鬼瓦、古代瓦、不明瓦の17種類に分類された。これらのうち、年報６に示した基準に従って、計測できるものを抽出し、諸属性の観察を行った。図示したものは、計測したそれぞれの瓦の種類のうち、比較的残存率が高く、特徴をよく示しているものを中心に提示している。ただし、刻印の認められる瓦については、種類や残存の度合いに関わらず、刻印部分を提示している。軒平瓦類の瓦当文様の分類は、年報９で示した分類名称を用いている。

１号溝からの出土が最も多く、他に１号遺構、４号遺構からも比較的多くの瓦が出土している。また、ピット17、ピット107からも比較的多くの瓦が出土している。

【古代の瓦】（図39、表22、図版32）

古代の瓦とみられるものは、８区西のA1層から出土したT001の１点のみである。瓦の本来の層序や遺構に伴うものではない。小破片で、瓦の種類や全体の特徴は不明であるが、片面には格子状の布目が観察される。二の丸北方武家屋敷地区では、第４地点（年報13）で多賀城創建期の軒平瓦や古代の平瓦が出土している。第７地点（年報19第２分冊）と、第11地点（調査報告１）では、T001と類似した平瓦の小片が１点ずつ出土している。

【軒丸瓦】（図39、表23、図版32・33）

軒丸瓦は７点出土している。１号溝から２点、４号遺構とピット164から１点ずつ、１層・撹乱から３点と、まとまった出土は確認されなかった。

このうち瓦当面の残存がよく、瓦当文様の特徴がよくわかる３点を図示した（T002～004）。瓦当文様が判明するものでは、連珠三巴文３点（T002）、三引両文２点（T003・T004）、巴文（左巻き）のみ残存したもの１点である。九曜文は出土していない。連珠三巴文のうち、巻きの方向が判明するものでは、右巻き、左巻きが１点ずつであった。

瓦当の直径が計測できるのは、三引両文の２点のみで、直径14.1～14.9cm、周縁幅1.4～1.7cmと、同程度の大きさである。

【軒平瓦類】（図39・46、表24、図版33・38）

軒平瓦類は、６点出土している。軒平瓦類としたものは、全体が残っていないため軒平瓦と断定できないものや、軒桟瓦になる可能性のあるものが含まれている。

１号溝から３点、１号遺構から１点、４号遺構から１点、１層・撹乱から１点と、まとまった出土は確認されなかった。このうち、瓦当文様が判明する２点を図示した（T005・T006）。また、T007は、文様は不明のため、全体形状は図示してないが、瓦当垂れ部分の一部に刻印が観察されるため、刻印のみを提示している（図46、図

版38)。T005は、三枚笹2a＋唐草1a類の瓦当垂れ文様である。T006は、細桔梗＋唐草3b類である。２点とも、垂れの形状は太剣で、瓦当垂長は5.3～5.4cmである。

【軒桟瓦】（図39、表25、図版33）

軒桟瓦は４点出土している。１号溝と１層・撹乱から２点ずつの出土である。そのうち、瓦当文様が判明する２点を図化した（T008・009)。いずれも１号溝出土である。T008は、小巴部分のみ残存している。右巻きの三巴文である。T009は、小巴部分と瓦当垂れ部分の一部が残存している。小巴部分は、左巻きの三巴文で、瓦当垂れ部分は、中剣の三枚笹＋唐草1a類である。

【丸瓦】（図40、表26、図版34）

丸瓦と特定できたのは17点である。そのうち、比較的残存率のよい２点を図化した（T010・011)。それぞれ胴長は23.2cm、23.4cmとほぼ同じ大きさであるが、尻幅は12.6cmと14.3cm、高さは5.7cmと7.5cmと若干の差異が認められる。

【平瓦１類】（図41・46、表27、図版34・38）

平瓦１類は、破片資料のうち、反りがあり、平瓦、桟瓦、軒桟瓦の一部である可能性があるものをまとめている。全体では362点と点数はやや多いが、計測可能な瓦はほとんど含まれていない。そのため、刻印があるものや特殊な調整痕がみられるものを図示している（T012～014)。３点はいずれも１号溝出土である。

【平瓦２類】

平瓦２類は、破片資料のうち、反りがなく、平坦な瓦をまとめている。板塀瓦などの破片で、平坦な部分のみが残存しているような場合は平瓦２類に含まれている。127点出土しているが、図化して提示する資料はない。

【平瓦】（図41・42、表28、図版34・35）

平瓦と特定できたのは３点で、すべてを図化した（T015～017)。１号遺構から２点、１号溝から１点出土している。頭幅は23.7～24.5cm、長さ27.8～29.5cmで、３点ともおおむね同程度の形状である。

【桟瓦】（図42、表29、図版35・36）

桟瓦は７点出土している。そのうち、面戸付で特殊なT018と、比較的残りのよいT019を図示した。

T018は、面戸付桟瓦で、桟瓦の尻側に板状の突起と釘穴３カ所が付いている。板状の突起は、桟と同じ高さで平坦に伸び、他端は垂直に途切れている。年報９において、この形態の瓦は、上に瓦を葺き重ねることができないため、棟際に用いられたものであり、突起は水を返すことはもちろんのこと、面戸としての役割を果たすことを意図したものと考察している。同様の瓦は、二の丸地区第４地点・第９地点の調査（年報４・５、年報８）において出土している。

T019は、きき足が左にある右桟瓦で、頭切り込みは付かない。

【板塀瓦】（図43・44・45、表30、図版36・37・38）

板塀瓦は56点出土している。１号溝、１号遺構b、ピット17からの出土がやや多い。そのうち、残りのよいものと面戸付きで特殊なものの６点を図化した。

T020は桟が右側にあり、T023～025の３点は桟が左側にある。これらは、桟の位置は大きく異なるが、全長

36.3～37.2cm、全幅31.7～32.4cm、桟幅4.8～5.7cmとほぼ同様の大きさを示している。また、尻側に釘穴３カ所、頭側中央に釘穴１ヵ所があり、上面に溝１条が観察されるなど、ほぼ同じ規格を示しており、共通点も多い。

T021、T022は、面戸付板塀瓦で、尻際が厚みを増す形態をしており、その部分に釘穴が観察される。T021は桟が右側に、T022は桟が左側にある。いずれも桟は山形の形状をしている。同様の瓦は、二の丸地区第５地点の調査において出土している（年報６）。

【面戸瓦】（図45、表31、図版38）

面戸瓦は、５号柱列柱４からの出土したT026の１点のみである。半分程度残存しており、長さ9.2cmである。

【輪違い】（図45、表32、図版38）

輪違いは１層・撹乱から２点出土しており、そのうちほぼ完形のT027を図示した。長さ12.8cm、上幅10.2cm、下幅14.5cmである。

【その他の瓦】（図45・46、表33、図版38）

その他の瓦として図示したのは、谷丸瓦（T028）と鬼瓦（T029）である。

T028の谷丸瓦は、垂れ部分のみの残存である。瓦の尻を上にして、垂れが右に付く形態である。垂れの下部は直線的でなく、抉りが入り、面戸状になっている。

T029は鬼瓦の一部分と考えられる。棟の両端を飾る鬼瓦の装飾のうち、両側に延びる部分から、上方に分岐する飾り部分と考えられる。そのように仮定すると、若葉型の装飾になると推測される。

【刻印のある瓦】（図46、表24・27、図版38）

刻印が観察される瓦は、瓦の残存状態や刻印の場所に関わらず、刻印部分を図化している。刻印が確認された瓦は３点である（T007、T013、T014）。

T007は軒平瓦類に分類される瓦で、垂れ部分に、山に「守」の刻印が観察される。T013、T014は、破片資料で、平瓦１類に分類される。T013は「モ」と推測される刻印、T014は山に「守」の刻印が観察される。

６．木製品・漆塗製品（表13）

今回の調査において、木製品・漆塗製品の出土は非常に少なく、残存状態が良好なものも少ない。

漆塗製品では、椀の可能性が考えられるが器形が崩れて判別しにくいもの、漆膜のみが残存したもの、板状の木片に漆が塗られているものなど、７点が出土した。木製品では、楔状の木製品、杭、箸？、加工木など、合計10点が出土した。残存状態が悪いため、図化したものはない。

７．金属製品（図47～51、表12・34～37、図版39・40）

金属製品は、古銭や煙管などの銅製品と、釘などの鉄製品とに分類して集計している。鉛製品の出土はみられなかった。鉄製品の和釘がやや多い程度で、銅製品も鉄製品も出土量はあまり多くはない。４号遺構、１号溝、１層・撹乱からの出土がやや多い。

古銭については、出土した全点を登録し、可能な限り図化して提示している。その他の金属製品は、残存状態のよいものや、特徴的な形状のものを抽出して、可能な限り図化した。

【古銭】（図47、表34、図版39）

古銭は、古寛永４点、新寛永６点（うち文銭１点）、寛永通寶（鉄銭）２点、四文銭（鉄銭）１点（26枚）、十銭白銅貨１点が出土している（MC001～014）。

１層・撹乱からの出土が中心で、他に、１号溝、４号遺構、A1層から出土しているが、１、２点ずつである。

MC001、MC011は文銭である。MC002の四文銭は、26枚が繋がった状態で出土している。大きさからすべてが四文銭であると考えられる。一端の裏文は、「波」「盛」と観察される。破損の恐れがあり、分離することができず、個々の特徴については観察できなかった。MC004、MC014は、寛永通寶の鉄銭である。MC013は十銭白銅貨である。十銭白銅貨は大正９年から発行されており、MC013には「大正十二年」の年号が観察される。

【煙管】（図48、表35、図版39）

煙管は３点を図化した。煙管の形態分類は、年報６に従っている。分類の模式図は、年報18に掲載しており、参照されたい。図化したMO001～003は、いずれも吸口部分である。１層・撹乱と１号溝からの出土である。吸口の形態は、いずれもⅡB類に分類されるもので、一本の管から製作され、肩のない形状のものである。MO002は、内部にラウが遺存している。MO003は、互の目文が数段に配される文様である。

【その他銅製品】（図49・50、表36、図版39・40）

その他の銅製品では、小柄の柄、簪、銅釘、管状銅製品、輪状銅製品、目貫が出土している。

小柄の柄は２点出土している（MO004、MO007）。８号遺構と１号溝からの出土である。MO004は、片面に花と葉の文様がみられる。MO007は、片面に毛彫りによる文様がみられるが、文様の詳細は不明である。

MO005は、種類不明の銅製品であるが、釘状の形状をしており、留め金具の一部とも考えられる。

MO006、MO009、MO015は、管状銅製品とした。アワセメがみられ、煙管のような形態ではあるが、直線的であり、両端ともほぼ同じ径をしている。煙管の吸口であれば、どちらかの一端は細くなると考えられ、雁首であれば火皿に接続する部分は、若干でも湾曲すると考えられる。煙管とはし難いため、管状銅製品とした。MO015は、内部に木質とみられるものが残存している。

MO008は、用途不明であるが、紐状のものを通して使用した可能性が考えられる。MO010は、輪状の形態をした銅製品である。２ヶ所に小孔があり、何らかの留具の可能性が考えられる。MO011は、円形の銅製品で、内面には何らかの接着剤のような付着物がみられる。

MO012は、線状の銅製品である。MO013は目貫である。薄板の型による押し出しによって文様が作られている。MO014とMO018は形状から簪と考えられる。MO016は幅1.2cmの板状の銅製品で、2個1対の小孔が4ヶ所あり、片面には漆が付着している。

【鉄製品】（図51、表37、図版40）

鉄製品で図化したのは3点である。MO019は、ピン状の留め金具とみられる。MO020は、さなと考えられ、全体に赤色化しており、被熱痕が観察される。MO021は、建具や調度品の飾り金具とみられ、表面の一部には漆が残存している。

8．ガラス製品（表13・39、図版41）

ガラス製品は、ガラス玉、小瓶、ビール瓶の3点が出土している。そのうち、ガラス玉（G001）を写真で提示している（図版41）。4号遺構からの出土で、断面には、螺旋状の縞が観察され、巻き付け成形されたものと考えられる。

9．石器・石製品（図52、表13・38、図版41）

石器は全て剥片である（S001～S004）。S002、S004の2点は石英製であり、S001a、S001b、S003の3点は石英安山岩である。4号遺構埋土から出土している2点（S001a、S001b）には接合関係が認められるが、明確な打点が確認できないため、節理のある面における意図的でない割れによる可能性が高い。

石製品では、碁石、硯、火打石、砥石、印鑑などがみられる。

図示した火打石はメノウ製である（S005）。素材には自然面が大きく残存している。稜線の一部が強く磨滅しているのが認められ、使用された痕跡が確認できる。

碁石としたものは、粘板岩製の黒石である（S006～S008）。これら3点の碁石は、形状の特徴から正円・薄型に分類できる。

硯（S009）は粘板岩製である。海から波止にかけて大きく欠損している。縁は一部が残存してはいるが、ほぼ全周において欠損している。残存している陸の部分にはほぼ同一方向を向いた線状痕がいくつかのまとまりを形成している特徴が認められる。硯破片（S010）としたものは、粘板岩製である。形状の特徴から硯の縁の一部であると考えられる。内面には同一方向を向いた線状痕が多く認められる。

S011は粘板岩製である。欠損部以外の全ての面が磨かれ、若干の光沢を帯びている。

砥石は粘板岩製である（S012～S014）。図示した全ての砥石の表面に幾つかの線状痕のまとまりが認められる。特に、S012には側面に同一方向を向いた明瞭な線状痕が多く確認できる。

印鑑（S015）は、印面には四角く溝が彫られ区画されたと考えられる内部に細く文字と想定される彫り込みが確認できる。ただし、文字に関しては判読することは困難である。印側には、数本の線状痕のまとまりが認められる。

10. 動物遺存体（表40・41、図版40）

川口貴史

武家屋敷地区第13地点から出土した動物遺存体の概要を以下に記す。同定作業の結果、貝類４種類、魚類１種類、哺乳類１種類の存在が確認された。同定に当たっては、奥松島縄文村歴史資料館（東松島市）所蔵の骨格標本を使用させていただいた。

貝殻の一部にはカルシウム分の溶脱が進んで脆弱なものがある。脆弱な資料体は、樹脂（パラロイドB72）により保存処理が施された。

同定された動物遺存体の種名一覧を下記に示す。

武家屋敷地区第13地点出土動物遺存体種名表

二枚貝綱　Bivalvia

チョウセンハマグリ　*Meretrix lamarcki* Deshayes

シジミガイ科　Corbiculidae gen. et sp. indet.

マガキ　*Crassostrea gigas* (Thunberg)

硬骨魚綱　Osteichthys

種不明　indet.

哺乳綱　Mammalia

ウマ　*Equus caballus* Linnaeus

１号溝から、チョウセンハマグリ、シジミガイ科、ミミガイ科（アワビ類）が１点ずつ確認された。シジミガイ科とミミガイ科の貝類は、殻の分解が進んで脆弱な状態にあり、種の判別は困難であった。ただし、シジミガイ科では、黒色の殻皮が一部に残存している。

ピット144からは、マガキが確認された。ほとんどが破損して細片化している。殻頂部による算定で、左殻６点、右殻２点を数える。幼貝とみられる殻高43mmほどの小さな左殻も含まれていた。

４号遺構からは、マガキの破片が一点のみ確認されている。

遺構外の１層・撹乱からは、同定不能の貝殻片、種不明魚類の椎骨が１点、ウマの左側の上顎臼歯１点が確認された。種不明魚類の椎骨は、受熱により白色化している。ウマの上顎臼歯は、上顎骨を伴わない遊離歯で、第三前臼歯から第二後臼歯のうちのいずれかである。咬合面の一部と歯根部が破損している。これにより歯冠高の計測は不可能である。なお、残存している歯冠部の歯冠高は78mmであった。咬合面をみると、咬耗のあまり進んでいない個体である。

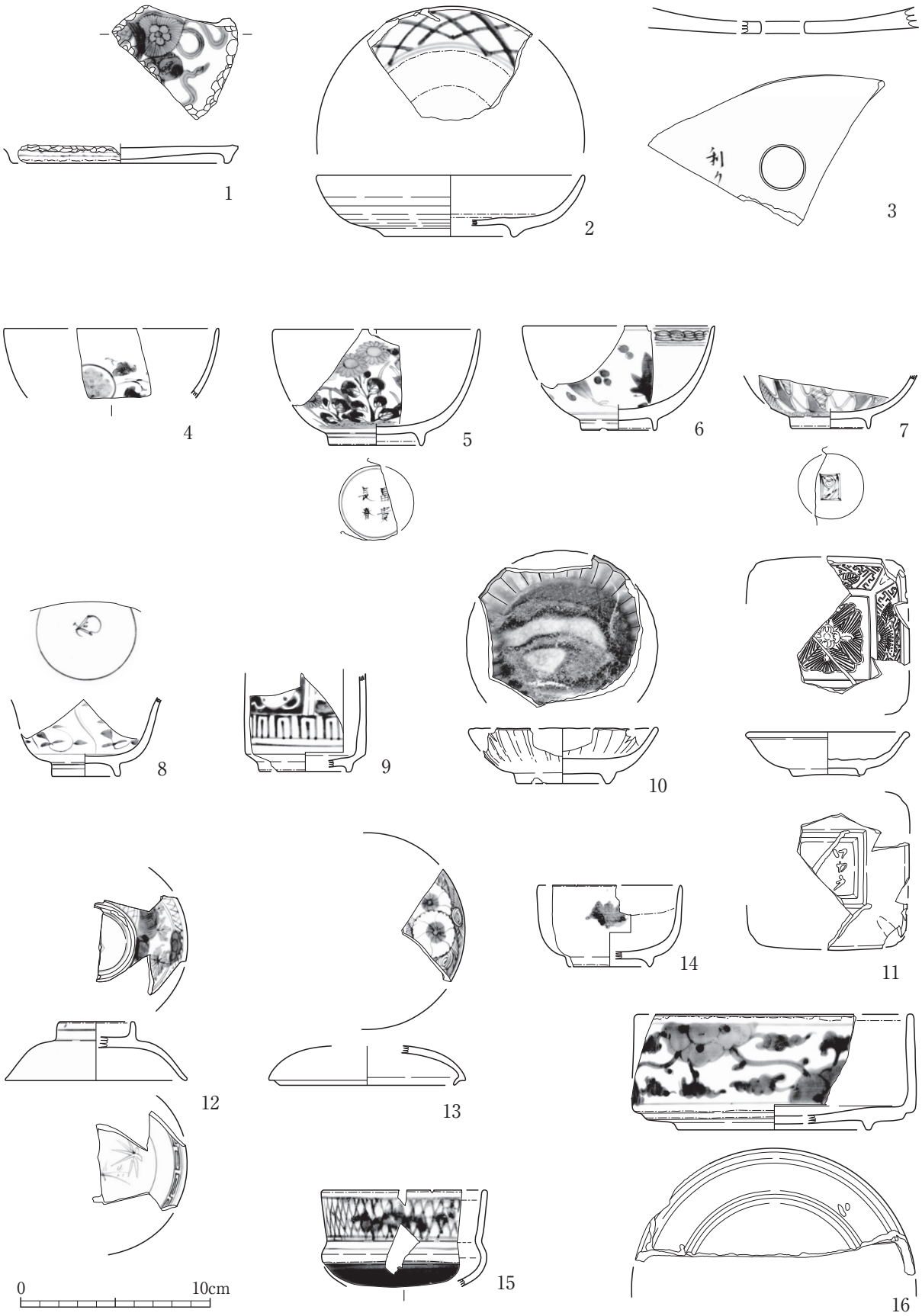


図27　武家屋敷地区第13地点出土磁器（1）
Fig. 27　Porcelains from BK13 (1)

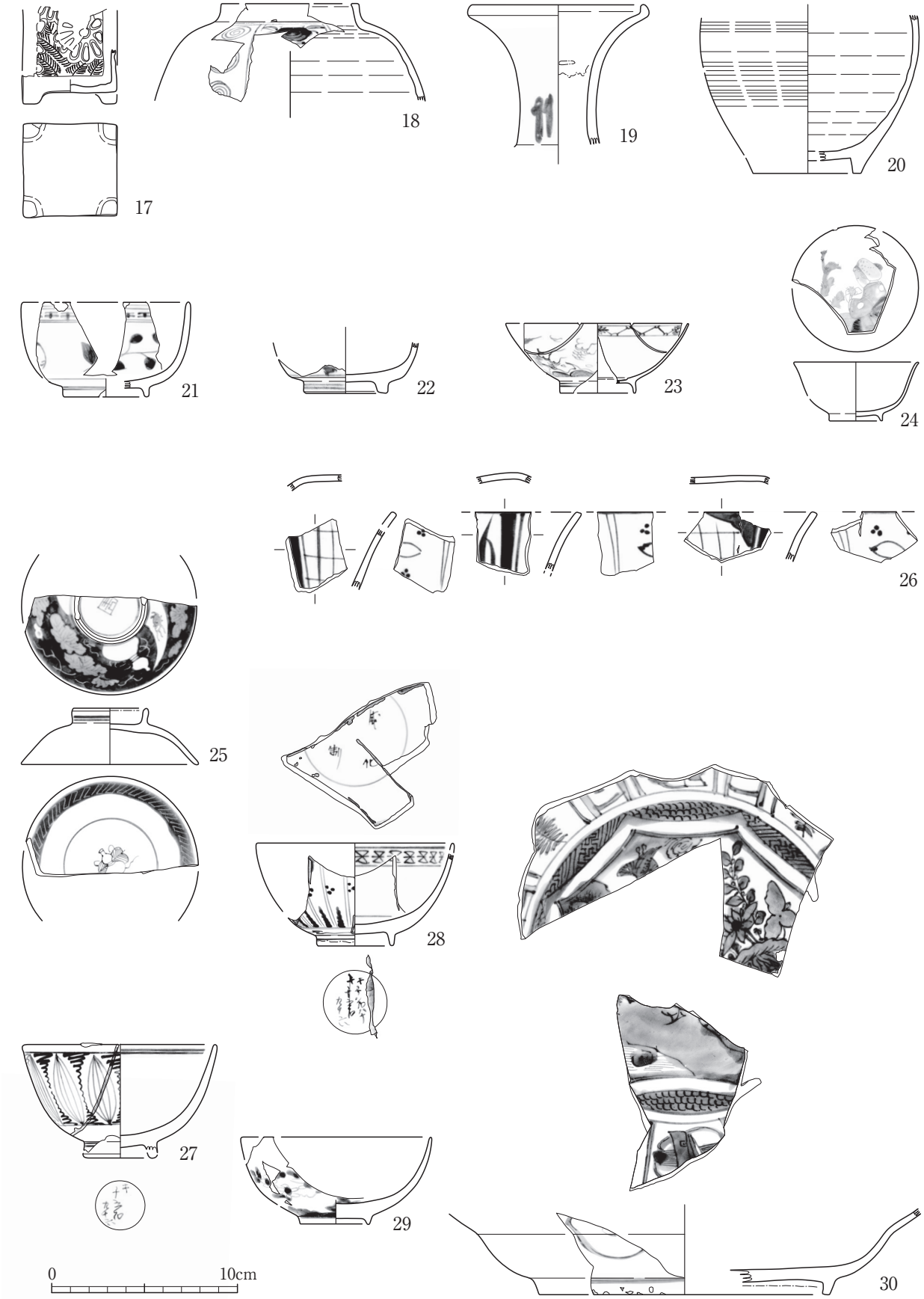


図28　武家屋敷地区第13地点出土磁器（2）
Fig. 28　Porcelains from BK13 (2)

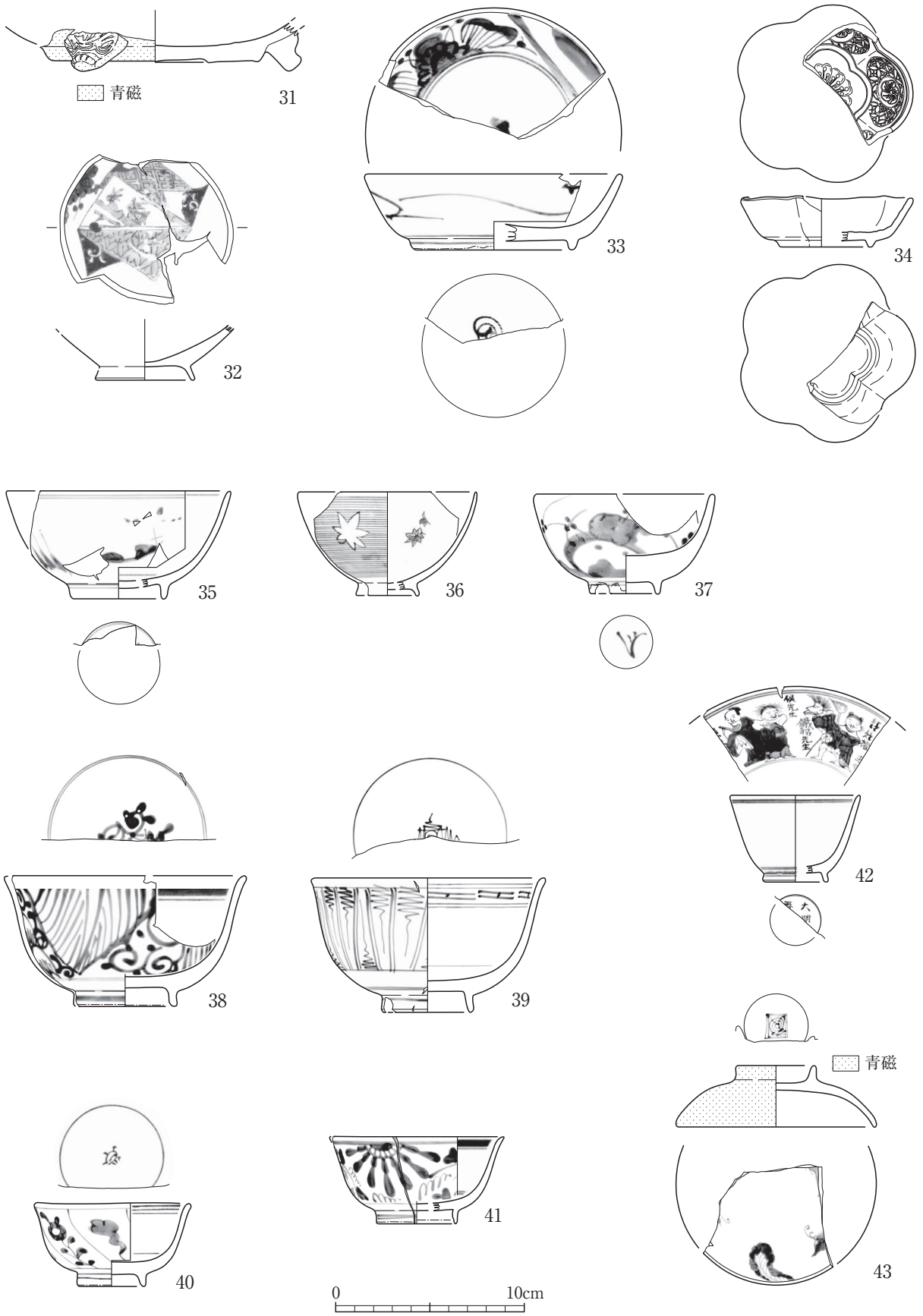


図29　武家屋敷地区第13地点出土磁器（3）
Fig. 29　Porcelains from BK13 (3)

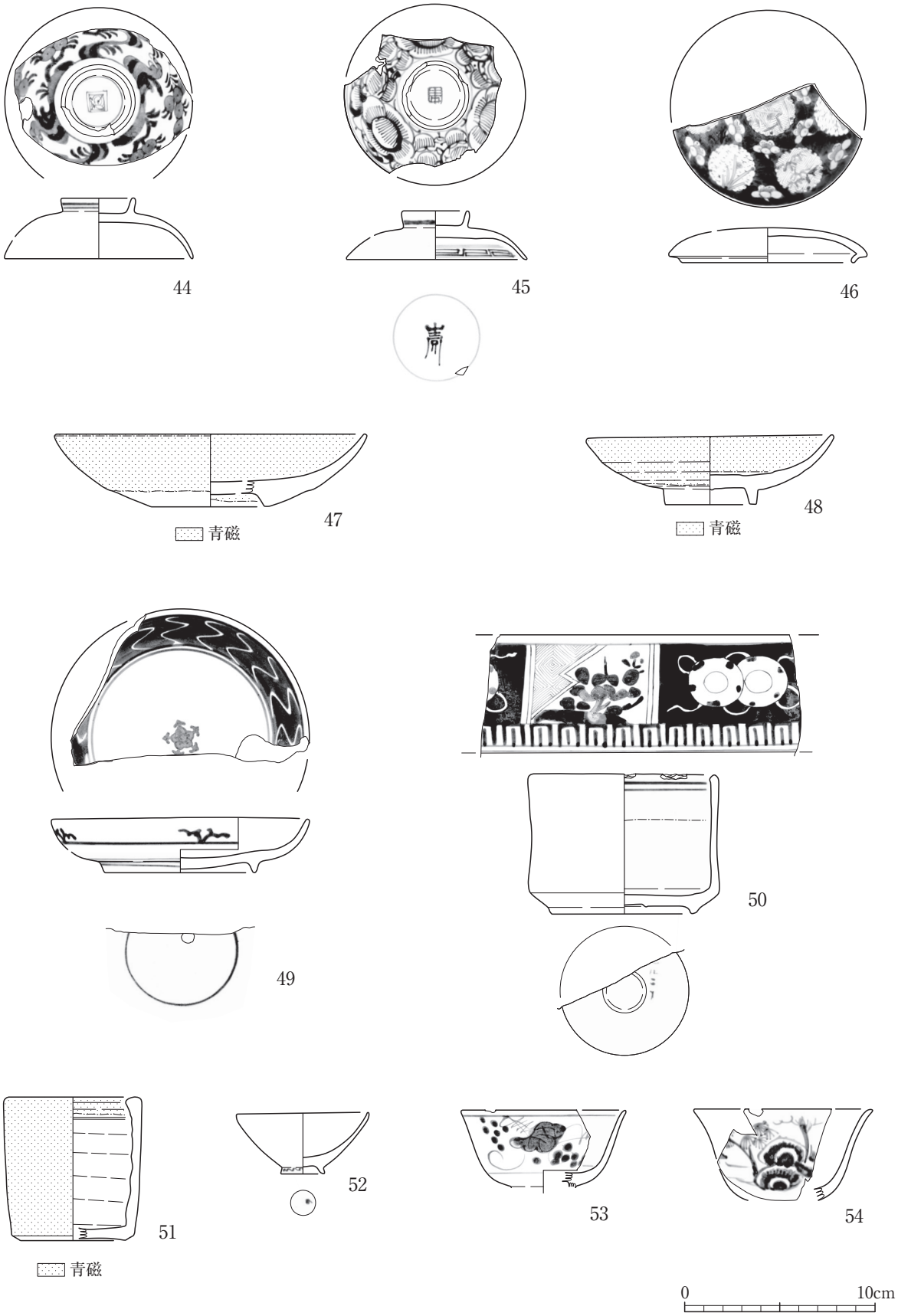


図30　武家屋敷地区第13地点出土磁器（4）
Fig. 30　Porcelains from BK13 (4)

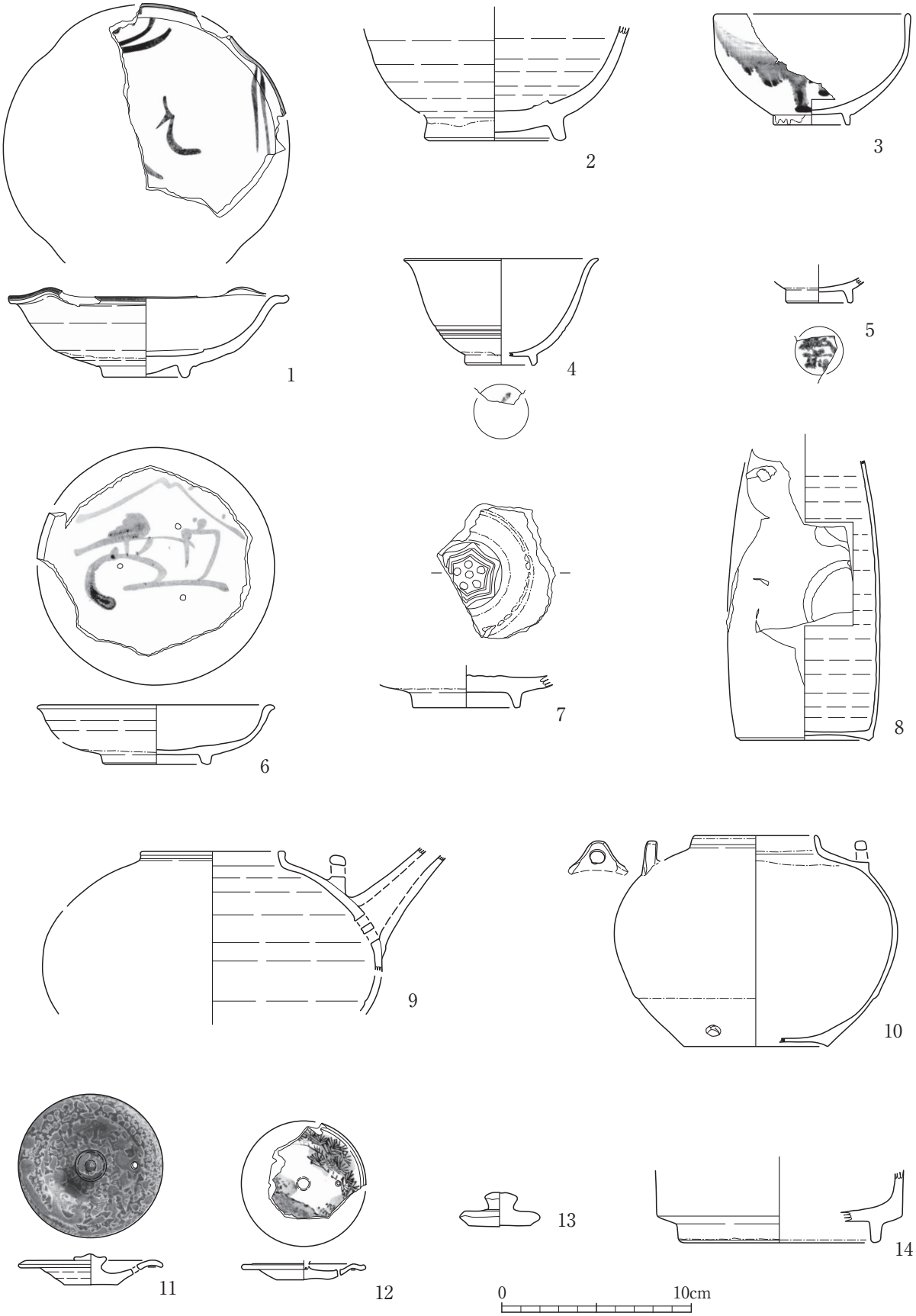


図31　武家屋敷地区第13地点出土陶器（1）
Fig. 31　Glazed ceramics from BK13 (1)

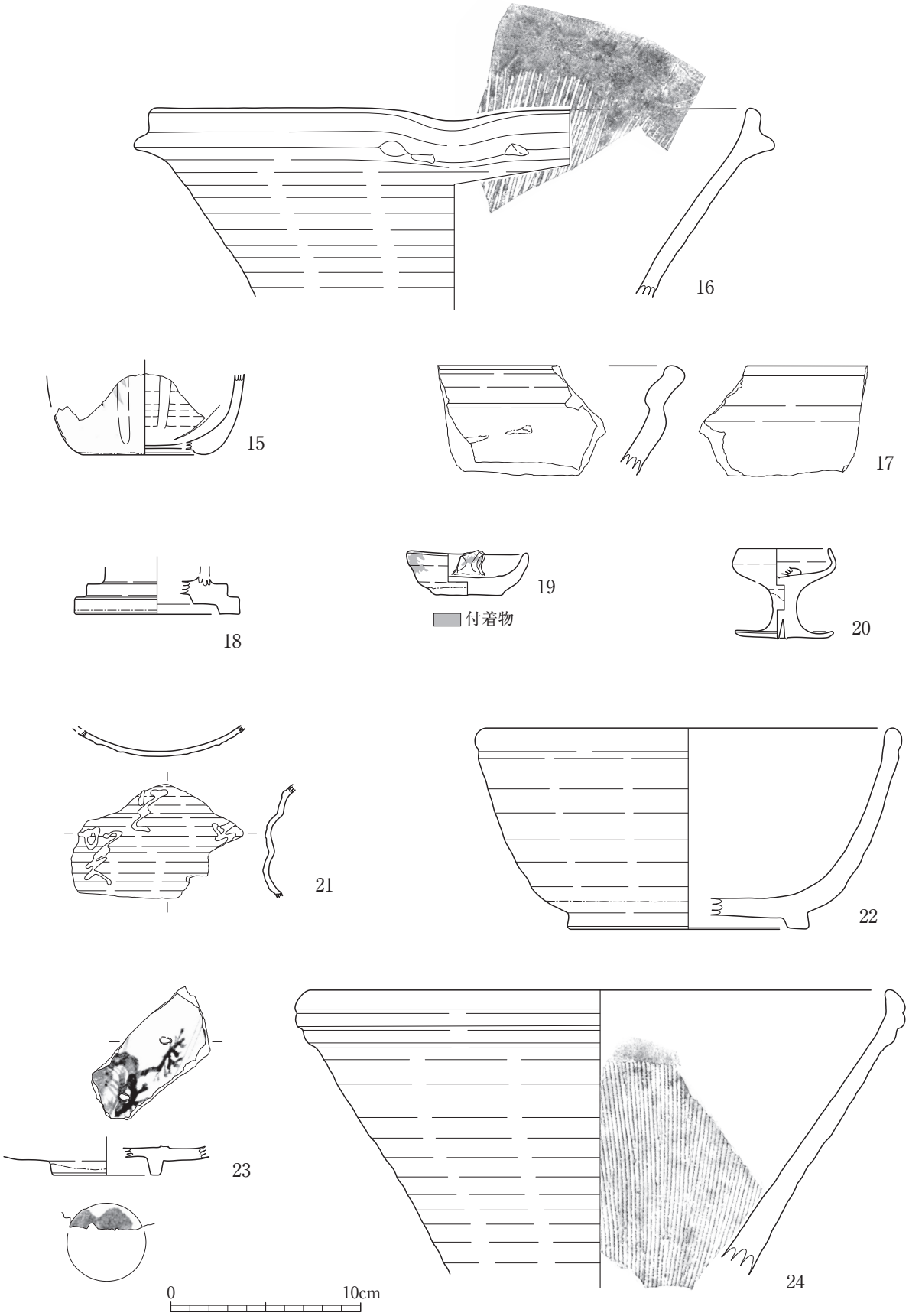


図32　武家屋敷地区第13地点出土陶器（2）
Fig. 32　Glazed ceramics from BK13 (2)

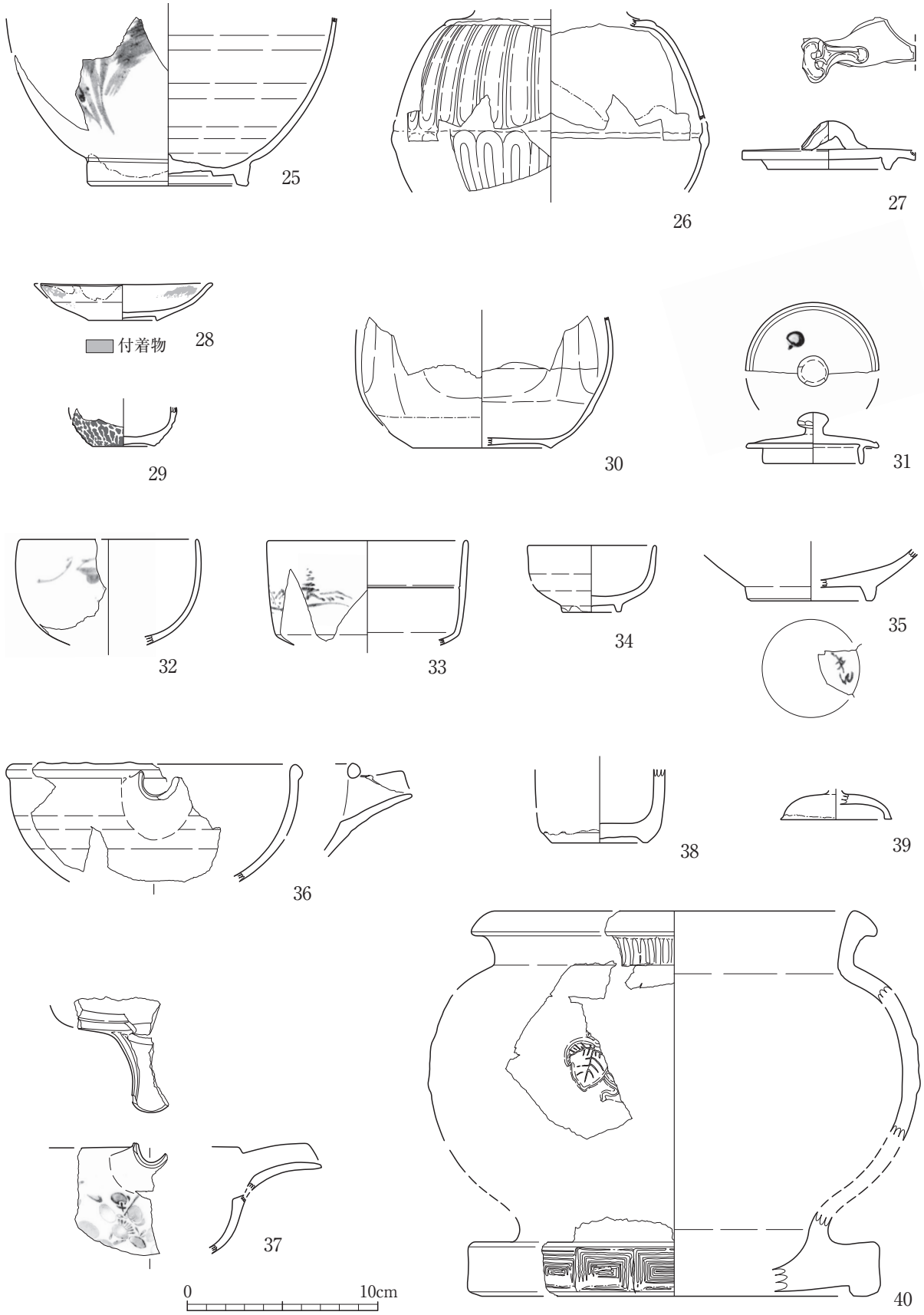


図33　武家屋敷地区第13地点出土陶器（3）
Fig. 33　Glazed ceramics from BK13 (3)

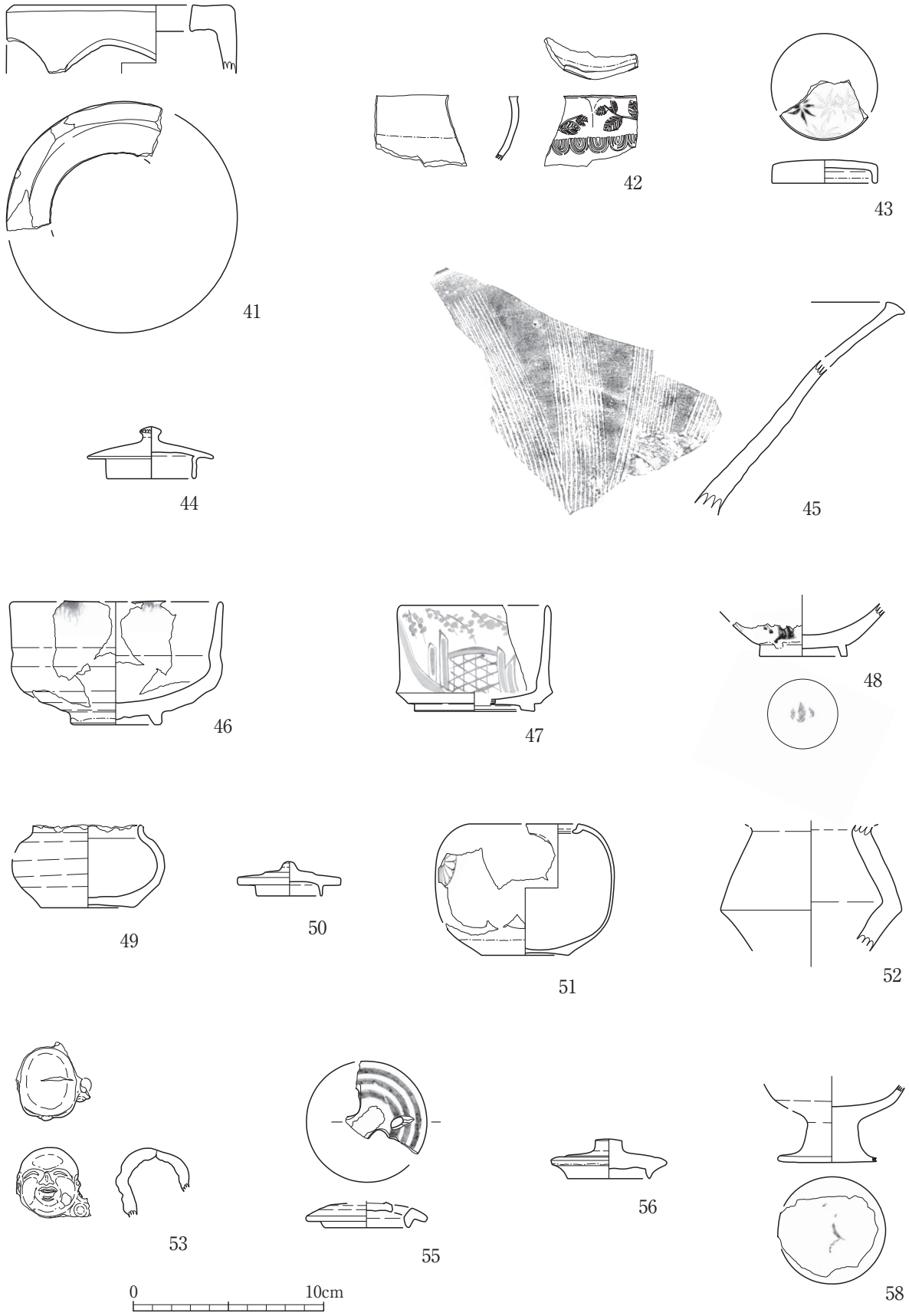
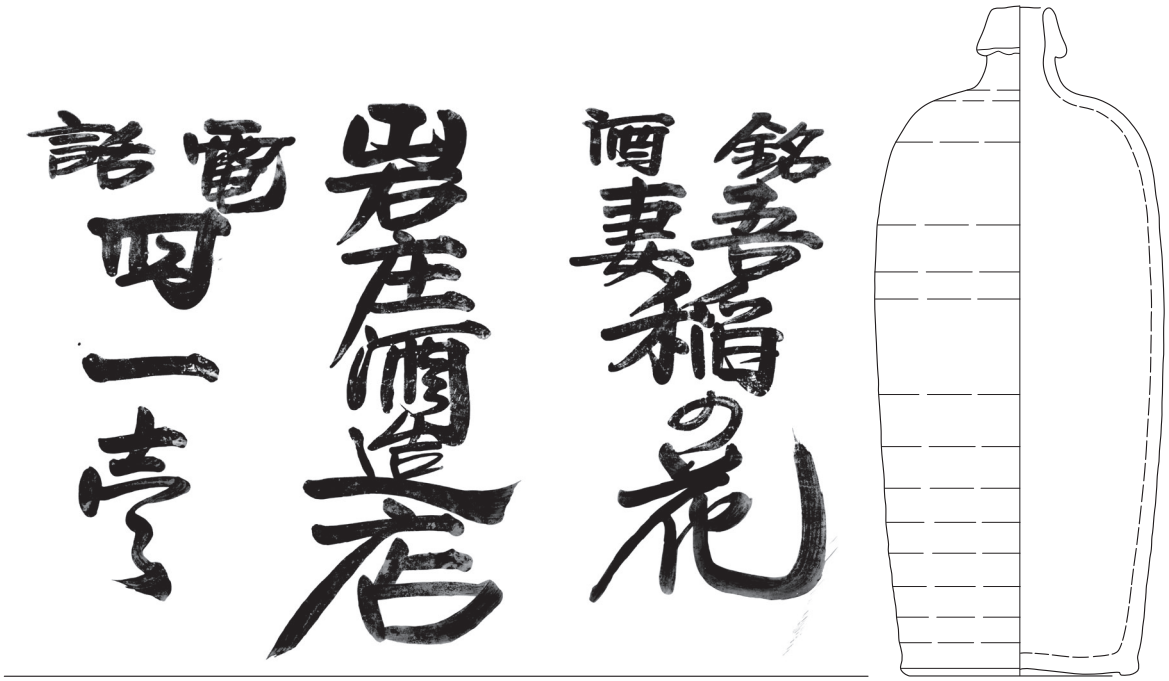
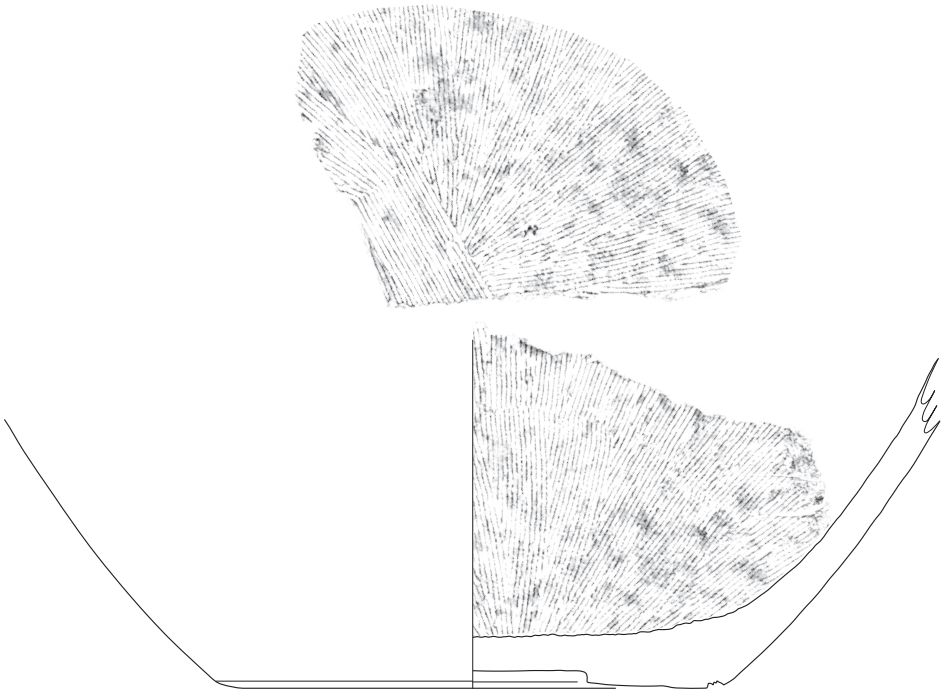


図34　武家屋敷地区第13地点出土陶器（4）
Fig. 34　Glazed ceramics from BK13 (4)



54



57

0 10cm

図35　武家屋敷地区第13地点出土陶器（5）
Fig. 35　Glazed ceramics from BK13 (5)

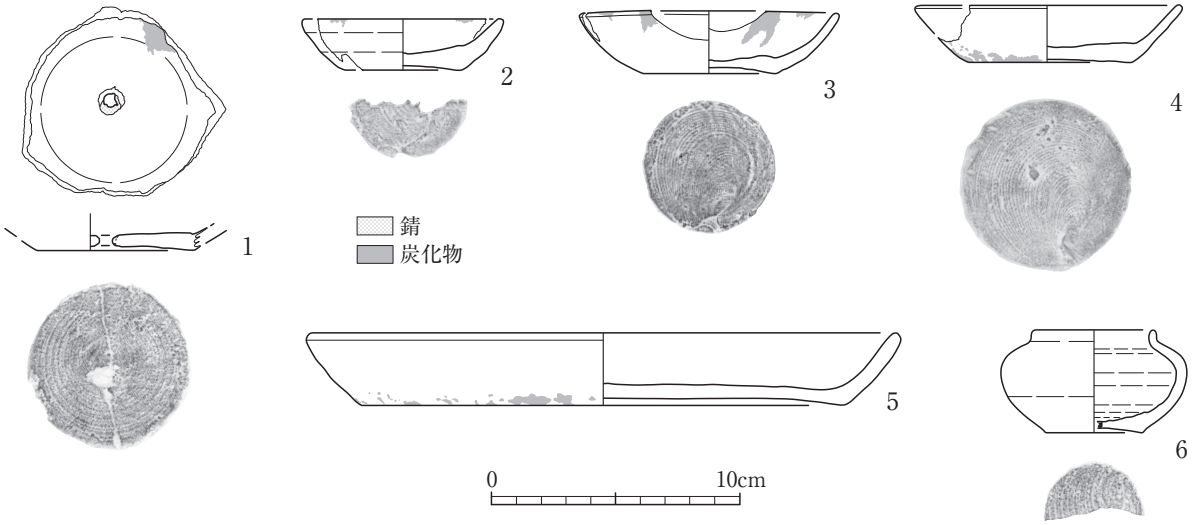


図36　武家屋敷地区第13地点出土土師質土器
Fig. 36　Unglazed ceramics from BK13 (1)

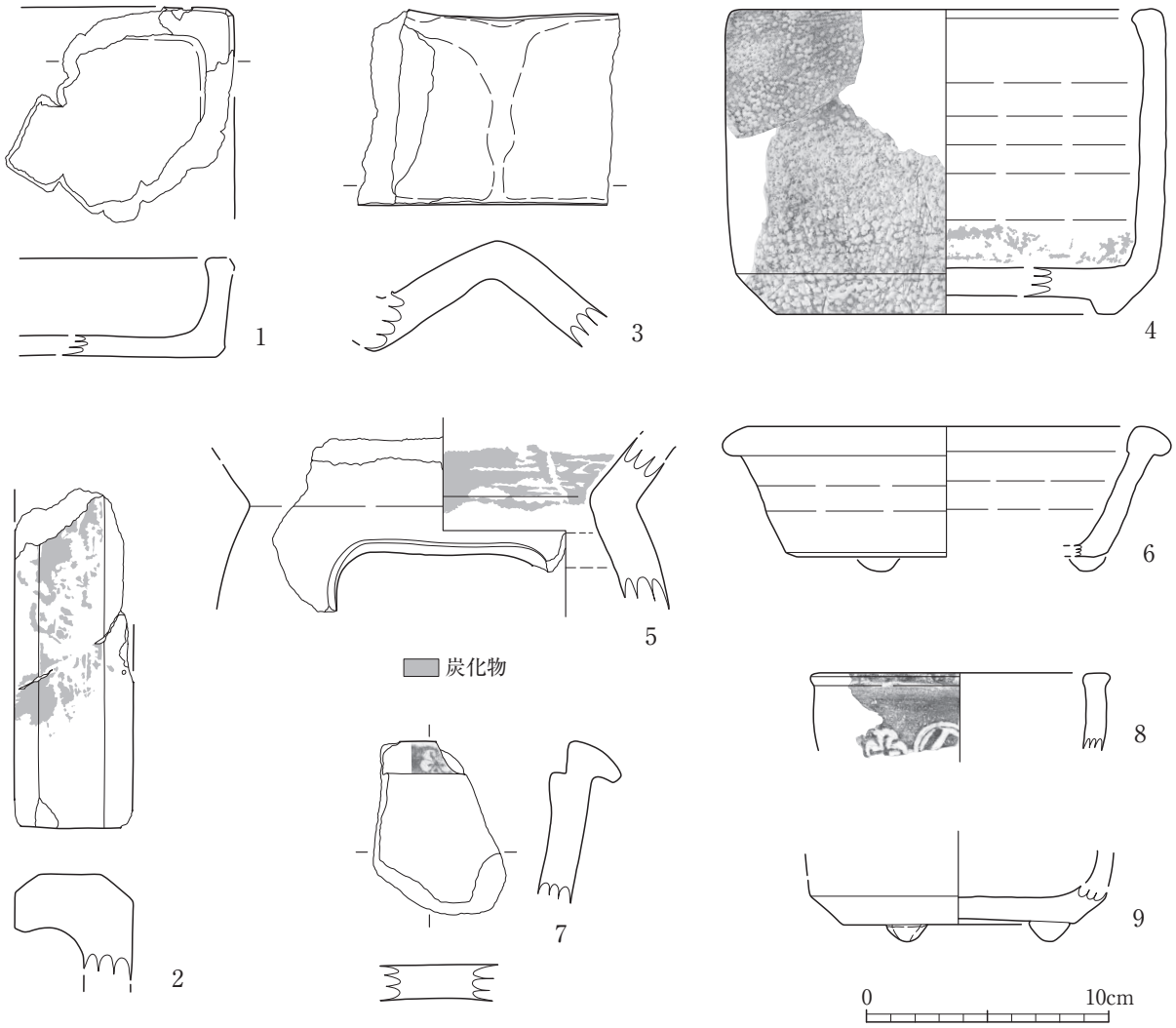


図37　武家屋敷地区第13地点出土瓦質土器
Fig. 37　Unglazed ceramics from BK13 (2)

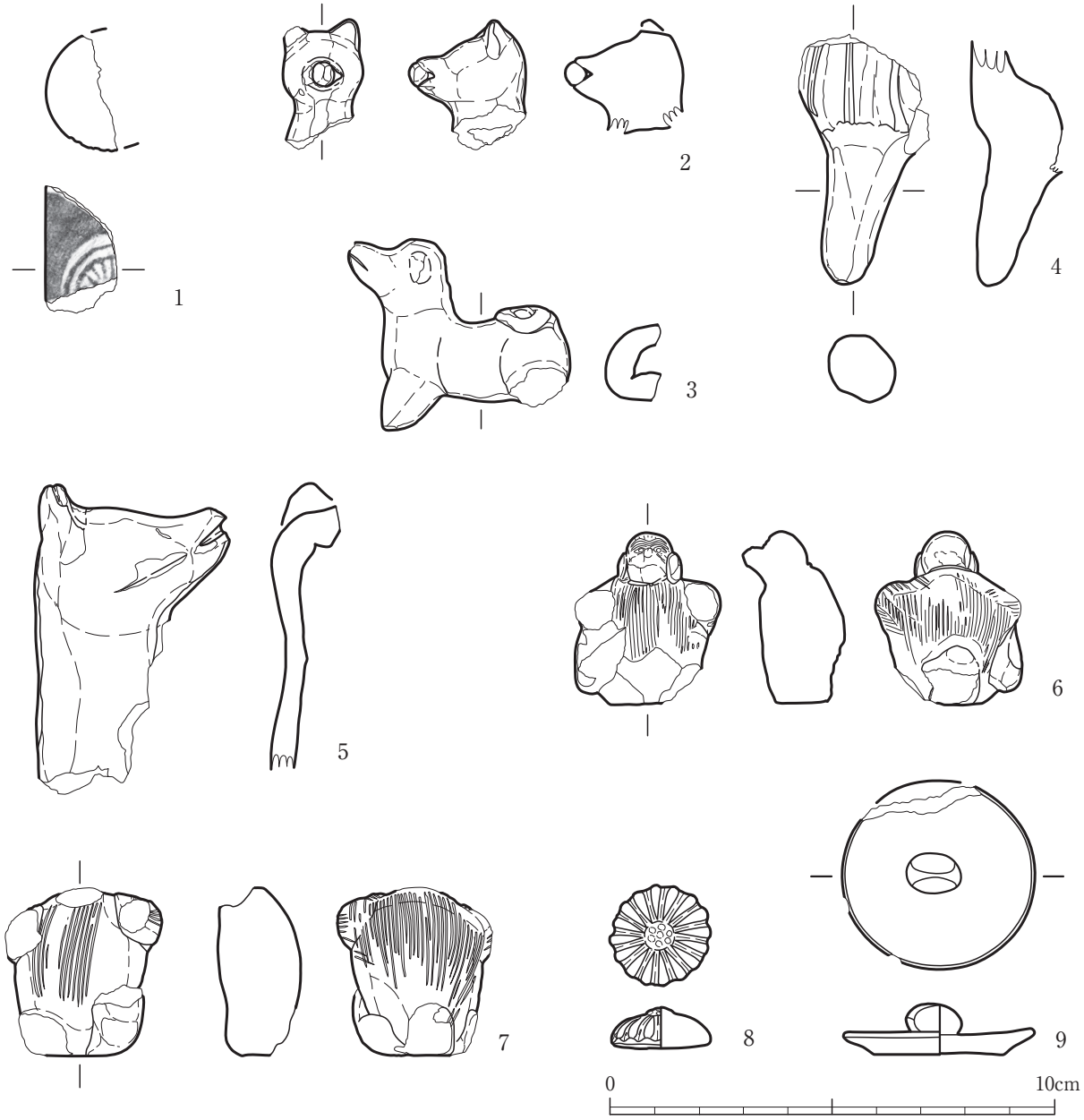


図38　武家屋敷地区第13地点出土土製品
Fig. 38　Clay objects and figures from BK13

図39　武家屋敷地区第13地点出土瓦（1）
Fig. 39　Various roof tiles from BK13 (1)

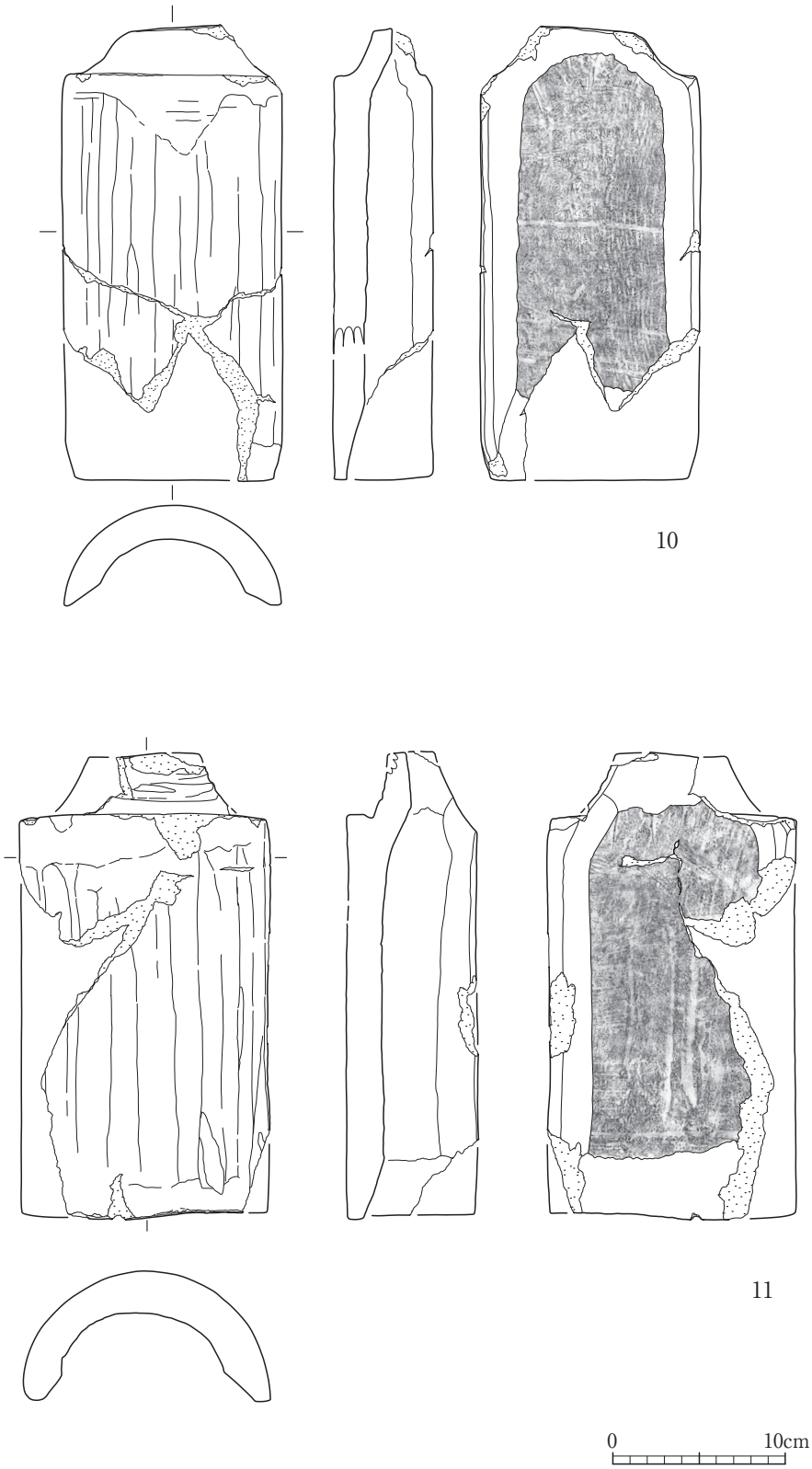


図40　武家屋敷地区第13地点出土瓦（2）
Fig. 40　Various roof tiles from BK13 (2)

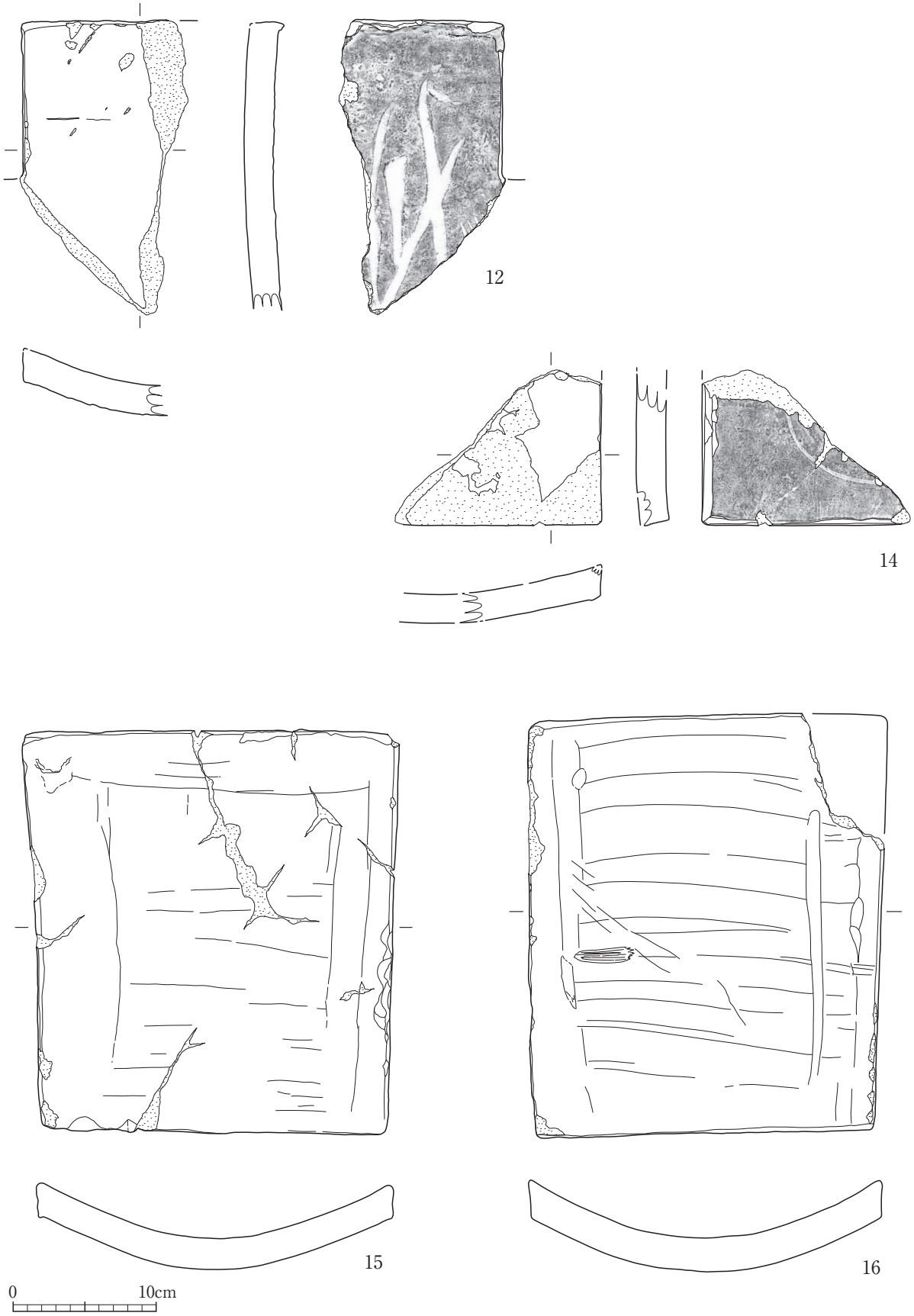


図41　武家屋敷地区第13地点出土瓦（3）
Fig. 41　Various roof tiles from BK13 (3)

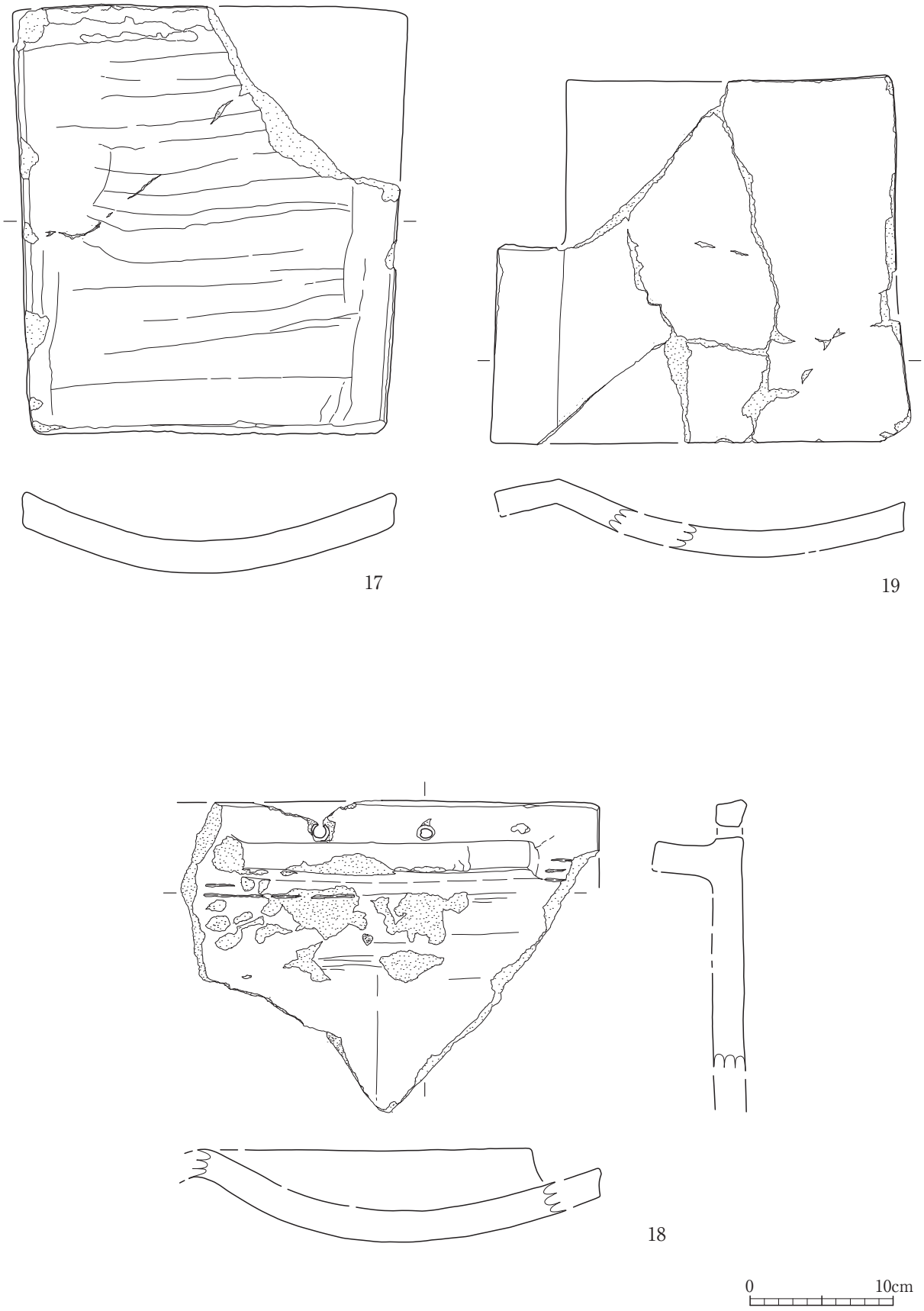


図42　武家屋敷地区第13地点出土瓦（4）
Fig. 42　Various roof tiles from BK13 (4)

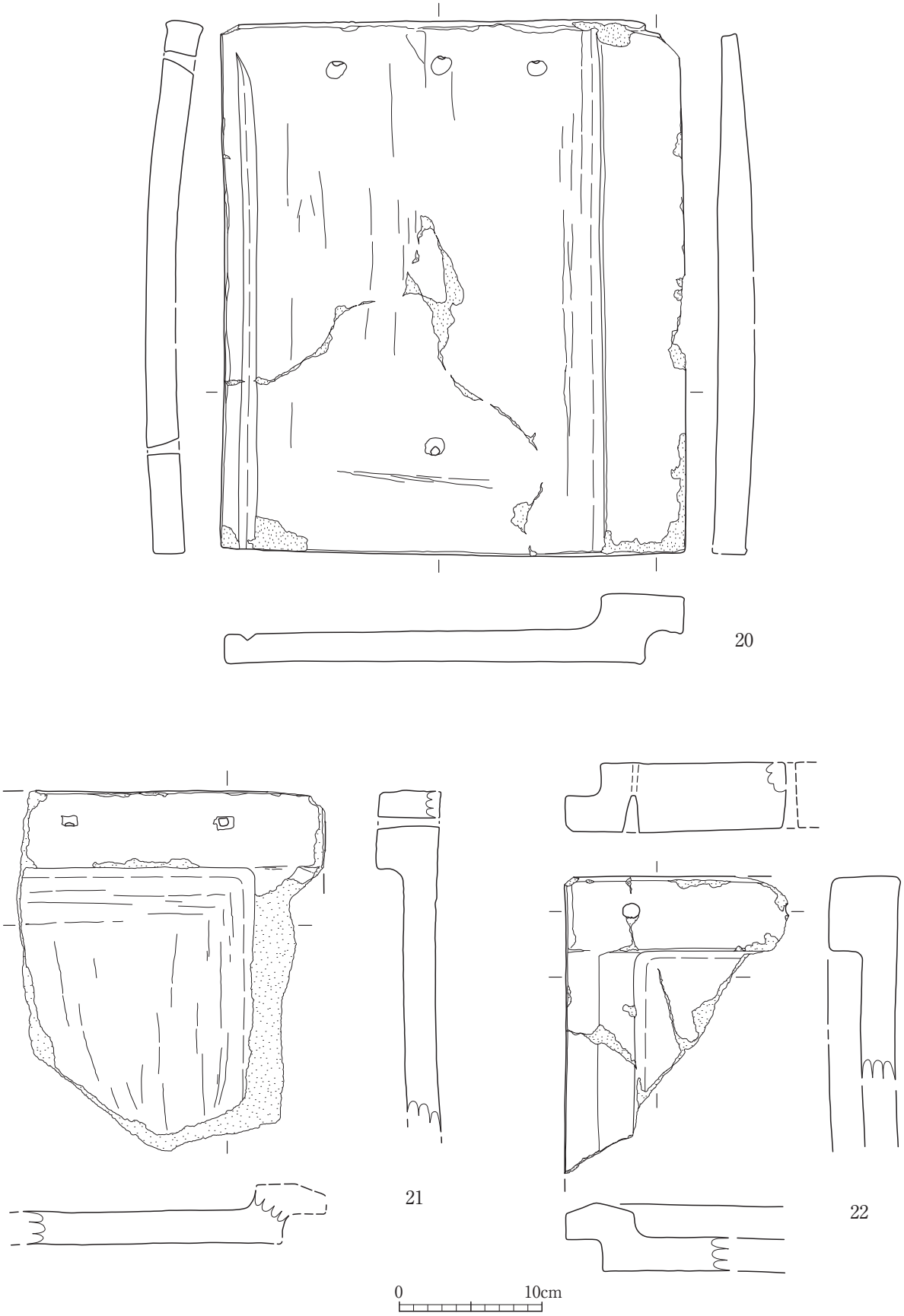


図43　武家屋敷地区第13地点出土瓦（5）
Fig. 43　Various roof tiles from BK13 (5)

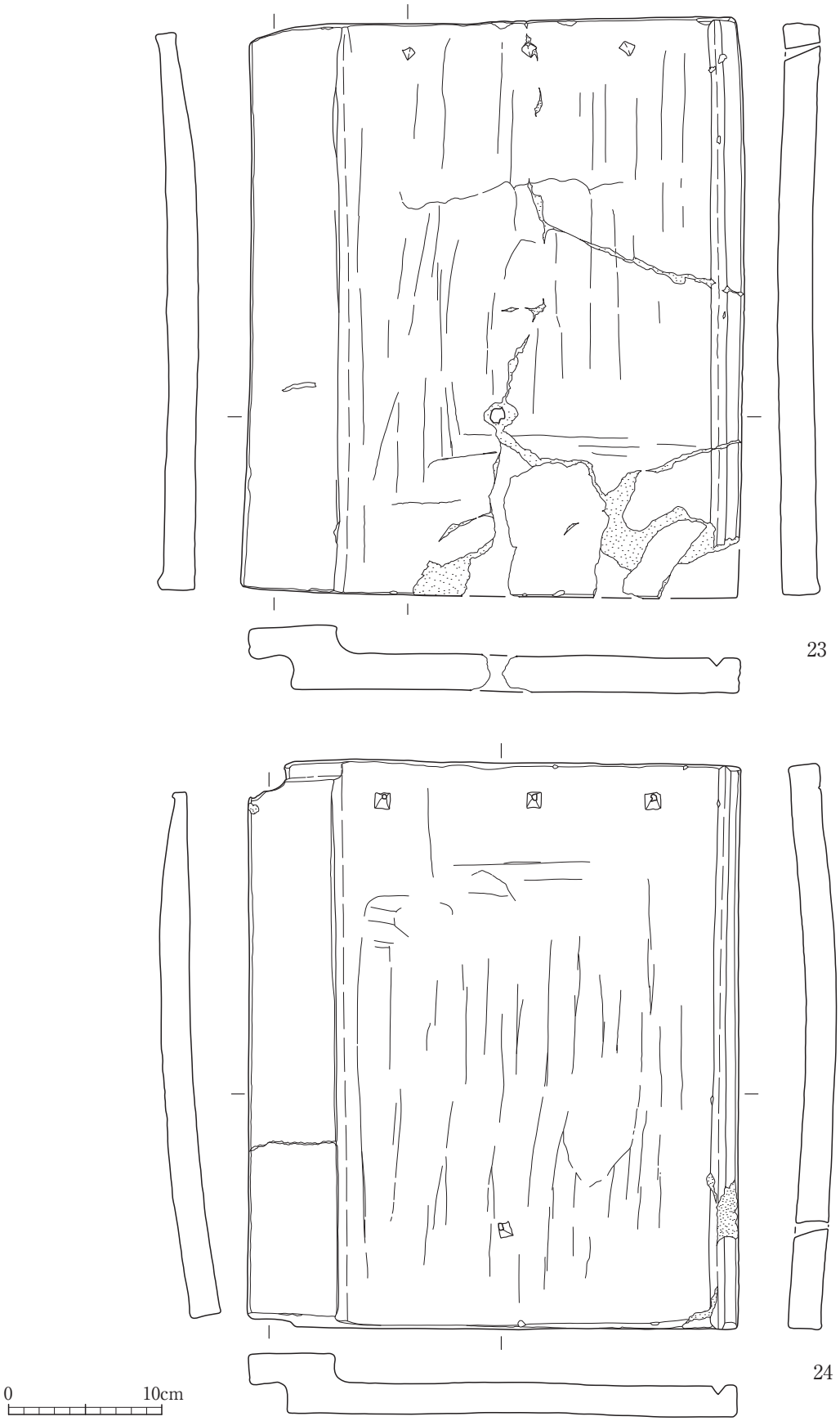


図44　武家屋敷地区第13地点出土瓦（6）
Fig. 44　Various roof tiles from BK13 (6)

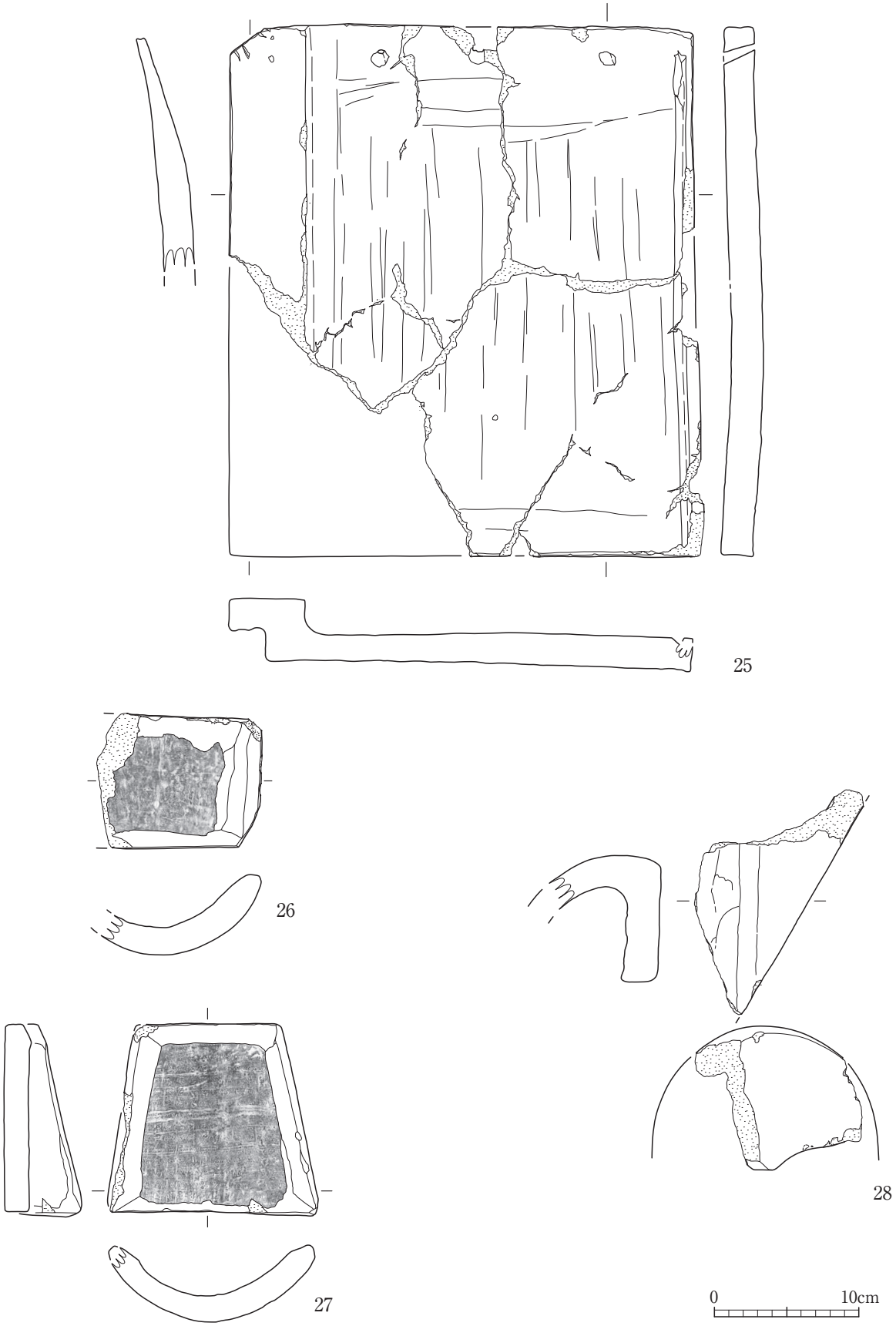


図45　武家屋敷地区第13地点出土瓦（7）
Fig. 45　Various roof tiles from BK13 (7)

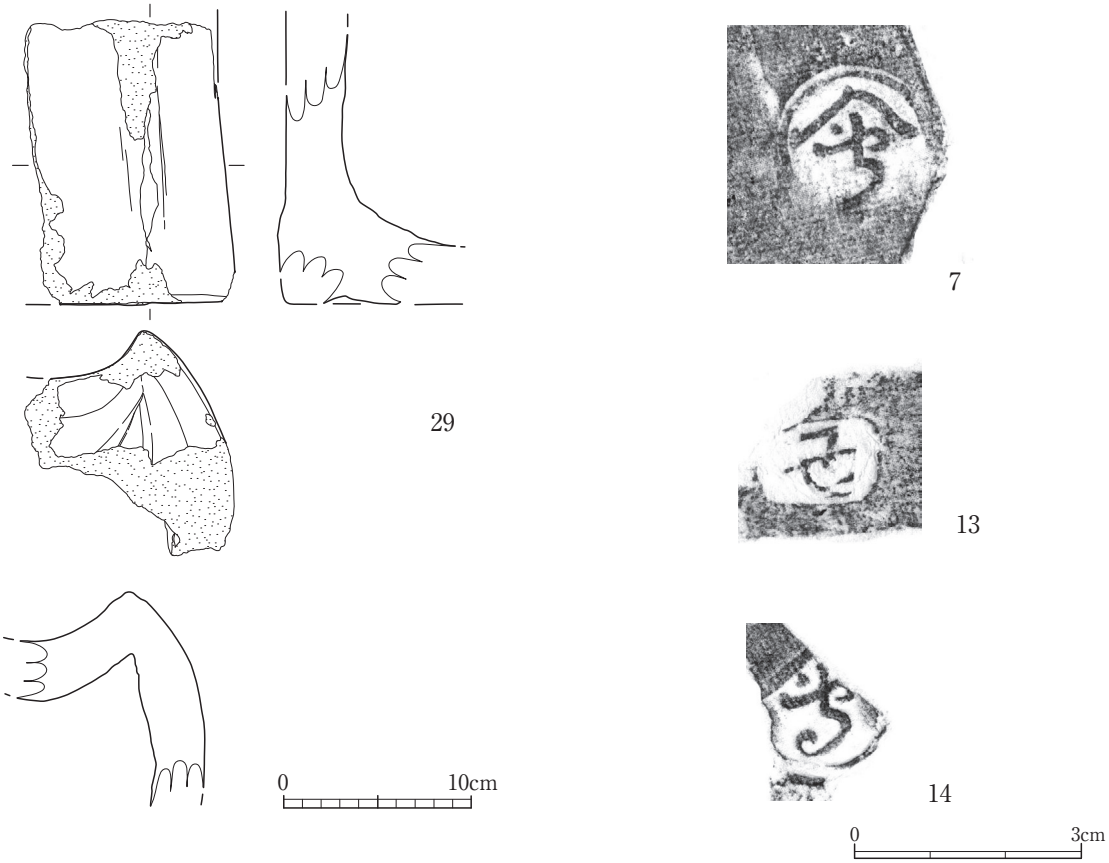


図46　武家屋敷地区第13地点出土瓦（8）
Fig. 46　Various roof tiles from BK13 (8)

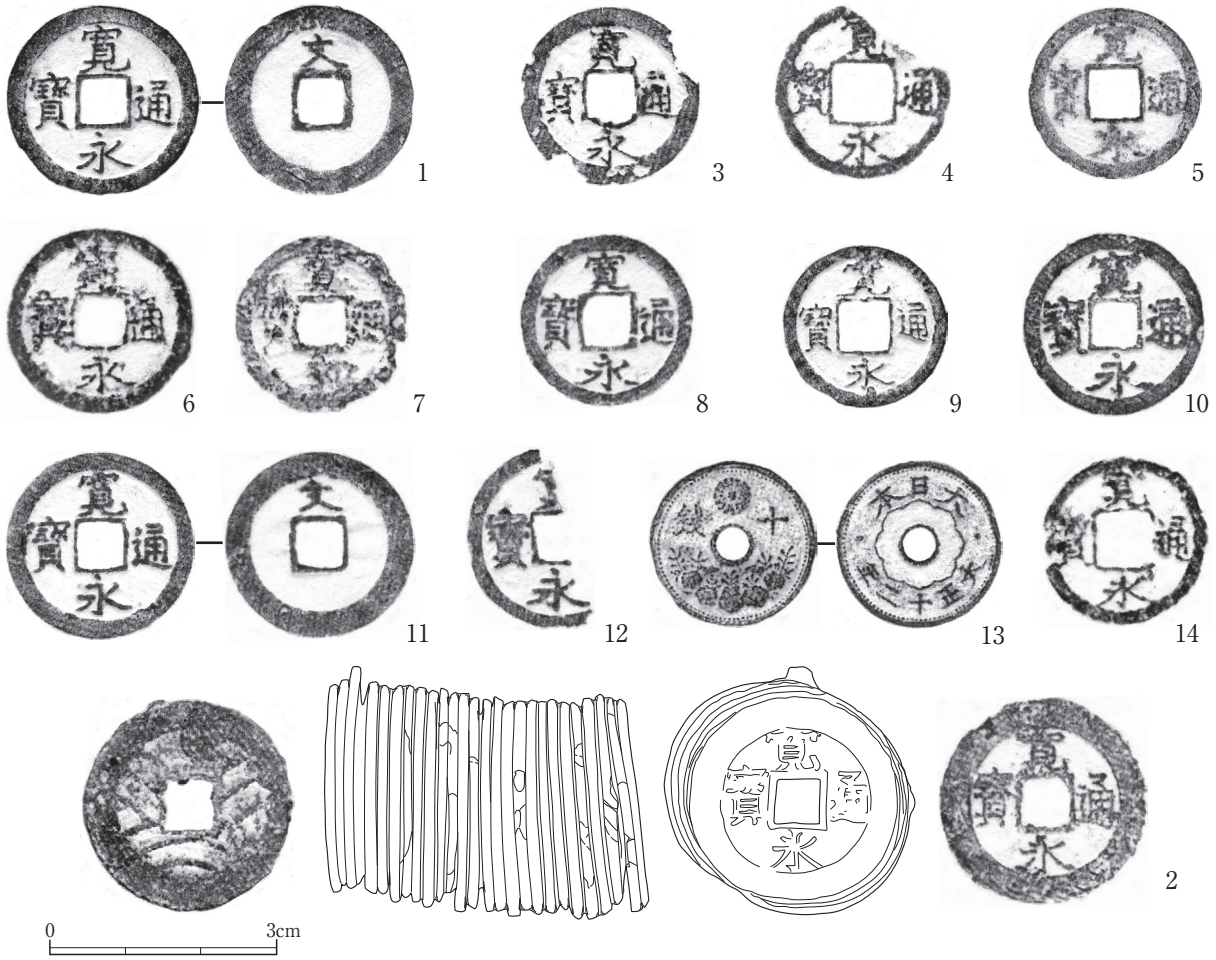


図47　武家屋敷地区第13地点出土古銭
Fig. 47　Coins from BK13

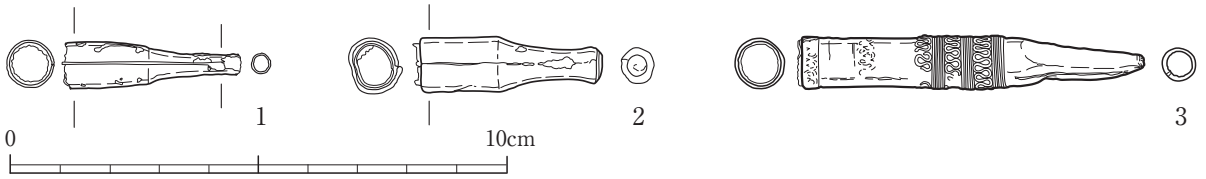


図48　武家屋敷地区第13地点出土煙管
Fig. 48　Pipes from BK13

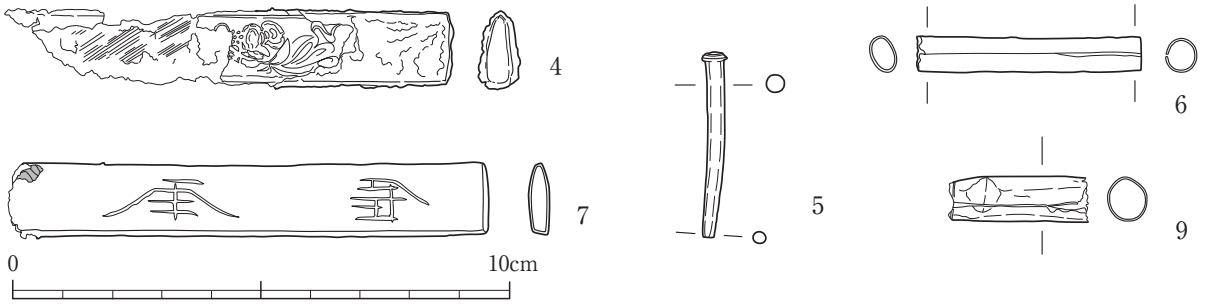


図49　武家屋敷地区第13地点出土その他の銅製品（1）
Fig. 49　Various implements made of copper from BK13 (1)

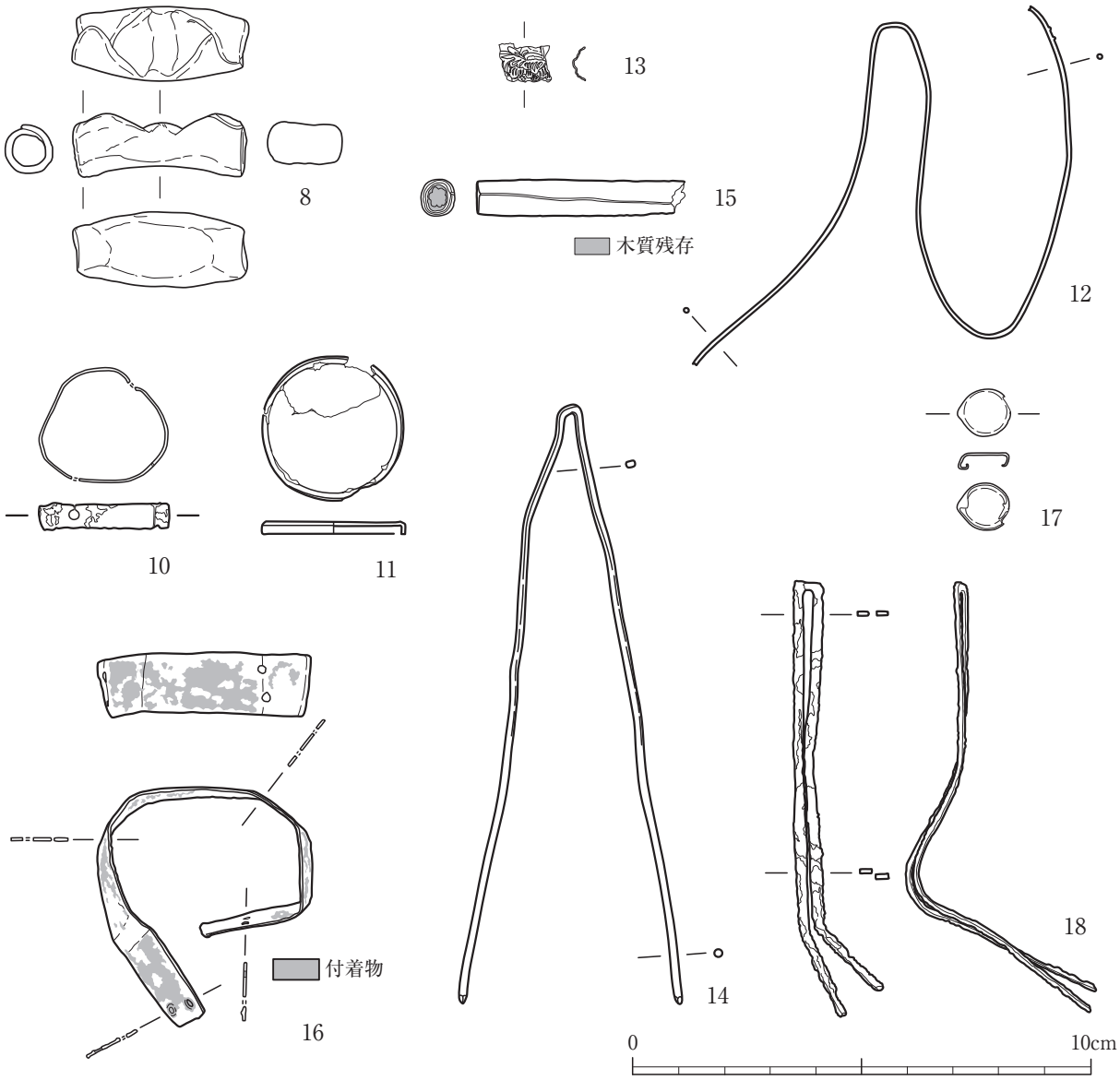


図50　武家屋敷地区第13地点出土その他の銅製品（2）
Fig. 50　Various implements made of copper from BK13 (2)

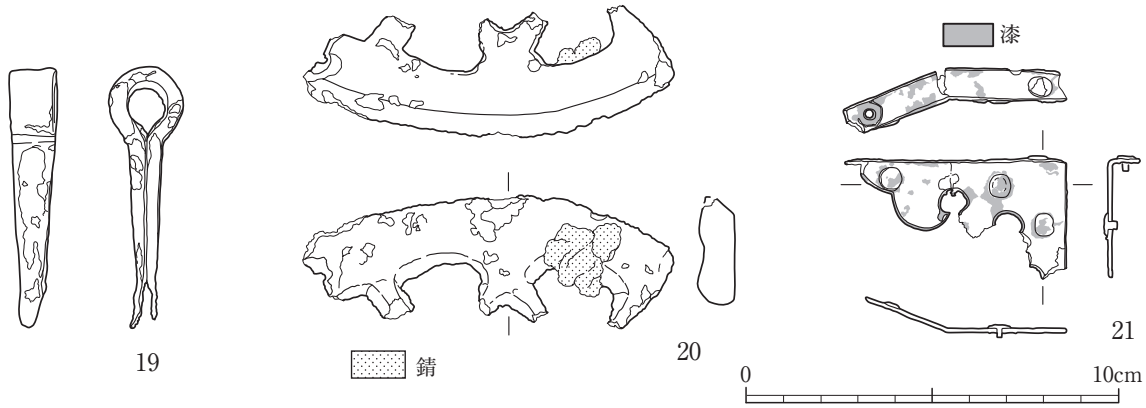


図51　武家屋敷地区第13地点出土鉄製品
Fig. 51　Various implements made of iron from BK13

図52　武家屋敷地区第13地点出土石器・石製品
Fig. 52　Stone tools and stone implements from BK13

表８　武家屋敷地区第13地点出土磁器集計表
Tab. 8　Distribution of porcelains from BK13

区	遺構名	大碗	中碗							猪口	小碗				碗不明	皿				小中鉢	碗鉢皿不明	袋物			蓋	その他	不明	合計
			丸	筒	端反	広東	その他	蓋	不明		丸	筒	端反	不明		大	小中	極小	不明			瓶類	不明	その他				
1区・2区	1号溝		65	2	15	5	腰張1、端反1	4	61	6	5	5	12	8	77	1	64	7	5		55	瓶類3、中瓶1、仏花瓶1	26	火入・香炉4、土瓶？2	1	紅猪口1、合子蓋1、蓋物3、小坏10、玩具急須？1、蓋物蓋2、合子身1、段重1、小坏？1、植木鉢？1	66	525
	1号溝掘方														1													1
	1号遺構a		1											1													1	3
	3号遺構		2	1	1				3				1				5		1		2						2	18
	4号遺構	1	31		12	1	腰張1		31		6	1	10	3	27	1	42				26		11	火入・香炉1		小坏5、蓋物3、紅猪口3、蓋物の蓋1、植木鉢1、合子身1、小坏？1、合子1	35	256
	6号遺構		1										1				1				3						3	9
	8号遺構			1													2		1							小坏1		5
	9号遺構								1																			1
	15号遺構		6		1			1	2						5		3			1	4		3			小坏2	2	30
	16号遺構							1			1																	2
	ピット20																				1					小坏1		2
	ピット187		1																		2							3
	ピット153								1																			1
	ピット164		1		1				1				1		2	3	1				1	燗徳利1	1		1			14
	ピット184																1											1
	A1層（1区）		17		4			1	9		1		2	3	16		13	1			16	3	9	火入・香炉1		急須？1、小坏3、仏飯器1、段重1、蓋物の蓋1	24	127
	1層・撹乱（1区）	2	190	8	76	2	2	10	204	8	14	12	49	27	164	3	232	11	20	5	205	燗徳利6、仏花瓶1、他8	44	土瓶？3、急須？4	11	人形？3、植木鉢？4、小坏28、仏飯器1、紅猪口4、蓋物10、水滴？4、蓋物の蓋2、合子身2	160	1539
	1層・撹乱（2区）		8		2	1			17	1		1	4		7		12	1	2		12	燗徳利4、他1	3	急須？1	1	小坏1、水滴？1、蓋物の蓋1	9	90
3区	13号遺構		1						2								2										1	6
3区	1層・撹乱				2		猪口1		1					1	1		5				1				1	蓋物1		14
5区	1層・撹乱																2								1			3
6区	1層・撹乱								2						1		2	1			1				1	小坏3	1	12
7区	1層・撹乱	1																										1
8区東	14号遺構																				2						2	4
	ピット25																1											1
	ピット214																1											1
	A1層				2				3						1		1				3	1				餌猪口1		12
	A2層																				1						2	3
	1層・撹乱		6						1						3		6				2	1	1			餌猪口1、小坏1、蓋物の蓋1		23
8区西	A1層		1		1			1							4		2				4					蓋物1、植木鉢？1	4	19
	A2層		1										1		2		4				1	2				小坏1、蓋物の蓋1	2	15
	1層・撹乱								1						1		2	1			1						1	7
立会調査地点	1区西-北側 1層・撹乱								2																			2
	1区東-南側 1層・撹乱		8	1	1				9			1	3	1	1		3				3		1				2	34
	3区-北側 1層・撹乱											1					2											3
	7区-北側 1層・撹乱	1	2		1				3			2			1		1				1							12
	8区西-西側 1層・撹乱		3		1						1				1		2											8
	8区西-北側 1層・撹乱		1		1										1		2				1							6
1層・撹乱（区不明）			2					1	3		1			2	1		9				8	他1	1		1		7	37
出土場所不明																											7	7
合計		5	348	13	121	9	6	19	357	15	29	23	84	46	317	8	423	22	29	6	356	34	100	16	18	122	331	2857

表９　武家屋敷地区第13地点出土陶器集計表
Tab. 9　Distribution of glazed ceramics from BK13

区	遺構名	大碗	中碗丸			小碗	碗不明	皿					鉢類			擂鉢	鉢その他	碗鉢皿不明	壺甕類				袋物					土鍋	行平	鍋蓋	その他	不明	合計
			丸	その他	不明			大	小中	極小	向付	不明	大鉢	小中鉢	片口鉢				壺	瓶	甕	不明	土瓶身	土瓶蓋	灰吹火入・	不明	その他						
1区・2区	5号柱列																															1	1
	1号溝	1	100	腰折７、筒１、端反８、腰張１、平杉１	56	14	28	1	70				4	10	3	27	植木鉢１	103	1	徳利１、中瓶１、瓶１	3、豆甕１	14	147	8	10	50	香炉？２	10	蓋１		乗燭３、人形１、蓋７、灯明受皿２、灯明皿３、取手１	120	823
	1号遺構a																	1															1
	1号遺構b													1																			1
	3号遺構		7	腰折１	2	1	4		3					1		4		10	1			1	11			1						9	56
	4号遺構		50	腰折２、筒形１、端反１、平杉１	17	5	5	1	42				6	4	1	18	植木鉢２、火鉢？１	47	1	2	2	3	38	4	3	24	水注？１	3	1		窯道具1、蓋3、銚子2、合子身1、蓋物2、乗燭1、灯明皿2、取手1	69	368
	6号遺構		1						2							3		1					6			2						2	17
	8号遺構		1								1			1																			3
	9号遺構		1																													1	2
	15号遺構		1	端反１	1	1			1					1		6		10		2	豆甕１		6			3		3			仏飯器？１、蓋１	9	48
	16号遺構													1														1					2
	ピット20															1		1								1							3
	ピット107		1		1														1														3
	ピット120															1																	1
	ピット164		1						1							1		2					5	1		2		1			灯明皿１	2	17
	ピット165																															1	1
	ピット184				1																												1
	ピット187		2		1													1															4
	A1層（１区）	1	19	端反３	5	3	1		4					3		5		26		2	2	2	25	2	2	7		5	1		蓋1、蓋物1、合子蓋1、灯明皿1	30	152
	1層・撹乱（1区）	2	194	端反14、筒５、腰折11、他２	79	21	23	1	108				13	19	1	67	植木鉢６	183	4	7	16、豆甕２	25	167	15	8	91	急須？１、唾壺？１、水指？１、香炉？１	11	蓋２		蓋4、人形1、取手1、灯明皿1、水滴2、仏飯器3、合子（身）2、乗燭3、人形（魚）1	202	1321
	1層・撹乱（2区）		11	端反１、腰折１	3	1			8		1	1		1		3		15		1		3	4	2	2	3	水注？１					9	71
3区	13号遺構		1		2																					1						2	6
4区南	1層・撹乱		3						2					1		1		1					1								香炉蓋１	2	12
5区	1層・撹乱		1		1	1												1															4
6区	1層・撹乱													1												1						2	4
8区東	14号遺構		1															1					1					1			灯明皿１	2	7
	ピット214															1																	1
	A1層		5		3				2							1		2					2			2						6	23
	A2層		2													1							1									1	5
	1層・撹乱		3		2											2					2	1				2					蓋１	3	16
8区西	ピット217															1														2			3
	A1層		5		1	1			7							3		10					1	1	1							4	34
	A2層		1		2											5		3			豆甕２		1			5						1	20
	1層・撹乱		2		1													3			1		1									2	10
立会調査地点	1区東-南側A1層相当														1																		1
	7区-北側 1層・撹乱																	1															1
	1区東-南側 1層・撹乱		3													1		2					2	1							仏飯器１	2	12
	7区-北側 1層・撹乱				2	1																	1								仏飯器１		5
1層・撹乱（区不明）			2	腰折１	1		1		5				1	1				5					3			4					合子身１		25
出土場所不明																							1									1	2
合計		4	418	63	181	49	62	3	255	1	1	1	24	45	6	152	10	429	8	17	32	49	424	34	26	199	8	35	5	2	61	483	3087

表10　武家屋敷地区第13地点出土瓦集計表
Tab. 10　Distribution of roof tiles from BK13

重量の単位 g

区	出土場所	軒丸瓦		軒平瓦類		軒桟瓦		丸瓦		丸瓦類		平瓦１類		平瓦２類		平瓦		桟瓦		桟瓦類		板塀瓦		面戸瓦		輪違い		その他		不明		合　計	
		個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量	個数	重量
1区・2区	2号建物											5	719	3	251							2	477							3	52	13	1,499
	4号建物													1	200															2	27	3	227
	2号柱列											1	78																			1	78
	3号柱列											1	167																			1	167
	4号柱列																													1	3	1	3
	5号柱列							1	238	1	24	4	1,226							1	277			1	329					3	145	11	2,239
	6号柱列											1	392																			1	392
	1号溝	2	467	3	1,551	2	986	3	1,477	48	5,857	158	39,125	45	8,681	1	2,580	6	4,216	4	300	16	6,484					鬼瓦１、谷丸瓦１	2,218	142	3,032	432	76,974
	1号溝b							2	635	1	260	8	2,097									1	303							2	38	14	3,333
	1号溝堀方																					1	262									1	262
	1号遺構a			1	103			1	120	7	970	10	2,724	1	65	1	2,500													4	296	25	6,778
	1号遺構b							4	1,866	9	3,229	33	11,117	31	6,245	1	2,630					10	18,977					面戸付板塀瓦２	3,020	39	365	129	47,449
	3号遺構									5	1,070	5	504	4	360							2	233							11	285	27	2,452
	4号遺構	1	70	1	58			5	2,579	9	2,293	44	8,176	11	1,471							5	2,122							16	344	92	17,113
	6号遺構									3	312	7	1,351	1	345							1	387							1	30	13	2,425
	8号遺構									1	141	5	1,907																	1	52	7	2,100
	9号遺構									1	90																					1	90
	15号遺構											3	249							1	61											4	310
	17号遺構											2	873																			2	873
	ピット11											2	140																			2	140
	ピット17											2	506	10	3,030							9	17,472							29	83	50	21,091
	ピット27																													2	16	2	16
	ピット29											2	330																			2	330
	ピット38											1	210																			1	210
	ピット45											1	479	4	2,830							2	2,100									7	5,409
	ピット55													1	472																	1	472
	ピット107									8	601	9	828	3	234															15	285	35	1,948
	ピット116													1	88															1	29	2	117
	ピット120											4	2,525																			4	2,525
	ピット122													2	615							1	360									3	975
	ピット125											1	165																			1	165
	ピット144																					1	842									1	842
	ピット152																					1	278									1	278
	ピット156									1	288			1	283							1	92							1	8	4	671
	ピット161											1	48							1	495									1	9	3	552
	ピット164	1	1,363									2	638	2	168					1	355	1	1,040							3	18	10	3,582
	ピット184											1	116																			1	116
	A1層（1区）									4	477	8	955																	2	4	14	1,436
	1層・撹乱（1区）	3	802	1	345	1	120			11	1,090	29	3,078	6	647			1	92	3	243	1	105			2	725	棟瓦１、鬼瓦２	1,153	29	555	90	8,955
4区	1層・撹乱					1	86					2	199																	1	12	4	297
5区	1層・撹乱									1	62																					1	62
8区東	14号遺構									1	272																			1	13	2	285
	ピット25																													1	68	1	68
	A1層																													1	30	1	30
8区西	ピット217											1	152																	1	7	2	159
	A1層							1	56	3	328	8	1,412									1	402					古代瓦１	48	3	33	17	2,279
	A2層									1	18	1	95																	2	33	4	146
合計		7	2,702	6	2,057	4	1,192	17	6,971	115	17,382	362	82,581	127	25,985	3	7,710	7	4,308	11	1,731	56	51,936	1	329	2	725	8	6,439	318	5,872	1,044	217,920

表11　武家屋敷地区第13地点出土土師質土器・瓦質土器集計表
Tab. 11　Distribution of unglazed ceramics from BK13

区	出土場所	土師質土器						瓦質土器			合計
		皿	火消壺	鉢	焙烙	その他	不明	蚊遣り	その他	不明	
1区・2区	1号溝	73		鉢類3	1		24	3	十能1、五徳1、さな2、鉢類（脚部）1、鉢類2	20	131
	1号遺構a	3								1	4
	1号遺構b	3									3
	3号遺構	8					5	2		1	16
	4号遺構	39		鉢類3	5		15	2	さな1、鉢類3、甕壺類1	12	81
	6号遺構	1					2		さな1、方形鉢状1	2	7
	8号遺構	2									2
	9号遺構						1				1
	15号遺構	11					3			4	18
	ピット45	1									1
	ピット107	11					2			1	14
	ピット164	3								1	4
	ピット187							1		1	2
	A1層（1区）	18		鉢類1		灯明皿1	35	1	鉢類1、炭櫃1	6	64
	1層・撹乱（1区）	103	4	鉢類3	2	灯明皿1、壺？1	38	2	鉢類9、さな2、甕壺類1	22	188
	1層・撹乱（2区）	2					2	1	鉢類1	1	7
3区	13号遺構								鉢類1		1
5区	1層・撹乱	2									2
8区西	A1層	3		鉢類1		壺1	2			1	8
8区東	A2層	3									3
	1層・撹乱								鉢類1	1	2
出土場所不明										1	1
合計		286	4	11	8	4	129	12	31	75	560

表12　武家屋敷地区第13地点出土金属製品集計表
Tab. 12　Distribution of various implements made of metal at BK13

区	出土場所	銅製品						鉄製品				合計
		古銭			煙管	その他	不明	和釘	洋釘	その他	不明	
		古	新	その他								
1区・2区	1号溝		1		吸口1	釘1、管状1、留め金具？1、板状1、容器蓋？1、管状1、小柄の柄1	3	10				22
	3号遺構						1					1
	4号遺構					目貫1、縁金具？1、ボタン状1、簪1、筒状1、針金状1		5		束状鉄銭1、留め金具3、鉄銭26		42
	6号遺構										1	1
	8号遺構				1	小柄の柄1						2
	15号遺構				1			3		飾り金具1、簀1	2	8
	ピット11							1				1
	A1層（1区）		1		1	簪1		9		鉄銭1	3	16
	1層・撹乱（1区）	4	4	十銭 白銅貨1	吸口2	蓋1、筒状1、針金状1、棒状1、環状金具1、弾丸？1	4	10	2	鉄銭1、箸状（木付）1、箸状1、栓抜？1、棒状（木付）1	7	45
	1層・撹乱（2区）					懐炉？1	1	1	1		2	6
合計		4	6	1	6	22	9	39	3	39	15	144

表13　武家屋敷地区第13地点その他の遺物集計表
Tab. 13　Distribution of various implements at BK13

区	出土場所	土製品					軟質施釉陶器			漆塗製品		木製品	植物遺存体	石器・石製品	ガラス製品	合計
		土師質				軟質施釉										
		ミニチュア	土人形	その他	不明		焙烙	他	不明	椀	その他					
1区・2区	1号溝	1	2	1	4		38	2	16	椀？1		加工木3	種子3	砥2、碁石1、不明粘板岩6、砥2		82
	3号遺構				1		1		1					不明粘板岩1		4
	4号遺構		1		2	1	15		10	椀1、椀？1	板状1、膜1	杭2、加工木1	種子2	剝片2、砥1、不明粘板岩4、判子1	ガラス玉1	47
	16号遺構						1									1
	15号遺構						6			椀（漆膜）1		箸？1、加工木1	種子1			10
	ピット164										膜1					1
	A1層（1区）			1	2		3		4					剝片1、碁石1、火打石1、不明粘板岩2		15
	1層・撹乱（1区）	6	5	2	4		45	1	9			楔状1、加工木1		砥石3、不明1、碁石1、剝片1、不明粘板岩3		83
	1層・撹乱（2区）													砥1	小瓶1、ビール瓶1	3
8区東	A1層						1							火打石1		2
	A2層				1				1					不明石製品1		3
8区西	A1層						1		1							2
	A2層						1									1
出土場所不明					1											1
合計		7	8	4	15	1	112	3	42	4	3	10	6	37	3	255

表14　武家屋敷地区第13地点出土磁器観察表（1）
Tab. 14　Notes on porcelains from BK13 (1)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ001	8号遺構検出面	小中皿	—	11.3	—	見込み青花花弁宝文	密	中国	明末清初（17c初～中）	欠損部分は意図的な敲打痕か　景徳鎮	27	23
CJ002	1号溝埋土1層	小中皿	14.0	6.9	3.2	斜格子文	密	肥前	18ｃ	蛇の目釉剥ぎ　焼継剤が残存	27	23
CJ003	1号溝埋土1層	植木鉢？	—	—	—		普通	肥前	19c	墨書「利ク」 孔あり	27	23
CJ004	1号溝埋土2a層（H・I・J11区）	中型丸碗	11.2	—	—	色絵（金・赤・緑・黒）染付丸に花文　折枝松文	密	肥前	18c前半？		27	23
CJ005	1号溝埋土	中型丸碗	10.8	4.8	6.1	菊花文　高台内「冨貴長春」銘	普通	肥前	17c末～18c後		27	23
CJ006	1号溝埋土	中型丸碗	10.0	3.8	5.4	楓に宝文　縁内渦巻き文	普通	肥前	19c前～中	漆継ぎ	27	23
CJ007	1号溝埋土	中型丸碗	—	4.0	—	二重網目文　高台内渦「福」銘	普通	肥前	18c中～後		27	23
CJ008	1号溝埋土	小碗端反	—	3.5	—	草花立湧文　見込み文様あり	普通	肥前	19c		27	23
CJ009	1号溝埋土	小型筒形碗	—	4.7	—	色絵（赤・黒）染付区画内宝文　蓮弁文	密	肥前	19c前半		27	23
CJ010	1号溝埋土1層	小中皿	10.0	4.9	2.9	三彩型打輪花皿	密	切込	19c中～後	三彩釉（茄子紺・青緑・白）高台内施釉 高台畳付に目跡3カ所	27	23
CJ011	1号溝埋土	極小皿	8.5	3.8	2.3	白磁型打花牡丹文　卍字崩し文	普通	瀬戸	19c中葉	焼継ぎ　焼継印あり	27	23
CJ012	1号溝埋土	中碗蓋	9.4	—	3.1	窓絵松梅文　縁内雷文　見込み竹文	普通	肥前	19c前～中	つまみ径4.0cm	27	23
CJ013	1号溝埋土	蓋物（蓋）	9.2	—	—	弧線地文に撫子	普通	肥前	19c前～中		27	23
CJ014	1号溝埋土	蓋物	7.4	4.3	4.2	桐文（こんにゃく判）	密	肥前	18c	貫入	27	23
CJ015	1号溝埋土	蓋物	8.6	—	—	斜格子に植物文　腰部錆釉	普通	肥前	18c		27	23
CJ016	1号溝埋土	段重	14.5	10.0	6.0	花唐草文	普通	肥前	18c後～19c初	焼継ぎ　焼継印あり	27	23
CJ017	1号溝埋土	火入・香炉	—	5.0	—	透彫　菊花文	普通	肥前	不明	貫入	28	23
CJ018	1号溝埋土	土瓶	7.3	—	—	区画花文　渦巻文	普通	切込	19c中～後		28	23
CJ019	1号溝埋土	仏花瓶	9.3	—	—	文様あり	普通	肥前	17c後～18c		28	23
CJ020	1号溝埋土	瓶類	—	5.7	—		普通	不明	19c後半?	無釉	28	23
CJ021	6号遺構埋土	中型丸碗	9.0	4.5	5.0	草花文	密	肥前	19c前～中		28	23
CJ022	9号遺構埋土2層	中碗不明	—	4.4	—	文様あり	普通	切込？	19c中～後		28	24
CJ023	15号遺構埋土	中型平形碗	9.7	3.9	3.7	波に雲竜文	普通	瀬戸	19c	焼継ぎ　素描き	28	24
CJ024	15号遺構埋土	小坏	6.6	2.8	3.1	色絵（金・黒・赤）福寿草に綿帽子婦人文	密	不明	19c		28	24
CJ025	15号遺構埋土	中碗蓋	9.4	—	3.0	宝に瓢箪文　見込み瓢箪文　縁内櫛歯文　つまみ内銘	密	肥前	19c前～中	つまみ径4.0cm	28	24
CJ026	15号遺構埋土	小中鉢	—	—	—	区画格子文　外面宝文	やや粗	肥前	19c前半	貫入	28	24
CJ027	4号遺構埋土	中型丸碗	10.3	3.9	6.0	蓮弁文によろけ縞文	普通	肥前	19c前～中	焼継ぎ　高台内朱文字 「□　千□□　　九千六」か	28	24
CJ028	4号遺構埋土	中型丸碗	10.5	4.0	5.5	区画よろけ縞文　見込「成化」「制」	密	瀬戸	19c中～後	焼継ぎ　高台内朱文字 「千□八百八十　　千□五百　　九千六」か	28	24
CJ029	4号遺構埋土	中型丸碗	10.1	3.7	4.6	草花文	普通	肥前	18c前～中	貫入	28	24
CJ030	4号遺構埋土1層	大皿	—	15.5	—	青花芙蓉手花鳥文	密	中国	明末清初（17c初～中）	景徳鎮民窯　高台内放射状工具痕 高台畳付に砂付着	28	24
CJ031	4号遺構埋土	火入・香炉	—	10.7	—	青磁　三足付蛇ノ目凹形高台　獣足	やや粗	肥前	18c前半？	貫入　波佐見	29	24

表15　武家屋敷地区第13地点出土磁器観察表（2）
Tab. 15　Notes on porcelains from BK13 (2)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CJ032	1区東 A1層	うがい茶碗	—	5.1	—	色絵（赤・緑・黒・紫）染付竹梅文	密	肥前	19c前半？		29	25
CJ033	1区東 A1層	小中皿	13.5	8.3	4.0	雪輪に草花文　見込み五弁花文（こんにゃく判）　高台内銘	普通	肥前	18c		29	25
CJ034	1区東 A1層	極小皿	—	—	2.7	型打　七宝・梅文・牡丹文	密	瀬戸	19c中葉		29	25
CJ035	1区東－南側 立会地点 A1層相当	中型丸碗	11.7	4.9	5.6	海浜風景文	普通	肥前	17c後半		29	25
CJ036	1区 1層・撹乱	中型丸碗	9.3	3.3	5.4	横縞に紅葉文　内面色絵（紅葉文）	やや粗	肥前	19c前～中	貫入	29	25
CJ037	1区 1層・撹乱	中型丸碗	9.5	3.6	5.2	雪輪に草花文　高台内銘	普通	肥前	18c	波佐見　くらわんか手	29	25
CJ038	1区 1層・撹乱	中型端反碗	12.6	5.2	6.9	梅花文　見込み文様あり	密	瀬戸	19c中葉		29	25
CJ039	1区 1層・撹乱	中型端反碗	12.2	4.8	7.0	よろけ縞文　見込み文様あり	普通	肥前	19c前～中		29	25
CJ040	1区 1層・撹乱	小型端反碗	8.2	3.5	4.4	草花立湧文　見込み文様あり	普通	切込？	19c中葉		29	25
CJ041	1区 1層・撹乱	小型端反碗	9.1	4.2	4.5	割菊花文に唐草文	密	瀬戸	19c中～後	焼継ぎ	29	25
CJ042	1区 1層・撹乱	猪口	6.8	3.4	4.5	八仙文　「候先生」「鐵拐先生」「洞賓」か「「麻姑」か「鍾離権」か　高台内「大明」「暦」銘	密	瀬戸	19c		29	25
CJ043	1区 1層・撹乱	中碗蓋	10.5	—	3.2	外面青磁　見込み蝶に葉文　高台内渦「福」銘	密	肥前	18c中～後	つまみ径4.2cm	29	26
CJ044	1区 1層・撹乱	中碗蓋	9.7	—	3.1	流水に橘文　高台内渦「福」銘	普通	肥前	18c中～後	貫入　つまみ径3.1cm	30	26
CJ045	1区 1層・撹乱	中碗蓋	9.4	—	2.5	梅花文　見込み・高台内文様あり	普通	瀬戸	19c中	つまみ径3.5cm	30	26
CJ046	1区 1層・撹乱	蓋物の蓋	8.9	—	1.8	色絵（金・赤・緑・黒）染付梅花文に雪輪竹文・草花文	蜜	肥前	18c	焼継ぎ	30	26
CJ047	1区 1層・撹乱	小中皿	16.2	6.2	3.8	青磁　口紅　外面体部下半から高台部鉄銹	普通	肥前	17c中葉	波佐見　碁笥底　高台内青磁釉　貫入	30	26
CJ048	1区 1層・撹乱	小中皿	13.0	4.7	3.6	青磁　高台内無釉　見込蛇ノ目釉剥ぎ	やや密	肥前	17c後半		30	26
CJ049	1区 1層・撹乱	小中皿	13.3	7.8	2.9	染付墨弾線描文　見込み五弁花文（こんにゃく判）	密	肥前	17c末～18c前半		30	26
CJ050	1区 1層・撹乱	火入・香炉	9.8	7.5	7.3	色絵（金・赤・緑・黄・黒）染付窓絵宝文？と梅樹文?	普通	肥前	18c末～19c前半	蛇ノ目凹形高台　底部墨書あり 口縁部に敲打痕	30	26
CJ051	1区 1層・撹乱	火入・香炉	7.0	6.3	7.4	青磁	普通	肥前	不明	底部無釉	30	26
CJ052	2区 1層・撹乱	小坏	6.9	2.3	3.1	櫛歯文	密	瀬戸	19c中葉以降		30	26
CJ053	1区東－南側 立会地点1層・撹乱	小型端反碗	8.5	—	—	葡萄文？	蜜	切込？	19c中～後		30	26
CJ054	4区 1層・撹乱	中型端反碗	9.3	—	—	雪輪に松文	普通	不明	19c中～後		30	26

表16　武家屋敷地区第13地点出土陶器観察表（1）
Tab. 16　Notes on glazed ceramics from BK13 (1)

登録番号	出土場所	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT001	8号遺構埋土	小中皿	14.9	4.5	4.7	鉄絵（暗茶褐色）草文	灰釉（灰色）	普通	肥前	17c初	絵唐津　皮鯨　貫入	31	27
CT002	1号遺構ｂ埋土	小中鉢	—	7.3	—		灰釉（淡青灰白色）	粗	小野相馬	18c	見込み目跡3ヶ所　半失透釉	31	27
CT003	1号溝埋土	中型丸碗	10.2	3.9	5.8		鉄釉流し掛け（淡黄褐色）	密	大堀相馬	18c後半～19c前半	貫入　半失透釉	31	27
CT004	1号溝埋土	中型端反碗	10.1	3.8	5.6		灰釉（灰白色）	普通	大堀相馬	19c前～中	高台内墨書あり　失透釉	31	27
CT005	1号溝埋土1層	中碗不明	—	3.5	—		灰釉（淡黄灰白色）	密	大堀相馬	18c後半～19c前半	高台内墨書「松前」か	31	27
CT006	1号溝埋土	小中皿	12.4	5.6	3.1	鉄絵山水文（暗茶褐色）	灰釉（淡緑灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c前半	見込目跡3ヶ所　半失透釉	31	27
CT007	1号溝埋土	小中皿	—	5.6	—	見込み印花文	灰釉（淡青灰白色）	粗	小野相馬	18c中～後	見込み蛇ノ目釉剥ぎ　半失透釉	31	27
CT008	1号溝埋土	瓶	—	7.1	—	飛鉋　灰釉（淡青灰白色）流し掛け	無釉	密	不明	19c	炻器質	31	27
CT009	1号溝埋土	土瓶身	7.5	—	—		灰釉（淡灰白色）	普通	大堀相馬	19c前～中	失透釉　貫入　茶漉し孔3	31	27
CT010	1号溝埋土	土瓶身	6.5	7.5	11.0		青釉（青緑色）	密	大堀相馬	19c前～中	底部外面炭化物付着　失透釉	31	27
CT011	1号溝埋土	土瓶蓋	7.5	—	1.6		鮫肌釉（暗緑褐色）	普通	大堀相馬	19c後葉	つまみ径1.7cm	31	27
CT012	1号溝埋土	土瓶蓋	6.5	—	—	青釉鉄絵山水文　白化粧	無釉？	密	不明	19c？		31	27
CT013	1号溝埋土	蓋	4.2	1.2	1.8		鉄釉（暗黄褐色）	普通	瀬戸・美濃	不明		31	27
CT014	1号溝埋土	灰吹・火入・香炉？	—	10.5	—		鉄釉（暗赤褐色）	密	大堀相馬？	19c		31	27
CT015	1号溝埋土	灰吹・火入?	—	6.2	—	色絵（緑）竹文	灰釉（淡黄灰白色）	やや粗	京・信楽	18c	貫入	32	27
CT016	1号溝埋土1層	擂鉢	31.0	—	—		鉄釉（暗茶褐色）	やや粗	東北産？	不明		32	28
CT017	1号溝埋土4層（F・G20区）	鉢類	—	—	—		無釉	粗	丹波	17c？	内面のごく一部に鉄釉が観察される	32	28
CT018	1号溝埋土	不明	8.6	—	—		鉄釉（暗褐色）	粗	不明	19c		32	28
CT019	1号溝埋土	秉燭	6.3	3.6	2.3		灰釉（暗緑灰色）	粗	東北産？	19c	芯立・内外面の一部に炭化物付着	32	28
CT020	1号溝埋土	秉燭	4.7	5.1	4.7		鉄釉（暗黄褐色）	密	大堀相馬	19c	底部に孔あり	32	28
CT021	1号溝埋土	土瓶身	—	—	—	鉄絵文字（暗茶褐色）「□賀」	無釉	やや粗	不明	19c		32	28
CT022	3号遺構埋土	小中鉢	22.2	12.5	10.5		灰釉（暗緑灰色）	粗	堤	19c	見込み目跡あり	32	28
CT023	6号遺構埋土	小中皿	—	5.5	—	呉須絵鉄絵（暗緑褐色）山水文	灰釉（淡緑灰白色）	やや粗	大堀相馬	19c初～中	高台内墨書あり　貫入　見込み目跡あり	32	28
CT024	6号遺構埋土	擂鉢	31.5	—	—		鉄釉（暗赤褐色）	粗	東北産？	19c？		32	28
CT025	15号遺構	瓶	—	8.3	—	鉄絵（暗褐色）草花文	灰釉（淡青灰白色）	密	大堀相馬	19c初～中	貫入　半失透釉	33	29
CT026	15号遺構	瓶	—	—	—	型押	灰釉（淡緑灰白色）	密	大堀相馬	19c前～中？	貫入	33	29
CT027	15号遺構	蓋	7.0	—	—		鉄釉（暗褐色）	密	不明	19c？	摘み部分型押による葉のモチーフ	33	29
CT028	ピット164埋土	灯明皿	9.2	3.5	1.9		鉄釉（暗黄褐色）	密	大堀相馬	19c中以降	口縁部炭化物付着　見込み目跡あり	33	29
CT029	ピット164埋土	袋物不明	—	3.2	—		鮫肌釉（暗緑褐色）	普通	大堀相馬	19c後葉	明治7年以降	33	29
CT030	ピット164埋土	土瓶身	—	7.2	—	木瓜形	青釉（青緑色）	密	大堀相馬	19c中～後	失透釉	33	29
CT031	ピット164埋土	土瓶蓋	5.2	—	2.6	白泥・鉄絵（暗褐色）	灰釉（淡緑灰色）	密	大堀相馬	19c中～後	貫入　半失透釉	33	29
CT032	4号遺構埋土	中型丸碗	9.3	—	—	錆絵染付蔓草文（暗茶褐色）	灰釉（淡緑灰白色）	密	京・信楽？	18c	貫入	33	29
CT033	4号遺構埋土	中型腰折碗	10.4	—	—	鉄絵山水文（暗茶褐色）	灰釉（淡黄灰色）	密	肥前	18c		33	29
CT034	4号遺構埋土	小型丸碗	6.6	3.0	3.5		灰釉（淡緑灰白色）	密	大堀相馬	18c末～19c初	貫入　半失透釉	33	29
CT035	4号遺構埋土	碗鉢皿不明	—	6.6	—		灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c前	高台内墨書あり　失透釉	33	29
CT036	4号遺構埋土	片口鉢	15.3	—	—		灰釉？	粗	瀬戸・美濃？	不明	漆継ぎ　釉が変質しており受熱か	33	29

表17　武家屋敷地区第13地点出土陶器観察表（2）
Tab. 17　Notes on glazed ceramics from BK13 (2)

登録番号	出土場所	器種	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図	図版
CT037	4号遺構埋土	銚子	—	—	—	色絵（黒・緑・不明）梅枝文	灰釉（淡緑灰白色）	普通	京・信楽	18c	貫入	33	29
CT038	4号遺構埋土	灰吹・火入	—	4.9	—		灰釉（淡青灰白色）	粗	小野相馬	18c	失透釉	33	29
CT039	4号遺構埋土	蓋	5.8	—	—		青釉（青緑色）	普通	大堀相馬？	19c前～中	失透釉	33	29
CT040	4号遺構埋土	瓶掛	21.0	21.4	—	頸部陰刻文　体部貼付葡萄文 台部印花雷文	緑釉（呂宋釉）	やや粗	瀬戸・美濃	19c前半	体部内面鉄釉　呂宋瓶掛 底部内外面炭化物付着	33	29
CT041	4号遺構埋土	窯道具	12.0	—	3.6		無釉	粗	不明	不明		34	29
CT042	4号遺構埋土	不明	—	—	—	型押蓮弁文・葉枝文	鉄釉（暗茶褐色）	普通	不明	不明	内面体部下半鉄釉　内面指紋か	34	29
CT043	1区東 A1層	合子蓋	5.4	—	1.2	色絵（赤・不明）	灰釉（淡黄灰色）	密	京・信楽	18c	貫入	34	29
CT044	1区東 A1層	土瓶蓋	4.6	—	2.7		灰釉（淡青灰白色）	密	大堀相馬	19c前～中	失透釉　つまみ径1.1cm　貫入	34	29
CT045	1区東 A1層	擂鉢	—	—	—		鉄釉（茶褐色）	普通	不明	不明	体部外面無釉	34	30
CT046	1区 1層・撹乱	中型腰折碗	11.0	4.7	6.4	口唇部鉄釉	灰釉（淡緑灰色）	やや粗	瀬戸・美濃	18c	貫入顕著	34	30
CT047	1区 1層・撹乱	中型筒形碗	7.8	6.2	5.5	色絵（赤・緑・黒）竹垣に梅枝文	灰釉（淡黄灰白色）	密	京・信楽	18c	貫入	34	30
CT048	1区 1層・撹乱	中型丸碗	—	4.5	—	鉄釉（暗褐色）流し掛け	灰釉（淡青灰白色）	普通	大堀相馬	18c末～19c前	高台内墨書「小」	34	30
CT049	1区 1層・撹乱	壺	5.7	4.9	4.3		灰釉（暗緑色）	粗	東北産？	19c		34	30
CT050	1区 1層・撹乱	蓋	3.4	—	1.8		灰釉（淡灰白色）	密	大堀相馬	19c	つまみ径0.7cm　貫入	34	30
CT051	1区 1層・撹乱	急須？	5.6	4.5	6.8	錆絵（黒）菊花文（16弁）	灰釉（淡黄灰白色）	密	京・信楽	19c前半	貫入	34	30
CT052	1区 1層・撹乱	袋物不明	—	—	—		灰釉（暗緑灰色）	粗	東北産？	19c	痰壺か	34	30
CT053	1区 1層・撹乱	人形	—	—	—		灰釉（暗緑褐色）	粗	不明	不明	前後合せ型作り　中空	34	30
CT054	2区 1層・撹乱	瓶	3.0	12.5	35.5	鉄絵文字「銘酒吾妻稲の花」「岩庄酒造店」「電話四一壱」	灰釉（灰色）	普通	瀬戸・美濃	20c初～前	「岩庄」は宝暦二年（1752年）に宮城郡原町に創業	35	30
CT055	4区 1層・撹乱	香炉の蓋	4.4	—	—	鉄絵（黒）同心円文	長石釉	普通	美濃	17c初～前	志野織部	34	30
CT056	8区東　1層・撹乱	蓋	4.3	—	2.1		灰釉（淡緑灰白色）	密	大堀相馬	18c～19c前	つまみ径01.4cm　貫入	34	30
CT057	1区東－南側 立会地点 1層・撹乱	擂鉢	—	27.0	—		鉄釉（暗赤褐色）	粗	東北産？	不明	見込み目跡あり　底部窯詰め痕	35	30
CT058	7区－北側 立会地点 1層・撹乱	仏飯器	—	5.6	—		灰釉（淡緑灰白色）	密	大堀相馬	18c末～19c前	底部墨書「く」か　半失透釉　貫入	34	30

表18　武家屋敷地区第13地点出土土師質土器皿観察表
Tab. 18　Notes on unglazed ceramic plates at BK13

登録番号	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整 内面	調整 体部外面	調整 底部糸切技法	回転方向	炭化物付着部位	備考	図	図版
CH001	1号溝埋土	—	6.3	—	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	右	内面底部	中央に孔あり、孔周辺に錆び付着	36	31
CH002	4号遺構埋土	8.0	4.7	2.0	ロクロナデ	ロクロナデ	不明	不明	口縁一部		36	31
CH003	4号遺構埋土	10.3	5.2	2.5	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左	口縁～内面の一部		36	31
CH004	4号遺構埋土	10.6	6.5	2.3	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整a	左	内外面底部に炭化物、全面黒色化		36	31
CH005	15号遺構埋土	23.6	19.2	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切無調整b	左	内外面底部に炭化物、全面黒色化		36	31

表19　武家屋敷地区第13地点出土土師質土器（皿以外）観察表
Tab. 19　Notes on unglazed ceramics (except plates) at BK13

登録番号	種類	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	備考	図	図版
CH006	壺	8区西　A1層	4.7	3.8	4.1	内面：ロクロナデ　外面：ロクロナデ	底部内外面炭化物付着	36	31

表20　武家屋敷地区第13地点出土瓦質土器観察表
Tab. 20　Notes on fumed ceramics at BK13

登録番号	種類	出土場所	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調整	備考	図	図版
CG001	方形鉢状	6号遺構埋土	—	—	4.1	内面：ナデ 外面：ミガキ	受熱により赤色化？	37	31
CG002	不明	6号遺構埋土	—	—	—	内面：ナデ 外面：ナデ、ミガキ	外面炭化物付着　幅4.8cm	37	31
CG003	不明	ピット164埋土	—	—	—	内面：ナデ 外面：ナデ	器面赤色化 幅10.7cm　厚さ2.1cm	37	31
CG004	鉢類	4号遺構埋土	17.5	13.8	12.4	内面：ロクロナデ 外面：連続した列点文 スタンプ状工具による施文か	内面黒色化 底部内面にタール状炭化物付着	37	31
CG005	蚊遣り？	4号遺構埋土	—	—	—	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、ミガキ	内面炭化物付着	37	31
CG006	鉢類	1区 1層・撹乱	18.2	13.1	5.9	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ 口唇部：ミガキ	三足か	37	31
CG007	不明	1区 1層・撹乱	—	—	—	内面：器面が摩滅しており、不明 外面：ロクロナデ 口唇部：ミガキ	口縁内面花型文様の刻印 器厚1.4cm	37	31
CG008	鉢類	1区 1層・撹乱	12.2	—	—	内面：ロクロナデ 外面：ロクロナデ、ミガキ 口唇部：ミガキ	外面刻印あり 内面には刻印を押したときの指紋が観察される	37	31
CG009	鉢類	2区 1層・撹乱	—	9.4	—	器面が摩滅しており、不明	三足　底部回転糸切痕左か	37	31

表21　武家屋敷地区第13地点出土土製品観察表
Tab. 21　Notes on clay objects and figures at BK13

登録番号	出土場所	種類	素材	口径／長さ(cm)	底径／幅(cm)	高さ／厚さ(cm)	特徴	図	図版
CO001	1号溝埋土	不明	土師質	—	—	—	中実　外面ミガキ　刻印あり	38	32
CO002	1号溝埋土1層	土人形　狐（稲荷）	土師質	—	1.8	—	左右合型作りの後、細部を手づくね　宝玉をくわえる	38	32
CO003	1号溝埋土	土人形　犬	土師質	4.9	—	4.2	左右合型作り	38	32
CO004	4号遺構埋土	土人形　馬？	土師質	—	—	—	型作り　中空　脚部と胸懸け（尻懸け）を表現　腹部は開口か　武家屋敷地区第11地点に類例あり	38	32
CO005	1区 1層・撹乱	土人形　狐（稲荷）	土師質	—	—	—	左右合型作り　中空	38	32
CO006	1区 1層・撹乱	土人形　猿	土師質	—	—	3.8	手づくね　中実　頭部のみ型使用か　手・足・尾・耳は粘土貼り付け櫛描きで体毛表現	38	32
CO007	1区 1層・撹乱	土人形　猿	土師質	—	—	—	手づくね　中実　手・足・尾は粘土貼り付け　櫛描きで体毛表現	38	32
CO008	1区 1層・撹乱	菊花状円板	土師質	2.2	—	0.9	型作り　中実　片面に型による菊花状文様	38	32
CO009	1区 1層・撹乱	ミニチュア　蓋	土師質	—	2.9	1.2	ロクロ成形　つまみは粘土貼り付け 底部回転糸切痕a右回転　最大径4.3cm	38	32

表22　武家屋敷地区第13地点出土古代瓦観察表
Tab. 22　Notes on ancient roof tile under for Nara and Heian periods at BK13

登録番号	出土場所	種類	特徴	備考	図	図版
T001	8区西　A1層	不明	表面には格子状の布目　厚さ1.4cm	古代瓦	39	32

表23武家屋敷地区第13地点出土軒丸瓦観察表
Tab. 23　Notes on round eaves tiles at BK13

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当直径(cm)	瓦当内径(cm)	周縁幅(cm)	釘穴	刻印	備考	図	図版
T002	1号溝埋土	連珠三巴文（右巻き）	—	—	2.0	—	—		39	32
T003	ピット164埋土	三引両文	14.1	11.5	1.4	1ヶ所	—		39	32
T004	1区 1層・撹乱	三引両文	14.9	11.5	1.7	—	—		39	33

表24　武家屋敷地区第13地点出土軒平瓦類観察表
Tab. 24　Notes on flat ezves tiles at BK13

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当垂長(cm)	頭幅(cm)	尻幅(cm)	長さ(cm)	備考	図	図版
T005	1号溝埋土2c層	三枚笹2a＋唐草1a類	太剣	5.4	—	—	—		39	33
T006	1区 1層・撹乱	細桔梗＋唐草3b類	太剣	5.3	—	—	—		39	33
T007	1号溝埋土1層	不明	太剣	5.2	—	—	25.3	刻印（山に「守」）	46	38

表25　武家屋敷地区第13地点出土軒桟瓦観察表
Tab. 25　Notes on eaves-pan tiles at BK13

登録番号	出土場所	全長(cm)	全幅(cm)	きき幅(cm)	きき足(cm)	尻切込長(cm)	頭切込長(cm)	瓦当小巴部分文様	小巴径(cm)	瓦当垂れ部分文様	瓦当垂れ形状	釘穴	図	図版
T008	1号溝埋土2a層	—	—	—	—	—	—	三巴文（右巻き）	8.5	—	—	—	39	33
T009	1号溝埋土1層	—	—	—	—	—	—	三巴文（左巻き）	9.0	三枚笹＋唐草1a類	中剣	—	39	33

表26　武家屋敷地区第13地点出土丸瓦観察表
Tab. 26　Notes on round roof tiles at BK13

登録番号	出土場所	頭幅(cm)	尻幅(cm)	玉縁長(cm)	胴長(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	釘穴	刻印	備考	図	図版
T010	1号遺構b埋土	—	12.6	3.0	23.2	5.7	1.8	—	—		40	34
T011	1号溝埋土	—	14.3	3.5	23.4	7.5	2.1	なし	なし		40	34

表27　武家屋敷地区第13地点出土平瓦1類観察表
Tab. 27　Notes on type 1 of flat tiles at BK13

登録番号	出土場所	長さ(cm)	頭幅(cm)	尻幅(cm)	谷深頭(cm)	谷深尻(cm)	厚さ(cm)	備考	図	図版
T012	1号溝埋土2層	—	—	—	—	—	2.1	刻線あり（指描）	41	34
T013	1号溝埋土2層	—	—	—	—	—	2.0	刻印（「モ」か）	46	38
T014	1号溝埋土	—	—	—	—	—	2.1	線刻あり、刻印（山に「守」）	41・46	34・38

表28　武家屋敷地区第13地点出土平瓦観察表
Tab. 28　Notes on flat roof tiles at BK13

登録番号	出土場所	頭幅(cm)	尻幅(cm)	長さ(cm)	谷深頭(cm)	谷深尻(cm)	厚さ(cm)	溝	釘穴	刻印	備考	図	図版
T015	1号遺構a埋土	24.2	26.3	27.8	3.1	3.7	2.3	—	—	—		41	34
T016	1号遺構b埋土	23.7	—	28.7	3.6	—	2.3	—	—	—		41	35
T017	1号溝埋土2a層	24.5	—	29.5	3.8	—	2.2	なし	—	—		42	35

表29　武家屋敷地区第13地点出土桟瓦観察表
Tab. 29　Notes on a kind of pan tiles at BK13

登録番号	出土場所	全長(cm)	全幅(cm)	きき幅(cm)	きき足(cm)	尻切込長(cm)	頭切込幅(cm)	釘穴	備考	図	図版
T018	1号溝埋土	—	—	—	—	—	—	3ヶ所	面戸付桟瓦	42	35
T019	1号溝埋土1層	25.2	29.2	—	13.5	11.5	—	—		42	36

表30　武家屋敷地区第13地点出土板塀瓦観察表
Tab. 30　Notes on pan tiles used for fence at BK13

登録番号	出土場所	左右 L・R	全長(cm)	全幅(cm)	きき幅(cm)	桟長(cm)	桟幅(cm)	厚さ(cm)	桟つなぎ	桟断面	刻印	釘穴	溝	備考	図	図版
T020	1号遺構b上面瓦集中部	R	36.8	32.4	29.2	35.8	5.7	2.2	平行	方形	—	4ヶ所	あり		43	36
T021	1号遺構b上面瓦集中部	R	—	—	—	—	—	2.3	平行	山形	—	2ヶ所	不明	面戸付板塀瓦	43	36
T022	1号遺構b上面瓦集中部	L	—	—	—	—	4.8	2.3	平行	山形	—	2ヶ所	不明	面戸付板塀瓦	43	37
T023	1号遺構b上面瓦集中部	L	37.2	32.0	29.0	35.5	5.7	2.0	平行	方形	—	4ヶ所	あり		44	37
T024	1号遺構b上面瓦集中部	L	36.7	31.7	29.0	34.6	5.7	2.0	平行	方形	—	4ヶ所	あり		44	37
T025	ピット17埋土	L	36.3	31.8	29.2	—	5.2	1.5	平行	方形	—	3ヶ所	あり		45	38

表31　武家屋敷地区第13地点出土面戸瓦観察表
Tab. 31　Notes on filler tiles at BK13

登録番号	出土場所	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	備考	図	図版
T026	5号柱列柱4	9.2	—	—	1.7		45	38

表32　武家屋敷地区第13地点出土輪違い観察表
Tab. 32　Notes on ridge decoration tiles at BK13

登録番号	出土場所	長さ(cm)	上幅(cm)	下幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	備考	図	図版
T027	1区 1層・撹乱	12.8	10.2	14.5	5.3	1.8		45	38

表33　武家屋敷地区第13地点出土その他の瓦観察表
Tab. 33　Notes on various roof tiles at BK13

登録番号	出土場所	種類	特徴	備考	図	図版
T028	1号溝埋土	谷丸瓦	瓦の尻を上にして、垂れが右に付く　垂れの下部は直線的でなく、抉りが入り、面戸状になる　厚さ2.0cm		45	38
T029	1層・撹乱	鬼瓦			46	38

表34　武家屋敷地区第13地点出土古銭観察表
Tab. 34　Notes on coins at BK13

登録番号	出土場所	銭名	外径(mm)	穿径(mm)	重量(g)	備考	図	図版
MC001	1号溝埋土	寛永通寶（新）	25.2	6.2	2.2	完形　文銭	47	39
MC002	4号遺構埋土	寛永通寶（四文銭）	27.5	5.5	129.1	鉄銭　完形　26枚付着　すべて四文銭とみられる 最後尾の裏文「波」「盛」	47	39
MC003	1区東　A1層	寛永通寶（新）	24.0	6.5	1.3	ほぼ完形	47	39
MC004	1区東　A1層	寛永通寶	23.0	6.5	1.8	鉄銭　一部欠損	47	39
MC005	1区 1層・撹乱	寛永通寶（古）	23.0	6.5	2.2	完形	47	39
MC006	1区 1層・撹乱	寛永通寶（新）	24.5	6.0	2.3	完形	47	39
MC007	1区 1層・撹乱	寛永通寶（新）	23.5	7.0	1.6	完形　錆化顕著	47	39
MC008	1区 1層・撹乱	寛永通寶（古）	23.0	6.0	2.3	完形	47	39
MC009	1区 1層・撹乱	寛永通寶（新）	21.8	6.5	1.8	完形	47	39
MC010	1区 1層・撹乱	寛永通寶（古）	24.0	5.8	2.5	完形	47	39
MC011	1区 1層・撹乱	寛永通寶（新）	25.0	6.0	2.7	完形　文銭	47	39
MC012	1区 1層・撹乱	寛永通寶（古）	24.0	5.5	1.3	1/2欠損	47	39
MC013	1区 1層・撹乱	十銭白銅貨	22.0	4.0	3.4	完形「十銭」「大日本　大正十二年」	47	39
MC014	1区 1層・撹乱	寛永通寶	22.2	6.5	1.8	鉄銭　ほぼ完形	47	39

表35　武家屋敷地区第13地点出土煙管吸口観察表
Tab. 35　Notes on pipes (mouthpieces) at BK13

登録番号	出土場所	全体形状	全長(mm)	ラウ口直径(mm)	吸口直径(mm)	備考	図	図版
MO001	1号溝埋土1層	ⅡB	34.5	9.2	4.2		48	39
MO002	1区 1層・撹乱	ⅡB	36.5	11.0	7.0	内部にラウ遺存　錆化顕著	48	39
MO003	1区 1層・撹乱	ⅡB	68.0	10.0	0.3×0.7	互の目文	48	39

表36　武家屋敷地区第13地点出土銅製品観察表
Tab. 36　Notes on various implements made of copper at BK13

登録番号	出土場所	種類	特徴・法量など	図	図版
MO004	8号遺構埋土	小柄の柄	片面に文様あり　花のモチーフか　幅1.4cm	49	39
MO005	1号溝埋土1層	不明	長さ3.7cm　径0.3cm	49	39
MO006	1号溝埋土1層	管状製品	アワセメあり　長さ4.5cm　径0.7cm	49	39
MO007	1号溝埋土	小柄の柄	片面に文様あり　長さ9.5cm　幅1.4cm	49	39
MO008	1号溝埋土	不明	紐状のものを通した金具か　長さ3.7cm　幅1.5cm	50	39
MO009	1号溝埋土	管状製品	長さ3.7cm　最大径0.9cm　アワセメあり　一端に補強帯のようなものが観察される	49	39
MO010	1号溝埋土	輪状製品	アワセメあり　小孔2ヶ所　留め具か	50	39
MO011	1号溝埋土	不明	蓋状　直径3.1cm　高さ0.2cm　内面に付着物	50	39
MO012	4号遺構埋土	不明	径0.8mmの線状製品	50	40
MO013	4号遺構埋土	目貫	文様あり　薄板の型による押し出しか	50	40
MO014	4号遺構埋土	簪？	長さ13.5cm	50	40
MO015	4号遺構埋土	管状製品	アワセメあり　内部に木質？残存　長さ3.3cm　径0.5cm	50	40
MO016	4号遺構埋土	不明	幅1.2cm　2個1対の小孔が4ヶ所あり　片面に漆付着	50	40
MO017	4号遺構埋土	不明	径1.0cm	50	40
MO018	1区東　A1層	簪？	長さ11.5cm	50	40

表37　武家屋敷地区第13地点鉄製品観察表
Tab. 37　Notes on various implements made of iron at BK13

登録番号	出土場所	種類	特徴・法量など	図	図版
MO019	4号遺構埋土	留め金具		51	40
MO020	15号遺構埋土	さな？	孔あり　全体に劣化しており、被熱痕か	51	40
MO021	15号遺構埋土	飾り金具	表面に漆が残存	51	40

表38　武家屋敷地区第13地点出土石器・石製品観察表
Tab. 38　Notes on stone tools and stone implements from BK13

登録番号	層位・遺構	器種	長さ・長径（mm）	幅・短径（mm）	厚さ（mm）	重量（g）	石材	備　考	図	図版
S001a	4号遺構埋土	剥片	25.5	16.7	22.3	9.2	石英安山岩	S001bと接合	52	41
S001b	4号遺構埋土	剥片	35.1	36.2	38.1	44.0	石英安山岩	S001aと接合	52	41
S002	1区東　A1層	剥片	17.0	13.7	3.3	0.8	石英		52	41
S003	1区 1層・撹乱	剥片	15.6	26.9	5.9	2.1	石英安山岩		52	41
S004	1区 1層・撹乱	剥片	10.9	21.6	4.3	0.8	石英		52	41
S005	1区東　A1層	火打石	46.1	20.9	22.4	30.5	メノウ		52	41
S006	1号溝埋土	碁石	21.9	21.8	5.2	3.8	粘板岩	正円　薄型	52	41
S007	1区東　A1層	碁石	22.2	22.2	4.4	3.5	粘板岩	正円　薄型	52	41
S008	1区 1層・撹乱	碁石	21.6	21.6	5.4	3.4	粘板岩	正円　薄型	52	41
S009	1号溝埋土	硯	—	61.8	—	146.9	粘板岩		52	41
S010	4号遺構埋土	硯破片	30.6	20.8	5.5	3.9	粘板岩		52	41
S011	1区 1層・撹乱	不明石製品	39.5	19.0	5.0	8.0	石灰岩か		52	41
S012	1区 1層・撹乱	砥石	70.8	58.6	12.4	77.6	粘板岩		52	41
S013	1区 1層・撹乱	砥石	47.5	39.4	8.5	25.4	粘板岩		52	41
S014	1区 1層・撹乱	砥石	67.7	48.5	19.6	56.5	粘板岩		52	41
S015	4号遺構埋土	印鑑	26.5	—	16.1	4.6	粘板岩	字あり（判読不能）	52	41

表39　武家屋敷地区第13地点出土ガラス玉観察表
Tab. 39　Notes on glass implements at BK13

登録番号	種類	出土場所	特徴・法量など	図	図版
G001	ガラス玉	4号遺構埋土	直径1.1cm　穿径0.26cm　螺旋状　巻き付け成形か	—	41

表40　武家屋敷地区第13地点出土貝類集計表
Tab. 40　List of Mollusca from BK13

出土場所	種	状態・点数	重量（g）
1号溝埋土	チョウセンハマグリ	R1	14.6
	シジミガイ科	左右不明1	0.7
ピット144埋土	マガキ	L6	7.0
		R2	2.8
		破片複数	27.7
4号遺構埋土	マガキ	破片1	0.7
1層・撹乱	種不明	破片5	14.5

表41　武家屋敷地区第13地点出土魚類・哺乳類集計表
Tab. 41　List of Pisces (Fish) and Mammalia from BK13

出土場所	種	部位
1層・撹乱	魚類種不明	椎骨
	ウマ	上顎臼歯（L）

第Ⅵ章　検出遺構の検討

今回の調査では、遺構埋土の掘り下げは最小限にとどめたため、出土遺物について、詳しい検討を加えることは難しい。遺構についても、全てを掘り下げていないため、詳しい特徴などは明確でないものも多い。それでも、確認した遺構プランをもとに、検出した遺構を、絵図の記載と対比させて検討することは可能である。確定的な結論に至らない部分も多いが、検出遺構について、若干の検討を加えてみたい。

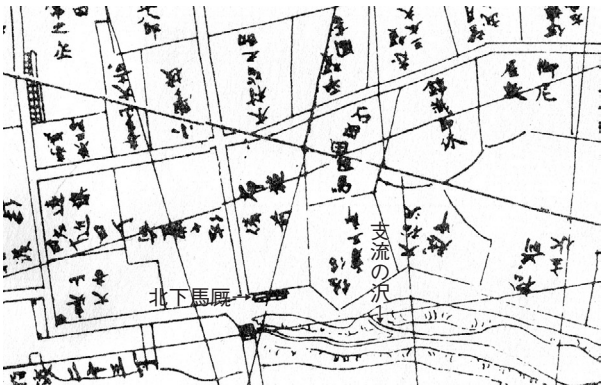
１．沢状遺構の変遷

４号遺構は、沢状の遺構であり、かなりの部分が埋まりつつも、Ⅱb期までは機能していた千貫沢の支流であると考えられる。今回の調査区は、これまでの調査・研究からすると筋違橋通沿いに該当すると考えられる（調査報告１）。仙台城関連の絵図の中で、この地域において最も古い沢は、『奥州仙台城并城下絵図』（天和二年：1682年）（仙台市史編さん室編2006：p.344）に認められる。この沢の表現は、「侍屋敷」とのみ記載された屋敷地内に谷頭が描かれ、千貫沢に合流するように描かれる。おそらく、沢はそれ以前にも存在していたのであろうが、絵図に表現されたのは、この絵図が最初である。同様の表現の沢は、『仙台城下五厘掛絵図』（元禄四・五年：1691・92年）（図53－１）にも描かれている。この絵図の沢は、「三澤左京殿」と「太田次郎兵衛」屋敷地境に位置しており、谷頭は三澤側にある。また、『仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調』（寛文年間～元禄年間：17世紀後半）（図54、註）では、後述する厩の建物と共に、近辺の道路の様子が描かれている。そこ

１．元禄四・五年（1691・92年）仙台城下五釐掛絵図

２．宝暦十～明和三年（1760～66年）仙台城下絵図

３．天明六～寛政元年（1786～89年）仙台城下絵図



４．安政三～六年（1856～59年）安政補正改革仙府絵図

１・３・４『絵図・地図で見る仙台』　２『絵図・地図で見る仙台　第二輯』

図53　武家屋敷地区第13地点周辺の絵図
Fig. 53　Picture maps around the area of BK13

では、屋敷地側に位置する厩の東側で道路が狭まり、千貫沢側の道路端もちょうどそこで狭まっている。その狭まった場所に橋があり、その下に沢が流れていたものと推測できる。

時代は下って、『仙台城下絵図』（宝暦十～明和三年：1760～66年）では、沢自体の表現は無いが、その部分が空白地として区画されている（図53－２）。そして、『仙台城下絵図』（天明六～寛政元年：1786～89年）には非常に細い線として描かれており、ちょうど「高泉主計」と「古内進」屋敷地境に位置する（図53－３）。さらに、『安政補正改革仙府絵図』（安政三～六年：1856～59年）（図53－４）では、屋敷地内における沢の表現は消え、千貫沢に合流する部分がわずかに表現されるに留まる。これらの絵図からすると、この沢は、17世紀後半には幅の広い沢であったが、18世紀後半にはかなり埋没し狭くなっていた状況が窺える。19世紀中頃にも千貫沢に合流する沢は存在していたようであるが、詳細は不明である。

今回の調査区内で検出された４号遺構と対比させるならば、Ⅰ期の頃は不明であるが、Ⅱ期の頃にかなり埋没した状態でわずかに存在した状況と合致する（図19）。また、調査区内の４号遺構は、Ⅲ期の頃には埋められ、その上に1号溝新段階が存在していたと捉えた。推測ではあるが、千貫沢との合流地点近辺まで谷頭が南側に移動した可能性も考えられる。また、絵図上の沢（４号遺構）は屋敷地の境であった。後述するように、下馬区域との関連もあるが、４号遺構の東西では遺構密度がかなり異なってきており、区画ごとの土地の使い方の違い、あるいは屋敷地内での使われ方の差異が窺える。

２．厩との関連

絵図との対比から、本調査区は武家屋敷地区内に位置するが、その中に下馬と記載された区域が含まれている。『奥州仙台城絵図』（正保二年：1645年）（図４－１）では侍屋敷とのみしか記載がないが、『仙台城下絵図』（寛文四年：1664年）（図４－２）では、区画こそあるもののとくに記載は無い。その後、『仙台城下絵図』（寛文八・九年：1668・69年）（図４－３）には屋敷地と同じ表現で「下馬」と記載されている。『仙台城下大絵図』（延宝六～八年：1678～80年）（図４－４）では、その下馬の区域の西と南側部分の線が無くなり、道路と同じ表現となる。それ以降は、この区域は基本的にやや広い道路として表現されることになる。

おそらく下馬の成立時にはすでに存在していた可能性は高いが、この区域に附属する厩がある。この区画の厩である「北下馬厩」が絵図に表現されるのは、『仙台城下絵図』（宝暦十～明和三年：1760～66年）（図53－２）からである。そして、『仙台城下絵図』（天明六～寛政元年：1786～89年）（図53－３）と『安政補正改革仙府絵図』（安政三～六年：1856～59年）（図53－４）では、北側屋敷地に接して描かれている。これらの絵図からは、幕末まで建物が存在していたことがわかる。この厩は、①『仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調』（寛文年間～元禄年間：17世紀後半）（以下①）（図54）では、図と共に「長弐拾間、横三間、腰掛幅三尺ニテ四ケ所」と記載されている。図では､20間の建物よりさらに東側に厠が付属している。その後の②『御修復帳・古』（安永年間：1772～81年頃成立）（以下②）（図54）や、③『御修復帳・新』（文化元年～文政十三年：1804～30年頃）（以下③）（図54、仙台市史編さん委員会編2006：p.369）でも同じ施設が示されている。これらの絵図の違いは、①では厠が４基存在しているが、②では３基、③では１基となり削減されている。また、腰掛が①・②では４箇所存在していたが、③では西側２箇所が削減されている。それに伴い「ニテ四ケ所」の記載部分が削除されている。

千貫橋からの距離は不明であるが、現在する千貫沢上道路の東辺から北方向に向かう線を引くと、今回の調査区４区の西側外を通る線となる。仮にこれを裏下馬通の東端と仮定する。また、厩の柱間寸法を６尺３寸とし、裏下馬通東端から今回の調査区１区に向かって20間を測ると、おおむね１号遺構の西端あたりまで到達する（図55）。この絵図との対比と、今回検出した遺構の時期や配置関係からは、厩には１号柱列（Ⅰ期・６尺３寸）が該当するものと考えられる。そして、１号溝古段階を筋違橋通北端とするならば、１号柱列は厩南端にあたる。

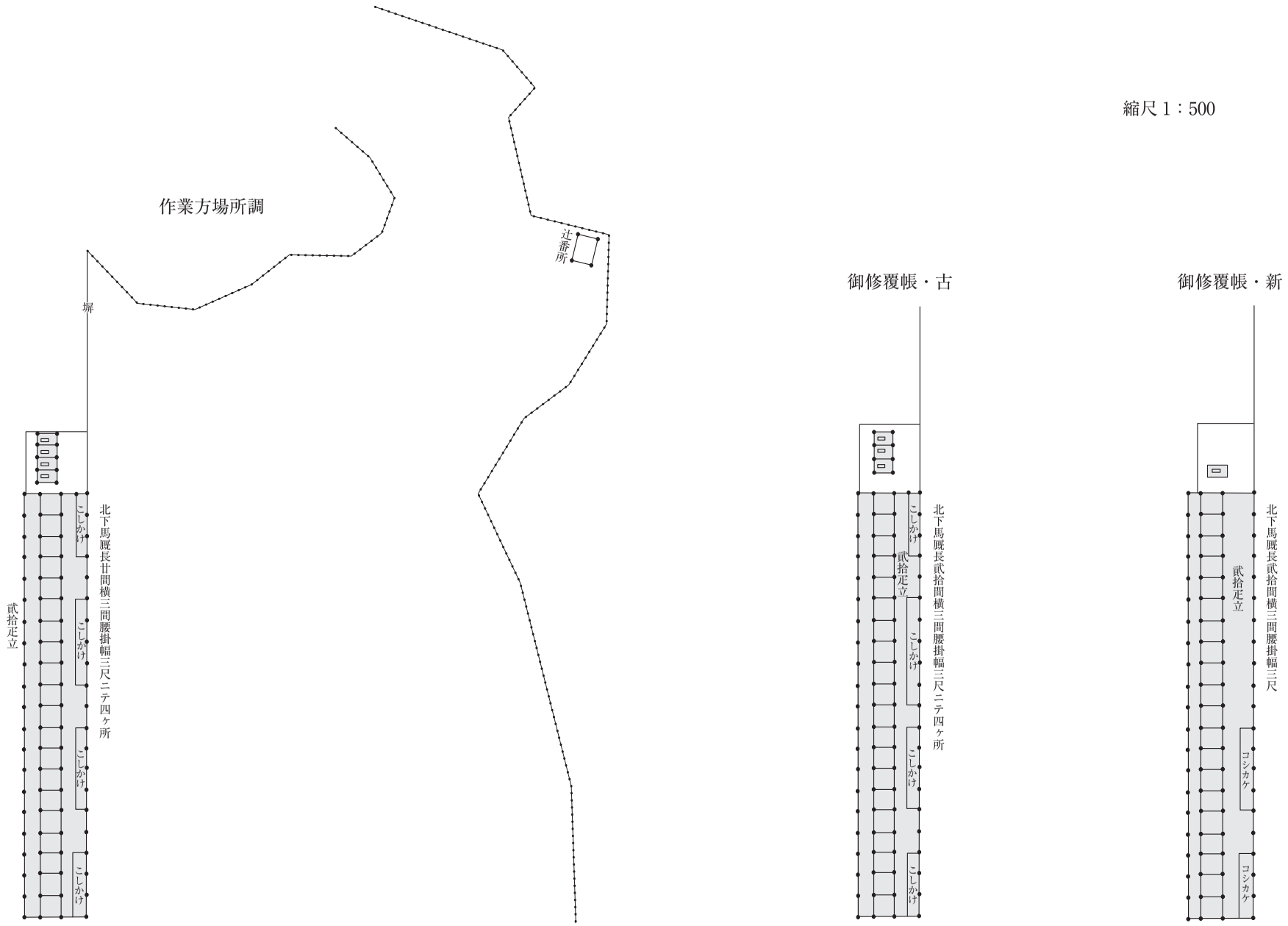


図54 「北下馬厩」の絵図
Fig. 54 Picture maps of the stable of the north side of Secondary Citadel

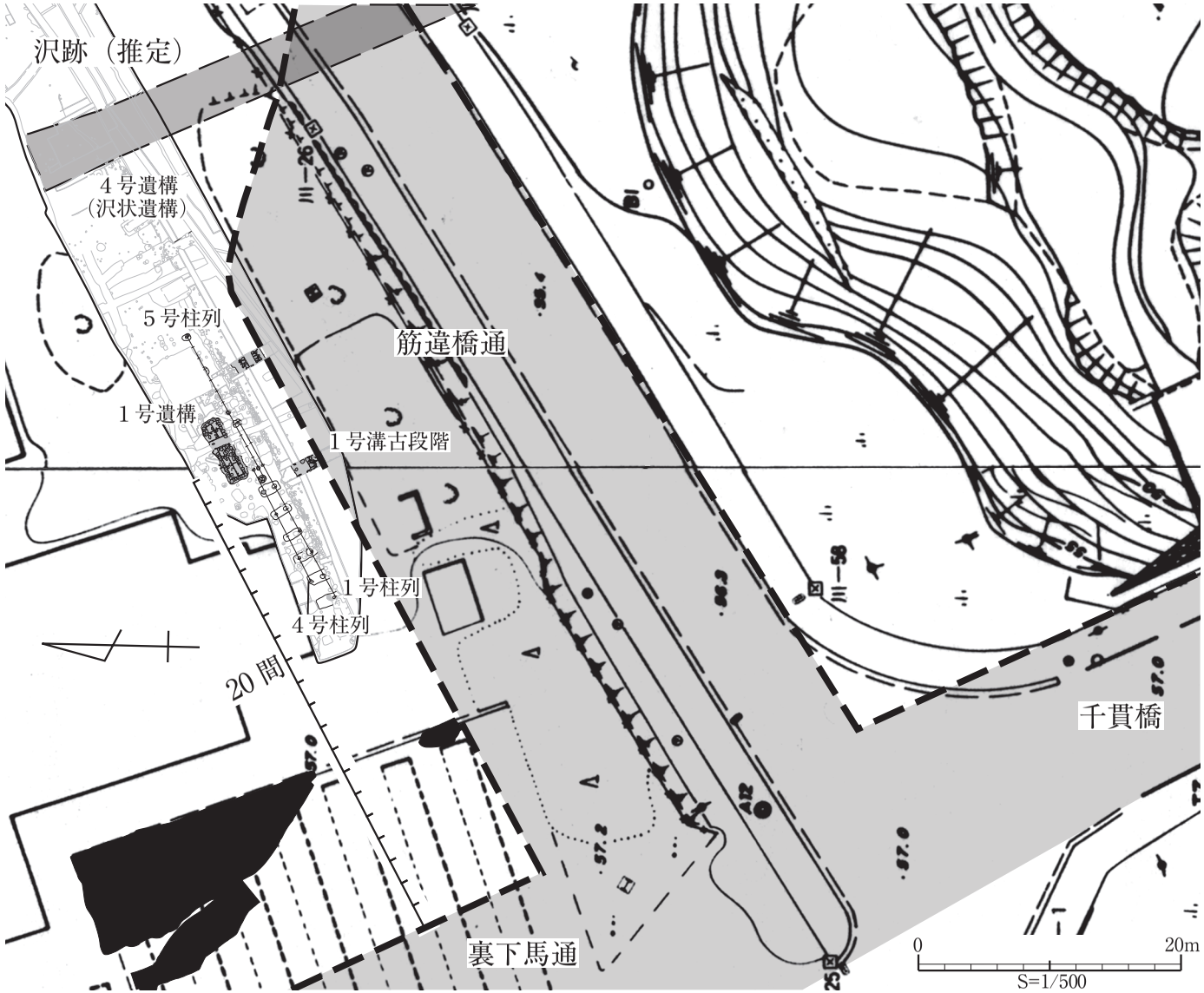


図55　武家屋敷地区第13地点検出遺構と絵図の対比
Fig. 55　Comparison with the picture maps and the features.

また、1号柱列の掘り方と重複して検出されたことからⅡa期と時期比定したが、ほぼ１号柱列と対向する４号柱列（６尺３寸）や、東側へと伸びる５号柱列（６尺３寸）は、柱間寸法などから建物である可能性もあり、建て替えなどの厩と関連する遺構であることも考えられる。

１号遺構に関しては、時期や位置関係から厠跡と推定できる。絵図の記載では、時期が新しくなるにつれ厠は削減されている。今回の調査でも、東側の１号遺構bがまず埋められ、西側の１号遺構aのみが最後に機能していた状況が指摘できる。遺構の項で説明したように、１号遺構bでは、埋土から18世紀の陶器（CT002）が出土しており、19世紀には埋没していたことがわかる。絵図からすると、③（1804～30年頃）には厠が１基だけ記載されているが、以上の点から１号遺構aがそれに該当するものと解釈できる。

今回の調査では、遺構の精査を行なっていないため、仮定に仮定を重ねた推論となるが、現在の調査区に関して絵図を用いて積極的に解釈するならば、以上のような推論も可能であろう。

註）仙台城については、城下絵図や仙台城全体を描いた絵図以外に、『御修覆帳』と総称される絵図がある。仙台藩の施設の維持管理を行っていた「作事方」という役所があり、ここで管理していた施設の平面図をまとめたものである。仙台城の付属施設や、領内の寺社、橋などが描かれており、３種類が残っている。一つは『仙台藩封内神社仏閣等作事方役所修繕ニ属スル場所調』で、宮城県図書館に所蔵されている（以下『作事方場所調』と略）。幕末から明治初期の混乱で散逸したものをまとめ直したもので、寛文年間から元禄年間、17世紀後期のものと考えられる。二つ目は、『御修覆帳』と表紙に書かれたもので、東北大学大学院工学研究科で所蔵している（以下『御修覆帳・古』と略）。おおよそ安永年間（1772～81）頃のものである。三つ目が、『御修覆帳』と表紙に書かれたもので、宮城県図書館に所蔵されている（以下『御修覆帳・新』と略）。文化・文政年間（1804～30）頃のものである。「北下馬厩」については、『御修覆帳・新』の図の写真が、『仙台市史城館編』に掲載されている。『作事方場所調』と『御修覆帳・古』については、写真を仙台市博物館から提供していただいた。図54は、これらの写真をもとに、建物の寸法で縮尺を合わせてトレースして作成した。

第Ⅶ章　まとめ

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点の調査成果について、最後に簡単にまとめておきたい。

今回の調査では、掘立柱建物、掘立柱列、溝、沢状の遺構などが検出された。東北大学川内北地区では、近代の建物などで破壊されていない部分では、江戸時代の遺構が良好に遺存していることが、あらためて明らかとなった。

検出遺構の多くは、遺構プランの確認にとどめたため、出土遺物はあまり多くない。そのため、遺構の変遷は、切り合い関係を中心に検討し、Ⅰ～Ⅳ期に分けられた。各期の推定時期は、次のように考えることができる。

Ⅰ期　17世紀

Ⅱ期　18世紀から幕末（19世紀中葉）

Ⅲ期　明治初頭（19世紀後葉）

Ⅳ期　明治20年（1887年）前後以降

沢状の遺構は、城下絵図に描かれたものがあり、二の丸地区と北方武家屋敷地区の間を流れる千貫沢の支流と考えられる。調査では、次第に埋没していく様相がとらえられた。この沢につながる西から東に流れる溝が確認され、３段階の変遷が認められた。この溝の北側に、掘立柱建物や石組の長方形の遺構などが検出された。これらは、絵図との対比から、二の丸裏門である「台所門」につながる「千貫橋」の外側に設けられた「北下馬厩」や、厩に附属する厠の可能性が考えられる。必ずしも、絵図とうまく合わない部分も残っているが、位置関係から見て、今回の調査区が「北下馬厩」の周辺に相当することは、間違いないものと考えられる。

今回の調査で出土した遺物は、大部分が江戸時代のもので、江戸時代以前の遺物は、古代の瓦が１点出土しているだけである。

江戸時代の遺物には、陶磁器、土器、土製品、瓦、古銭や煙管を含む金属製品、石製品、動物遺存体などがある。遺構埋土を掘り上げたものが少ないこともあって、木製品・漆塗製品の出土は少ない。この点を除くと、これまでの武家屋敷地区での調査において出土した遺物と、大きな違いは見られない。陶磁器は、17世紀初頭から近現代のものまでが含まれている。19世紀前葉から中葉のものや、明治期に入ってからの資料が多い。

今回の調査では、比較的良く絵図と対比して考えることができ、絵図に描かれた「北下馬厩」に相当する可能性の高い遺構を指摘することができた。このことは、仙台城周辺の武家屋敷地区に置かれた施設を、考古学的に検討していく上で、重要な知見を加えることとなったと言えるであろう。

〈引用・参考文献〉

《仙台市教委刊行仙台城関係報告書・東北大学刊行報告書以外（50音順）》
愛知県陶磁資料館　1984 『近世城館出土の陶磁』
青山礼志　1982 『新訂貨幣手帳』ボナンザ
赤松和佳　2006 「畿内出土の17～18世紀の京焼について」『京焼の成立と展開－押小路、粟田口、御室－』関西陶磁史研究会研究集会資料　24～48頁
浅川滋男・箱崎和久編　2001 『埋もれた中近世の住まい』同成社
阿刀田令造　1936 『仙台城下絵図の研究』斎藤報恩会博物館図書部研究報告４
石川俊秀　1989 『高崎遺跡調査報告書』多賀城市文化財調査報告書19
市田京子　2000 「江戸時代の下駄」『江戸文化の考古学』吉川弘文館　26～54頁
江戸遺跡研究会編　1991 『よみがえる江戸』新人物往来社
江戸遺跡研究会編　1992 『江戸の食文化』吉川弘文館
江戸遺跡研究会編　2000 『江戸文化の考古学』吉川弘文館
江戸遺跡研究会編　2001 『図説江戸考古学研究事典』柏書房
江戸遺跡研究会編　2004 『江戸の祈り　信仰と願望』吉川弘文館
江戸遺跡研究会編　2009 『災害と江戸時代』吉川弘文館
江戸陶磁器土器研究グループ　1992 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』シンポジウム資料
江戸陶磁器土器研究グループ　1996 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』シンポジウム資料
ＮＨＫプロモーション　2007 『乾山の芸術と光琳』
大月義徳・小岩直人・平野信一・松本秀明　1994 「Ⅱ自然の現在のすがた　２地形と地質」『仙台市史特別編１自然』 46～93頁
大橋康二・西田宏子監修　1988 『古伊万里』別冊太陽
大橋康二　1984 「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』九州陶磁文化館　152～157頁
大橋康二・尾崎葉子　1988 『有田町史　古窯編』有田町教育委員会
大橋康二　1993 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55　ニューサイエンス社
大橋康二　1994 『古伊万里の文様　初期肥前陶磁器を中心に』
大平　茂・松本　睦　1992 『三田市下相野窯址－近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書ＸⅦ』兵庫県文化財調査報告書第107冊
小川啓司　1974 『そば猪口絵柄事典』
関西陶磁史研究会　2006 『京焼の成立と展開－押小路、粟田口、御室－』
喜多川守貞著、朝倉治彦・柏川修一校訂編集　1992 『守貞謾稿』第一～五巻　東京堂出版
九州近世陶磁学会　2000 『九州陶磁の編年』
九州近世陶磁学会　2002 『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』第一分冊
九州近世陶磁学会　2002 『国内出土の肥前陶磁　西日本の流通をさぐる』第二分冊
九州近世陶磁学会　2004 『受容層の違いによる九州陶磁の様相』
古賀　孝　1974 『切込焼』
古建築研究会編著　1992 『宮城県の古建築－江戸・明治期の建造物－』宮城県文化財調査報告書第151集
小林　克　2000 「あかりの道具研究の方向」『江戸文化の考古学』吉川弘文館　221～242頁
小林謙一　1991 「江戸における近世瓦質・土師質焜炉について」『江戸在地系土器の研究Ⅰ』1～46頁
小林清治編　1982 『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書第二巻　名著出版
小林博範・斎藤　進・小島正裕ほか2000 『汐留遺跡Ⅱ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第79集
小林博範・西澤　明・小林　裕ほか　2003 『汐留遺跡Ⅲ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第125集
財団法人瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2006 『江戸のやきもの－生産と流通－』
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1999 『列島に拡がる大窯製品　東日本の様相』
齋藤鋭雄　2004 「第二章第三節　城下の災害」『仙台市史通史編５近世３』仙台市　122～137頁
佐賀県立九州陶磁文化館　1984 『国内出土の肥前陶磁』
佐賀県立九州陶磁文化館　1990 『柴田コレクション展Ⅰ　－初期伊万里から柿右衛門へ－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1991 『柴田コレクション展Ⅱ』
佐賀県立九州陶磁文化館　1993 『柴田コレクション展Ⅲ』

佐賀県立九州陶磁文化館　1994 『よみがえる江戸の華－くらしのなかのやきもの』平成６年度特別企画展
佐賀県立九州陶磁文化館　1993 『世界の染付展』
佐賀県立九州陶磁文化館　1995 『柴田コレクションⅣ　－古伊万里様式の成立と展開－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1996 『名品図録』
佐賀県立九州陶磁文化館　1997 『柴田コレクションⅤ　－延宝様式の成立と展開－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1998 『柴田コレクションⅥ　－江戸の技術と装飾技法－』
佐賀県立九州陶磁文化館　1999 『柿右衛門－その様式の全容－』
坂田啓編　1995 『私本仙台藩士事典』創栄出版
佐藤広史ほか　1990 『切込窯跡』宮崎町文化財調査報告書第３集
佐藤　巧　1979 『近世武士住宅』叢文社
白神典之　1990 「堺擂鉢と明石擂鉢」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会第３回大会発表要旨　47～51頁
白神典之・増田達彦　1999 「堺環濠都市出土の調理具・貯蔵具」『関西近世考古学研究』Ⅶ　79～100頁
白川昌三　1987 『新寛永通宝カタログ』新寛永クラブ
島崎とみ子　2000 「江戸時代の料理と器具」『江戸文化の考古学』吉川弘文館　86～98頁
新宿区内藤町遺跡調査会　1992 『内藤町遺跡』
新宿区歴史博物館　1990 『江戸のくらし－近世考古学の世界－』
鈴木省三　1937 『仙台風俗志』（1977年歴史図書社より再刊）
鈴田由紀夫　1995 「17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様」『柴田コレクションⅣ－古伊万里様式の成立と展開』 272～279頁
関根達人　1998 「相馬藩における近世窯業生産の展開」『東北大学埋蔵文化財調査年報10』51～90頁
関根達人　1999 「相馬焼の生産と流通」『江戸の物流－陶磁器・漆器・瓦から－』江戸遺跡研究会第12会大会発表要旨　65～90頁
関根達人　2006 「流通①北海道・東北」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集　瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　199～228頁
芹沢長介編　1978 『切込』東北大学文学部考古学研究会
瀬戸市史編纂委員会　1993 『瀬戸市史　陶磁史篇四』
瀬戸市史編纂委員会　1998 『瀬戸市史　陶磁史篇六』
瀬戸市文化振興財団埋蔵文化財センター　2006 『江戸時代のやきもの－生産と流通－』記念講演会・シンポジウム資料集
仙台市教育委員会　1967 『仙台城』
仙台市教育委員会　1994 『仙台市青葉区文化財分布地図』
仙台市教育委員会　1995 『仙台市太白区文化財分布地図』
仙台市教育局生涯学習部文化財課　2004 『仙台城跡整備基本構想』
仙台市教育局生涯学習部文化財課　2005 『仙台城跡整備基本計画』
仙台郷土研究会　1991 「仙台藩歴史用語辞典」『仙臺郷土研究』復刊第16巻第１号（通巻242号）
仙台市史図録編纂委員会篇　1980 『増補改訂版　目で見る仙台の歴史』宝文堂
仙台市史編さん委員会編　1994 『仙台市史特別編１　自然』仙台市
仙台市史編さん委員会編　1995 『仙台市史特別編２　考古資料』仙台市
仙台市史編さん委員会編　1997 『仙台市史資料編３　近世２城下町』仙台市
仙台市史編さん委員会編　1997 『仙台市史特別編４　市民生活』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2001 『仙台市史通史編３　近世１』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2003 『仙台市史通史編４　近世２』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2004 『仙台市史通史編５　近世３』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2006 『仙台市史特別編７　城館』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2008 『仙台市史通史編６　近代１』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2009 『仙台市史通史編７　近代２』仙台市
平重道編　1973 『伊達治家記録二』宝文堂
高倉淳ほか編　1994 『絵図・地図で見る仙台』今野印刷
高橋富雄ほか編著　1979 『角川日本地名大辞典４宮城県』角川書店
高橋幹夫　1994 『江戸萬物辞典　絵で知る江戸時代』芙蓉書房出版
高橋幹夫　1994 『江戸の暮らし図鑑　道具で見る江戸時代』芙蓉書房出版
高橋良一郎　1977 『相馬のやきもの』ふくしま文庫40　福島中央テレビ
田口昭二　1983 『美濃焼』考古学ライブラリー17　ニューサイエンス社

多治見市教育委員会　1993 『美濃窯の焼物　特集写真でみる美濃焼の歴史』多治見の古窯３
谷田有史　2000 「江戸時代のたばこ」『江戸文化の考古学』吉川弘文館　171～191頁
たばこと塩の博物館編　1983 『きせる』
千葉正樹　2003 「第三章仙台城下の景観と構造　第一節城下町の景観」『仙台市史通史編４　近世２』160～187頁
坪井利弘　1976 『日本の瓦屋根』理工学社
坪井利弘　1977 『図鑑瓦屋根』理工学社
坪井利弘　1979 『桟瓦屋根のデザイン』理工学社
坪井利弘　1981 『古建築の瓦屋根』理工学社
東京国立博物館　1997 『特別展　日本のかたな　鉄のわざと武のこころ』
東北電気通信局　1967 『東北の電信電話史』
東北大学埋蔵文化財調査室　2008 「2007年度宮城県内主要発掘紹介　仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点」『宮城考古学』第10号　宮城県考古学会　210頁
東北陶磁文化館　1987 『東北の近世陶磁』
東北歴史資料館　1990 『宮城県の諸職』東北歴史資料館資料集27
東北歴史資料館　1993 『宮城県の瓦職』東北歴史資料館資料集34
東北歴史資料館　1995 『仙台・堤のやきもの』
東北歴史資料館　1995 『宮城県の桶職』東北歴史資料館資料集38
土岐市美濃陶磁歴史館　1993 『桃山の華　大阪出土の桃山陶磁』
土岐市美濃陶磁歴史館　1994 『大阪出土の桃山陶磁Ⅱ』
土岐市美濃陶磁歴史館　1996 『特別展堺衆のやきもの　堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁』
土岐市美濃陶磁歴史館　2002 『第14回織部の日特別展　美濃桃山陶』
土岐市美濃陶磁歴史館　2003 『第15回織部の日特別展　織部の流通圏を探る　東日本』
土岐市美濃陶磁歴史館　2004 『第16回織部の日特別展　織部の流通圏を探る　西日本』
土岐市美濃陶磁歴史館　2005 『第17回織部の日特別展　織部様式の成立と展開』
土岐市美濃陶磁歴史館　2006 『第18回織部の日特別展　天下人とやきもの』
土岐市美濃陶磁歴史館　2007 『第19回織部の日特別展　ポスト織部の時代　元和寛永の茶陶』
土岐市美濃陶磁歴史館　2008 『第20回織部の日特別展　桃山時代の茶陶生産』
土岐市美濃陶磁歴史館　2009 『第21回織部の日特別展　遺跡にみる茶の湯とやきもの』
土岐市美濃陶磁歴史館　2010 『第22回織部の日特別展　公と武　京と江戸のやきものの文化』
都立一橋高校内遺跡調査団　1985 『江戸　都立一橋高校地点発掘調査報告』
中井さやか　1992 「近世の漆椀について－その器種と組み合わせを考える－」『江戸の食文化』吉川弘文館　180～204頁
永井久美男編　1997 『近世出土銭Ⅰ』兵庫埋蔵銭調査会
永井久美男編　1998 『近世出土銭Ⅱ』兵庫埋蔵銭調査会
永田久光　1956 『日本の郷土玩具』東京創元社
西　和夫　1990 『図解古建築入門』彰国社
西沢笛畝　1957 『日本の人形と玩具』岩崎書店
西沢笛畝　1965 『日本郷土玩具事典』岩崎美術社
日本馬具大鑑編集委員会　1991 『日本馬具大鑑　第四巻近世』日本中央競馬会
日本民具学会　1989 『信仰と民具』雄山閣
日本民具学会　1997 『日本民具辞典』ぎょうせい
丹羽基二　1971 『家紋大図鑑』秋田書店
根津美術館　1998 『華南のやきもの　黄瀬戸・織部・青手古九谷の源流を求めて』
根津美術館　2002 『知られざる唐津　二彩・単色釉・三島手』
根津美術館　2004 『仁清の茶碗』
根津美術館　2005 『特別企画展大名茶陶高取焼展図録』
野馬追の里原町市立博物館　1999 『相馬のやきもの－収蔵資料を中心として－』
乗岡　実　1999 「近世備前焼の擂鉢－素描メモ－」『関西近世考古学研究』Ⅶ　119～130頁
長谷部楽爾監修　1997 『明末清初の民窯　中国の陶磁10』平凡社版
長谷川眞　2006 「近世丹波焼の諸相」『江戸時代のやきもの－生産と流通』
畑中英二　2003 『信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版
畑中英二　2007 『続信楽焼の考古学的研究』サンライズ出版

原町市教育委員会　1995 『相馬地方の古陶』
早坂芳雄　1958 『宮城県酒造史　本編』
早坂芳雄　1962 『宮城県酒造史　別篇』
平泉研究会　1996 『地鎮・遺構の廃棄儀礼検討会資料』
福島県立博物館　1990 『企画展東北の陶磁史』
福田敏一・石崎俊哉ほか　1997 『汐留遺跡Ⅰ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告書第37集
福田敏一・石崎俊哉ほか　2006 『汐留遺跡Ⅳ－旧汐留貨物駅跡地内の調査』東京都埋蔵文化財センター調査報告第189集
藤沢　敦　2008「宮城県の考古学－この10年の歩みと展望－Ⅶ．近世」『宮城考古学』第10号　宮城県考古学会　89～102頁
藤沢良祐　1998 『瀬戸市史　陶磁史編六』瀬戸市史編纂委員会
平凡社　1989 『別冊太陽　江戸細密工芸尽くし』
ポーラ文化研究所　1989 『日本の化粧－道具と心模様』ポーラ文化研究所コレクション２
堀江　格　1998 『岸窯跡－近世窯跡の調査－』福島市埋蔵文化財報告書111
本田勇編著　2003 『史料仙台伊達氏家臣団事典』丸善
松本権六・羽野禎三　1939 『時代椀大観』文化出版局
三浦正幸監修　2002 『最新日本名城古写真集成』別冊歴史読本第27巻第14号　新人物往来社
宮内　悊　1991 『箱』ものと人間の文化史67　法政大学出版局
宮城県教育委員会　1998 『宮城県遺跡地図』宮城県文化財調査報告書第176集
宮城県図書館　1993 『宮城県図書館所蔵絵図・地図解説目録』
宮城正俊　1982 『新説切込焼』
宮澤智士　1983 「近世民家の地域的特色」『講座・日本技術の社会史第七巻建築』日本評論社　151～182頁
村上　直・木村　礎・藤野　保　1988 『藩史大事典第１巻北海道・東北編』雄山閣
室井　綽　1973 『竹』ものと人間の文化史10　法政大学出版局
両角まり　1996 「瓦質土器類の分類について」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ』85～98頁
山崎信二　2008 『近世瓦の研究』同成社
山本忠尚　2001 『和英対照日本考古学用語辞典』東京美術
吉岡一男ほか編　2005 『絵図・地図で見る仙台　第二輯』今野印刷
渡辺浩一　2003 「第三章仙台城下の景観と構造　第二節武家屋敷と武士」『仙台市史通史編４　近世２』188～207頁　仙台市
渡辺信夫ほか編著　1994 『宮城県姓氏家系大辞典』角川書店

《仙台市教育委員会刊行仙台城跡および関連遺跡調査報告書（報告書番号順）》

佐藤　洋ほか　1985 『仙台城三の丸跡』仙台市文化財調査報告書第76集
金森安孝・根本光一　2002 『仙台城跡１－平成13年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第259集
金森安孝・伊藤　隆　2003 『仙台城跡２－平成14年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第264集
渡部　紀・中山　純・豊村幸宏・伊藤　隆　2004 『仙台城跡３－平成15年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第270集
渡部　紀・中山純・伊藤隆　2004 『仙台城跡４－平成15年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第271集
金森安孝　2004 『仙台城跡第１次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第４分冊石垣図版編』仙台市文化財調査報告書第275集
金森安孝・渡部　紀　2005 『仙台城跡第１次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第３分冊出土遺物編』仙台市文化財調査報告書第282集
鈴木　隆・渡部　紀　2005 『仙台城跡５－平成16年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第285集
斎野裕彦・北原正範・澁谷正信　2005 『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（1）概要報告書』仙台市文化財調査報告書第289集
佐藤　淳ほか　2005 『若林城跡－第４次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第292集
鈴木　隆　2006 『仙台城跡６－平成17年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第297集
渡部　紀　2006 『仙台城跡第１次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第２分冊遺構編』仙台市文化財調査報告書第298集
金森安孝・渡部　紀・鈴木　隆　2006 『仙台城跡地震災害石垣復旧事業及び史跡整備事業報告書　中門跡・清水門跡』仙台市文化財調査報告書第299集
橋本顕嗣・古川久雄・村尾政人　2006 『仙台城跡登城路第１次調査－平成17年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第300集
佐藤甲二・竹内俊之ほか　2006 『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（2）概要報告書』仙台市文化財調査報告書第302集
佐藤　淳　2010 『若林城跡－第６次・第７次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第306集
鹿野仁子・鈴木　隆・渡部　紀　2007 『仙台城跡７－平成18年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第309集
竹内俊之ほか　2007 『川内Ａ遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』仙台市文化財調査報告書第312集
佐藤甲二・竹内俊之ほか　2007 『仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査（3）概要報告書』仙台市文化財調査報告書第316集
廣瀬真理子・中山豊　2007 『桜ケ岡公園遺跡－第２次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第318集
佐藤　淳・佐藤好司・後藤太一・高梨雅幸　2008 『若林城跡－第５次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第323集
渡部　紀・在川宏志・鹿野仁子　2008 『仙台城跡８－平成19年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第330集
土橋尚起・関美男・福井流星　2007 『仙台城跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』仙台市文化財調査報告書第342集
佐藤　洋・在川宏志　2009 『仙台城跡９－平成20年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第348集
伊藤雅和ほか　2008 『桜ケ岡公園遺跡－第３次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第335集
渡部　紀　2009 『仙台城跡第１次調査－石垣修復工事に伴う発掘調査報告書－第１分冊本文編』仙台市文化財調査報告書第349集
渡部　紀・黒田恵之・大口和樹　2009 『仙台城跡－追廻地区遺構確認調査－』仙台市文化財調査報告書第350集
佐藤　洋・福井流星　2009 『仙台城跡登城路第２次調査－平成21年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第354集
馬場由行・福原千恵・伊勢　契　2010 『仙台城跡－北方武家屋敷第２次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第356集
佐藤　洋・在川宏志　2010 『仙台城跡10－平成21年度調査報告書－仙台城本丸大広間跡調査成果の総括』仙台市文化財調査報告書第374集
佐藤　淳・瀬戸かな子・吉村　晶・北野桂子　2010 『若林城跡－第８次・第９次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第377集
鈴木　隆・関根信夫　2010 『桜ケ岡公園遺跡－第４次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第378集
佐藤　淳・瀬戸かな子・服部英世　2011 『若林城跡－第11次発掘調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第383集
主浜光朗・結城慎一・守谷健吾・萩澤太郎　2011 『桜ヶ岡公園遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅳ－』仙台市文化財調査報告書第384集

主浜光朗・結城慎一・土任　隆・武田芳雄　2011　『川内Ｂ遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ－』仙台市文化財調査報告書第385集
主浜光朗・結城慎一・長林　大・辻本　彩　2011　『仙台城跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅵ－』仙台市文化財調査報告書第386集
佐藤　洋・村上芳成　2011　『仙台城跡11－平成22年度調査報告書－』仙台市文化財調査報告書第395集
工藤信一郎・水野一夫・蒲　明男・岩瀬雄史　2012　『川内Ｂ遺跡ほか－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅹ－』仙台市文化財調査報告書第401集
渡部　紀・工藤信一郎・水野一夫・水上匡彦・横井　奏　2012　『仙台城跡ほか－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ－』仙台市文化財調査報告書第402集
渡部　紀・工藤信一郎・水野一夫・山本信夫・土橋尚起・武田芳雄　2012　『桜ヶ岡公園遺跡Ⅱ－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅸ－』仙台市文化財調査報告書第403集

東北大学埋蔵文化財調査室刊行報告書一覧

《東北大学埋蔵文化財調査年報》

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報１	1985	昭和58年度（1983年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第１地点（ＮＭ１）	
		仙台城跡二の丸第２地点（ＮＭ２）	
		仙台城跡二の丸第３地点（ＮＭ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報２	1986	昭和59年度（1984年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		青葉山Ｂ遺跡第１次調査（ＡＯＢ１）	
		青葉山Ｂ遺跡第２次調査（ＡＯＢ２・旧称ＡＯＦ）	
		青葉山Ｅ遺跡第１次調査（ＡＯＥ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報３	1990	昭和60年度（1985年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第６地点（ＮＭ６）	
		芦ノ口遺跡第１次調査（ＴＭ１）	
		芦ノ口遺跡1976年考古学研究室による調査（ＴＫ）	
		研究編－東北地方における近世窯業と陶磁器をめぐる問題ほか	
東北大学埋蔵文化財調査年報４・５	1992	昭和61年度（1986年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		昭和62年度（1987年度）事業概要	
		仙台城跡二の丸第４地点（ＮＭ４）	
		仙台城跡二の丸第７地点（ＮＭ７）	
		仙台城跡二の丸第８地点（ＮＭ８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報６	1993	昭和63年度（1988年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）	
東北大学埋蔵文化財調査年報７	1994	平成１年度（1989年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査委員会
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）付帯施設部分	
		仙台城跡二の丸第５地点（ＮＭ５）調査成果の検討	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第５地点（ＢＫ５）	
		川渡農場町西遺跡第１地点（ＫＷ１）	
東北大学埋蔵文化財調査年報８	1997	平成２年度（1990年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第９地点（ＮＭ９）	
東北大学埋蔵文化財調査年報９	1998	平成３年度（1991年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第10地点（ＮＭ10）	
		芦ノ口遺跡第２次・３次調査（ＴＭ２・ＴＭ３）	
		考察編－仙台城二の丸跡の考古学的調査－	
東北大学埋蔵文化財調査年報10	1998	平成４年度（1992年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第13地点（ＮＭ13）	
		青葉山地区分布調査	
		研究編－相馬藩における近世窯業生産の展開	
東北大学埋蔵文化財調査年報11	1999	平成５年度（1993年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第12地点（ＮＭ12）	
		仙台城跡二の丸第14地点（ＮＭ14）	
		青葉山Ｅ遺跡第２次調査（ＡＯＥ２）	
東北大学埋蔵文化財調査年報12	1999	平成６年度（1994年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第15地点（ＮＭ15）	
		青葉山Ｅ遺跡第３次調査（ＡＯＥ３）	
東北大学埋蔵文化財調査年報13	2000	平成７年度（1995年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第11地点（ＮＭ11）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第４地点（ＢＫ４）	
		青葉山Ｅ遺跡第４次調査（ＡＯＥ４）	
		研究編－東北大学構内（仙台城二の丸跡）遺跡出土漆器資料の材質と製作技法	
東北大学埋蔵文化財調査年報14	2001	平成８年度（1996年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第６地点（ＢＫ６）	
		青葉山Ｅ遺跡第５次調査（ＡＯＥ５）	
		芦ノ口遺跡第４次調査（ＴＭ４）	
東北大学埋蔵文化財調査年報15	2001	平成９年度（1997年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第16地点（ＮＭ16）	
		青葉山Ｅ遺跡第６次調査（ＡＯＥ６）	

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査年報16	2001	平成10年度（1998年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		研究編－糖アルコール含浸法における予備実験	
東北大学埋蔵文化財調査年報17	2002	平成11年度（1999年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
東北大学埋蔵文化財調査年報18	2005	平成12年度（2000年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸第17地点（ＮＭ17）	
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第１分冊	2006	平成13年度（2001年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		芦ノ口遺跡第５次調査（ＴＭ５）	
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 遺構	
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第２分冊	2009	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 陶磁器・土器・土製品・瓦	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第３分冊	2007	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 木簡・墨書ある木製品	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第４分冊	2008	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） その他の遺物	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報19 第５分冊	2010	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第７地点（ＢＫ７） 分析・考察	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報20	2006	平成14年度（2002年度）事業概要	東北大学 埋蔵文化財調査研究センター
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第８地点（ＢＫ８）	
		青葉山Ｅ遺跡第７次調査（ＡＯＥ７）	
		青葉山Ｅ遺跡第８次調査（ＡＯＥ８）	
東北大学埋蔵文化財調査年報21	2007	平成15年度（2003年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第９地点（ＢＫ９）	
		芦ノ口遺跡第６次調査（ＴＭ６）	
東北大学埋蔵文化財調査年報22	2008	平成16年度（2004年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報23	2009	平成17年度（2005年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査年報24	2010	平成18年度（2006年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
		仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第10地点（ＢＫ10）	
		青葉山新キャンパス地区試掘調査	

《東北大学埋蔵文化財調査室調査報告》

シリーズ名	書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告１	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点 －仙台市高速鉄道東西線機能補償関係調査報告書－	2011	東西線補償関係埋蔵文化財調査の概要	東北大学 埋蔵文化財調査室
			仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点（BK11）	
			仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK12）	
			川内地区の絵図記載人名の検討	
			川内地区における江戸時代の道路の復元	
東北大学 埋蔵文化財調査室 調査報告２	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点	2013	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第12地点（BK13）	東北大学 埋蔵文化財調査室

《東北大学埋蔵文化財調査室年次報告》

書　名	刊行年	掲載内容	刊行主体
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2007	2010	平成19年度（2007年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2008	2010	平成20年度（2008年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2009	2012	平成21年度（2009年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2010	2012	平成22年度（2010年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室
東北大学埋蔵文化財調査室年次報告2011	2013	平成23年度（2011年度）事業概要	東北大学埋蔵文化財調査室

国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程

平成６年５月17日　規第56号

（趣旨）

第１条　この規程は、国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の組織及び運営について定めるものとする。

（目的）

第２条　調査室は、国立大学法人東北大学（以下「本学」という。）の特定事業組織として、本学の施設整備が円滑に行われるために、構内の埋蔵文化財に関する調査を行い、併せて資料の保管及びその活用を図ることを目的とする。

（職及び職員）

第３条　調査室に、次の職及び職員を置く。

室長

文化財調査員

特任准教授

事務職員

その他の職員

（室長）

第４条　室長は、調査室の業務を掌理する。

２　室長は、本学の専任の教授をもって充てる。

３　室長の選考は、第６条に規定する運営委員会の議に基づき、総長が行う。

４　室長の任期は、２年とし、再任を妨げない。

（文化財調査員）

第５条　文化財調査員は、室長の命を受け、調査室の業務に従事する。

２　文化財調査員は、調査室の職員をもって充てる。

（運営委員会）

第６条　調査室に、その組織、人事、予算その他運営に関する重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

（運営委員会の組織）

第７条　運営委員会は、委員長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　東北大学施設整備・運用委員会各地区キャンパス整備委員会の委員　各１人

二　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人

三　発掘調査地に関連のある部局の教授又は准教授で、その都度委員長が指名するもの

四　施設部長

（委員長）

第８条　委員長は、室長をもって充てる。

２　委員長は、運営委員会の会務を総理する。

３　委員長は、必要があると認めるときは、運営委員会の同意を得て、委員以外の者を運営委員会に出席させ、議案について、必要な説明をさせ、又は意見を述べさせることができる。

（調査部会）

第９条　運営委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する専門の事項を調査審議させるため、調査部会を置く。

（調査部会の組織）

第10条　調査部会は、部会長及び次の各号に掲げる委員をもって組織する。

一　調査室の特任准教授

二　文化財調査員

三　発掘調査に関連のある専門分野の教授又は准教授　若干人

四　施設部計画課長

五　発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

（部会長）

第11条　部会長は、室長をもって充てる。

２　部会長は、調査部会の会務を掌理する。

（委嘱）

第12条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員は、室長が委嘱する。

（任期）

第13条　第７条第１号から第３号まで並びに第10条第３号に掲げる委員の任期は、２年とする。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

２　前項の委員は、再任されることができる。

（幹事）

第14条　運営委員会に幹事を置き、施設部計画課長をもって充てる。

（事務）

第15条　調査室の事務については、国立大学法人東北大学事務組織規程（平成16年規第151号）の定めるところによる。

（雑則）

第16条　この規程に定めるもののほか、調査室の組織及び運営に関し必要な事項は、室長が定める。

附　則

１　この規程は、平成６年５月17日から施行する。

２　東北大学埋蔵文化財調査委員会規程（昭和58年規第38号）は、廃止する。

３　東北大学公印規程（昭和46年規第17号）の一部を次のように改正する。

〔次のよう〕略

附　則（平成16年４月１日規第207号改正）

この規程は、平成16年４月１日から施行する。

附　則（平成18年4月26日規第80号改正）

１　この規程は、平成18年４月26日から施行し、改正後の国立大学法人東北大学埋蔵文化財調査室規程の規定は、平成18年４月１日から適用する。

２　平成18年４月１日（以下「適用日」という。）の前日にセンター長の任にある者は、適用日において改正後の第４条第３項の規定により室長となったものとみなし、その任期は、同条第４項の規定にかかわらず、平成18年５月16日までとする。

附　則（平成19年４月１日規第76号改正）

この規程は、平成19年４月１日から施行する。

RESERCH REPORTS
IN ARCHAEOLOGY ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY
No.2 MARCH 2013

The Archaeological Research office
On the Campus, Tohoku University
1-1, Katahira, 2chome, AobaWard, Sendai
980-8577 JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of samurai residences.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This report carries the research result of salvage excavations of BK13 (Loc.13 of *samurai* residences located at the side of north outer moat of Ninomaru, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle), on Kawauchi campus, which was conducted by the Archaeological Research Office on the Campus of Tohoku University in 2008 and 2009.

The purpose of this excavation is to recognize the archaeological features still remained in the area. Therefore, the excavation was halted at the stage when features were recognized. In the excavation of BK13, we detected a characteristic soil layer which was named the layer A, below the bottom of the first layer in the eastern survey area. It is a brown silt layer containing yellowish brown clay blocks. And a lot of artifacts dated to various periods of occupation have been excavated from there. The past excavations show that this layer is the result of place use as farmland. Besides, structures of swamp, some ditches, colonnades, and buildings were found. These features of structure are classified into temporal phases I~ IV.

Phase I is 17th century.
Phase II is from the 18th century to around the last stage of Edo period (the middle stage of 19th century).
Phase III is the beginning of the Meiji period (the latter stage of the 19th century).
Phase IV is around the 20th year of Meiji (1887).

It is considered that the ditch which flows from east to west had changes in 3 stages. The structure of a swamp stream, which flows from north to south, had been buried gradually. The ditch and the swamp were connected at Phase II. This swamp was drawn on the illustrated maps made in the 17th – 19th century. In addition, we recognized features which were the "toilet" and "stables" among the structures of this locality. These "toilet" and "stables" were illustrated on the maps made in the 18th–19th century.

Most artifacts belong to the Edo period and after. Only one artifact is dated before Edo period, it is a roof tile dated to Nara or Heian period. A lot of artifacts are discovered from No.1 ditch, No.4 structural remain and layer A. They are pieces

of porcelain, glazed ceramics, unglazed ceramics, clay objects and figurines, roof tiles, old coins, tobacco pipes, various metal implements, stone implements, animal remains and so on. Usually, many wooden implements and lacquer wares are found at this site. However, in this excavation term, few wooden implements and lacquer wares were found and their conditions are bad. The porcelain and glazed ceramics are dated from the beginning of the 17th century to the Meiji period. Among them, those of early to middle 19th century and the Meiji period are abundant.

No.1 ditch yielded porcelain and glazed ceramics from wide ranging periods. The major parts are dated to 19th century. But a few older ones, which are dated to the 17th or 18th century, are included.

写　真　図　版

１区西全景（左側が北）

図版１　武家屋敷地区第13地点全景（1）
Pl.1 Views of BK13 (1)

1．　1区西全景（東から）

2．　1区西中央部全景（北から）

図版２　武家屋敷地区第13地点全景（2）
Pl. 2　Views of BK13 (2)

1区東全景（左側が北）

図版３　武家屋敷地区第13地点全景（3）
Pl. 3　Views of BK13 (3)

1．　1区東全景（東から）

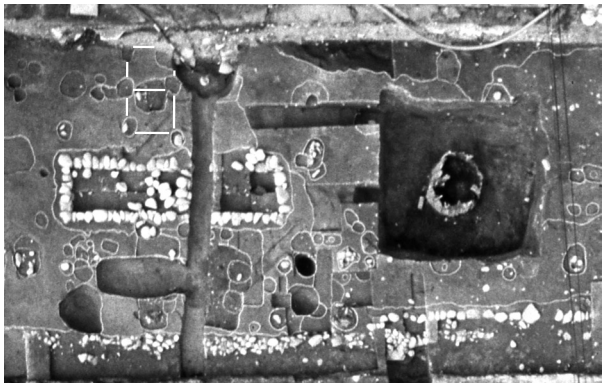
2．　1区東全景（西から）

図版４　武家屋敷地区第13地点全景（4）
Pl. 4　Features at BK13 (4)

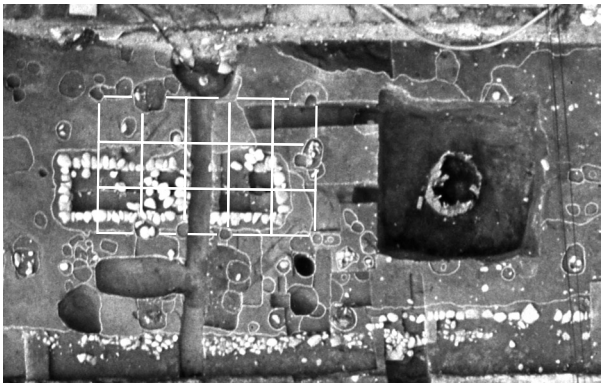
1．　２区全景（北から）

2．　２区から千貫沢を望む（北から）

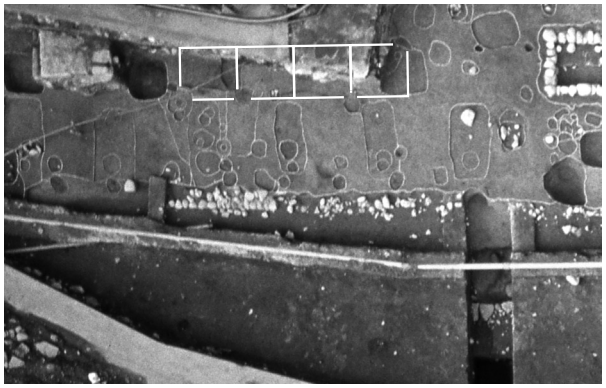
図版５　武家屋敷地区第13地点全景（5）
Pl. 5　Views of BK13（5）



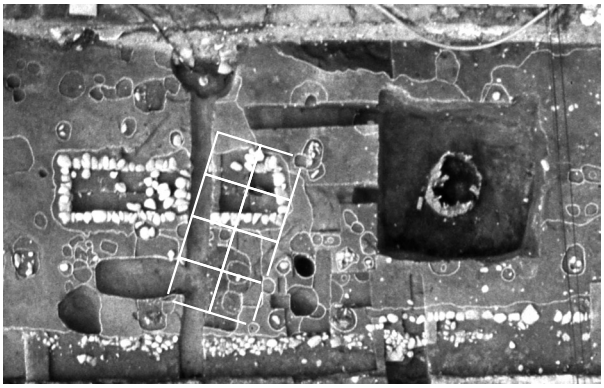
1.　1号建物



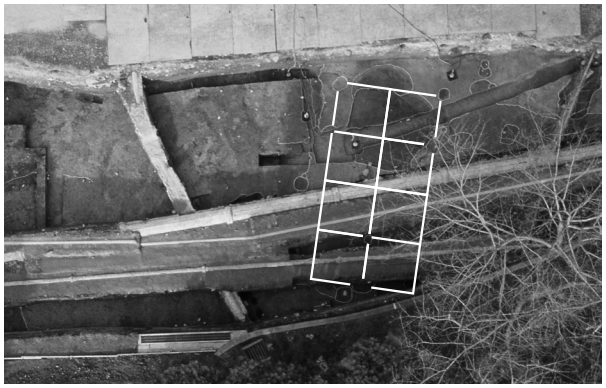
2.　2号建物



3.　3号建物

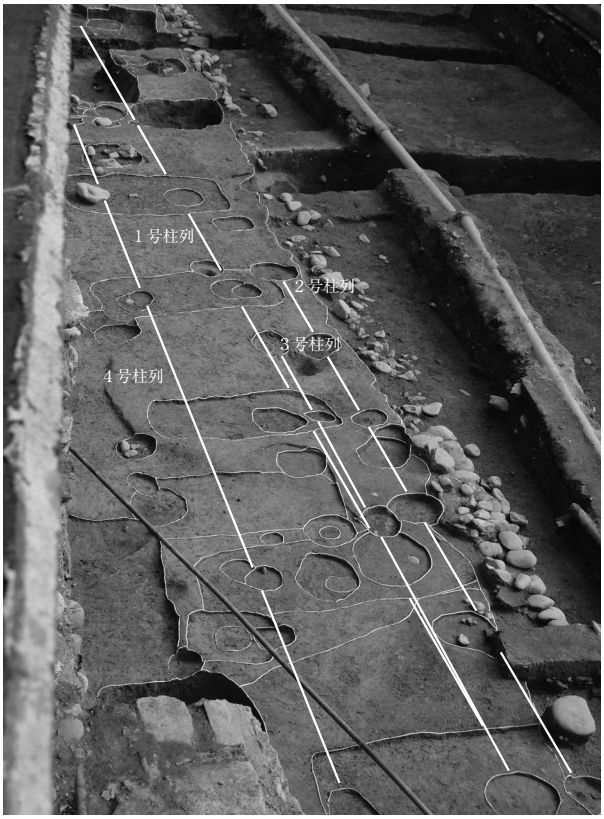


4.　4号建物



5.　5号建物

6.　1号柱列

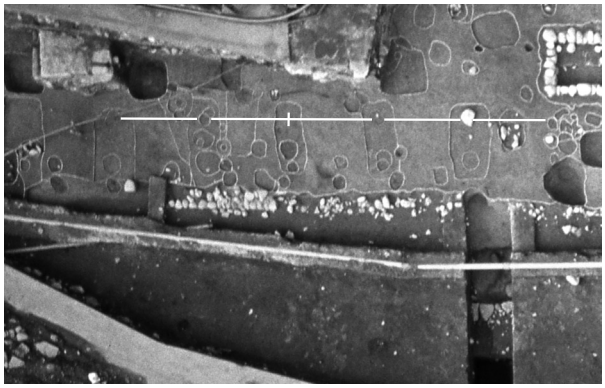


7.　1～4号柱列（北西から）

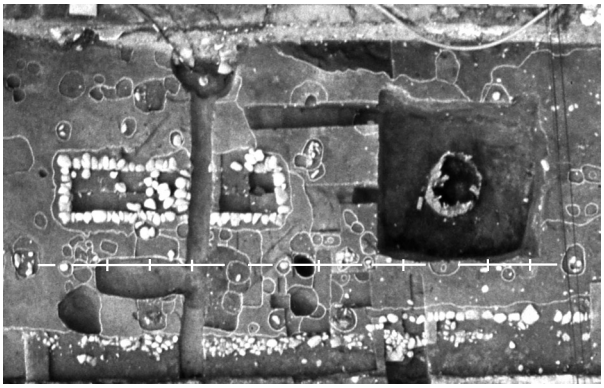
図版６　武家屋敷地区第13地点の遺構（1）
Pl. 6　Features at BK13 (1)

1.　2号柱列

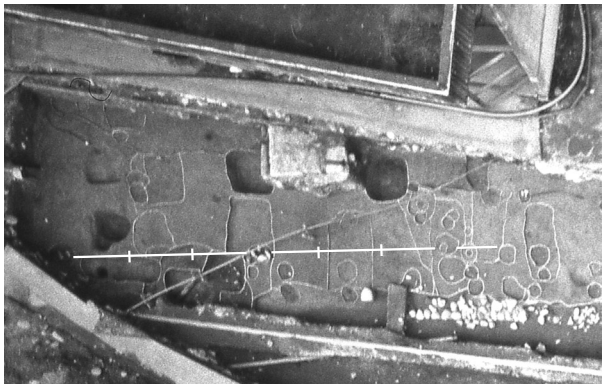
2.　3号柱列



3.　4号柱列



4.　5号柱列



5.　6号柱列

6.　1号遺構と周辺の遺構（北から）

7.　1号遺構と4号遺構西端（西から）

図版７　武家屋敷地区第13地点の遺構（2）
Pl. 7　Features at BK13 (2)

1.　1号遺構a検出状況（北から）

2.　1号遺構a東西セクション西側（南から）

3.　1号遺構a東西セクション東側（北から）

4.　1号遺構a南北セクション北側（東から）

5.　1号遺構a南北セクション南側（西から）

6.　1号遺構a13列南北セクション（東から）

7.　1号遺構a調査終了状況（北から）

8.　1号遺構b上面瓦集中部検出状況（南から）

図版８　武家屋敷地区第13地点の遺構（3）
Pl. 8　Features at BK13 (3)

1.　1号遺構b検出状況（北から）

2.　1号遺構b東西セクション西側（南から）

3.　1号遺構b東西セクション東側（北から）

4.　1号遺構b南北セクション南側（西から）

5.　1号遺構b南北セクション北側（東から）

6.　1号遺構b13列南北セクション（西から）

7.　1号遺構b調査終了状況

8.　1号遺構調査終了状況（北から）

図版９　武家屋敷地区第13地点の遺構（4）
Pl. 9　Features at BK13 (4)

1.　2号遺構検出状況（北から）

2.　3号遺構検出状況（南東から）

3.　3号遺構南北セクション（西から）

4.　1区東　北壁セクション（4号遺構）19・20区（南から）

5.　1区東　北壁セクション（4号遺構）20・21区（南から）

6.　1区東　北壁セクション（4号遺構）21・22区（南から）

7.　1区東　北壁セクション（4号遺構）23区（南から）

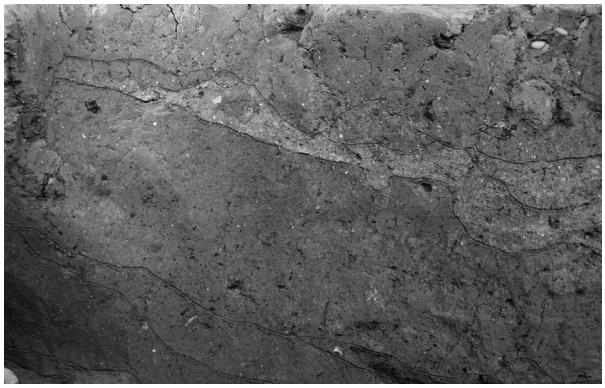
8.　1区東　北壁セクション（4号遺構）24区（南から）

図版10　武家屋敷地区第13地点の遺構（5）
Pl. 10　Features at BK13 (5)

1.　1区東　北壁セクション（4号遺構）25区（南から）

2.　4号遺構F−13区北壁セクション（南から）

3.　4号遺構F−14区北壁セクション（南から）



4.　4号遺構F−14区北壁セクション（南から）

5.　4号遺構F−14・15区北壁セクション（南から）

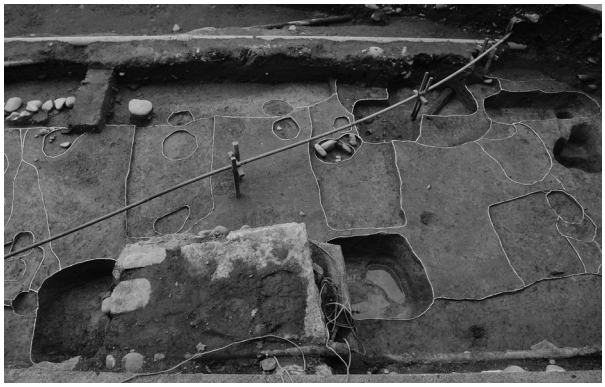
6.　4号遺構F−15区北壁セクション（南から）

7.　4号遺構G−14区北壁セクション（南から）

8.　4号遺構E・F−20区西壁セクション（東から）

図版11　武家屋敷地区第13地点の遺構（6）
Pl. 11　Features at BK13 (6)

1.　4号遺構東端部、15・16号遺構検出状況（北から）



2.　5号遺構検出状況（北から）

3.　6号遺構検出状況（南から）

4.　7号遺構検出状況（北から）

5.　1区西における4号遺構・1号溝・井戸（北西から）

図版12　武家屋敷地区第13地点の遺構（7）
Pl. 12　Features at BK13 (7)

1．　1区西1号溝・4号遺構検出状況

2．　1区東1号溝・4号遺構検出状況

図版13　武家屋敷地区第13地点の遺構（8）
Pl. 13　Features at BK13 (8)

1.　1号溝H・I・J−11区西壁セクション（東から）

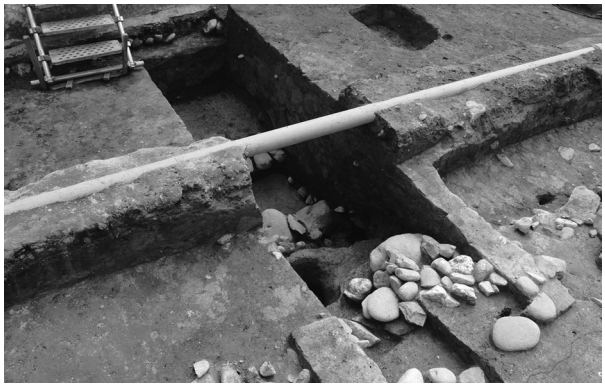
2.　1号溝・17号遺構I・J−11区西壁セクション南側（東から）

3.　1号溝I−11区西壁セクション中央（東から）

4.　1号溝H−11区西壁セクション北側（東から）

5.　1号溝H−13区西壁セクション（東から）

6.　1号溝H−13区東壁セクション（西から）



7.　1号溝H・I−14区西壁セクション（北東から）

8.　1号溝H−14区西壁セクション南側（東から）

図版14　武家屋敷地区第13地点の遺構（9）
Pl. 14　Features at BK13 (9)

1.　1号溝I−14区西壁セクション中央（東から）

2.　1号溝I−14区西壁セクション北側（東から）

3.　1号溝G−17区西壁セクション（東から）

4.　1号溝G−18区西壁セクション（東から）

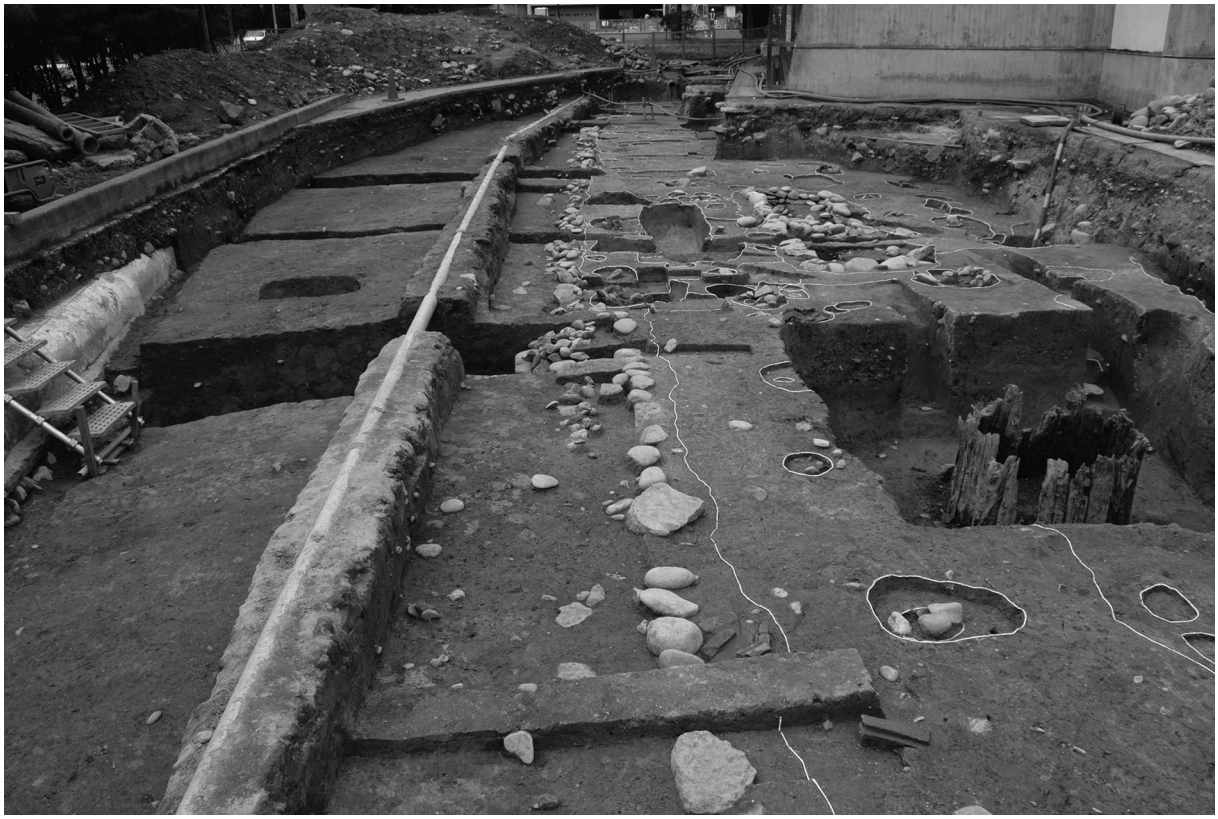
5.　1号溝F・G−20区西壁セクション（東から）

6.　1号溝E・F−20区西壁セクション（東から）

7.　1号溝F・G−22区西壁セクション（東から）

8.　1号溝G−22・23区南壁セクション（北から）

図版15　武家屋敷地区第13地点の遺構（10）
Pl. 15　Features at BK13 (10)



1．　1区西1号溝石列（東から）

2．　1区東1号溝東端（西から）

図版16　武家屋敷地区第13地点の遺構（11）
Pl. 16　Features at BK13 (11)

1.　2区8・9号遺構検出状況（北から）

2.　8・9号遺構C−4区南北セクション（西から）

3.　8・9号遺構C・D−4区南北セクション（西から）

4.　8・9号遺構D−4区南北セクション（西から）

5.　8・9号遺構D−4区南北セクション（西から）

図版17　武家屋敷地区第13地点の遺構（12）
Pl. 17　Features at BK13 (12)

1.　8号遺構B−3区西壁セクション北側（東から）

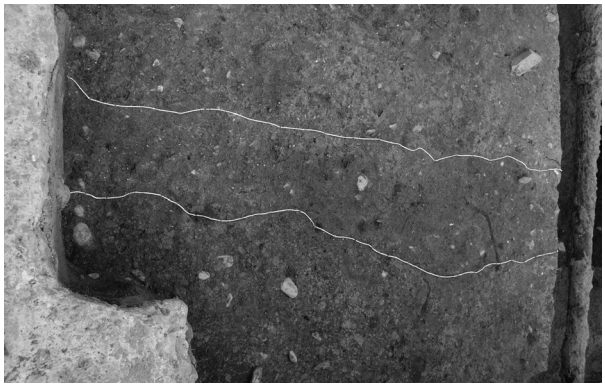
2.　8号遺構B−3区西壁セクション中央（東から）

3.　8号遺構B−3区西壁セクション南側（東から）

4.　8・9号遺構C−2区西壁セクション

5.　8号遺構B−2区西壁セクション南側（東から）

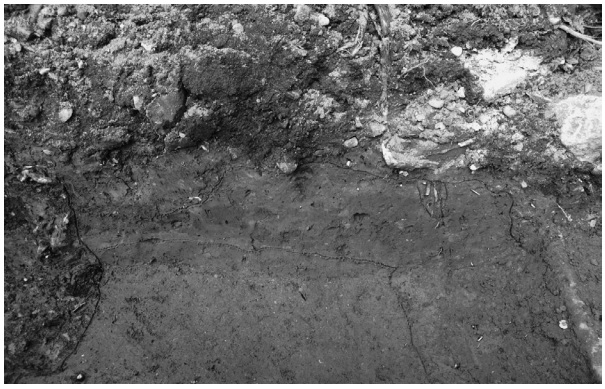
6.　8号遺構B−2区西壁セクション北側（東から）



7.　2号溝跡検出状況（西から）

8.　3区13号遺構検出状況（西から）

図版18　武家屋敷地区第13地点の遺構（13）
Pl. 18　Features at BK13 (13)



1.　3区東壁セクション（西から）

2.　4区全景（北から）

3.　4区北　西壁セクション（東から）

4.　4区北　8・10・11号遺構検出状況（南西から）

5.　4区南　8・9・12号遺構検出状況（北から）

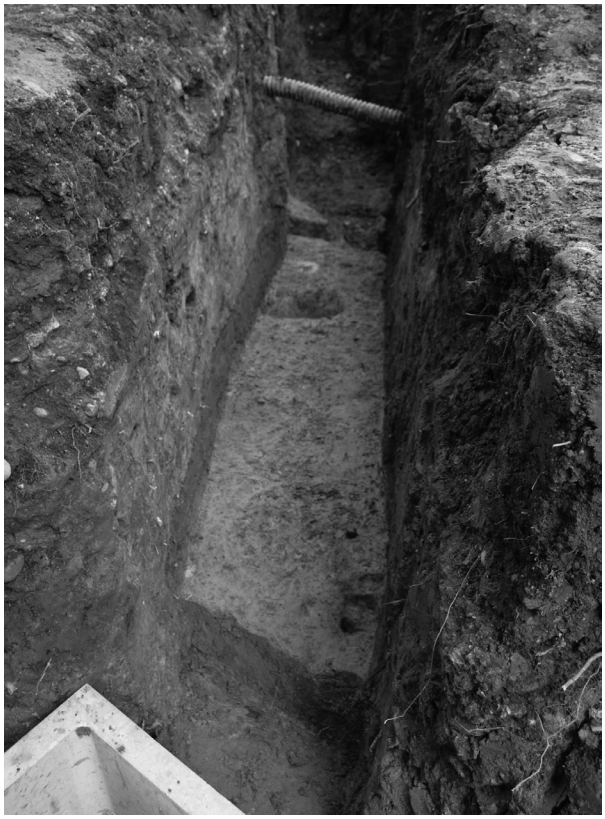
図版19　武家屋敷地区第13地点の遺構（14）
Pl. 19　Features at BK13 (14)

1.　4区南　西壁セクション（東から）

2.　5区全景（北から）

3.　5区C−34区東壁セクション北側（西から）

4.　5区E−32区東壁セクション南側（西から）



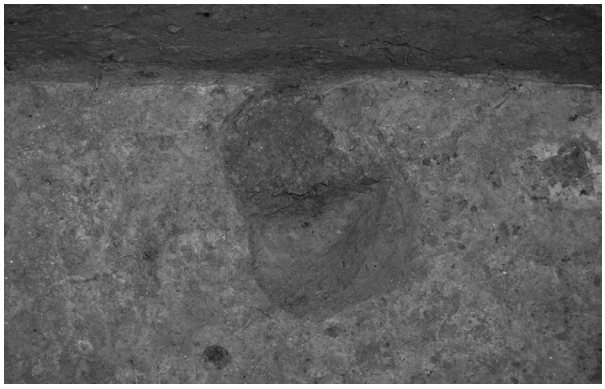
5.　6区全景（東から）

6.　6区E−31区南壁セクション東側（北から）

図版20　武家屋敷地区第13地点の遺構（15）
Pl. 20　Features at BK13 (15)

1.　6区E−30区南壁セクション西側（北から）

2.　6区ピット213セクション（南から）



3.　6区ピット212セクション（北から）

4.　6区ピット212完掘状況（北から）

5.　7区全景（西から）

7.　8区東　南壁セクション西側（北から）

6.　8区東全景（北から）

図版21　武家屋敷地区第13地点の遺構（16）
Pl. 21　Features at BK13 (16)

1.　8区東14号遺構南北セクション（西から）

2.　8区東ピット215セクション（南から）

3.　8区東ピット216セクション（北から）

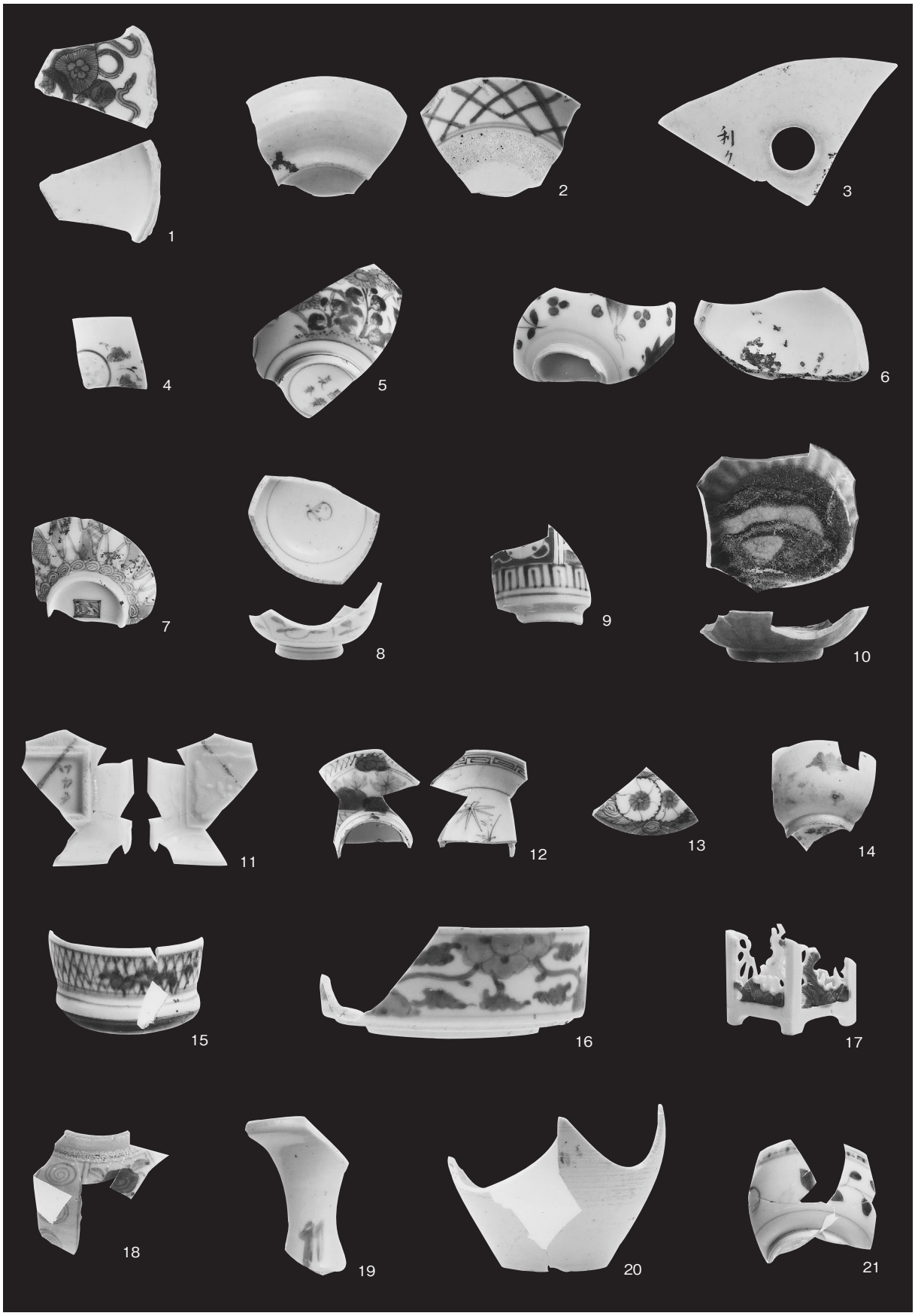
4.　8区東ピット214・215・216完掘（南から）

5.　8区西全景（南から）

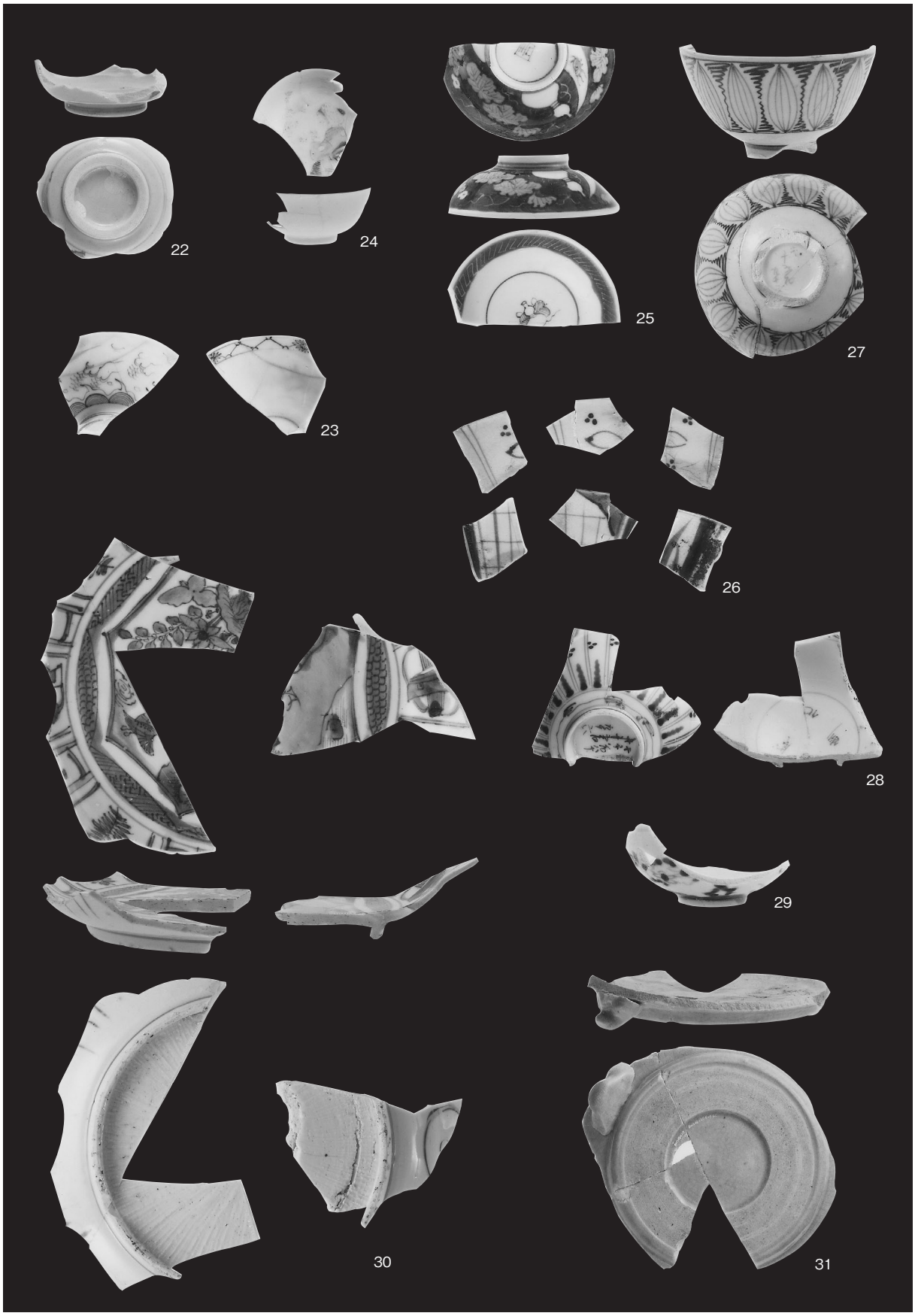
6.　8区西　西壁セクション（南東から）

7.　8区西ピット217・218セクション（南西から）

図版22　武家屋敷地区第13地点の遺構（17）
Pl. 22　Features at BK13 (17)

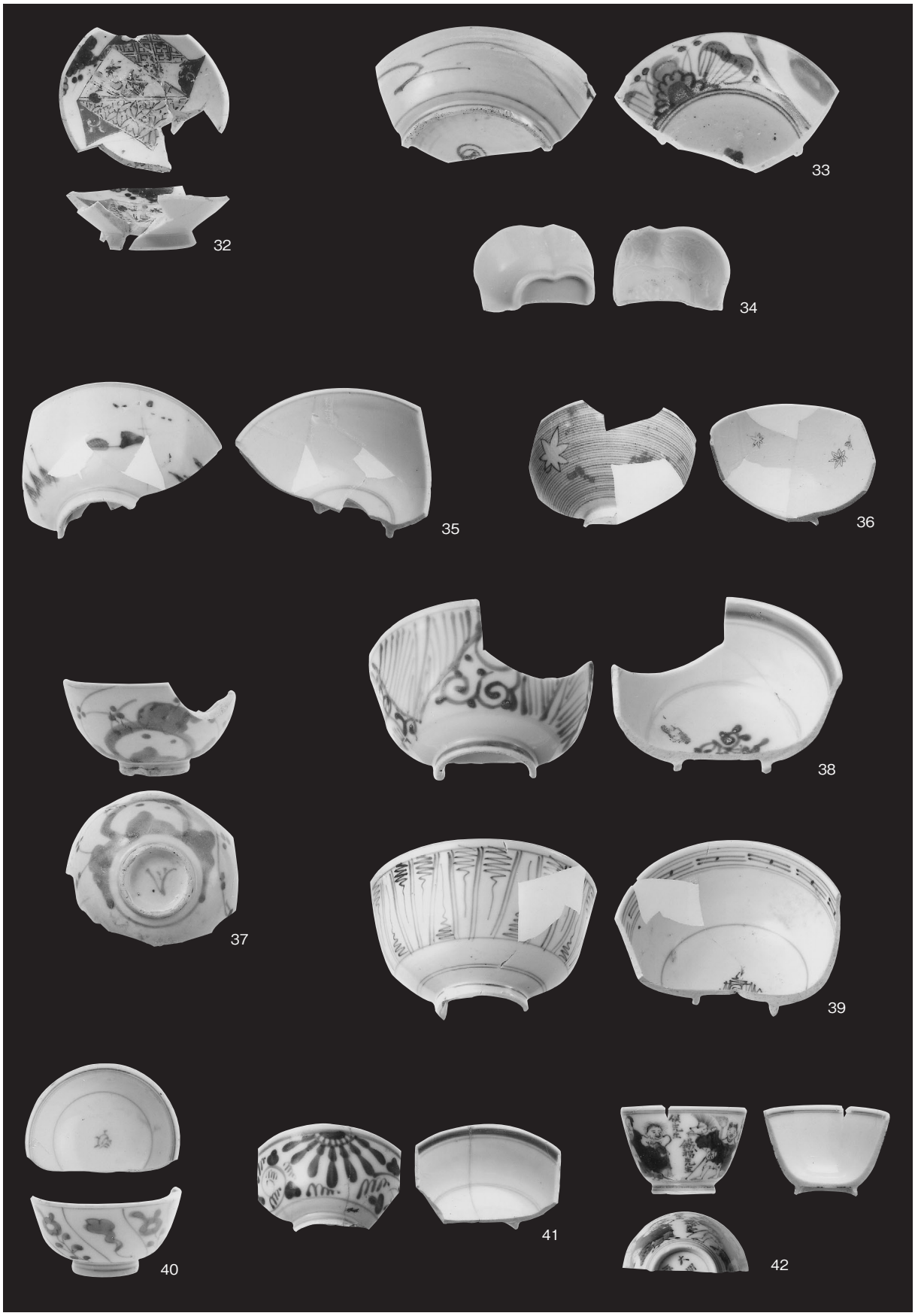


図版23　武家屋敷地区第13地点出土磁器（1）　S＝1：3
Pl. 23　Porcelains from BK13 (1)

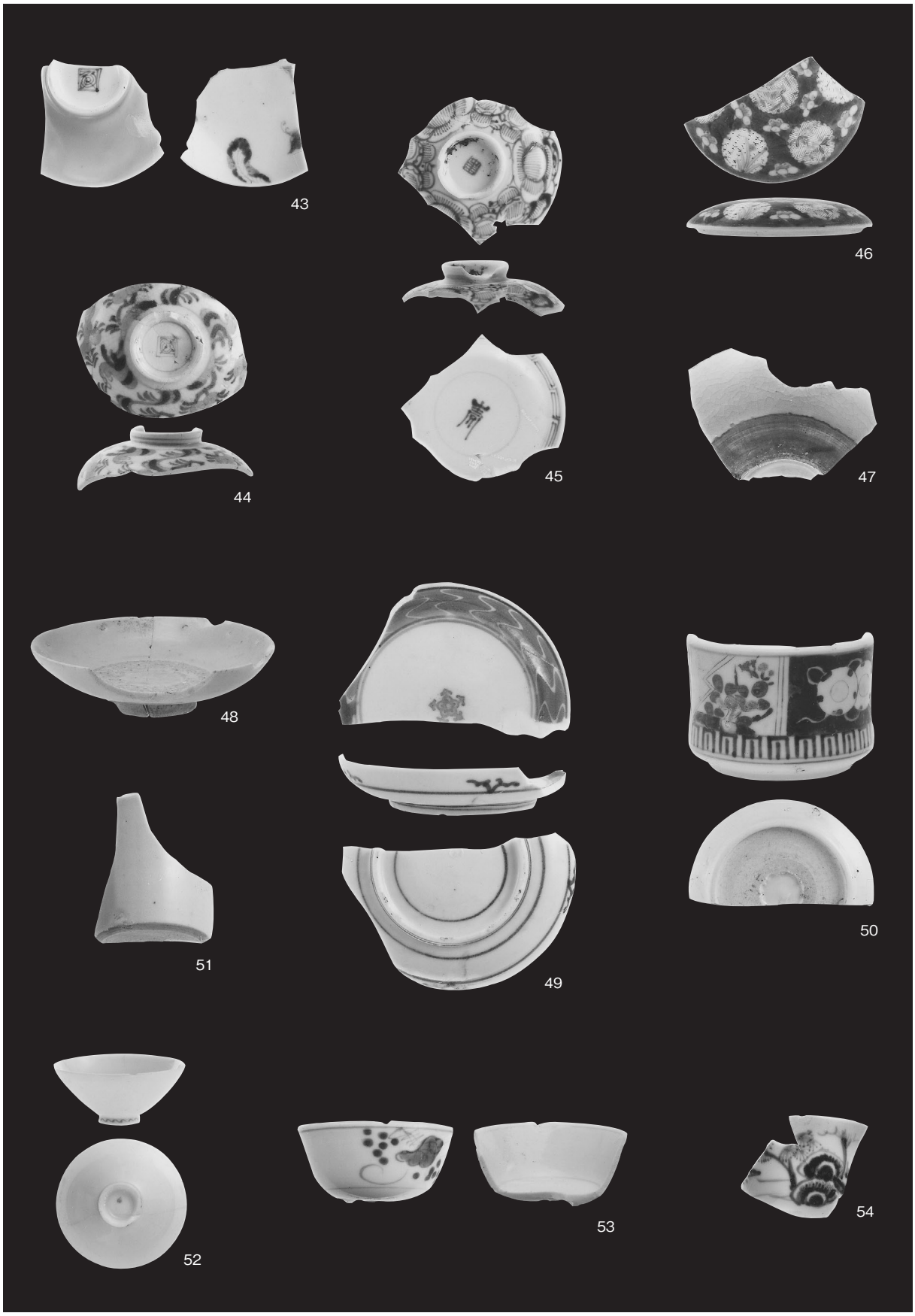


図版24　武家屋敷地区第13地点出土磁器（2）
Pl. 24　Porcelains from BK13 (2)

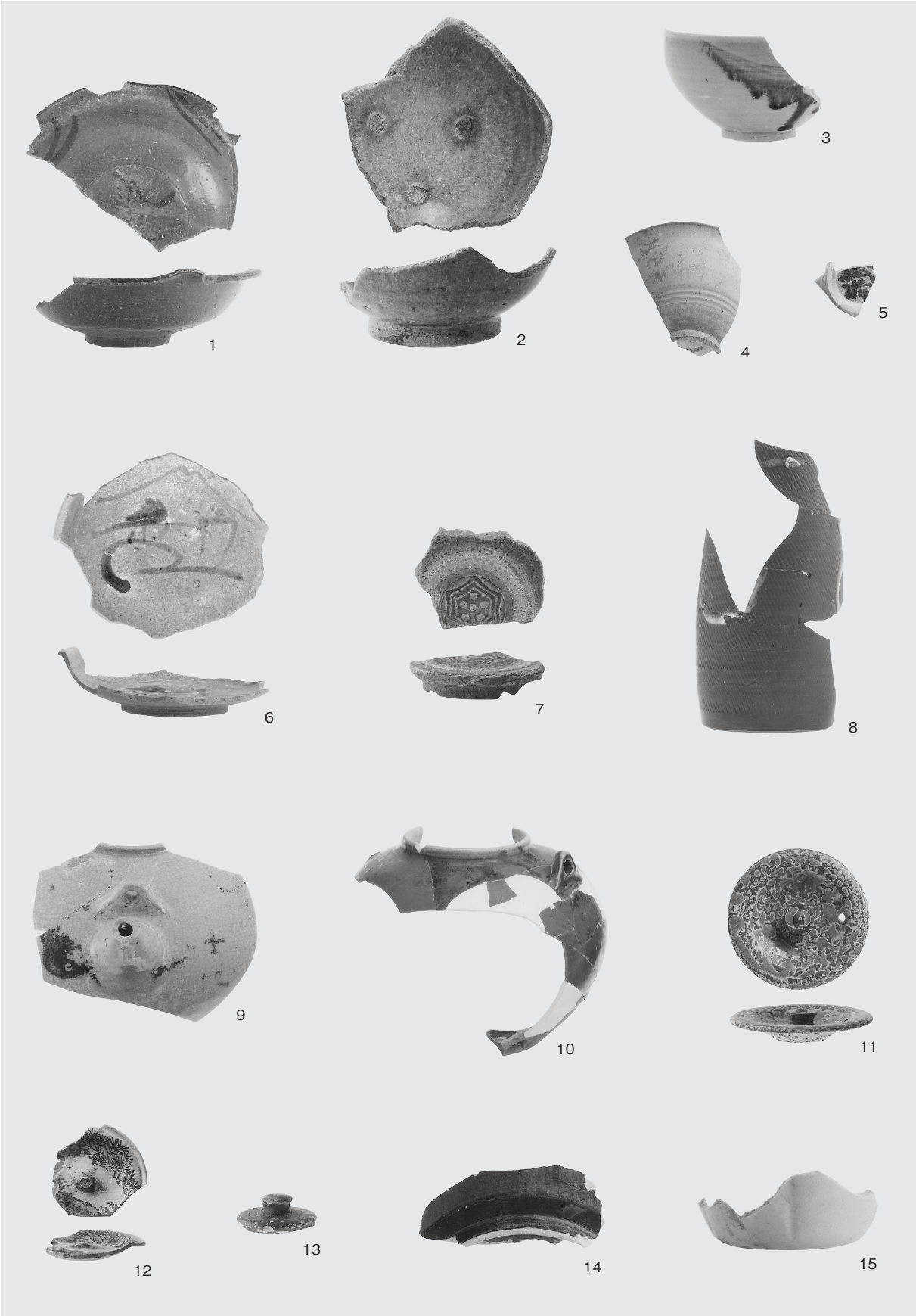
S = 1 : 3



図版25　武家屋敷地区第13地点出土磁器（3）　S＝1：3
Pl. 25　Porcelains from BK13 (3)

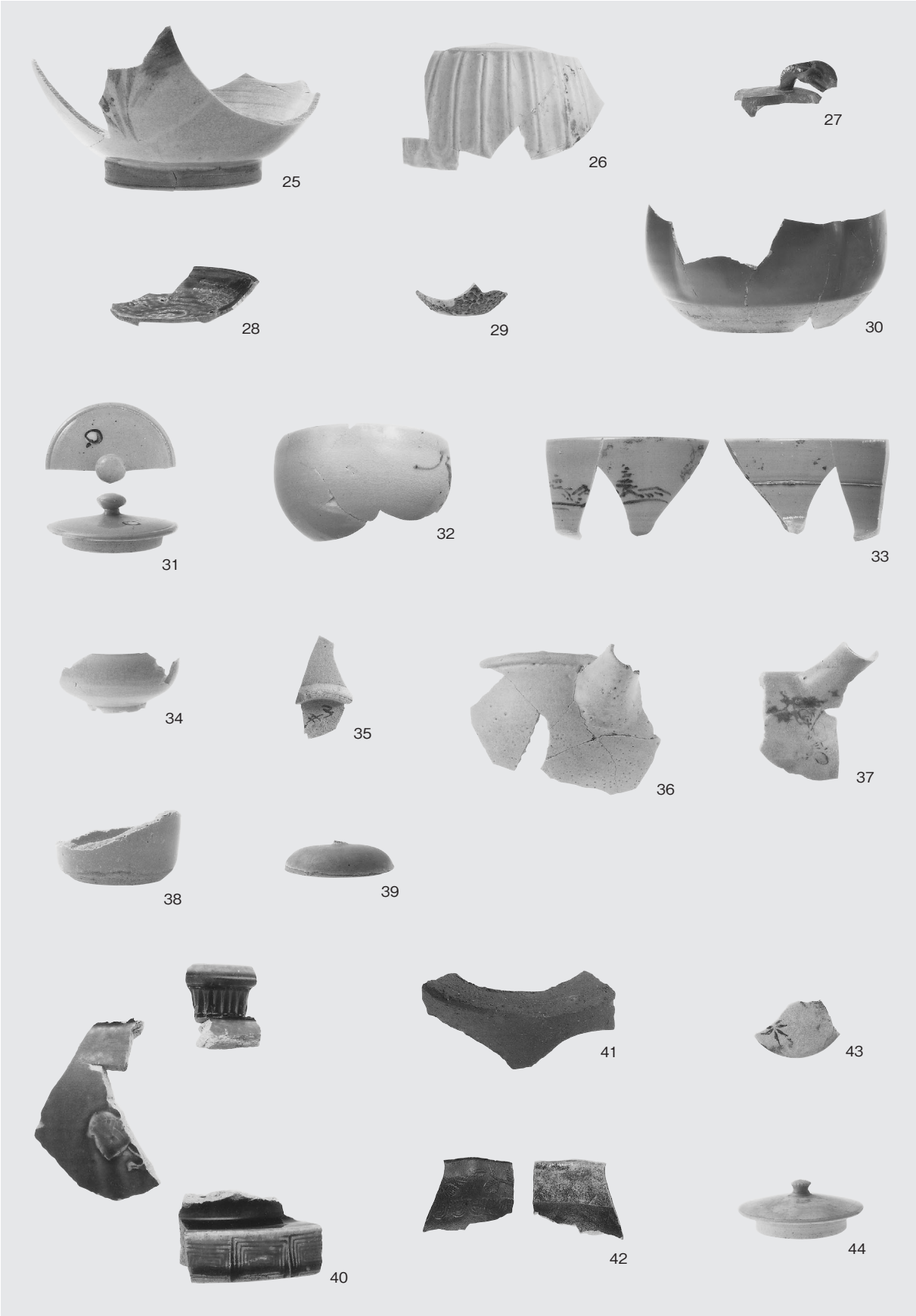


図版26　武家屋敷地区第13地点出土磁器（4）　S＝1：3
Pl. 26　Porcelains from BK13 (4)



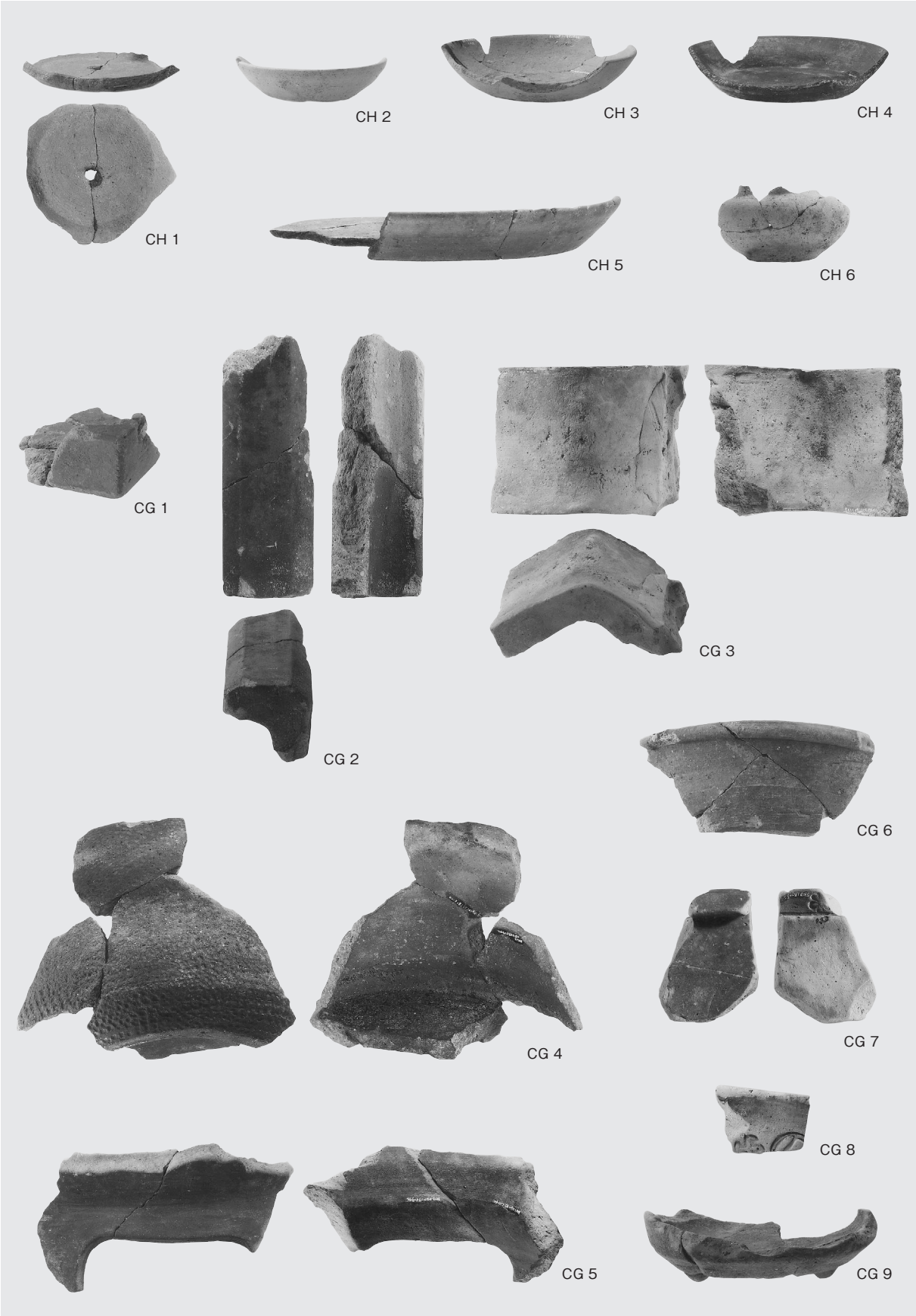
図版27　武家屋敷地区第13地点出土陶器（1）　S＝1：3
Pl. 27　Glazed ceramics from BK13 (1)

図版28　武家屋敷地区第13地点出土陶器（2）　S＝1：3
Pl. 28　Glazed ceramics from BK13 (2)

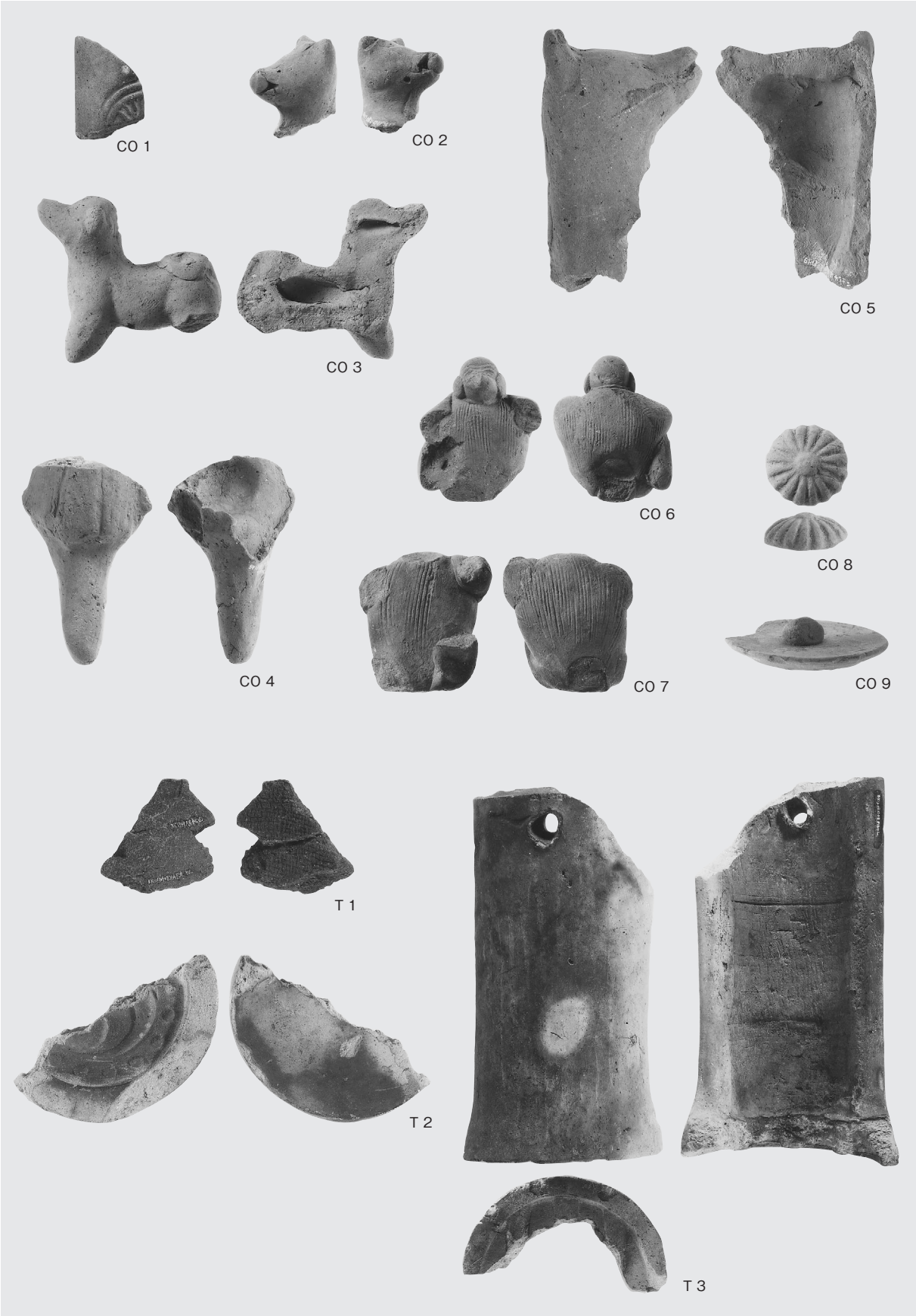


図版29　武家屋敷地区第13地点出土陶器（3）　S＝1：3
Pl. 29　Glazed ceramics from BK13 (3)

図版30　武家屋敷地区第13地点出土陶器（4）　45～53・55・56・58　S＝1：3
Pl. 30　Glazed ceramics from BK13 (4)　54・57　S＝1：4

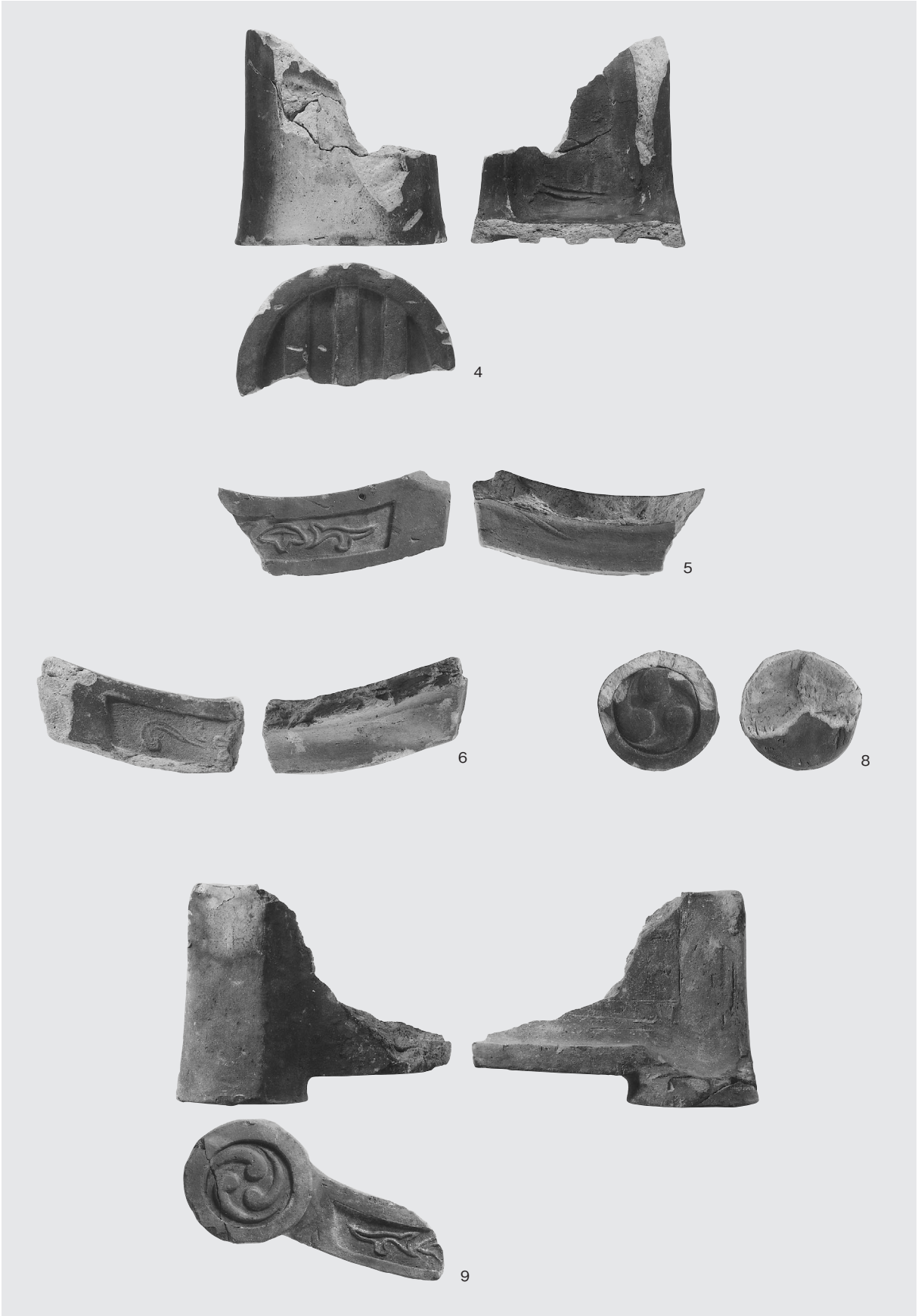


図版31　武家屋敷地区第13地点出土土師器土器・瓦質土器　S＝1：3
Pl. 31　Unglazed ceramics from BK13

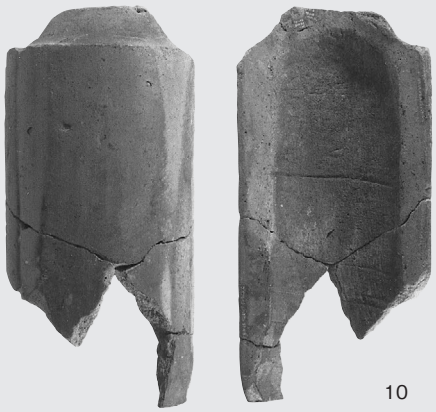


図版32　武家屋敷地区第13地点出土土製品・瓦（1）
Pl. 32　Clay objects and figures, various roof tiles from BK13

CO1～9　S＝2：3
T1　S＝1：3
T2・3　S＝1：4

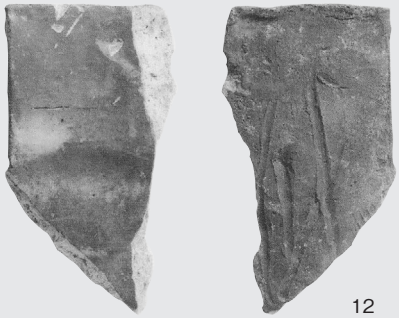


図版33　武家屋敷地区第13地点出土瓦（2）　S＝1：4
Pl. 33　Various roof tiles from BK13 (2)

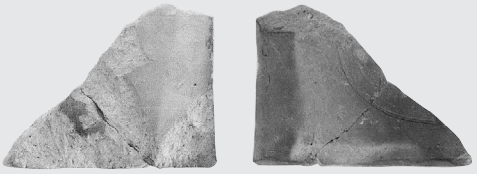


10

11



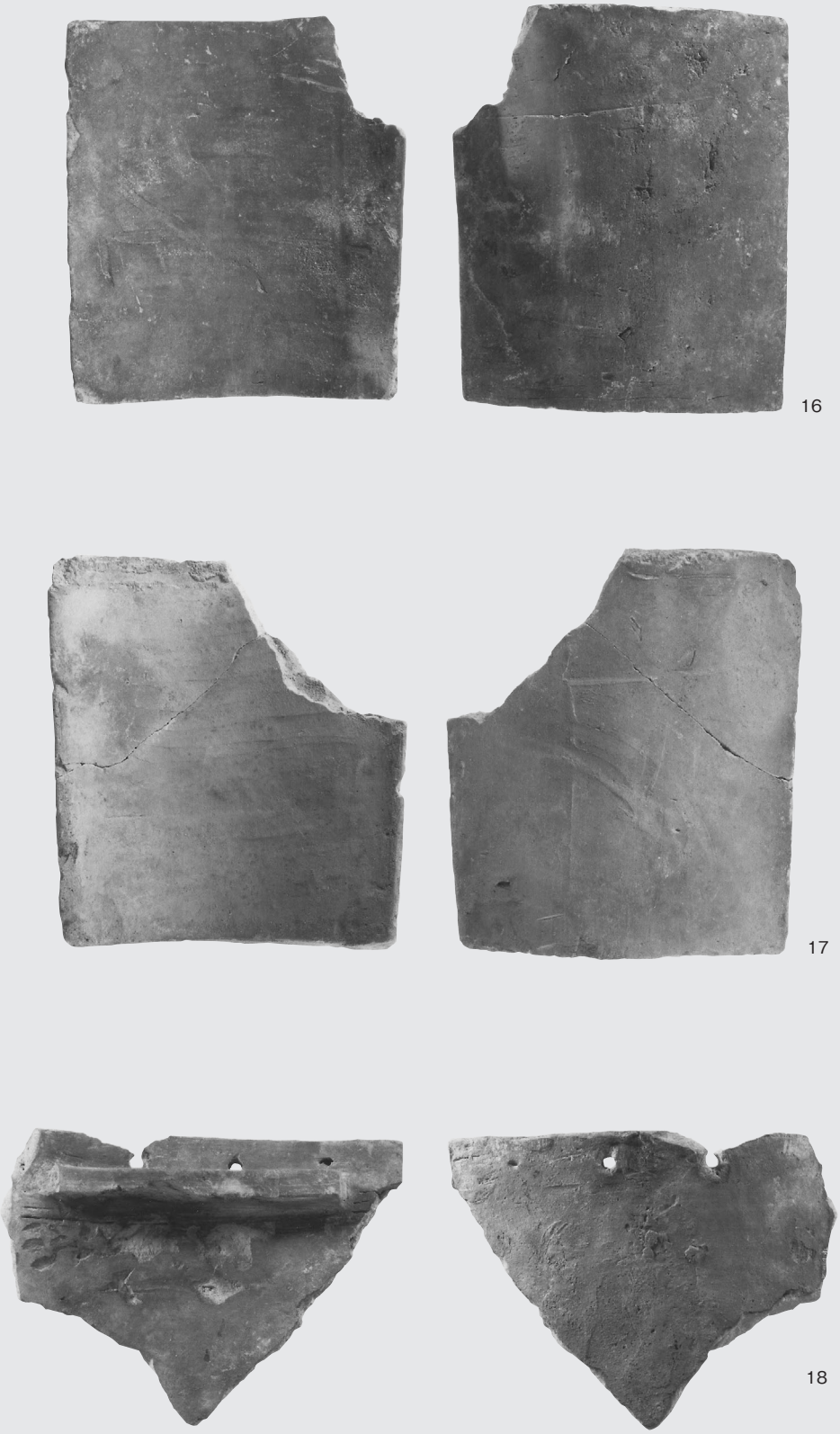
12



14

15

図版34　武家屋敷地区第13地点出土瓦（3）　S＝1：5
Pl. 34　Various roof tiles from BK13 (3)



図版35　武家屋敷地区第13地点出土瓦（4）
Pl. 35　Various roof tiles from BK13 (4)

S＝1：5

19

20

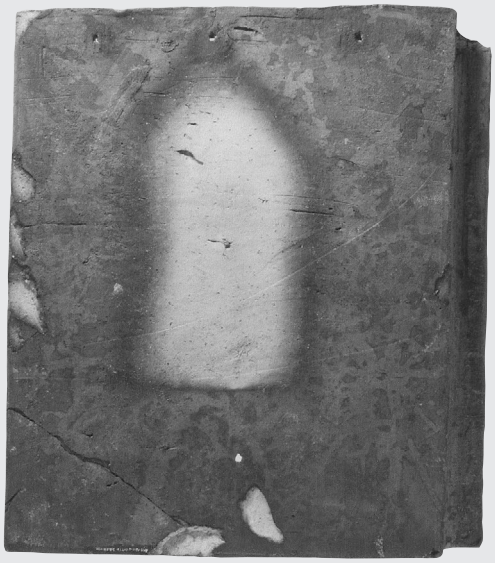
21

図版36　武家屋敷地区第13地点出土瓦（5）
Pl. 36　Various roof tiles from BK13 (5)

S＝1：5

22

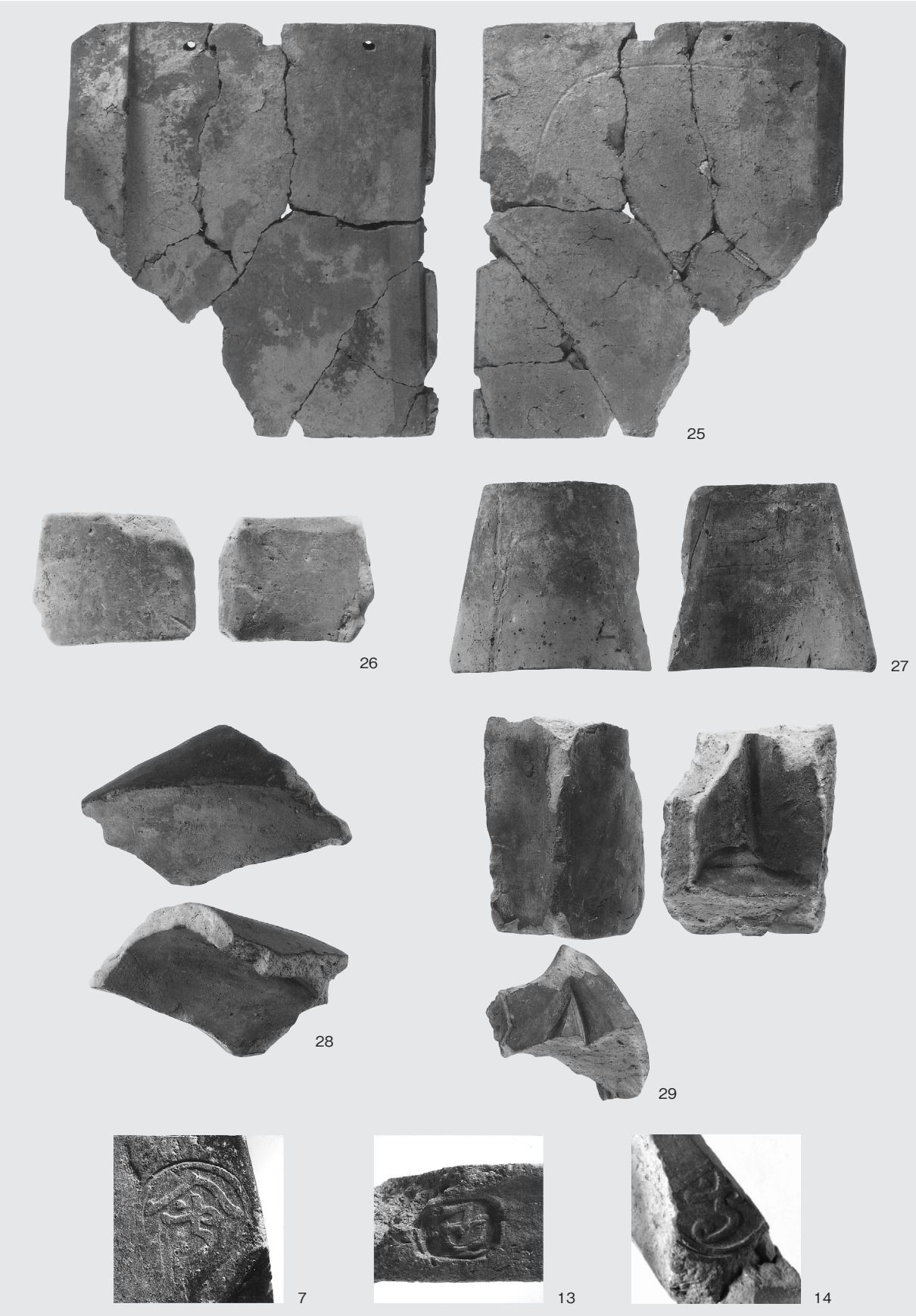
23



24

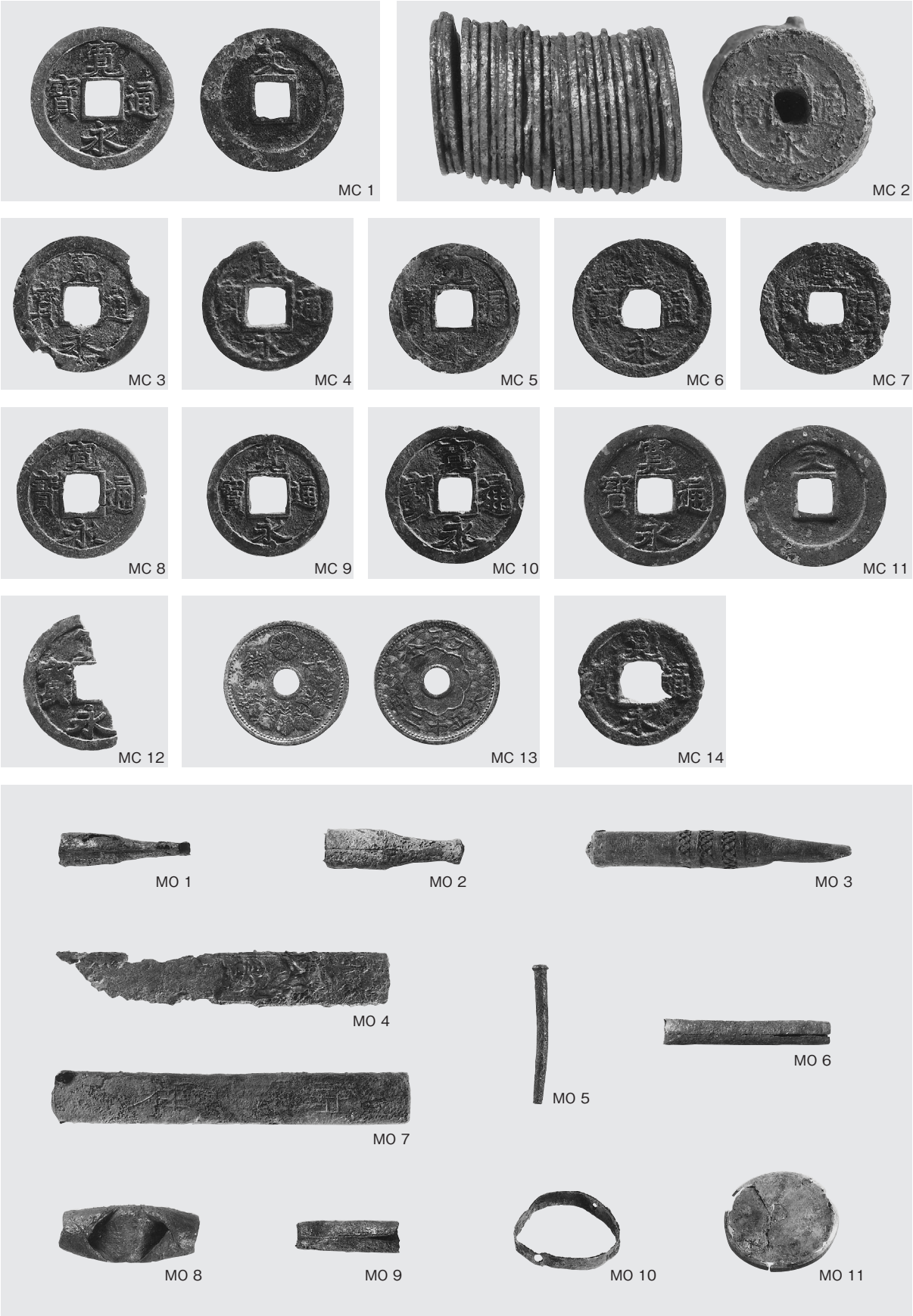
図版37　武家屋敷地区第13地点出土瓦（6）
Pl. 37　Various roof tiles from BK13 (6)

S＝1：5

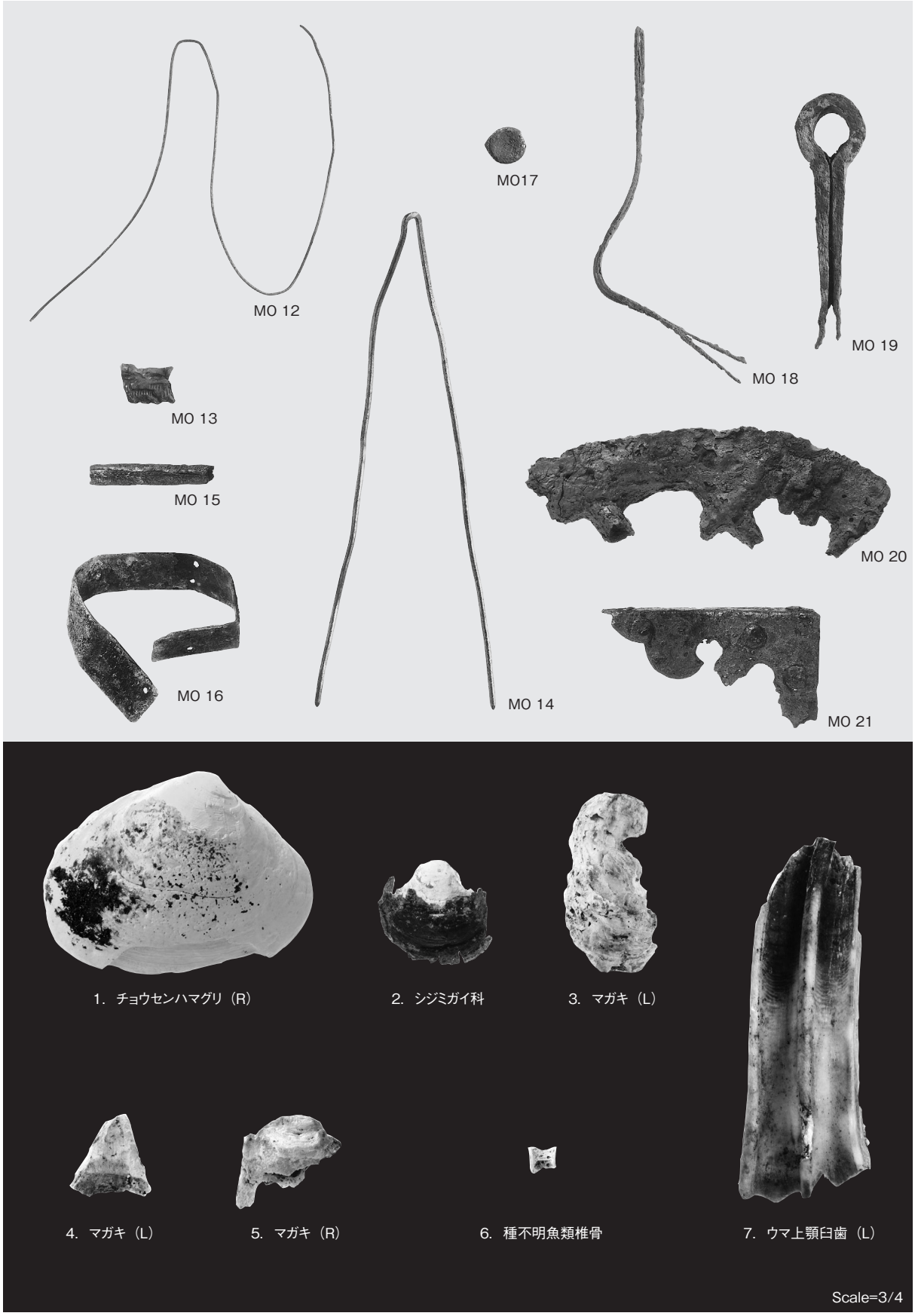


図版38　武家屋敷地区第13地点出土瓦（7）
Pl. 38　Various roof tiles from BK13 (7)

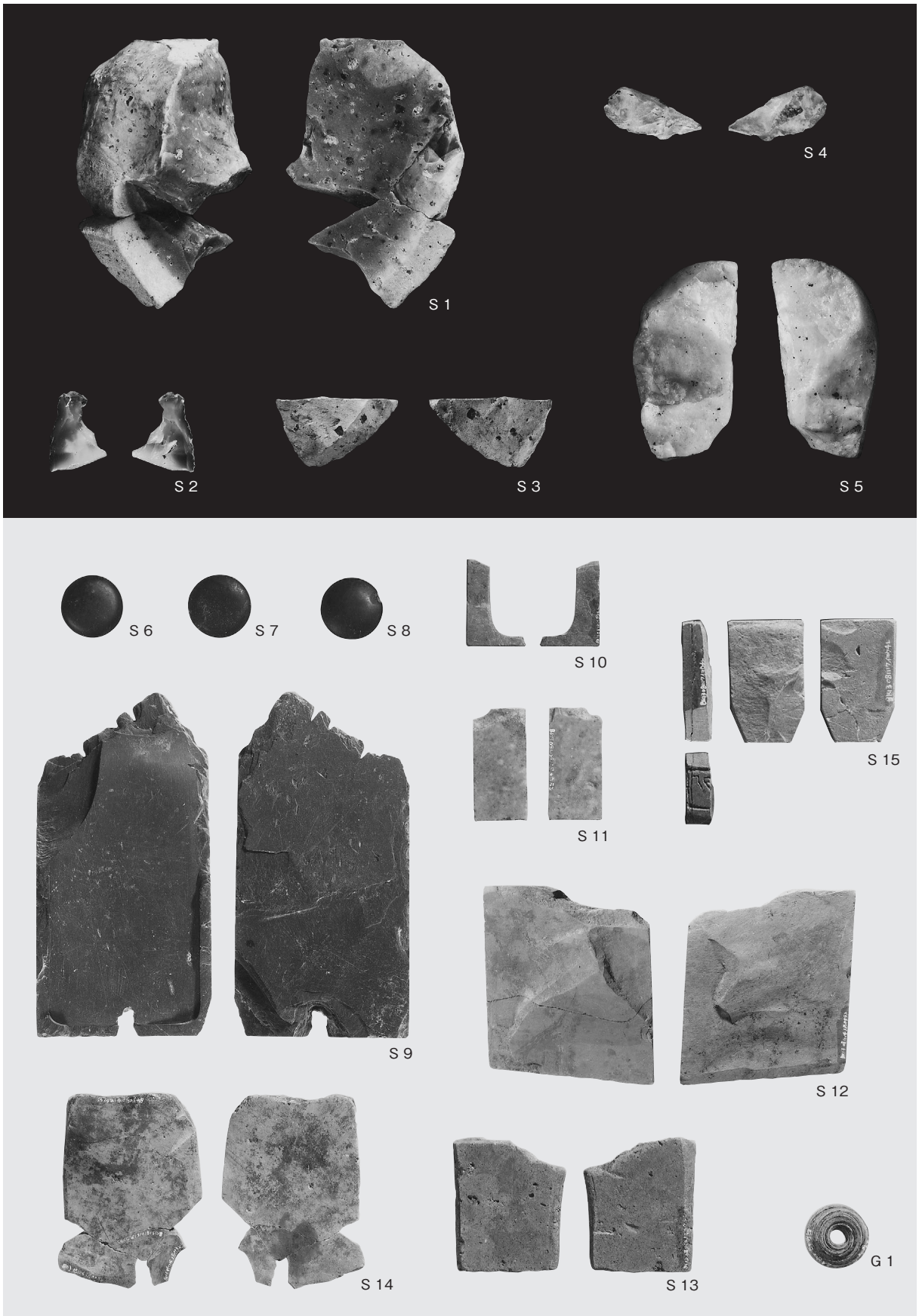
25　S＝1：5
26～29　S＝1：4
7・13・14　S＝1：1



図版39　武家屋敷地区第13地点出土古銭・煙管・その他の金属製品（1）　MC1～14　S＝1：1
Pl. 39　Coins, pipes and various implements made of metal from BK13　MO1～11　S＝2：3



図版40　武家屋敷地区第13地点出土その他の金属製品（2）・動物遺存体　MO12～21　S＝2：3
Pl. 40　Various implements made of metal, and animal remains from BK13



図版41　武家屋敷地区第13地点出土石器・石製品・ガラス玉　　S1～5・15　S＝4：5
Pl. 41　Stone tools and stone implements, a glass bead from BK13　　S6～14　S＝1：2
G1　S＝1：1

報　告　書　抄　録

ふりがな	せんだいじょうあとにのまるほっぽうぶけやしきちくだい13ちてん
書名	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点
副書名	
巻次	
シリーズ名	東北大学埋蔵文化財調査室調査報告
シリーズ番号	2
編著者名	阿子島香・藤沢敦・柴田恵子・菅野智則・川口貴史・傳田惠隆
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室
所在地	〒980-8577　宮城県仙台市青葉区片平二丁目1－1　TEL022－217－4995
発行年月日	西暦2013年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	世界測地系 北緯	世界測地系 東経	調査期間	調査面積	調査原因
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区	宮城県仙台市 青葉区川内41	04100	01033	38度 15分 36秒	140度 51分 10秒	2008.9.1 ～ 2009.3.30	774.8 ㎡	厚生会館増改築工事
						2009.6/15～9/11・18、10/1、11/5、12/10、2010.2/3・4	44.9 ㎡	厚生会館増改築工事（付帯工事部分）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点	城館	近世	建物・柱列・溝・沢状遺構・ピット	陶磁器・土器・瓦・金属製品・土製品・石製品	

要約 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点	江戸時代から明治初頭に至る各種の遺構・遺物が確認された。これらの遺構は３時期に大きく区分できる。主な遺構としては、掘立柱建物、溝、沢状の遺構が確認された。出土遺物は、19世紀前葉から中葉、明治期に入ってからの資料が量的には多いが、18世紀代や17世紀に遡るものも若干含まれている。また、絵図との対比から、沢状遺構は千貫沢に合流する沢と推定し、柱列と遺構の一部は「北下馬厩」と対応するものと解釈した。

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告２

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点

平成25年３月29日

発行　東北大学埋蔵文化財調査室
〒980－8577　仙台市青葉区片平2丁目1－1　TEL 022（217）4995

印刷　株式会社　東北プリント
〒980－0822　仙台市青葉区立町24－24　TEL 022（263）1166

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点　付属CD－ROM　収録内容

1．本CD－ROMには、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点から出土した遺物等のカラー写真データ（JPEG型式）が収録されています。
2．写真データは、図版別のフォルダに収納されています。そのフォルダ名は、写真図版キャプションと対応しています。
3．図版23～41の写真データのファイル名は、観察表の登録番号と同一です。一つの登録番号で、表面・裏面や、見込み・側面・底部など、写真が複数ある場合は、掲載番号にa、b、cなどの記号を付して区別しています。（例：CJ001a.jpg，CJ001b.jpg）
4．写真は、整理作業の途中で撮影したものです。そのため、一部の写真には、登録番号とは異なった、整理段階で用いた仮番号のラベルが写っているものがあります。正式な登録番号は、ファイル名を参照ください。
5．本CD－ROMは、学術資料としての観点から、複写・転載に関しては、基本的に許可申請を必要としませんが、有償による販売を目的とした刊行物などで使用される場合は、東北大学埋蔵文化財調査室までお問い合わせ下さい。
6．本CD－ROMの使用により生じたいかなる損害に対しても、東北大学埋蔵文化財調査室では責任を負いかねます。あらかじめご了承ください。